漱石先生

漱石先生

松岡讓著

自序

今年は私が漱石先生にお目にかゝつてから丁度二十年目に相當するので、それを記念する意味に於て、春以來何かやりたいと思つて居た矢先、折よく岩波氏のすゝめがあつたので、本書を出版する氣になつた。さゝやかながら私にとつてはさういふ意味での謂はば記念出版なので、そこで子供じみた話ではあるが、集めた文章も年の數にちなんで二十篇にしたわけだ。

文學に携はる徒の一人として、私は近代日本文學の一番巨きな星であつて、又自分の文學生活に極めて大きなものを與へて貰つた漱石先生、其人の「人・藝術及び時代」を正面から研究する志を持たないわけではないのであるが、今の私はそれを敢てするのは近過ぎるともいへるし、又反對に遠過ぎるともいへる一種妙な三角點に立つて居るので、これは自然の齎してくれる時を待つ事として、今はたゞ世の漱石黨と共に、心ゆく迄先生中心のもろ〳〵の事を物語りたい、さういふ至極打ち寛ろいだ、謂はば漱石座談會でおしやべりをして居るやうな氣持で、この隨筆集を編んだのである。

縁あつて生前親しく教をうけ、縁あつて歿後遺族と俗縁がつながつた。私はこの因縁を時々不思議に思ふのであるが、しかし岳父といつた俗縁の立場から先生を見た事はかつて一度も無く、飽く迄も先生は私にとつて先生なのである。私が在世中山房に出入したのは、わづかに晩年の正味一年間。だから先生を直接識つてるといふ點では末輩の末輩でしかない。自然語るべきものも少いのであるが、しかし先生が亡くなられて十九年、その間の事については、多少私に語るべき義務と責任とがあるやうに思ふ。一見他愛のないやうな事でも、筆のまに〳〵書きとめておいた所以である。

本書の大半は、永い間にいつとはなしに新聞や雜誌にのせたものに、今度新に雌黄を加へたものであるが、本書の爲に書かれた未發表のものも少くない。一番の舊稿は『其後の山房』で、未發表の數篇は、主として今夏かゝれたものである。其間のひらきが十九年もあるので、相當意を用ゐはしたものの、まゝ重復したところがあるかもしれない。本書の性質が性質だから、其點は諒とされたい。

昭和九年十月

松岡　讓

内容目次

漱石のあとを訪ねて

一　未亡人三十三年振りの九州

關門連絡船が海峽の中程に出た時に、甲板にあつて本州九州の山々をしげ〳〵と眺めくらべて居た未亡人は、始めて懷舊の瞳を輝かせた。

「山の形までいくらか變つてるやうよ。あの兩側の煙突や大きな建物なんかまるで無かつたんですものね。それに私たちが始めて渡つた時には、ちつちやな艀がどつさり居たんだけれど……」

未亡人には大きな連絡船より小さいサンパンの方が情が移るらしい。

「えゝ、今でも居るには居りますよ。此前來た時に、僕乘つた事がありますもの。」

「そお、あの時私だつたか父だつたか、持つて來たものを連絡船の中に忘れてしまひ、私た

ちは門司に上り、船は間もなく下ノ關に引きかへしてから氣がついて、福岡から出迎へてくれた叔父が艀にのつて取つて來てくれたのですが、波が高くつてその艀がとても搖れて、叔父が青くなつたのを覺えて居るわ。でも叔父が生命保險をかけてるから安心して居たと强がりを言つたものだから、父と一緒に笑つたわね。」

あの時と未亡人がいふのは、父に伴はれ年老いた女中を一人連れて、遙々東京から熊本に嫁入りに下つた其時を指すのである。明治二十九年六月八日、二三日後には見知らぬ土地の花嫁にならうといふ二十歳の初夏だ。つや〳〵した娘島田に花簪をさして、人生の新しい生活に踏み入らうといふ希望に充ちた時だ。ところが今、その花簪のうつゝた黑髮も白髮染めをしなければならなくなり、其時の父もすでに亡く、その時の夫も亦すでに逝き、人生のあらましを過ごして、かうして子に當る長女の夫を伴つて、亡夫十三回忌の年に、三十三年目にこの海峽を渡つて舊蹟を弔はうといふのである。感慨の深いのも當然だ。ましてやこの海峽はたゞさへ一入物を思はせるところなのだ。思ひ出深げに見入る義母の感傷に、私も思はず引き込まれるのであつた。

門司驛で長崎行きの列車に乘り込むところを、どや〳〵と新聞記者團に取り圍まれ、九州の

御關所だ、素通りは相成らぬとばかりに、矢繼早に一打程の訊問をうけた。そこで私は長崎、雲仙、熊本、別府、松山の順序で旅程をたてて居る事、旅行の目的は熊本・松山の兩地に於て、漱石先生の舊居のあとを親しくたづねて、それ〴〵の寫眞をとつたり、當時のお識り合ひの方方にお會ひして、目下稿を續けてゐる未亡人の『思ひ出』を追補したいと考へてる事、熊本は始めて新家庭を持つたところであるから、いろ〳〵な思ひ出が行つて見たらあるであらうと、未亡人が今から非常に樂しみにして居られる事、さうしてこの九州入りは實に三十餘年振りで、もう二度とかういふ機會もあるまいから、感慨も一倍深いものがあるらしい事、長崎や雲仙は初めてではあるが、先を急ぐので今度はほんの行きがかりの瞥見に止めておく事、それからトピックは自然最近文壇の傾向とか何とか、そんなおきまりの方向にそれてしまつたが、この質問のお蔭で、私達が心に描いてゐた旅行の全貌が、はつきりと表面に呼び出された形であつた。

　九州に入つた第一夜を、紫檀づくめの長崎の宿で送つた私達は、いたるところの店先に咲き誇つてる芍藥を見て、東京の蕾の固かつたことを語り合つて、自分達が南の國へ來たことをしみじみ感じながら、急ぎ足で立ち寄りたかつた圖書館の前を素通りして、諏訪公園や崇福寺や浦上の天主堂などを見てまはつた。諏訪神社では珍らしいので英語のお神籤をひいた。如才な

くハピネスと出た。崇福寺では、佛前に丸ごとの豚や羊が毛皮をはがれたまゝ紫の檢印だらけの膚で捧げられて居るのに度膽をぬかれた。肉饅頭や蛸の足も三方にのつて居る。馬鹿祭といふお祭だといふが、それにしても同じ黄檗でも精進物の普茶料理を賣り物にしてゐる宇治の黄檗とは段違ひの氣の荒さだ。浦上の天主堂に入ると、戸外の雨風をよそに深い谷にでも佇んでるやうなひつそりした青空の感じだ。高い空色のステーンド・グラスのせゐだ。天井に祈、謙、忍、貧、從、貞、敬神、信、望、愛、節、勇、義、賢、などといふ文字が、一つ〳〵丸いわくの中に書かれて居る。それを仰いでると、折から正午を告げる會堂獨得の鐘が鳴つた。聖母像に捧げられた花の美しく又大きいのに反し、基督像に捧げられた造花の目立つて色褪せて貧弱なのは、こゝの信仰をよく示して居るのかも知れない。

第二夜は雲仙で送つた。雲仙はその名の如く、雲に暮れて、雲に明けて、雲の中を下つた。登るとから降る迄雲又霧で、山の容一つ見るでなく、躑躅が滿開だといふその名物の赤い花を見るでなく、わづかに朝のテーブルで此邊でとれたといふ苺を頬張り、同じく此邊でとれたといふ蜂蜜をトーストにぬつてかじつた位のもの。しかも五合目迄下つて來たら、下界は忽ち晴れ渡つて、島原の海一體が的皪と光つて居るではないか。雲仙といふ山は恐ろしく皮肉な山だ

と思つた。かう徹底して名實相伴つて居ては、今更負惜しみも不平も洩らせまい。

第三夜を私達は始めて目的地の熊本で迎へた。市についた第一印象として、おや隨分變つたわねと義母は獨りごつたものであるが、やがて宿へついてやゝ落ちつくと、あんまり變らないやうねと、まるで反對の事を言つた。五六年前に私が最初來た時にはなかつた電車が、今度來て見ると、チン〳〵動きますをやつてる熊本だ。勿論三十年の間にはかなり變りもしたに違ひない。しかし家の中に入つて見ると、表向程には變つて居ないのかも知れない。これが熊本なんだらう。私にはこの一見矛盾した印象の言葉が誠に面白く生々と響いた。さうしてこの分だと案外好い收穫があるぞと考へた。

ところが其夜、かねて東道一切を頼んでおいた九州日日新聞社の後藤是山君が訪ねて來て、明日以後の熊本でのスケジュールをこしらへ旁々舊居の話などをして居るうちに、私は益々豫想以上の收穫がありさうな自信をもつに至つた。是山君は俳人だ。君の童顔が示すやうに新聞人には珍らしい君子人だときく。『かはがらし』といふ俳誌を主宰して句作にいそしんで居る大の漱石黨だ。「紫瞑吟社」の昔、熊本俳壇と漱石とは深い因緣があるのだ。同行の末次青雉氏も俳友で、第一今日も大阪の俳人青木月斗氏を迎へた、今はそのかへり道だとある。月斗氏と

私達とは島原から三角へ渡る間同船したのださうである。その月斗氏も青雉氏も、明日小天の漱石館へ行くなら同行したいといふ申出だ。元より異議のあらう筈はない。寫眞撮影には是山君の膽入りで、同じく九州日日新聞社の寫眞部主任釘山君を煩はすことにした。是山君でも釘山君でも進んで私達の擧を心から援けてくれるのは有難い。

私はなほ念のために佐賀の行德二郎君に出て來るやうに電報を打つた。行德君は五高時代に夏目一家に同居したことがあつて、この地の昔の關係のある地理には別して明るい人、東京に出てからも亦關係の深い仁だ。第一私達と行を共にする事をどんなに喜ぶか知れないのだ。

手筈が整つた。明日が待たれる。

二　小天漱石館

連日の强行軍で、一等案じて居たのは未亡人の健康だつた。が、一夜あけて見ればすつかり疲勞を恢復して、常にも增して元氣なのは緊張してるからであらうが、先は上々吉だ。佐賀の行德君が一番乘りに飛び込んで來る。

やがて寫眞の釘山君が來て、記念のニュース寫眞として私達をピシヤリとやつてるところへ、

是山君、青雉・月斗の兩氏と顔が揃ふ。十時頃、二臺の自動車に分乘して小天に向ふ。

小天は熊本の西北三里半、蜜柑の名産地として名高いが、名作『草枕』の地として又喧傳されて居る。もとは熊本から峠を越して來たのであり、今は普通同じく蜜柑の産地河内の方を通つて自動車で來るのが順道なのださうであるが、去年の潮害で迂廻するのだといふ。その峠が『草枕』冒頭の「峠の茶屋」のあるところで、この條は中等教科書には殆ど例外なしに出て居るから、共點だけでも先づは天下の名所だといつていゝのかも知れない。よく峠を歩いて越して小天を訪ねる學生さんなどもあるといふ事だが、今は未亡人と同行だから、そんな山路はお斷りする外ない。その峠の茶屋のあるところが、其の當時と現在とは違つて居るとやら、そのところにいろ〳〵『草枕』にちなんだ文句などが落書きされて居るとやら、好事家はいろ〳〵な事を教へてくれる。

好事家といふより、むしろこの地方の一般の人々の間に信じられてるところによれば、『草枕』の那古井溫泉が小天村字湯ノ浦の溫泉であり、志保田家がこの玉名郡の名家前田家であり、怪美人那美子さんが前田家の息女卓子さんであり、ひげの美しい老隱居は前田案山子その人であり、馬子の源さんはいまだに生きて居て、先頃は東京の宮崎龍介君のところに働いて居たと

やら、（さうして宮崎君の母堂は又この前田家の出である）それから觀海寺は、鏡ヶ池はといふ風に、一々立所に事實に結びつけて攷證よろしくあるのである。

成程、那古井の地は海に臨んで居て蜜柑畑が多い。湯ノ浦も有明灣に臨んで居て柑橘類の名

『草枕』のモデル當時の前田卓子さん

產地。溫泉宿とはいふものの、隱居が別莊に建てたもので、客はあるもよし無くもよし、本家は小高い岡の上にあつて白壁の家だとある。今その本家は燒けてしまつたが、數里の先からそのお城のやうな豪勢な白壁が見えたといふ。その本家には兄が居て、こゝの溫泉は正しく隱居案山子が老を樂しみ養つた別莊で、政界の名士を數多く迎へたところださうだ。小說では美しい髯の隱居が書畫骨董を樂しんで居るところへ、主人公がお茶によばれる。事實案山子は議會三美髯の一人といはれた程の美しい髯の持主で、多くの珍らしい書畫骨董を集めて自適の生活をして居たといふ。漱石も亦同好の趣味

をもつて居て、しば〱茶に招かれて書畫骨董を見せてもらつたといはれて居る。後に前田家が離散して人手に渡つた珍寶の中には、一雙の屛風で數萬圓の名品迄あつたといふ。この案山子(あんざんし)は弓をひく癖をすることになつてるが、事實は槍をとつては細川藩で及ぶもののないといはれた名手であつたさうである。

怪美人那美(なみ)さんは一旦緣づいて不緣で親元へかへつて來て居る。彼女の行動はキ印だと噂される程端倪(たんげい)すべからざるものがある。卓子(つなこ)さんは生涯あらゆる苦勞をなめて來て、現在六十六七歲の餘生を府下池袋で養つて居られる不幸な方で、當時不運の第一步を踏んで、嫁入り先きから親元へかへつて居た。美しく、田舍には珍らしいチヤキ〱の、當時のいはば新らしい女であつたらしい。作中の怪美人は軍人になつたらといはれる位勝氣であるが、卓子(つなこ)さんも後には支那革命に彼地へ渡つて奔走した位の女丈夫だ。その外家の特色ある作りなど、小說と事實と正に一致する。だから『草枕』の地は、取りもなほさずこの小天(をあま)村字湯ノ浦の溫泉に外ならないといふのである。

それはそれに違ひなからう。私達も亦それを疑はない。疑はないどころか、むしろそれを信ずればこそかうやつて訪ねて來るのである。しかし、こゝで間違つてはならない事は、さうし

てしば〳〵誤られ易い事は、『草枕』の素材がこゝから得られたといふ事實から更に一歩を進めて、『草枕』の中に描かれて居る事をすべて事實として、反對に『草枕』を尺度としてこの地や人物を說明し去らうとすることだ。これは危險千萬だ。一體『草枕』は平俗な自然主義全盛の當時の文壇に投じられた謂はば反自然主義の巨彈なのだ。事實そのまゝ、醜い人生そのまゝ、つまり當時の合言葉によれば現實暴露の悲哀を描かうとしたものではなく、反對にむしろ主人公が作者と一緖になつてしば〳〵反覆して居るやうに、所謂「非人情」の境地或は詩情を描いたものである。だから、下手にモデル問題なんぞを逆に使つて、漱石の初戀だの卓子さんのエロ・サーヴィスだのと邪推しては、折角の非人情哲學が泣き出すわけだ。

さて漱石がこの地に來たのは、明治三十一年十二月三十一日、大晦日に友人の同じく五高教授の山川信次郎さんと二人連れでやつて來て、「溫泉や水滑かに去年の垢」と長々と浴槽の中で春を迎へて、至極暢氣に正月休みを暮らしたものらしい。床に若冲の鶴の幅がかけてあつたり、青磁の鉢に羊羹を入れて卓子さんが持つて出たりしたことは『草枕』にあるとほり。夜暗い浴槽の中に二人が入つてるとも知らず、誰も居ないものと思ひ込んで下りて行つてびつくりして逃げ出したりした事があるとは、彼女自身が物語るところ。若い時から老成の風があつたとい

はれてる漱石だ、好きな書畫骨董を觀せてもらつて喜んだことは想像出來るが、特別茶目つたともはしやいだとも考へられない。卓子さんもおとなしい方だつたといふだけで、むしろ印象は山川さんの方がはつきりして居るらしい。其後夏蜜柑の頃日がへりで同僚四五人と一緒に立ちよつたことがあるといふ。事實小天と漱石との交渉はこれしきのことでしかないのであるが、『草枕』と共にこの地の名は不滅であるかのやうに見える。

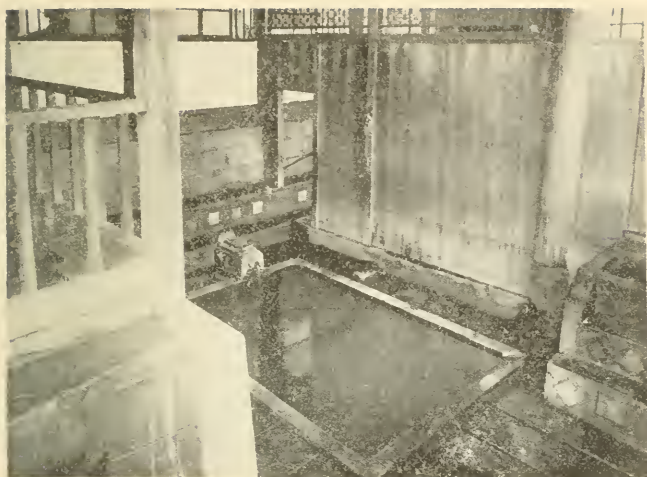
小天の本村に入つて、先づ郵便局長の田尻さんを訪ねる。田尻さんは志保田の前田家とは親戚で、前田さんの方から私達が行くから案内を賴むと言つてある方だ。庭には蜜蜂が飼つてある。折ふし老主人は私達の來訪を待ち兼ねて、恐らく明日か明後日かになるであらうから、迎へ旁〻打ち合はせに樣子を見てくるとあつて、熊本へ出られた後だといふ。して見るとすつかり行き違ひになつた訣で恐縮だ。それでは私がとあつて若主人が先に立つて案內される。湯ノ浦までは村を離れて六七丁あるが、こゝも去年の潮害で堤防をやられ、自動車は途中迄しか行かないといふお話。自動車を捨てたところで、蚊帳を顏にかぶつた人達がしきりに荷車に蜜蜂の箱を積んで居る。花に從つて、枇杷の花、桊の花、紫雲英の花、蜜柑の花といふ風に次々に移動するのだといふ。その花の蜜によつて、蜜の色も香も幾らかづつ違ふといふ。今小天は蜜

小天漱石館（右手の棟は紫山子の居室）

柑の花の眞盛りだ。右手はいためられた田を隔てて海、左手に蜜柑山、ひらけた堤防の上に立つた時、あれですと田尻さんは蜜柑山の麓の小村の中にある雅致ある一構を指す。目ざす舊蹟は指呼の間にあるのである。成程と一行は期せずして點頭いた。たゞあたりの荒涼たる潮害をのぞけば、『草枕』から心に描いて居た豫期とあんまり違はなかつたのだ。

門前に立つて見ると、いかにも數寄者の建てた家らしく面白い作りだ。小説の宿と同じやうに、麓の平地から丘の腹に向つて中庭を圍んで建てられて居るので、一見三階建のやうにも見えるが、しかもその一番高い三階の座敷に入つて見ると、かへつて庭の沓脱ぎからすぐに上ら

れる仕組みになつてるといふ凝り方だ。兩翼、殊に向つて左側が母屋、漱石が居たといふ三番の部屋といふのは、その母屋をのぼり切つた三階に當る、全く他の部屋とはかけ離れた特別室だ。さうして案山子の居室といふのは二階の一番上の部屋で、この部屋の造りは變つて居る。そこへ所狹きまでに珍貴な道具類が並べられて居たものださうであるが、今は全くがらんとして何もない上に、幾分の模樣がへもあつたとやら。庭を隔てて山を見、庭の盡きるところへ海がやゝ鈍重に光つて居る。みんなは三番の部屋を觀てから、こゝに集まつた。一家の方はいふに及ばず、そこへ村長さんや農會技師なども走せ參じて、是山君の音頭で、これから『草枕』座談會を開かうといふ好景氣だ。私は何はともあれ釘山君を督して方々の寫眞をとり始めた。『草枕』以來一躍この溫泉が有名になり、それから誰いふとなくこの宿を漱石館とよんで、溫泉宿を續けてゐたさうであるが、今の主人水本氏になつてからはそれをやめて、只管柑橘類に專念されて居て、今では多くの部屋部屋がネープル・オレンヂの貯藏室になつてるといふお話。主人自身のお話によれば、所謂三番の特別室も、先日迄やはりオレンヂを入れておいたのださうであるが、私達が訪ねるといふ話があつたので、漸く兩三日前にそれは片付けたところだとの事、今日は庭の草をひいたところで、明日あたり疊替をして遠來の珍客を迎へる手筈で、田

小天漱石館の浴槽

尻氏とも相談し、出來れば一泊宿つて頂きたいと思つて居たのに、豫期以上の早目に來てしまつたので、とんだ亂雜なところをお目にかけてとひどく恐縮の體だ。突然押しかけたのだから、むしろ罪は當方にありで、かへつて有りのまゝの現状を見せて頂いて有難かつたのであるが、成程三番の部屋の疊はよごれて室飾も何もない。いかにも人の住んで居ない荒れ方だ。それを見て田尻氏が氣をきかせて、宅に案山子舊藏の浦上玉堂の山水の掛軸があるから、それを自轉車でとらせて來ようといふ。いゝ思ひ付きだから、部屋の寫眞はそれがついてからといふことにし、釘山君と浴槽へまはる。

裸體の美人を見て主人公が裸體美論をやるこの浴槽は、棧敷のやうな脫衣所から見下ろせるやうになつて居て、いはばこの三層樓の地下室に當る。當時とは幾分趣も變り、溫泉の溫度も低くなつたとのこと、こん〳〵と湧き出る湯の口に手を入れて見ると、大體體溫の程度だ。寫眞をとる。それから門のところからの全景、中庭などを撮影してまはつてから庭へ出て、周圍一尺の松の大木とはどれだらう、先生も非常識なことをいふものだ、海岸にある筈の溫泉から、舟で谷川を下るあの末段のトンチンカンと好一對で、隨分と超然たるものだなどと笑ひあつて居ると、玉堂の山水がついたので、それをかけて三番の部屋の寫眞を外からも內からも幾枚もとる。それから大體の見取り圖を書く。

釘山君が持つて來たキヤビネの乾板はあと一枚になつたと悲鳴をあげる。その一枚を一同の記念撮影の爲に殘すこととして座談會をのぞいて見ると、田尻老人不在の爲に、微かに覺えてゐるやうだといふ水本老母以外、小天に於ける漱石を知つてる者がないので、話は自然他の方へそれたものと見え、愛嬌ものの行德君が目達原の仇討といふ鄕里の大衆文學式な話で一座を笑はせて居るところであつた。座上には土地の名物ネーブル・オレンヂがどつさり出されて居る。頗る美味だ。未亡人達を促して背後の丘の山にある案山子の墓に參る。大きな墓碑だ。全

山蜜柑の花盛りで、蜂の羽音が高い。月斗氏と共にしきりに感心する。釘山君がヴェストを出して墓前の私達を寫してくれる。卓子さんにいゝ土産だ。八ノ久保といふこの丘つゞきの高臺にあつた本邸は、明治三十七年に火を失して、燒跡は今ではやはり蜜柑畠になつてるといふ。

大體の目的を果したしたので、それ以上準備もないところに迷惑をかけてはすまないとあつて、わかれを告げる。水本氏も村長さん達も大いに感激して、是非これは保存すると意氣込んで居られた。『草枕』で有名になつたとはいふものの、『草枕』の作者の感興をそゝつて書かしめたこの家そのものが元々面白い家なのである。殊にそこには中江兆民や、其他當時の中央地方の政界の名士も數多く集まつた、いはば一種の記念すべき倶樂部なのである。かうした記念の建物は、いろ〳〵の意味で是非その地方地方に保存しておきたいものだ。私も先生の遺蹟といふ見地からと、又かうした地方文化の見地からと、雙方からしきりにおすゝめしておいた。

時計を見ればもう三時だ。一行のオレンヂ腹もペコ〳〵だ。かう腹がへつては仇討どころでないと見えて、いよ〳〵一刀兩斷といふ行德君の語りどころは、熊本へかへつて夕食をつめ込んでからにのびたらしい。

熊本へかへつて今日の一行を招待する。釘山君が差し出す書畫帳に月斗氏が俳句を書く、

小天漱石館にて

古館の花橋の匂ひかな　月斗

五高の小島伊左美教授、野々口勝太郎教授がお訪ね下さる。小島さんは漱石在任當時の現在唯一の同僚であつたといふ。義母と二人で懷舊談に花が咲く。野々口教授からはいろ〳〵新しい事實をお聞きする。その野々口教授も今はもう故人になられた。

明日は市内の舊居まはりだ。

三　熊本の舊居六つ

漱石が松山から熊本の五高に赴任して來たのが、明治二十九年四月。その六月に新妻を東京から迎へて一家を持つてから、明治三十三年六月の洋行迄に、全部で六軒の家を轉々して居る。その舊居が全部あるかないかはわからないが、ともかくたづねて見ようといふのが今日の日程だ。私達の外に是山君、行德君、それから釘山君といふ顏觸。

七圓五十錢の三三九度をあげたといふ、近頃流行の婦人雜誌などの儉約くらべの結婚式よりまだ安い、記念すべき結婚式をあげて新家庭をもつた光琳寺町の家といふのは、義母がたしか

熊本市光琳寺町の舊居（前面の離れが結婚式の室）

にこの邊だといつて墓地を目當てにさがしあてた板塀の中の一棟、こゝに入口があつた筈だといふのであるが、全く入口がわからない。是山君が近所の人にきいてくれると、市區改正で表通りに門がついて、今では「熊本簡易保險健康相談所」の奥座敷だとわかる。表へまはつて來意をつげると、看護婦や醫師が始めて知つてびつくりする。もと妾宅であつたとやらで、一寸茶室風の離れのやうな一室があり、そこでザツクバランな結婚式があげられたのだといふ。義母は懷しさうに瞳を輝かせて、まるで違つて居ないわね、こゝに夏目が坐り、こゝに私が坐り、ここに父が坐つてと、その記念すべき日をまざまざと目に浮べてるのであらう、手に取るやう

に説明してくれるのである。

すゞしさや裏は鉦うつ光琳寺　　漱石

當時の句がある。隣りは墓地、この墓地には土地で名高い靈犬の墓があるさうであるが、何でもその昔この家に不義があつて刃傷沙汰があつたとやらで、夜變な物音がするといふので引つ越したのが合羽町二三七番地だ。

合羽町の家といふのは何だか下宿屋みたいないやな家で、その癖家賃が十三圓といふ當時としては高い家だつたのよと義母が言つた其家は、さがし出す迄もなく殆んど當時のまゝで、成程みすぼらしく殘つて居た。しかも滑稽な事には、本當に下宿屋をして居るのである。下宿の人達も全くの初耳で不時の訪客に驚いて居て、中にはライオン齒磨を脣いつぱいにくつつけて、ごし／＼齒ブラシを使ひながら覗いて居た下宿人もあつた。漱石の舊居とわかつて、今に下宿料の値上げをされなければいゝが……。

大江町は當時まだ大江村であつた。水車があつたり、裏は一面の田畑で本當に眺めのいゝところで、そこでは『猫』でお馴染の多々羅三平君がかなり活躍したところであつたがと、未亡人は又しても追憶の瞳を輝かせる。變つたであらうと語り合ひながら行つて見ると、水車が懶

くまはつてるのでおや／＼昔のまゝよと言つてるうちに、元田男爵家の古風な洋館の玄關に立つ。こゝも亦舊のとほりだとある。舊居といふのはこの邸内の一隅にあるのださうである。

　夏目未亡人が訪ねたといふので、これは／＼と出迎へられたのは大正天皇の侍從落合東郭さんの御母堂、つゞいて元田男爵の御母堂だつた。新聞で貴方のおいでといふことは知りましたが、ようこそ訪ねて來て下された、三十幾年振りでしたが、すつかり見違へるやうになつてと、自分の娘でも迎へるやうなもてなしぶり。義母もすつかり喜んで甘えるやうに昔話に花を咲かせる。その頃は貴女もお若かつたになど言はれるのは元田さんの御母堂だ。まだ子供のなかつた花嫁氣質のぬけ切らない頃のことだ。お年を伺ふと八十二歲。明治大帝に帝王の學をさづけ奉つたといはれる元田永孚先生の未亡人だ。矍鑠としてしかもやさしみのうちに凜乎犯すべからざる氣宇が漾うて居るのは流石だ。私は老未亡人について何等知るところがないけれども、初對面の印象から推して、明治の新日本建設の大事業の背後には、かくの如き日本女性の隱れた力が多分に働いてるに違ひないと考へ、一種いふにいはれないすが／＼しい莊嚴さに打たれた。落合先生の御母堂も七十幾歲とやら、宛然姑につかへるが如く又全く姉妹の如く、こゝには人の世の埃つぽい風は微塵も吹かないらしい。しかも私がたつて御願ひしてカメラに納まつ

て頂いた時には、幾分面はゆいらしく、お互に場所を譲り合つて居ずまひを正されるあたり、ほほゑましくもゆかしい限りであつた。

この古風な質素な應接間には、それにふさはしい古オルガンがあり、時代ものの堆朱の卓がある。二枚の平べつたい籠の中に蠶が桑に憩うて居る。二人の老夫人たちの手すさびであるらしい。しかしこゝには私達の目を奪ふものがある。それは明治の元勳たちの詩箋尺牘のはりまぜ衝立だ。三條實美、土方久元、坂本龍馬、勝安房、佐野常民、高崎正風の諸大家の外に、元田永孚先生の「鈴鹿峰頭雪滿レ天、驅レ車直指帝城邊」に始まる七言律があるが、それには明治十年二月西南の變を聞き愴惶として西京に赴き、天顏を拜して而して作ると前書きがある。當時の光景が目に浮ぶ。

屋敷も簡素で神社の境内のやうなすが〲しさ。小さい祠がある。明治大帝の靈位が祀つてある。前に蘭の花が咲いて居る。離れがある。舊居はその隣りの大きな梧桐の下にあるのである。平家造りの閑靜な構へだ。こゝは大いに氣に入つて長く居たかつたのだが、落合さんが熊本へかへられるといふので、やむを得ず井川淵へ立退いたのだといふ。

井川淵の家は藤崎の宮の近くで、白川に面して居る。二階に上ると明午橋が目の下で、橋板

熊本市井川淵の舊居二階より明午橋を望む

を踏む下駄の音が手にとるやうに聞こえる。大きな榎があつて、その下に鶏が遊んで居た。手狹な家だ。こゝの家人も舊居である事を知らずに居たが、美しい夫人は、宅が役所から歸つて聞きましたら、どんなに喜ぶでせうと心から嬉しさうに禮をいつて居た。明午橋をよんだ、「春の夜のしば笛を吹く書生哉　漱石」は大方こゝでの印象であらう。

居る事僅かに三箇月で坪井町に移つた。當時十圓の家賃だつたといふが、これは又おそろしく立派な家だ。洋館の應接間や玄關が新しくつついたので、未亡人は一時、これは新築らしいと言つて居たが、勝手の方から庭口へまはつて見て、當時のまゝだとわかつた。物置小屋が

熊本市内坪井町の舊居

もとは厩で馬丁が同居して居たといふ程だから、當時五高の學生さんだつた寺田寅彦博士が書生においてくれといふ話で、物置でもよければといつて話がきまつたといふのも道理だ。こゝで初めての長女が生まれた。「安々と海鼠の如き子を生めり　漱石」といふのが祝ひの句。海鼠の如きは少々恐れ入る。こゝは産湯の水の井戸だ、七五三縄でも張つたらどうですなどと、是山君が珍しく輕口をたゝく。子規居士が初雛を祝つてくれる。その手紙と雛とは今私達夫婦が祕藏して居る。こゝの住ひは足掛け三年の長きにわたつた。

角力司の吉田追風の七五三縄を張り渡した門を過ぎた近くの北千反畑の二階家には、ほ

んの三箇月足らずしか居なかつたのであるが、其頃書生同様同居して居た行徳君はしきりになつかしがり、長女の乳母車を押し犬を連れては、藤崎八幡のあたりを散歩した話をして居た。

とにかく六軒の家は六軒ながら、殆どもとどほりといつていゝ位に殘つて居たのは、來て見た甲斐があつたといふもので、熊本の文學通の是山君などでさへ、わづかに二箇所を知るのみだつたのだ。現住者の大部分が知らなかつたのも亦一興であつたが、私達の不意の訪問が却つてそれらの人々を喜ばしたのも嬉しかつた。變つたやうで變らないと未亡人が洩らした第一印象がいゝ箴をなして、熊本なればこその感を深くしたことであつた。私がこれらをすべてカメラに納めたのはいふ迄もない。豫感どほり好收穫であつた。

五高を訪ねたが、こゝでは取り立てて見るものもなく、小島さん野々口さんその他の教授たちに擁せられ、古い學校一覽で、當時の同僚や年俸の辭令などを見た位なもの。圖書館に案内されて、幾度製本をしなほしてもすぐに背がこはれるといふきたない漱石全集を觀た時には、一種の感慨に打たれた。

其夜、『夏目さんの人及び藝術』の著者の訪問をうけた。さうして氏自身が撮影された『草枕』『二百十日』のモデルであらうといはれてる地の寫眞數葉を下さる。これは大いに有難かつた

が、昔學校へ行つた時から話の出て居た私の大嫌ひな講演を、たうとう學生諸君に坐り込まれて承知せざるを得なくなつてしまつたのは迷惑だつた。

翌日未亡人と行德君とは休養旁々名所見物。私は五高へ行つて短い講演でともかく責任を果たした。夜は五高の學生諸君が義母を取り圍んで、思ひ出話に興じて居た。

熊本に於ける三日三晩、私達は漱石氣分、『草枕』氣分を滿喫して、第二の目的地たる『坊ちやん』の地伊豫松山に向つて立つた。熊本では徹頭徹尾後藤是山君の斡旋に負ふところがあり、殊に寫眞撮影に於ては釘山君の全的な好意によつて思はざる便宜を得たのであるが、さて松山ではこれだけの便宜が得られるであらうか。尤も松山滯在はたゞ僅かに一箇年であつて、一人身の氣輕さには、宿も一二で、其點文句は少い筈であるが、いかんせん未亡人も私も松山にはまだお目にかゝつたことがないので、全く勝手がわからないのだ。仕方がないので俳人村上霽月さんにお世話を御願ひしておいたのだが、果して熊本のやうな收穫が得られるかどうか。

私達は宮地、竹田、別府と、まづ別府でとまつて、そこから伊豫の高濱へ渡らうといふのである。松山中學出身者は俺の中學こそ『坊ちやん』の中學だといつて威張る。さうして山嵐の

モデルがどうのかうのといふことは、これ迄幾度聞かされたか知れない。それで見ると松山の『坊ちやん』熱は、遙かに熊本の『草枕』熱を凌駕して居るやうにも感じられる。いゝことに私は、例の「赤シャツ」のモデルだといはれた人が、この小說の餘白にべつたりと當時の中學校のこと、先生のこと、その他『坊ちやん』中の事件の眞相を詳細に涉つて書き込まれた珍本を手にして居る。これが何よりの手引きであつて、當時の事をこれ以上に知る事は一寸不可能であらう。私はこれを懐にしてまだ見ぬ松山に乘り込まうといふのである。

私達は『草枕』のフイルムをぬいて、『坊ちやん』のそれと入れかへなければならない。別府からの船の上では、もう未亡人の顏からあの關門海峽の感傷は消え去つて居た。

四　道後溫泉

松山では村上霽月さんに萬事の御世話をお願ひしておいた。霽月さんは子規・漱石の俳友で、地方俳壇の先覺者として、俳壇一方の驍將である事はよく人の知るところ。子規・漱石兩者には親しく交はつて、松山時代にはしば〳〵宿を訪ねられたと聞いて居るから、案內をうけ乍ら其人の口から當時の模樣をきくのは、私達の大きな喜びでなければならない。村上さんも私か

らの懇望を快諾して其日を待つて居て下すつたのであるが、いかんせん、好事魔多しとは此事で、折ふし三土藏相が歸省展墓をかねて四國の銀行大會に臨まれるのと打突つて、銀行の頭取をしてをられる村上さんは、その接待委員で香川縣の方へ出張されなければならない羽目になつてしまつた。そんな第一歩の踏み出し違ひから、私達は高濱へ上陸すると、輕便にまた乘つて、それから又先へ行つて乘りかへるより、一氣に自動車を飛ばせるにしくはないと思つて、タクシーを道後へ飛ばした。ところが埃だらけな田舍道に、車は使ひ古しのフオードと來てゐる。まるで苦しみに乘つたやうなもので、道後溫泉の鮒屋へついた時には、變に動悸がすると義母が言ひ出したものだ。これは失策つたと思つて居ると、女中がお客樣ですと名刺を取り次いだ。大島梅屋さんだ。

梅屋さんも松山に於ける子規門下の俳人で、當時しば〳〵漱石の宿にも訪ねて來て、一番當時の事情には通じて居られるといふので、村上さんが自分が來られないために、つまりその代理格で萬事の東道を委任されたのだといふ。しかも恐縮な事には私達を高濱迄出迎へられたのに、私達はいきなりタクシーに乘つてしまつたので姿を見失ひ、輕便に乘つてからどこかに居るに違ひないと思ひ、一々の車室を東京の夏目さん、東京の松岡さんと高聲に尋ねて下さつた

のだといふ。さうして宿もこの道後よりは、かへつて『坊ちやん』の山城屋、つまり城戸屋の方がよからうといふので、大體話をしておいたのだといふのだ。いよ〳〵もつてどぢを踏んだわけだ。では明日からは間違ひのないやうにと、いろ〳〵打ち合はせたことであるが、明日は多分森河北さんも同行されるとのことだつた。河北さんも同じく銀行家の俳人だ。

漱石が松山中學へ赴仕したのは明治二十八年四月。それから熊本の第五高等學校の教授になつて松山へおさらばをしたのが翌年の四月だから、丁度松山には滿一箇年間居た勘定だ。尤もその三年程前、明治二十五年の暑中休暇に岡山へ來て大洪水に遭ひ、それから海を渡つて折から歸省中の子規居士を訪ねたことがあるから、松山には二度來た事になるのであるが、この時はまだ文科大學の一學生で、子規の母堂がこさへてくれたすしが大變おいしかつたと氣に入つた位で、別に印象の書き誌されたものも殘つてゐない。また幾日位滯在したものかそれもよくはわからない。しかし當時ぱり〳〵の文學士で、しかも成績のよかつたといふ人が、すでに東京で教職にもついてゐながら、何を苦しんでか突然こんな片田舍の中學の教師になんぞなつて都落ちをしたのかは、いや失戀をしたんだとか、ずつと後年出て來た憂鬱症が出てゐて、近親や東京と遠ざかりたくなつたんだらうとか、いろ〳〵揣摩臆測の取り沙汰があるやうだが、當

の先生は手紙でそれを一笑に附しては居られるが、事實は結局謎で、ともかく松山に來たといふ事その事だけについていへば、前に一度來た事のある親友子規の故郷といふ事が、有力な一動因をなしてる事と思はれる。

ところが赴任するについて手元が不如意であつたらしく、菊地謙次郎さんに、五十圓融通してくれないかといふ、漱石にしては誠に珍しい手紙を書いて居るが、果して融通をうけて、その金で支度をして松山へ乘り込んだのかどうか、それは菊地さんにお尋ねして見ないとわからない。

さて松山へついた漱石は、まづ初めは『坊ちやん』の中の山城屋事城戸屋の客となり、それからいか銀の愛松亭に移り、そこも二タ月ばかりで、二番町の上野といふ老夫婦の宅に宿をとる事になつた。正岡子規が從軍記者に出て病を得てかへつて來て同居したのは其時で、夏から秋へかけての二タ月程であつたらしい。こゝで子規のもとに馳せ參ずる多くの俳人を識つた。霽月さんでも梅屋さんでもみんな當時のお識り合ひ筋なのである。

ところが梅屋さんの話によると、城山の中腹にあつたこの愛松亭といふのは先年取り拂はれて、今では舊城主久松家の別邸の庭になつてるといふ。中學も元の校舍ではなく、今では他へ

移つてるといふことであるが、そこはともかく訪ねるとして、私達が主として訪ねるのは二番町の舊上野氏宅と城戸屋位のもので、熊本にくらべて大分荷が輕い。梅屋さんに賴んで寫眞師を約束して貰ふ。

別府二日の休養で旅の垢をきれいさつぱりと流したいつもりの私達には、この道後の何となく錢湯めいた感じはあんまり好もしくなかつた。それでも初見參の珍しさが手傳つて、いくつもある共同風呂の浴槽をのぞいて步いて、「湯の中で泳ぐべからず」といふ貼り札でもないかしらと考へたりした。湯の町を步くと、ところ〴〵の店先に霽月さんの短册が下がつて居る。俳句の盛んな土地柄であるのと、霽月さんの盛名とが思ひやられる。

道後溫泉の遊廓は『坊ちやん』にはいろ〳〵の役目を仰付かつて居る。まづ入口のところにある團子屋は、坊ちやんが二皿七錢なりを平らげて、生徒に落書きをされた御舊蹟。これは湯晒し團子といつて昔からの名物であるといふ。當時中學の先生たちでもこゝで團子をたべたといふ人は敢て坊ちやんに限らず、同僚で間もなく校長になられた橫地理學士の如きは、『坊ちやん』の書き入れ本に、明治二十九年一月廿六日、家族一同と共に同所に散步して此團子及び善哉を喰へりと、日迄書き込んであるのは恐ろしく几帳面なものだ。それから山嵐と坊ちやんと

が赤シャツと野だいことに天誅を加へるべく、七日七晩障子の穴から二人の登樓をのぞくその家は、ついそこにあるあの家だなどといふのがある。これは團子とくらべると少々眉唾ものだが、しかしさういふ傳説はちやんと殘つて居る。さうなつて來ると、あとを追つて玉子を打突ける松並木も、今練兵場の近くに舊蹟があるさうです、天麩羅を四はいたべて大いに英名をとどろかせるその蕎麥屋もあすこですといつて、翌々日自動車で市内を通つた時教へてもらつた。しかし坊ちやん蕎麥とか坊ちやん團子とか改名はして居ないやうだ。松山ではかういふ事をよくしらべてる人があると、翌々日訪ねて來た新聞社の方からきいた。熊本の『草枕』傳説同樣、こゝでも坊ちやん傳説は中々盛んのやうだ。滯在中たんまりさういふ愛嬌のある傳説をきかなければならない。自然私の筆も實説と傳説とがチヤンポンになるかも知れない。

五　子規・漱石同宿の家

いゝ天氣だ。宿の緣に立つと、初夏の綠の小山の上に白い城がくつきり見える。まるで箱庭の築山の上に、陶製の玩具を置いたやうだ。うつとりとけだるさうな、いさゝか若葉でむされさうな日の光だ。梅屋さんと河北さんとが見える。未亡人も案じたよりは元氣を取り戻して居

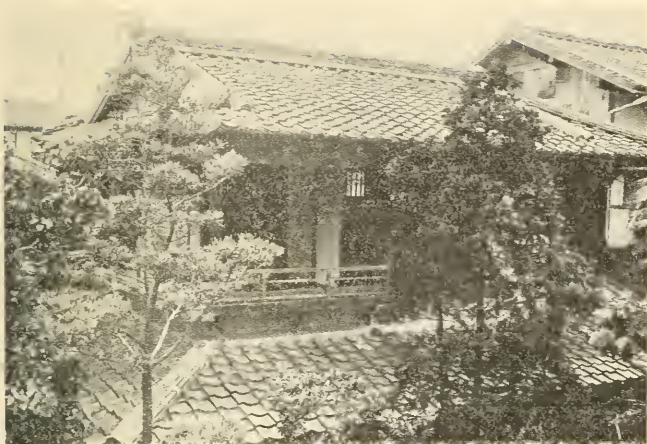
る。先づ目ざすところは二番町の舊上野氏宅だ。

漱石が初め居た愛松亭といふのは一番町で、そこの主人は津田安といふ書畫骨董なんぞをいぢくつた半商賣人であつたらしい。それが通常『坊ちやん』のいか銀のモデルだとされて居る。やたらに茶をいれませうと入つて來ては、人の茶を無暗にしぼつてのむといふ役だから、端役乍らこんなモデルはあんまり有難くない。其人はずつと前に亡くなり、養子は滿洲とか朝鮮とかに行つてるといふ話。こゝには一時巖谷一六翁（小波山人の嚴父）なども居られた事があるさうだ。その家は前にも書いたとほり取り壞はされて今はないが、大體あのあたりでしたよと、鐵格子の扉いかめしい久松別邸の門前に車を留めて、梅屋さんが城山の中腹を指す。高濱虛子さんの『漱石子と私』の中に、虛子さんが始めて漱石を訪ねる條があるが、其時漱石はあづちに向つて弓をひいて居た事が書いてある。漱石の弓は大學の頃からで、一時は大分凝つて引いたものらしく、弓の句などもかなりあるのであるが、かういふ僻遠の地へひとり來て、城山の中腹で弓をひいてる二十九歲の漱石を想像すると一寸面白い。

梅屋さんの記憶によると、そこから二番町へ引つ越したのは六月下旬の頃だつたとあるが、書簡集の日附から押すと、大體その見當に違ひあるまい。原因はいか銀が山嵐にありもしない

事を訴へ、山嵐が怒つていか銀の奴は不都合千萬だとあつて、速刻轉宿を取計らつたといふ一說がある。

約束しておいた寫眞師に聲をかけて、二番町の舊上野氏宅に行つた。今は寺井さんといふ方のお宅だ。昔の武家屋敷とかで、町の通りはしもた家ばかりの靜かなところだ。多くは關西特有の紅殼(べにがら)をぬつた細い格子のはまつた家だ。その家と家の間に狹くはさまれた格子戸をがらがらとあけて、やつと傘のさせさうな、いかにも隱宅めいた見付き。氣取らない植込みなんぞもあつて、前の家の盡きたところにさゝやかな二階家があるのである。

家は東と南とが開き、障子の外は狹い濡れ緣になつて居る。東の緣先きには、僅か二間ばかりの奥行ではあらうが、狹い割合に石の多い小庭が造られ、石燈籠の下に躑躅(つゝじ)がまばらに咲いて居るのが、この場合不思議な彩(いろどり)を見せて居た。袖垣なども卑しからず、ちよこちよこ飛石の多いのも小庭らしくていゝ。東は低い塀が緣に迫つて居る。部屋は六疊で、床と棚とがくつついて居る。平凡ながらきちんとしまつて居る。唐紙(からかみ)一重で次の間の四疊半とも五疊ともつかない不得要領の部屋がつながつて居る。階下の部屋といふのはこの二つ切りで、こゝへ子規居士が轉がり込んで、二箇月ばかり寢たり起きたりの病身でありながら、毎晩のやうに門下を集め

て運座をやつて氣焰を上げて居たところなのだ。その部屋の後ろに階段がある。時代がついて古光りがして居る。

二階は六疊と三疊と次の間とだ。梅屋さんの話によると、床脇の窓の下に机を置いて、多く漱石は勉強して居たといふ。窓をあければ城山だ。東と南とに小さい張り出しがある。明るい小ぢんまりとした、もう一度一人身にかへつて下宿して居たいやうな、まことに氣持のいゝ部屋だ。地袋のついた半床には蛸壺に花が插してあつて、高濱虚子さんの色紙がかけてある。亂暴な字だ。寫眞師を督して階上階下の寫眞を五六枚とる。

松山の宿の裏二階（漱石の居た室）

梅屋さんのいふところによると、漱石がこの

二階に移つたのは子規が來たからであつて、それ迄は前の家の奥の八疊にしばらく居たといふことだ。今は裏廊下が立てしきられて、二軒になつて居るが、元々別棟にはなつて居たが、もとは廊下傳ひに行かれたのださうだ。梅屋さんの口きゝで、釘づけになつて居るそこの戸をあけて貰つて、表の八疊に行つて見る。こゝはやゝ陰氣だが、その代り廣々として居て落ちつけさうだ。漱石が裏の二階家に移り住むやうになつてから、老夫婦が入れ代はつてこゝに居たさうだが、いまだにその上野老人の謠の聲が、どこか部屋の隅々に殘つて居さうな氣配がする。其頃八十歳の老人であつたといふ。漱石はこの部屋に二箇月足らず居たわけだ。

六　子規の助産術

子規・漱石の二文豪が、この松山の地で一つ家の階上階下に住んで居たといふことは、單にそれだけで十分興味のある話でもあるが、しかしこの僅か二箇月足らずの同居は、明治文學史上に於ける隱れた一つの重大事なのである。この事についてはまだ誰も言つて居ないやうだが、漱石が松山に來た事は、單に名篇『坊ちやん』を得たのみでなく、或は生涯の文學的事業の基礎をこゝに得たのではあるまいかとさへ私は考へるのだ。

過ぎ去つてしまつた人の一生を逆に引き戻して、改めて「若し……ならば」(If) といふ假定の下に新な推論を恣にするのは、或は愚の骨頂であるかも知れない。しかしこの場合の私のIfばかりは、少々勝手な言ひ分だが、許されていゝ氣がする。といふのは、漱石が松山に來て居て子規と同居しなかつたならば、漱石の文學的事業は大分色合が違つたものになつてやしなかつたであらうかといふのだ。

漱石の俳句は今日では誰でもその高名な事を知つては居るが、子規がすでに新俳句の闘士として又文人として華々しく中央文壇に馳驅して居たこの頃、漱石はまだ俳句といふものを五十句そこ〳〵しか作つて居ない。それも決して俳人漱石の名を高からしめるやうな代物ではないのである。子規がこの家に同居するやうになつてから、始めはそれ程でもなかつた樣子であるが、やがて子規に誘はれ感化されて、毎夜集まる子規一門の連中に伍して、自分でも運座に加はるやうになり、やがて子規が東京へかへつてからは、俳句に對する熱度を急速度にあげて、一度に數十句づつの句稿を子規の許に送つて、批評を乞ひ始めた。それに一々子規が朱筆で批評を書いて送つたものが、今漱石山房に數十枚殘つて居る。さうして子規の故郷にのこした俳人達とも往來して、自宅で運座をひらいた事さへもあるに至つた。漱石全集の俳句集を見ると、

明治二十八年の秋の頃から、卒然として俳句熱の旺溢して來たのが手に取る如く見える。この俳句熱は、松山から熊本に移つて益〻旺盛となり、洋行前年迄絶えず燃燒し續けた。さうして俳人漱石として優に一家をなすに至つた。其後俳句の數は減つたけれども、終生俳句に對して愛着をもつて居り、しかもその文脈に多分の俳味のある事は等しく人の認めるところだ。この俳句への熱に口火をつけたものは子規の同居ではあるまいか。だから若しこの同居がなかつたならば、漱石の姿は變つてやしまいかといふのが、私の第一の理由なのだ。勿論漱石程の大才だ。子規の手引がなくとも或は大成したでもあらう。しかしあのギリシアの哲人ソクラテスが、思想の産婆といはれたと同じ意味で(ソクラテス的助産術といふ言葉がある。この哲人がうまく人の思想や哲學を導き出してくれるからだ)子規も明治文學一方の先驅者でり、且又無類の煽動者であつた。俳句に和歌に文章に、彼自身の遺した足跡は甚だ大きいが、彼の後に從つた者への影響が、それにもまして非常に大きいのである。明治文學の運動は多く西洋直輸入のものが多かつたのであるが、子規のこの新日本主義的な運動は、今後もう一度見なほされる時が必ず來るであらう。漱石は正に子規のこの助産術によつて、俳人漱石を取り上げたのだと私は考へる。さうしてその因緣は、この同居によつて結ばれたのだとかう言ひたいのである。

それから第二の理由は、子規ののこした俳句のグループだ。この俳句こそ當時の漱石が自分の文學的發表欲を滿足させた文學の全部なのだ。一體他の文學と違つて、俳句程そのグループを必要とするものはない。俳人といふものは蜜蜂みたいなもので、一人の盟主を圍んで、あとはみんなで集まつては相互切磋琢磨をやる。この子規の下に集まつたグループの數は相當あつたやうであるが、その中で特に後の文學生活に關係のあるのは高濱虛子さんだ。子規の病中彼を慰める爲に送つて來た『ロンドン消息』は、子規の雜誌『ホトトギス』に揭げられて病友を喜ばせたのであるが、同時に彼のこの方面に於ける文才を人々に認めさせた最初のものといつていゝのであるが、虛子との交際はずつと續けられ、漱石をして一躍文壇の寵兒たらしめた『吾輩は猫である』の如き作品は、全く虛子のすゝめで書いて見て、虛子などと一緒にやつて居た山會と云ふ文章會で朗讀し、その表題さへも虛子がつけたといはれて居る位。この『ホトトギス』と虛子とに對する關係は、元來子規からの關係だといつてよからうと思ふ。

一體、漱石は自分でも言つて居たが、どつちかといふと頗る消極的であつて、自ら進んで職を求めるの發表するのといふ側ではなく、人が地位を與へたり機關を與へたりすれば、一意專心ありたけの力で責任をつくすといふ謂はば受動的な性質の人であつた。だから手引きよく膳

立てをする人があれば、ならうとも思はないうちにいつしか天下の俳人となり、いつしか大小說家となつてしまつた。その代りなりたくないものに人がしてくれたつて、氣に喰はなければ御免を蒙むる事、かの博士辭退の如しだ。この人に子規のやうな勝氣な絶好な産婆さんがついて居たのは、誠に天の配材の妙だといはなければならない。

子規・漱石の交友は、早く明治二十二年頃から始まつて年と共に深まつて行つた。若し――こゝでも亦Ifを使ふが――子規居士が三十六歳を一期として漱石の洋行中に亡くならず、彼が小說家として世に打つて出る迄生きて居たならば、その交友は恐らく日本文壇には比類なく、かのゲーテ、シルレルのやうなものになつたかも知れない。「子規と漱石」は文學史上の特別興味ある題目であるばかりでなく、又人間として誠に麗しい友情の典型であらう。

子規は八月二十七八日頃にこゝへ來て、さうして十月半過ぎに上京の途についた。中ノ川の蓮福寺で松風會の連中で送別の句會を開いた。其席上漱石の送別の句の一つに、

お立ちやるかお立ちやれ新酒菊の花　　漱石

といふのがあつて、みんな感心したものだと梅屋さんが言つて居た。素寒貧の子規に、月給をとつて來ると、おい、お小使だよと漱石がやると、子規も頗る恬淡に貰ふのみならず、乃公は

病人だから精をつけなけりやといつて、居候をして居ながら主人よりも贅澤で、平氣で鰻をとつて食べたりして居たなどといふ逸話は、こゝの事であらう。かへりに京都・奈良をまはるといふので、漱石がその旅費を出してやつたとも言はれて居る。

（前略）四月十日は小生意氣揚々として廣島を出發し從軍と出掛候其日に御座候。五月下旬戰を見ずにすご〳〵と歸る途中、船にて發病、神戶病院に在ること二ケ月あまり、命をひろひ候のち、須磨郷里と療養にくらし、一昨日僅に歸京致候。まだ本とうによくならねど、旅行が出來る位に相成申候のみ。（後略）

これは子規が十一月二日に東京の根岸の自宅から人に寄せたものであるが、どうやら旅行位はといつて居たそれさへ危く、やがて全く牀につき切りになり、それからの數年を病牀に呻吟する人となつてしまつた。松山で同居して居た時でさへねたり起きたりで、寢牀も多く敷つ放しだつたさうである。この親友同士の同居が、結局子規の故郷訪問の最後となつてしまつた。さうして次にかへつて來た時には、彼はもう骨になつて居たのだ。

人多く漱石の松山での唯一の獲物を『坊ちやん』だと思つて居る。しかしから見て來ると『坊ちやん』は副產物で、主產物は實は子規といふ名產婆の手によつて生まれた俳句なのでは

あるまいか。とにかくかういふ因緣を取り結んだこの小さい二階家は、私達にとつて記念すべき場所であるばかりではなく、松山にとつても大いに記憶さるべき家であるに違ひない。家人の心やりで楣間にかゝげられた雜誌の口繪か何かの貧弱な漱石像の代りに、今日の訪問を記念すべく、寫眞を贈る約束をして、私達は旅館城戸屋に向つた。

七　坊ちやんの間

城戸屋は三番町にあつて、昔から松山隨一の旅館ださうだ。市内の割に靜かなものだ。成程これならば道後よりこゝへとまつた方がよかつたかも知れない。今では代がかはつて、株式組織かで經營して居るとの事だ。これが『坊ちやん』の山城屋だ。

さて山城屋だとすると、坊ちやんが階段下の暑苦しい暗い部屋に奮慨して、大枚五圓の茶代をはずんだところが、早速とてつもない立派な二階の部屋に案内される、坊ちやんいきなりその十五疊敷の眞中に大の字なりにねころがつて恐悦がるのであるが、その部屋を見なければならない。先へ立つた支配人が、恐る恐るこれで御座いますといつて案内してくれる二階の一室に入る。入口に木の札が下つて居て、麗々しく「坊ちやんの間」と書いてある。坊ちやんの間

城戸屋旅館の所謂「坊ちやんの間」

ですかと、期せずして義母と私とは顏を見合はせて、少々擽い感歎の聲を嘱いたものだ。すると丁寧な支配人が、へえと一層恐縮したやうに腰をかゞめた。さうしていふ事には、

「先生にいらして頂いた時に、早速このお部屋へ御案内すればよかつたのを、ついその何で、存じませんもんで、その……」

と揉手をしてあとは言ひ淀んでしまつた。さうして尊敬すべき吾等の老支配人は、益々戰々兢々として愈々恐縮するばかりだ。何だか少し様子が變だ。第一その馬鹿丁寧さ加減に此方が面喰ふ。

部屋は坊ちやんが生まれて始めてだとびつくりした位立派だとも思はないが、名前だけをき

くと子供部屋みたいだが、どうして中々堂々たるものだ。十疊に四疊の次の間つきだが、もとはもう一疊廣く、正に十五疊敷だつたさうだ。成程下手な月給をもらつて居たんでは、いかな無鐵砲な坊ちやんでも漱石でも、いくら諸色が廉からうと、こんな部屋に長く泊まつて居られる筈はない。床の間には私達を迎へる意であらう。漱石の書がかけてある。樹下閑レ襟坐、吟懷與レ道新、落花人不レ識、啼鳥自殘春、といふ自作の五言絶句だ。楣間に一六居士の額がかけてある。何だか先刻のいか銀の因緣がどうやら糸をひいてるやうだ。

森さんはこの部屋には二三度來た事があるが、大島さんは中へ入つたのは始めてだといふ。その梅屋さんは前の緣側から下の町を見下ろして、さう〳〵、たしかにこゝでしたよ、いつか私が先生と散歩をしてこの下をとほつた時に、僕はあの部屋にとまつた事があるんだよといつて顎でしやくつて、更に云ふ事には、ところがその前にすぐ下の吉原の行燈部屋みたいな部屋に入れられたには閉口したよと洩らしたさうだ。そこで梅屋さんがこの若い謹嚴な學者が、吉原の行燈部屋なんてものを知つてるのかと大いに愕いて、へえ、そんな吉原の行燈部屋なんぞといふところを御存じなんですかと問ひかへしたら、ナーニ、行かなくたつてそれ位の事は知つてるよとすまして答へたものださうだ。梅屋さんはしきりに三十五年も前の事を、昨日今日

れたものであらう。この前で記念撮影をしようかと言つて居たのであるが、折ふし工事中で碑が動かされて居るので、碑だけの寫眞をとつた。內藤鳴雪翁の髪塔が近所に建てられるのだといふ。石工がテントの中で、しきりと新しい石を彫つて居た。こゝが松山新名所の俳星塚となるのであらう。

正岡子規の髪塔

　明治以後の新しい俳壇の巨星には、不思議と松山人が多い。この子規・鳴雪の二巨星の外に、中央俳壇一方の旗頭となつたものに、虛子がある。碧梧桐がある。東洋城がある。東洋城さんは生まれは松山ではあるまいが、この中學の出身だ。この盛觀は土地の人々が十分誇つてもいい事だ。髪塔が次々にこゝに建てられるのも結

構な企てではないか。

住職に導かれて、本堂裏手の子規の記念室に行く。小ぢんまりとしたひんやりした一室で、かつて子規が居た事のある記念の部屋ださうで、居士の使つたといふさゝやかなストーヴ、古ぼけた脇息、みすぼらしい小机などが、記念品として置かれて居る。机の上には本立に居士の不揃な著書がならべられて居る。髪塔の前で記念の寫眞をとらなかつたので、下村爲山畫伯の糸瓜の繪のぶらさがつてる床の間の前で、四人でカメラに納まる。

庫裡の座敷でお茶をよばれる。住職が當時の運座の句稿をどつさり持ち込んで來る。序におきまりの畫帖だ。もろ〳〵の俳人が句をぬたくつて居る。署名だけで勘辨して貰ふ。句稿に漱石といふ名が出たりすると、住職は蚤取り眼で、そのどつさりある反古の中に一枚位は漱石自筆のものがあるだらうからと、それを私達から見つけて欲しいのだ。當時の運座の模樣に詳しい梅屋さんが、そんなもののあらう筈はない、和尚さん欲張つてると、そつぽを向いて私に囁いた。五言律詩を書いた明月和尚の小さい額がある。立派な出來だ。松山の名物は、書では明月、繪では竹かきの名人藏澤といはれる程で、藏澤の墨竹も明月の書も共に漱石の甚だ好むところであつた。藏澤については碧梧桐さんの書かれた小さい研究があるが、とてつもなく勢の

い〻竹だ。この二人の作品は各〻二つ三つづつ漱石山房に珍藏されて居るが、漱石自身初めの頃は、この竹に影響された竹を描き、書にも或る時代、明月にいくらか影響されたあとが殘つて居る。計らずもこ〻でかうした小さい乍らに名品を觀たのはうれしかつた。さうして明月和尙が一生さがしたといはれる道後溫泉の碑のことなどが思はれて一層なつかしく、しげ〳〵とこの小額を仰ぎ眺めたことであつた。

九　『坊ちやん』の學校

新聞を見て飛んで來たといつて、私の中學の同窓河路松山高等學校教授が訪ねて來てくれて吉報を齎らした。吉報といふのは所謂『坊ちやん』の學校なる松山中學の現校長は、昔私達の中學（新潟縣長岡中學）の校長だつた御手洗學先生で、私が一年ばかり教へをうけたその先生だといふのだ。これは願つてもない幸だ。さういつてるところへ市長の御手洗不速さんや野間叟柳さんの俳人方が、昔話をきかせるべく訪ねて來て下さる。恐縮だ。

今日は河路君を先達にして、折柄來合はせて居た新聞社の人ものせて、中學校に行つた。昔の城山の麓にあつた中學とはまるで方角が違ふのださうだ。

舊松山中學校（背後は城山）

御手洗校長は昔さながらの温顏の持主で、たゞ白いものが增えてるだけで、二十年前と殆んど變らない。私達の訪問を非常に喜んで迎へてくれられた。舊師の心からなる喜びが私に懷舊の情はもとより、一種感激の瞬間を與へてくれた。同窓の誰彼の消息などを噂しあつた。校長さんが舊師である爲か、敎頭の大內さんや、京都で識り合ひだつた廣瀨さんが親切である爲か、初めて來たとは思へない程すつかり家族的にくつろいだ感じだ。すると舊師が敎頭を顧みて、もう少し早目に來て下さると、生徒をみんな集めてお話しをして貰ふのだつたに、もう最終時間でかへつたものもあるやうで殘念だといはれるから、實はそんな事になると困ると思つて、用心して時刻をはかつて來た

のですといつて笑つた。それでは職員だけでも集めるから挨拶をしてくれろといふ事で、舊師の紹介で短い挨拶をのべた。校長室に參集された職員方には、赤シヤツらしい方も山嵐らしい方も野ダイコらしい方も見受けなかつた。

「貴方方がお見えになるといふので、實は何か御參考になる當時の記錄でもさがして置かうと思つていろ〳〵しらべて見たのですが、この敎務日記以外何もございません。宿直日誌があると大變面白いと思ひ、それには必ず先生の御自筆があるに違ひないので、さうしたら學校の寳にしようと思つて居たのですが、どうしても見當りません。餘程以前にすつかり整理をしてしまつたものらしいのです。」

大内さんがさういつて出される明治二十八年度分の敎務日記をひろげて見ると、四月十日現在生徒數が四百四十一人とあつて、この日が新學年の授業始めらしい。現生徒の約三分の一ださうだ。越えて九月十二日、夏目敎官十一時より病氣缺勤とある。子規と同居の頃だ。更に十二月十七日、夏目敎官病氣により第五時間目早引とある。翌日は子規へ長い手紙を書いてる位だから、大した病氣でもあるまい。そのあたりの手紙を見ると、冬休みに東上して、見合ひをして愈〻婚約する段取りになり、旁〻しきりに油の乘つて居る俳句について、子規庵の運座に

出る事を樂しみにしてる氣配があり、いよ〳〵松山がいやになり、東京が戀しいといふやうな事を洩らして居る。心は半ばすでに東京に走つてるらしい。

教務日記は更に報告する。一月十日、夏目教官病氣缺勤。まる一日の缺勤は一年間を通じてこれが最初の最終だ。持病の胃か風邪か不思議だと思つてると、傍らの未亡人が、同じ思ひか、あらと小さく口の中で呟いて、指折り數へて思案顔だ。どうしたのですと尋ねると、やつぱりさうねと、破顔一笑。何でも暮の二十八日に四角ばらない見合ひをすませて婚約し、正月中二度ばかり往復をして、正月七日に松山へたつのを新橋驛で見送つたのださうであるが、途中で船の都合か何かで遲れたらしいのね、といふ未亡人の説明だ。若い連中は無暗と喜ぶ。するとこの一日は意味深長の一日ですねと誰やらが言つたので、みんなで大笑ひ。東京の連中なら、てつきり奥さんおごりなさいよと來るところだが、こゝにはそんな不躾な方は居ない。かうして四月九日、本日午前九時より講堂に於て夏目教官告別式擧行とあつて、それで中學とは縁が切れたわけだ。私達はその年の古ぼけた卒業記念寫眞の中に漱石を見出して歡呼の聲をあげる。丁度三十歳の春だ。それから約十年たつて、始めて『坊ちやん』が呱々の聲をあげたわけだ。

一〇　モデルと種本

此卒業寫眞を此間から敎頭始め若い職員方が睨めて、確かにこの中に漱石が居るに違ひないと取沙汰して、あれかこれかと評議一決しなかつたのださうだ。漱石がわかつたとなると『坊ちやん』のモデルも居なければならない筈、寫眞中央の軍服姿の校長が「狸」であるのはわかつたとして、「赤シャツ」や「山嵐」「野ダ」はどれだらうと、みんなは異常の好奇心を昂ぶらせて瞳を輝かせるのだ。常識からいへば、私は遺蹟巡禮にわざ〳〵『坊ちやん』の本場に訪ねて來たのだから、私が尋ねる方であつて、職員諸君が敎へて下さるのが事の順序だ。ところが事實は正に逆で、私が說明役にまはつて、諸君が尋ね役で聞き役なのだ。こんな變な道理てものは世の中にある筈のものではないのだが、それも實をあかせば私が種本を持つてるからなのだ。それがなければ松山に緣もゆかりもない若輩の私などに、この寫眞について說明をする事なんぞ、てんで出來よう筈がない。

　種本といふのは外でもない。先刻から二度ばかり引き合ひに出した『坊ちやん』の書入れ本のことで、その書入れこそは、校長の向つて右手にむづかしい顏をしてられる横地理學士と、

『坊ちやん』のモデルだと云はれる松山中學校明治二十九年春の卒業
寫眞　前列右から三人目眞鍋嘉一郎氏　二列右から四人目横地石太郎氏
三列左から二人目漱石先生

ある部分坊ちやんのモデルだと言はれて居る弘(ひろ)中(なか)又一さん（同列右端？）とが、小說『坊ちやん』の餘白にべつたりと、當時の事實談やら感想やら傳說やらを、思ひ當る節々(ふしぶし)について殆んど競爭の姿で書き込んで居られるのだ。何しろ一人は道後溫泉の團子を食つた年月日迄几帳面(きちやうめん)に書くといふ位の律義さであるし、他の一人は木喰戒(もくじきかい)をやつてるといふ仙骨を帶びた人なのだから、その正確さやうそいつはりのない事は十分信用していゝ。これは小說の構成を見る上にも、亦當時の風俗資料文化資料としても、いろいろな點から非常に價値のある文獻なのであるが、今はその書き込み全文の紹介が主でないから、たゞ小說の解說に入用の部分だけその助け

を借りればいゝのである。私はこの書入れをかなり丹念に幾度もよんでる上に、更にいゝ事には、横地さんから、漱石の前任者の外人教師の送別記念寫眞をもらつて居て、それに職員方の名前やら渾名やら、さうして『坊ちやん』のモデルならずやといふ嫌疑迄が明細に書いてあるのだ。この二つがいはば手品の種明かしで、別にカンニングをやつてるわけでも何でもないのだ。だから私が職員諸君に説明するのも、いはば横地・弘中の兩先輩が後輩に向つて思ひ出話をされるのを中繼するやうなものだ。但しこの放送に雜音が入つてるのはやむを得ない。

先づ便宜上、其頃生徒間でうたはれて居た先生達の渾名の數へ唄から始めよう。

一つとやー　一つ弘中シツポクさん（英語）
二つとやー　二つふくれた豚の腹（西川氏、英語）
三つとやー　三つみにくい太田さん（漢文）
四つとやー　四つ横地のゴートひげ（物理化學）
五つとやー　五つ色男中村さん（歴史）
六つとやー　六つ無理いふ伊藤さん（體操）
七つとやー　七つ夏目の鬼瓦（英語）

八つとやー　八つやかしの本吾さん（安藝氏、博物）

九つとやー　九つこつとり一寸坊（中堀氏、地理）

十とやー　十でとりこむ寒川さん（會計）

これには又いろ〳〵の替へ歌があつたといふから、大抵の連中は槍玉にあがつたであらう。其中で弘中さんのシツポクといふのは、例の天麩羅蕎麥四杯から來て居るので、これは明かに生徒に見付けられてこの名を貰つたのだと、弘中さん自身が認めて居る。關西のシツポクは大體東京の天麩羅そばだと思へばいゝ。弘中さんには又坊ちやんといふ別名もあつた。教場で生徒にからかはれたのも事實だが、但し團子の方は漱石だそうだ。弘中さんにはこの『坊ちやん』のもろ〳〵の活躍とよく吻合（ふんがふ）する箇所がいくつもあるといふ事だ。

豚腹の西川さんは赤縞のシヤツを着込んで居て、釣の名人であり、顏は所謂盤大面（ばんだいづら）で「ホホホ」と笑ふところは全く赤シヤツのモデルだが、性質は全く違つて居て、多分赤シヤツの陰謀やなんかは、狸校長の腹心（ふくしん）としていろ〳〵細工（さいく）をした前任の教頭が、後で排斥をくつて他へ轉任になり、漱石の來た頃にはその傳說がいろ〳〵殘つて居たから、それによつて鹽梅（あんばい）したのだらうといふのが、横地・弘中兩先輩の說なのだ。赤シヤツなんぞといふ憎まれ役は誰だつて買

つて出たくないのだが、横地さんが教頭だつたので、とかく赤シャツ役を世間では持ち込むので、氏は氣をくさらせて書中大いに辯明これつとめて居られる。弘中さんもその寃罪である事をきつぱり認めて保證されて居る。

横地さんは山羊髯を生やして居たので、そこで四つとやに唄ひ込まれたわけ。色男と謳はれた中村さんには、流石色男だけに艶種が大有りで、作中うらなり君の送別會に現はれる小鈴といふ藝者は、實は鈴吉といふ當時の賣れつ妓で、それと大いに仲がよかつたとやら、それから道後の遊廓に馴染があつて、そこへしば〳〵登樓し、時にはその家の息子が中學生だつたので、それに缺席屆を持參させたといふ徹底振りに、教員室の問題になつた事があるともいはれて居る。この人かつて松江にあつて、ラフカヂオ・ヘルン先生（小泉八雲）を某樓に引つぱつてつて見せた事があると自慢してたさうだから、この道にかけては中々の猛者だつたらしい。醉ふと「日清談判破裂して」をどなつた。

體操の伊藤さんはあんまり無理をいつたせゐか、舍監をして居てバツタを寢牀の中に入れられ、イナゴだがなもしをくつた御當人だとある。この人寄宿舍で酒をのむのを生徒に見つかつて、たうとうあやまり證文をとられた。夏目の鬼瓦といふのは、薄あばたが漱石の顏にあつた

からで、このあばたを相當苦にして居られたものらしい。八つとやのやかしといふのは阿波の方言で、何やかし彼やかしとこの人が使ふのが耳障りでつけられたのだとは罪がない。中堀さんは丈が低くて靴音ばかりがコツトリ〳〵音がするといふのだ。會計が取り込むのは、今と違つて諸色のやすい共頃でも、みんなの頭にピンと來たものと見える。これは寒川といふ人で、作中の書記君そつくりと來て居る。

　かう數へ上げて來ると、主要人物で出てないのは、狸と山嵐と野ダの三人だ。うらなり君は送別會をやつてもらつて、人と猿とが半々に棲む日向の延岡へ轉勤したのだから、その寫眞には姿を見せて居ない筈。

　さて狸であるが、この狸はたゞの狸でなかつたと横地さんも述懐して居るのであるが、生徒から排斥されて、山嵐なんぞもそれに加はつて學校に居づらくなつた時に、全部自分の連れて來た一味腹心の職員を他へ榮轉させてから、それが片付いた上で自分の首を待つたといふ。排斥を喰ふ半面には、中々武士道的なところがあつた。高等師範の出身で住田といふ仁、自分の閥を造り過ぎたのが災したものらしい。月給六十圓だのに、横地・夏目二人共に八十圓づつといふ校長よりも給料のいゝ學士が二人も來たのだから、校長としてはやり難かつたであらう。

山嵐は儲け役で、松山の人で渡邊政和さんといふ數學の教師だといふ事になつて居る。なる程ちよく〳〵似てる箇所もあるにはあるが、作中の山嵐程さくいい人ではないと、御兩人共書いてゐる。しかし土地の人ではあり、生徒に信望もあつて、校長排斥の黑幕だから用心しろと人から注意された事もあると横地さんはいふ。とにかく世人は山嵐をすつかりこの人にしてしまつて、山嵐といへばすぐに渡邊さんと來るのださうだ。私にも訪ねたらといふ人があつたので、何か特別の話がおありかしらときゝかへしたら、世間では『坊ちやん』といふとすぐ私を引き合ひに出すが、何も知らないよと言つてられるといふ事に、それでは閑居を騷がせる迄もないと思つて遠慮した位だ。しかしこれは『坊ちやん』のモデルとして、今ではたつた一つの動かない相場になつてるやうだ。かうなつたら違ふと頑張る人が出て來たつて、もう反對意見は通用しつこないのが世間だ。渡邊さんは老後の思ひ出として、いゝ儲け役を拾はれたものだ。しかしその山嵐の渡邊さんは、別に赤シヤツとその一黨に天誅を加へたり玉子を打突けたりはせず、永年この學校に奉職して、先頃引退されて、今は港町の自宅で靜かに老を養つてをられるといふことだ。

赤シヤツと共に困つた憎まれ役は野ダだ。啻に困るばかりではなく實に輕蔑に値するのだか

ら、いくら世間が廣くとも、野ダは私でございとこの役を買つて出る有志家は居ないのである。梅木といふ慶應出身の、寫眞では漱石の隣の人がそれではないかといふ推定なんだが、平常はおとなしく、醉ふと裸踊りをやるからだといふ一點からでは、少し氣の毒な氣がする。畫と習字の石川さんといふ人が似てゐるといふ說もあるが、しかしこれは反對黨のうらなりだらうともいはれて居る。かうなるとうらなりとのだいことの混線で、カツクテールなら知らぬ事、モデル問題では匙を投げる外はない。野ダなんぞといふ有難くない登場人物は、あんまり洗ひ立てない方が穩當だ。

先づ名前は、實名渾名(あだな)を取りまぜてざつとこんなものだ。御手洗先生始めとして、皆さんにはどんな愉快なニツクネームがついてるか、今度は其方(そちら)で一つ披露なさいませんかと水を向けると、みんな相顧みて哄笑して胡魔化してしまつたのは、野ダの言ひ前ぢやないが全くそりやひどい。

さて人物調査は一通り終つたから、これから事實調査に入るのだが、天麩羅やバツタのやうに、宿直をあけて溫泉に行つて、途中校長にあつたのは弘中さんで、職員會議の席上渡邊さんにやり込められ、あとで山嵐は「やあ、今は失敬」と天井を向いてやつてのけたとやら、釣好

きの西川さんに誘はれて釣に出たのは、三津濱でなくて高濱で、そこでゴルキを釣つたといふのは實はギゾーのあやまり。だからロシヤ文學でなくて、フランス文學を釣つたんだ、ギゾーは有名な文明史の著者だ。さうして、そこのマドンナを立たせたとかの靑島といふのは四十島で、高柏寺といふのは大山寺だとやら、それから、一錢五厘の氷水事件だの職員會議で誰がどう喋言つたのと、かういふ事を殘るくまなく書いて居たら、全く以て切りがない。このお二人にかゝつたら全篇殆んど出所のないものはないといつていゝのだから。そこで小說の大筋にいくらか關係のあるいはばモチーヴといつたものの正體にふれて見る事にしよう。

先づ目につくのは學校の中の勢力爭ひだ。それが善玉惡玉にわかれて、何でもかんでも結局はみんなそこへ結びついてしまふ仕組みになつて居るが、事實其當時の學校にそんな氣配があつたのであらうか。あつたといふのが、御兩所の答案だ。

狸が排斥されて居た事はすでに書いた。その黑幕に山嵐が居たといふ噂は、横地さんあたりの耳に入つて居て、生徒を煽動したなどとも言はれて居たさうだ。狸校長が修身の時間に敎室へ行つて見ると、生徒が一人も居ないで、すご〳〵校長室へ取つてかへした事などもあるといふ。休職となつて送別の時に、山嵐が面當てがましく馬鹿丁寧な挨拶をしたものださうな。

それで後任といふ事になり、生徒に人望があるので渡邊を校長になどといふ聲さへあつたといふが、知事にすゝめられてのつぴきならなくなつて、横地さんが校長に就任したのださうだ。山嵐の當時の月給は三十五圓だ。前の敎頭は追ひ出し、校長は排斥するといふ工合で、何となく不穩の空氣があつたものだといふ。そんな事からひいては釣に行くにしても自然二派にわかれて、山嵐派は山嵐派、さうして赤シャツ派の西川の方では、新任の高給のぱり〳〵に取入らうとして、夏目・横地兩囑託を高濱へつり出したものだらうといふことだ。横地さんが校長になられてからは、漱石の後釜に有名な玉蟲一郎氏や、數學に林鶴一氏(現在東北大學名譽敎授)なんぞを迎へ、山嵐の勢力を分割しようとしたが不成功だつたといふ。そんな事に漱石が超然として居たことは想像に難くない。かういふ勢力爭ひといふものはどこの學校にもよくある圖に違ひなからう。

そこに現れて來るのが遠山の令孃マドンナ姫のいきさつだ。これは全くの脚色で、誰がどうしたのかうしたのといふラヴ・シーンはなかつたのだが、いつの時代、どこの國でもそんなひま人が居ると見えて、當時松山の町内美人番附といふものを作つてくばつたものがあつて、其の東か西かの大關に、遠田といふ陸軍將校の娘さんが入つて居た。遠田にはお豐さんお捨さん

といふ美人で評判の姉妹があつて、職員間でも時々話題にのぼつた位の小町娘だ。マドンナは多分この妹さんの方を拜借したのだらうといふ見當。どうです、こゝらで一休みして、皆さんのマドンナの話でも聞かうぢやありませんかと、私は又しても水を向けるのだが、大分面白くなつて來たから、もう少し、いづれ僕達の「新編坊ちやん」は、ゆつくり後で披露しますからと、中々先生達如才がない。仕方がないのでおだてられて、序にもう一くさり辯じてしまふ。

さうかうやつてるところへ、大きな事件が持ち上がつて、山嵐・坊ちやんの二人がみんな赤シヤツの術中に陷つて最後の決心をする。中學生と師範生との喧嘩とその中傷記事とだ。この衝突は事實中々の大事件で、日清戰爭凱旋軍歡迎の時だ。

普段から中學生は地方稅地方稅と師範生を馬鹿にして居る。ところが公式の場合師範の方が中學より先に立つ。これが小癪に障るとて、此日は中學の方が先へ出たもんだから、師範の方が承知せず、歸途衝突をおつ始め、教員や生徒で田圃の中に放り込まれるのがあるやら、さうかと思ふと敵の頭の二つや三つ擲らなかつた職員はなかつたとやら、ある職員は喧嘩をやめさせようとて、八尺もある鐵棒を苧殼の如く振りまはして武勇傳を奮つたとやら、誠に大騷動で、警官が正に拔劍して鎭靜しようとした程だつた。そのうちに年嵩の師範生が中學一年生あたり

の帽子を百餘りも分捕つてしまつて、凱歌をあげて引き上げ、それをこれ見よがしに師範の木柵に獄門にさらしたといふから、何條もつて中學生たるもの默して居られよう。夜に入つて逆襲となり、それを奪還したといふ大事件だ。新聞屋が面白がつて書く筈ではないか。漱石も山嵐も怪我なんぞ勿論しやしなかつた。記事をのせた新聞は海南新聞、二三日たつて小さい取消しを出すには出したさうだが、喧嘩をしたのは事實なんだから、何の取消しをしたのかさつぱりわからない。さうして次の天誅云々のカタストローフは、事實無根と意見一致して居る。漱石の生前何かの話の序にこの衝突の話が出て、門下の一人があれは本當にあつたのですかときいたら、中々あの時は大騷動だつたねと、漱石自身騷ぎだけは肯定して居たのを、現に私も其席に居て聞いて居る。

これで『坊ちやん』の事實調べは終つた勘定だが、坊ちやんの弘中さんは結論にいふのである。——

「漱石は非常に感じのいゝ男であつた。本文（小說『坊ちやん』を指す）にはないが、子規が漱石の下宿（上野）に來て煩（わづら）つて居た時など親切に看護して友情掬すべきものがあつた。松山に居た頃は文學博士になる野心が勃々として居た。朝日新聞に入つた時は、文士の盛りの短

きを思ひ諫止すべく訪問したけれども、先生の抱負甚だ高く、氣焰當るべからず、終に一言せずして歸つた。果して劃時代的の偉業を千歲に殘した。漱石は偉い男であつた。しかし漱石の生前は彼を第一流の作家とどうしても思へなかつた。」

又横地さんは書いて居る。

「夏目が赴任した日學校にどんな書物があるか見せて呉れと云うたから、余が書庫へ案內したら、英文學者であるにも拘らず英書には殆んど目もくれず、主として漢書をあさり、其中から陶淵明詩集二册を引き出し、此れを借りたいと云うて持ち歸つたには少々意外であつた。」

この結論めいた附記は、二つ共に『坊ちやん』には緣がないが、漱石自身の面目をよく傳へて居る。

この小說が出て間もなく讀んだ弘中(ひろなか)さんは、大變なものを書きましたねと漱石にいふと、あれは事實ぢやない、たゞの小說だといつたとある。又當時の五年生だつた眞鍋(まなべ)嘉一郎教授などにも同じことをいつたと書いてある。しかしいくら作者自身にさう斷られたつて、お二人ともにさうかといつてすましては居られないのだ。さうしてかうしたモデルに註を施し事實調査を巨細に涉つてやつてられるのだ。猿之助一座が芝居でした時なんぞも、眞鍋さんの說明やら註

文やらは微に入り細に入つて、その精神に於てこの御兩所とちつとも變らなかつた。さうしてこれが一般讀者の心情でもあるやうだ。事實は、いくらかの事實が材料を供給して名作を生ませたのだが、後にはかへつて名作がモデルを生む結果となるものと見える。作者がいくらこれはたゞの小說だよといつたつて、誰も承知しないのである。かうした名作のかうした意味でのモデル談議は、單に俗流の卑說として或は俄に退けらるべきものでないかも知れない。その眞鍋さんは前列の右から三番目に、きかん氣を眉宇に漲らせて昂然として頑張つて居る。

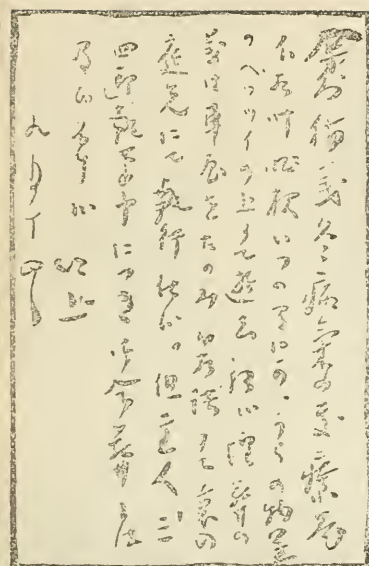
舊師のもとでいゝ氣持になつたと見えて、校長室で私はすつかりお喋言りをしてしまつた。

漱石が三津濱からたつた時には、霽月さんや虛子さんや橫地さんなんどが見送られたさうだが、どうもこの虛子さんとは同行で宮島まで行き、そこで別れたのではあるまいかと思はれる。虛子さんの著書に宮島に一緒に遊んだ事が書いてはあるが、年代が合はない。多分高濱さんの記憶違ひだらう。

永き日や欠伸うつして別れゆく　　漱石

といふ名吟は、多分この時の別れの句であらう。さうして漱石は熊本の五高へ赴任したのであつた。

らつてか、英名を世に轟かす程の器量(きりやう)猫はつひに出なかつた。但し死ぬとは、同じこの墓地に埋められた事、人の世の慣(なら)はしに同じ。

北側の崖に近い櫻の木の下、そこに四つ五つの石ころが投げ捨てられたやうに置かれ、てんでに缺け茶碗に水が供へられて居た。私の知つた時には、「我犬の爲に　秋風の聞こえぬ下に埋めてやりぬ」と追悼の句を書いた墓標が、その石の群(むれ)の中に見えて居た。言はずと知れた愛犬ヘクトーの供養(くやう)塔婆(たふば)だ。他の石は、それ〳〵文鳥(ぶんてう)の墓であり、又子供達の金魚の墓であつた。自然、こゝはこの家の小動物を永遠に安らけく眠らせる墓地の觀があつた。犬の墓標は下の方が白蟻(しろあり)に喰はれて、固い手輪だけが紙を重ねたやうに殘つて、風にも堪へられなくなつたのを見たので、そのまゝ雨

猫の死亡通知

犬の墓「我犬の爲に　秋風の聞こえぬ下に埋めてやりぬ」

の中に朽ちさせ、心なき人の手にかゝつて捨てられるのをおそれて、山房のうちに保存する事とはなつた。すでに句の後半は讀むべくもない。

　これは家の外なる墓の事であるが、信心深いこの家の女あるじは、家の中には猫の祭壇を設けて居た。福運を招きよせるといふ小さい招き猫が本尊で、常に大きな鰹節を供へ、月々の命日にはその鰹節を取りかへ、又祥月命日にはおかしら付きとて小鯛、おかかのお飯などを供へて、それを拜するのを例とした。人が迷信と嗤ふものがあつても、女あるじはいつかな耳をもかさない。なほも昂じて、いつしかに猫のもろ／＼の小さい玩具置物などの小コレクションを造り始めた。古い召使はこの命日を忘れない。新らしく來た召使もその日をおぼえるのにつとめる。あるじは又信心深くもその命日を忘れた事がないのである。誰いふとなしに、家ではこれをお猫さんと呼んで居る。勿論神格である。

『坊ちやん』劇其他

漱石先生は明治二十八年の四月に松山中學へ英語の教師として、月給八十圓で赴任してゐる。「坊ちやん」が赴任したのも松山中學で、月給は四十圓、東京の物理學校をびりの方から何番目かに出て、數學の教師となつたといふことになつてゐる。「坊ちやん」はこの四十圓の月給を大層苦にやんでゐる。「坊ちやん」は同僚に山嵐とか、たぬきとか、赤シャツとか、うらなりとか、或は野ダイコとかいふ渾名をつけて、大いに蠻勇を揮つて、溜飲を下げて、四十圓を棒に振つて、その代り大手を振つて、東京に引き上げた。しかし「坊ちやん」の置土産の渾名は長く松山中學のあたりをめぐつて、人玉のやうにふらついてゐたやうだ。松山中學を出た友達から、山嵐がどうのかうのとよく聞かされたことを未だに覺えてゐるが、さうして噂に聞けば山嵐はどうも一人ぢやないやうだが、野ダだの赤シャツだのといふ憎まれ役になると、とんと引きうけ手がないものか、今日迄あんまりその噂は聞いてゐない。

ところが去年の冬のこと、十二月九日、丁度漱石先生が亡くなられて滿十年に相當する祥月命日に、其頃私はまだ京都に住んでゐたのであるが、津田青楓・和辻哲郎・池崎忠孝の三君とそれから私が發起人になつて、京阪地方にある先生の遺墨・原稿などを彼れ此れ三四十點借り集めて、小さい記念の展觀を催した上で、其夜遺墨の下に集まつて、生前知遇を得たもの十五六人で晩餐をしたゝめたことがあつた。其時、以前山口高等商業學校長をしてゐられて、今教育界から引退されてゐられる横地石太郎さんも見えた。展觀の前に横地さんの御令孃が先生の遺墨(たしか王維の鹿柴館の詩を書いた小點)を持つてゐられることを以前から知つてゐて、それが大變いゝ出來なのを覺えてゐたので、拜借しようと使ひを出したところが、それは令孃が他へ嫁入りされる時に持つて行かれて、今宅に殘つてゐるものとては何もない。それでも何かの御參考までにこれを持つて行つてはどうかと使ひに寄せられたのが、一つは松山中學の校友會雜誌、それに先生の論文が載つかつてゐる。他の一つは初版當時の『鶉籠』。それの『坊ちやん』の條に、一面の書入れがしてあるのだつた。

私は其時まで横地さんのことを餘りよく知らなかつた。たゞ山口高商の校長をしとられて、何かの機會に先生と昵懇なのだらう位に片付けてゐたのであるが、この書入れを見て驚いた。

といふのは、横地さんは先生が松山中學に赴任された頃の教頭代理か何かで、例の赤シャツのモデルにあらずやといふ當の容疑者なのであるのだ。横地さん自身はそれを否定してゐられるし、私も亦勿論それに違ひないと思ふのであるが、この書入れは兎もかく非常に面白いものである。

『坊ちやん』は懐しい作品だ。それから痛快な作品だ。誰の中にも多少の「坊ちやん」は巣喰つてゐるだらう。俺が「坊ちやん」だといふ人は、天下にその數は少くあるまい。山嵐の役も貰つて出たいところだらう。胸中一片の覇氣を藏するものには、誠に胸のすく底の人物だらう。しかし誰でも赤シャツのいや味と野ダの臭味とは少し位持たないものはよもやあるまいとは思ふのであるが、どうか俺の頭にと、自ら自分の頭を、玉子を打ち突けられる爲に突き出す物好き男はまづ〳〵あるまい。

私はいつか機會があつたら松山へ出かけて、其時代の先生方にいろんな其時代のことを聞いて見たいと思つてゐたものだ。

横地さんの話によると、小説などといふものはこれ迄よんだこともないのであるが、何でも

挨拶をしたうちに教頭のなにがしと云ふのが居た。是は文學士ださうだ。文學士と云へば大學の卒業生だからえらい人だらう。妙に女の様な優しい聲を出す人だつた。尤も驚いたのは此暑いのにフランネルの襯衣を着て居る。いくらか薄い地には相違なくつても暑いには極つてる。文學士丈に御苦勞な服裝をしたもんだ。しかも夫が赤シャツだから人を馬鹿にしてゐる。あとで聞いたら此男は年が年中赤シャツを着るんださうだ。妙な病氣があつた者だ。當人の說明では赤は身體に藥になるから、衛生の爲めにわざ〳〵誂らへるんださうだ入らざる心配だ。そんなら序に着物も袴も赤にすればいゝ。夫から英語の敎師に古賀とか云ふ大變顏色の惡るい男が居た。大槪顏の蒼い人は瘠せてるもんだが此男は蒼くふくれて居る。昔し小學校へ行く時分、淺井の民さんと云ふ子が同級生にあつたが、此淺井のおやぢが矢張り、こんな色つやだつた。淺井は百姓だから、百姓になるとあんな顏になるかと淸に聞いて見たらさうぢやありません、あの人はうらなりの唐茄子許り食べるから、蒼くふくれるんですと敎へて呉れた。それ以來蒼くふくれた人を見

横地石太郎氏書入『坊っちゃん』初版本

夏目が松山中學のことを書いたといふので讀んで見たところが、當時のことが中々うまく取り入れて書いてある。けれども小說は小說、事實は事實。そこで横地さんは事實に立脚して小說を解剖し、當時を追懷し、其頃の學校の人事やら町の風俗やら、時世の風習變遷やら、それから事件、會話の果に至るまで、凡そ感想のあるところにはくまなく細字で書入れがしてある。頗る珍書であるといふべきだ。私は『坊ちやん』の筋を追ひながら、この批評であり記錄であり、いろ〳〵の意味で面白いこの書込みを適宜に配し生かして、一つの讀物を綴ることを横地さんに約束してゐるのであるが、まだ塵事多端にしてその事を果してゐないのは申譯がない。これは創作心理の考察の上にも、モデルを如何に使ひこなすかといふ創作上の用意の上でも、又當時の一種の文化資料としても、非常に有益でかつ面白いものである。

横地氏の書入れと同時に、矢張り當時の同僚弘中又一氏と中堀貞一氏との書込みもある。弘中さんも中堀さんもみんな今京都に住んで居られる。京都の展觀の日の夜の會に、横地さんからアドレスを伺つて案內すると、何でも木喰戒をやつて居られるので、世間の宴會には一切出ないといつて斷られた。仙骨を帶びて居て、斷られながら甚だ愉快だつた。

この書入れは、先づ横地さんが永年の間にボツ〲當時の事を思ひ出して書入れをされたのを、弘中さんが聞いて更に書込まれ、それが又中堀さんのところへまはつて來て書入れをされたもの。横地さんのものが最も分量が多く、中堀さんのものは遠慮勝で一番少い。この本の事を當時の中學生だつた眞鍋さん、松根さんにお話ししたら、是非見たいといふことに、これも同じく書入れをして頂いて置かうと思つて居る。

一體漱石先生は芝居には餘り興味がなかつたやうだ。晩年一時しきりと劇場へ入られたことがあるさうだが、それも長くは續かなかつたらしく、たうとう劇場と特別の因緣を結ばれないで了つた。今度先生が逝かれて十二年目に、『坊ちやん』が初めて脚光を浴びた。私にとつてはいろ〲の意味で興趣が深い。

先生の小說で芝居に燒き直されたものでは、さきに『吾輩は猫である』の一節があるさうだ。以前人からも聞いたことであるが、このあひだ久保より枝女史の『嫁ぬすみ』をよんだところが、その中に中洲の眞砂座へ伊井一座の『猫』を觀に行つたといふことが書いてあつた。それからこれは學生劇であるが、法政大學で同じく『猫』の一節を演じたのを觀たことがある。い

いにも惡いにもこれくらゐのものであらう。ともかく伊井一座の『猫』は知らないが、今度の本郷座の『坊ちやん』が、恐らく先生の作物を相當にこなした最初のものではあるまいかと私は思つてゐるのである。

法政大學學生劇『吾輩は猫である』

『坊ちやん』劇は甚だ愉快だつた。この近年芝居に對する愛情をすつかり失つて、幾年にも劇場に足を踏み入れたことのない私にも、こればかりはまづ〳〵面白く觀られた。二日目にのぞき、又四日目に觀た。一度のぞくさへおつくうがつてゐる私が、同じ芝居を二度も觀て、飽きるどころか、二度とも面白く觀たのだから、(さうして行く前には臺本まで讀んで居たのだが)これは相當面白い芝居に違ひない。いはゆるお芝居らしくないお芝居で、それでゐて立派に芝居になつてゐて、やつてゐる俳優諸君も生々として樂しさうだが、觀てゐる觀客も正に生きかへつた心地がする。肱を張つて

の飜譯風な演劇議論が、鼻の尖にブラ下がつてゐるではなし、かといつて今もいふとほり、在來のお芝居に屈服追從してゐるではなし、又强ひて新らしがりもしなければ、惡く通がつても居ない。それでゐて立派に觀客の心をさらつて行つてゐる。恐らく猿之助は彼の當り狂言を一つ增やしたことだらうし、日本の劇壇も亦新らしい特異な珍味を一つ加へたわけだ。後にも前にも小說『坊ちやん』が外にないやうに、劇壇でも『坊ちやん』劇のやうなものは外に見ることが出來ないであらうと思ふ。

『坊ちやん』劇（市川猿之助の坊ちやん）

一體『坊ちやん』の味は直線的の味だ。芝居ではこの味は出て居るには出てゐるが、小說程にその直線に丸みと重みとが出てないやうだ。つまり見てゐる目には實に痛快愉快なのだが、さて見た後で殊に印象といふものがやゝ稀薄だ。もつともこれは一つには芝居と小說との根元的な持味の相違から來てゐるのかも知れない。がそれはとにかくとして、俳優諸君は皆一人一役それ〳〵の役割を相當に演じ生かして、これは困るといふ代物がない。狸校長から下は小使生徒に至るまで、甚だ樂しさうに役を仕生かして活躍してゐる。見てゐていゝ氣持だ。それには木村錦花氏の脚色も與かつて力があるだらう。キネマ式に場數を多くわけて、忠實に原作を追うて行つて、さうして急所急所を要領よくおさへて出て、前後照應纏まつたそつのない一つの劇を見せてくれる手際の鮮かさ、中々隅にはおけない手腕だ。檢閱を恐れてか學校騷動の場景などのないのはいさゝか物足りないが、原作にうまく段取りがついてゐるとは云へ、これだけに行けば先づ先づ上の部と申すべきであらうと思ふ。難をいへば場數の多いために、舞臺の飾付が少々淺きに過ぎて、みすぼらしくはなかつたか。

ともかく私はもう一度樂近くなつてから見て置かうと思ふが、三度見てもやつぱり多分愉快だらうと思つてゐる。

『坊ちゃん』劇（前方市川猿之助の坊ちやん）

歸りに、京濱電車に乘つて腰掛に納まつてゐると、東京驛あたりから乘り込んで來る客の顏が、みんな今本郷座の舞臺で見て來たもののやうな氣がしてならない。野ダイコ見たいな人もあれば、うらなり然とした人も居る。狸もがん張つて居れば、山嵐は太いステツキをついて肩を怒らしてゐる。婆やのキヨも居れば、モダーン・マドンナもつんとすましてござる。たゞ多分こんな御面相なと思はれるのは澤山居るが、惜しいことに赤シヤツを著込んだ紳士が見當らないのは甚だ殘念だ。が、黑色シヤツだの、褐色シヤツだのと、シヤツの色が文句をいふ今日、うつかり赤シヤツも著ては居れないわけか。私は車内を見廻して、何だか『坊ちやん』劇の樂

屋へ入つたやうにくすんと笑つたことである。

この本郷座の『坊ちやん』劇は大當りに當つて、毎日切符を賣切つて、補助椅子を出しても足りない位、芝居道の不景氣風をいつぺんに吹き散らして、見ん事猿之助丈の當り藝の一つとなつてしまつた。山荒しが出ればワアツとわき、坊ちやんが現はれればわき、文句なんかも原作で有名なのになると、役者よりも見物の方がよく心得てるといつたわけで、誠に和氣靄々たる芝居で、芝居で笑はせればとかく擽りになり下がつて下品になりたがるのを、これは無邪氣でいや味がなくつて甚だよかつた。役者もかうなつてはこの味が忘れられないものだらう。其後帝劇で出し、それから去年二月頃京都の南座でも出した。勿論猿之助丈の主演でだ。

帝劇の時には、二度目の出し物で、本郷座の時よりも大分形式が整つて居たやうだが、初演の時のやうなザツクバランの面白さ、一種の氣魄といつたものが稀薄になつて居たやうで、私にとつては本郷座の薄ぎたない舞臺面の方が、遙かに感銘が深かつた。

本郷座の初演の時、木村錦花氏の臺本を見て、『坊ちやん』の原作そのまゝの筋を追つて行つて、極めてわづかしか脚色者の創案のないのを見て、今更原作がうまく仕組まれてるのを感じ

た事であるが、小說『坊ちやん』のうまみは、事件そのもの、人物そのもの、會話そのものなどの面白さはいふ迄もない事ながら、この坦々としてしかも層々と組み立てられたその構成に大部分あるやうである。それは極めて流動して居りながら、しかも自ら小說構成の大道をふんで居るものだ。今度P・C・Lの森岩雄君の懇望で映畫化される事になり、私はまだ見て居ないが、小林勝君がシナリオを書く筈になつて居る。芝居が映畫的な手法で成功して居るので、私はこの映畫に冀待して居る。

去年京都南座で開演中、大阪朝日新聞社の京都支局の主催であらうと思ふが、『坊ちやん』の學校、當時の松山中學の先生さん方で京都に居られる前記の横地さん弘中さん中堀さんのお三方を中心に、猿之助丈、成瀨無極、竹內逸、山本修二、高谷伸の諸君に新聞社の方が加はつて、『坊ちやん』座談會をひらいた、その記事の切りぬきを贈つてくれた人があつた。座談會としては中々面白い思ひ付きで、一般の讀者諸君には隨分と興味のあつた事と思ふ。しかし前記の横地さんの書入れ本を熟讀して居ると、それ以外の目新らしい話といふものはさうザラにある筈のものでなく、私にはむしろかうした物珍らしい古老の顏合せより、普通の人が聞けば何で

もなゝ猿之助丈の、どういふ心意氣や用意で芝居をやつてるかといつた話の方がかへつて興があつた。

本郷座初演の時に、今は淺草の大勝館のマネジヤーをして居られると思ふが、其頃松竹に居られた森岡格雄君が、私達「九日會」の連中總見といふ日に、どうでせう、御註文やら御注意やらがおありのやうだから、芝居がはねてから、役者どもに皆さんで一席つけ〳〵とお話を聞かしてやつて頂きたい。役者達始め、私達も是非お伺ひしたいのだからといふ事に、私から會の諸君に取次ぐと、芝居のハネるのが十一時、それからよそへ繰り出すのは大變だ、二階の食堂で此方の顔見世旁〻挨拶をしようぢやないかと一決し、ハネを待つてみんなで食堂へ上がつた。最終の幕へ出る幹部どころは白粉を洗ふのもそこ〳〵に、待つほどにみんな素顔でやつて來た。猿之助・友右衛門なんぞの大どこが前の方で、野ダイコになつた翫右衛門なんぞが、ついさつき舞臺で玉子を打つつけられた顔を洗つて居ならぶと、君は野ダか、いや、君があの名小使かなんかといふ半疊に、役者の方で小さくなつてしまひ、こゝでも亦和氣靄々たるものがあつた。

すると喋言るのは先づ年の順からといふ事で、眞鍋さんがやをら立つて、講義よろしく例の

早口で始められた。ところが眞鍋さんは松山中學出身で、夏目先生が赴任された時の最上級の五年生、『坊ちやん』の事件は自分の一手專賣だ、あれはかう、これはかう、道後の溫泉で手拭が薄赤く染まる事から、赤シャツの說明、人物の原型から土地の地理や敎室の模樣迄、顯微鏡をのぞくやうに微に入り細に入つて說明し、だからあれはいけない、これは見當違ひだといふ風に一々駄目を出し、それが又いつ果つべしとも見えない蘊蓄豐かな大講演になつてしまつたものだ。十一時半頃から始まつた松山中學風物史の大講演は、瞬く間に十二時なんかわけなくのり越えて、一時近くになつても中々やみさうにない。御座敷のかゝつてる役者はあつたかどうか知らないが、あつちでもこつちでもひそかに腕時計を見たり、あくびをかみころしたりしてもぢ〳〵して居る。しかし眞鍋さんの話はこん〳〵として盡きない。多分其夜一晩中話しても盡きない程あつたのだらう。

たうとうこんな工合で、座談會になる筈のこの會合は、眞鍋さん一人の選手で獨占されてしまつた。後に帝劇での再演の時には、これが緣となつて、舞臺稽古を見に行かれ、いろ〳〵注文を出されたといふことだ。さうしてそれらについての感想を綴つて、たしか小冊子にして知己に配られたやうに思ふ。序ながら眞鍋さんが吉右衛門贔屓であつて、又敎授に劇評のあるの

は知つてる方(かた)も多いだらう。私は京都の座談會の切抜きを讀みながら、はしなくもこのほゝゑましき本郷座の獨演會の光景を想ひ浮べた。

芝居の事を書いた序に、この近年先生の作物が芝居になつたものを、心覺えのつもりでこゝに書きとめて置かう。

初め芝居や映畫の話があつても、先生があんまり好かれなかつたのではあるし、元々小說で芝居向き映畫向きに出來てるものではないので、話があつても殆んど相手にならずに居たのだつたが、しかし先生の生前頃とは國產映畫は比較にならない程發達し、それにつれて又芝居も變つて來て居るし、また一方原作の定評はきまつてしまつて、若し芝居や映畫が不出來でも、誰でもそれを原作の罪にして、原作がいけないからだとは言はないのだから、芝居なり映畫なりを見て、一人でも原作に親しむ機緣が作られるならば、それも亦方便(はうべん)だといふ風に考へが變つて來て、今では相當責任あるものが責任をもつてやるといふ場合には、それもよからうと出來るだけ許可する方針にして居る。

『坊ちやん』が大當りに當つたので、次いで本郷座で又『猫』をやつた。しかしこれは正直

に見て失敗だつた。一體『猫』といふ作品が讀むには面白いが、『坊ちやん』見たいに臺本になる場合、原作の場面を追つただけでは芝居にならない。それを同じやうに原作に忠實にやらうといふのだから、もう根本から無理がある。自然部分的には面白いが、しかし全體として盛り

『吾輩は猫である』劇（市川猿之助の苦沙彌先生）

上がつて來る何ものもない。だから猿之助丈がいくら奮闘しても、どうにもあの儘では芝居にならなかつた。これは一思案も二思案もやつての上で、思ひ切つて突飛な大膽不敵な智慧を働かさない以上、決して面白いものにはなりつこあるまい。その代りやりやうで又隨分面白い變つたものが出來さうな氣がする。野心のあるものは一つやつて見るべしだ。

ところが本郷座の『猫』よりも、もつとやくざな『猫』が淺草で上演された。それは初め畑

中蓼波君に泣きつかれて、つい私がほだされたのが間違ひのもとで、金子洋文君が臺本を書き、たしか帝國ホテルの演舞場で上演の手筈だつたのが、どう手元が狂つたのか淺草落ちをしてしまつた。どうせつぶれる筈の劇團だとは思つたが、しかし劇團の浮沈にかゝる事だからと、その期にのぞんで泣きつかれて見れば、まさか淺草だからいけないともいへず、不承不承に默許して、さてふたがあいたので行つて見ると、どうにもこれは芝居になつちや居ない、本郷座より數等ひどい出來だ。それでもみんな一生懸命、寧ろ競演のつもりで熱演なのだから、見て居る此方で顏まけし、樂屋ものぞかず、わざ〳〵誘つて行つた友達にも氣の毒をして、そこ〳〵にかへつた事があつた。猫の芝居なら、鍋島の猫騷動でもやつてれば無難だのに、かういふ哲學者の猫なんかやるのは當分考へものだ。

淺草で思ひ出すのは、二三年前に例のエノ健一座が『坊ちやん』をやつたらしいが、無斷でやつて居たので、多分本物の『坊ちやん』ではあるまいと見に行かなかつた。見たといふ人の話では、大分本物に似て居たといふ事だつた。

最近では、明治座の六月興行で、水谷八重子主演で、井上正夫なんかの新派の一座で『虞美

人草』をやつた。一體『虞美人草』は隨分前から新派の人達にねらはれ、又映畫でも數度交渉をうけたものだ。ところが映畫では二度程も、そんならやつていゝだらうといふ事になると、それつ切り音沙汰なしでうつちやりを食ふ。段々きいて見ると、他の映畫會社へ取られないやうに、つまり横取りともつかない邪魔を入れるのだと知れた。芝居ものとはよくもいつたもので、そんな事やら、前に『猫』を上場する時面白くなかつた仕打ちを食ひ、こんな非紳士的な連中はもう眞平だと、一時は相手にならなかつた事さへあつたが、しかし八重子がやりたがつて居る話はきいて居たので、とにかくやつて見るがよからう、よければ猿之助の『坊ちやん』みたいに殘るし、悪るければ同丈の『猫』みたいに消えてなくなるからと、丁度入江たか子が映畫で是非やりたいといつてるからゆるしてくれといつたのを、

『虞美人草』劇（水谷八重子の藤尾）

『虞美人草』劇（右より井上正夫の父・水谷八重子の小夜子）

入江なら藤尾役にはまらうと許したところとて、入江によしといつて、水谷にいやといふ道理もないわけで、ともかく八重子の芝居を見る段取りとなつた。ところがこの芝居は、何でもかんでも八重子一人に芝居をさせないといけないものらしく、それはまあいゝとして、脚色家が甚だ近視眼（きんしがん）で、漱石物でこれ程所謂（いはゆる）お芝居になつてる作物は外にないのに、どう又固くなつたものか、一生懸命で原作者の立てた荒筋（あらすぢ）をおせつかいにも掘りおこして、それを全く散文的（プロザイツク）に羅列して見せた、どう考へても索然不味を極めた不手際なもので、勿論原作が三十年も前に書かれたが爲に、現代から見ればいくらか時代のこけが生えても居

るのだから、それは仕方のない事として割引きして考へてやらなければならないのだが、そんならそれでせめて原文をよんでうけるあの獨得の氣分を何とかして味はせてくれゝばいゝのだが、それがお氣の毒ながら藥にしたくもないのだつた。これは脚色の未熟と申し上げる外ないやうだ。もう少し原作と役者とを生かす手がありさうなものだ。でなければ折角かうした名作を芝居にする意味がないではないか。私は水谷八重子さんにもう一度立派な脚色で、この芝居がやらせて見たいと思ふ。どうも座附作者といふものは、舞臺の上で役者をラヂオ體操みたいに運動させる事ばかり考へてるんぢやあるまいかといふ疑があつて、作の勘どころとか氣分とかいふものには、極めて鈍感のやうに素人の私なんかには考へられてならない。

『門』の行方

上

大正九年は漱石先生逝去の第五年に當る。其年の夏から計畫して、秋に至つて漸く先生の遺墨展覽會を開くことが出來た。先生の歿後、あれ程に先生の晩年を慰めた遺墨をいつかは一堂に集めて、志を同じうする人々と共に追慕の情を新にしたいといふ素念が愈ゝ達せられたので、自分の歡びは一ト通りではなかつた。自分は及ぶ限りの力を致して、諸家珍藏の書畫幅を借り集めたり、原稿を求めたりした。さうしてその結果展觀されたものは、色紙短册尺牘をのぞいた恐らく全遺墨の九分通りを網羅して、其數三百餘點に上つたであらう。

開會の三四日前のことである。ある新聞の婦人記者が訪ねて來て、遺墨展觀の模樣を尋ねた。自分は問はるゝまゝに出陳の遺墨について、其收集の苦心やら、思ひもかけなかつた掘出しや

ら、其他いろいろのことについて感想の一端を洩らした。例へば無いものとばかり思つてゐた『草枕』の原稿が突然現はれたり、『文學評論』の原稿の一部が出て來たり、『思ひ出すことなど』の原稿の大部分を、展覲の二箇月ばかり前に突然買ひ求めたりしたことなどを話した序に、大體主なる長篇小說の原稿はすべて在所がわかつて、其大部分は借り出すことが出來たが、殘念なことにはたつた一つ『門』の原稿ばかりは、どこへ行つたものか皆目行方が知れないといふやうなことを附け加へた。すると翌日の新聞に、よくあることだが、久しく見當らなかつた『門』の原稿なども珍らしく出されるといふ風に誤り書かれてあつた。自分は又やつたな位で極めて輕い氣持で、誤り傳へられた自分の談話を讀み過ごした。

正午頃であつた。刺を通じて自分に面會を求める未知の婦人があつた。應接間で會つて見ると、婦人はやゝ色のくすんだといふより、寧ろ褪せかゝつた裾模樣の着物を着て、やゝ世間なれない態度で、甚だ鄭重に挨拶をされる。見たところ二十六七歲の家庭の人とは受け取れるが、どういふ種類の婦人で、何の用事で訪ねて來られたものか、てんで見當がつかない。それ切り婦人はだまつて頭を垂れたまゝ、自分の向ふ側の椅子に固くなつてかけてゐる。何を言ひ出す

かしらとやゝ不安のうちに待つてゐた自分は、見るに見兼ねて來意を尋ねた。するともぢ／＼してゐたらしい婦人は、其時漸く思ひ切つて顏を上げた。何處となく年の割に世帶窶のした顏のやうに思はれた。婦人が突然の來訪を詫び乍ら語る言葉は、意外も意外、自分にとつては全く唐突のものであつた。

「……あの、今朝の新聞で拜見しますと、今度の先生の遺墨展覽會に『門』の原稿が出るといふことでございますが、何誰樣がお持ちでございませうか。御差支がなければお伺ひしたいものでございます。若しお名前を仰言つて御差支がありますれば、たゞの一ト目でもいゝからその原稿にお目にかゝらせて頂きたいものと存じまして、それで上つたのでございます。」

婦人の態度が、如何にも思ひつめたといふ風に相手の胸をつきさすやうに眞面目なので、自分は先づそれに驚いた。が次の瞬間には言葉の裏に曰くありげな、さうして心配さうな、どこか沈痛な趣のたゞよつてゐるのに不審を抱いた。けれどもそれよりも何よりも最後に自分を襲つて來たものは、抑へきれない笑ひであつた。全體、婦人の物思はし氣な樣子と言ひ、質問と言ひ、すべて明かに一人の婦人記者の記憶の誤りから記載された、僅か一行の記事に胚胎してゐる。さうして婦人は自分に罪のない、その誤報にあやつられて、わざ／＼遠い郊外から裾模

様の訪問者を着て、見ず知らずの自分の前におづ〳〵と罷り出て來たのである。それが可笑しくなくつてどうしよう。自分は込み上げてくる笑ひを、婦人に氣の毒だとは思ひ乍らも、どうしても抑へることが出來なかつた。自分は笑ひ乍ら事もなげに氣輕に、

「いやそれは全く新聞の誤報ですよ。私は來訪の記者に外の原稿は皆在所が分つたが『門』だけがいまだに分らないで殘念だと話したのです。それがよくある奴で、あゝいふ風に反對に書いてあつたのです。」

と答へた。すると婦人の顏から緊張した物思はしげな樣が消えて了つた。と同時にその安堵の中に、明かに一種の失望の色が浮んで來た。自分は婦人の並々ならぬ樣子をいぶからないわけには行かなかつた。自分は仔細あり氣な事情を聞くべく膝を進めた。

婦人の語るところによると、彼女は今さる洋畫家の夫人であるが、まだ嫁がない女學生の頃、大の漱石崇拜家であつた。一度先生の直筆に接したいものと日頃念じてゐた矢先、朝日新聞に勤めてゐた伯父の許に起臥してゐるうち、折もよく先生の『門』が每日の紙上に揭載されることになつた。矢も楯も堪らなくなつて、熱心にせがむので、伯父もそれ程に思ひつめてゐるならと、每日歸宅の時には組み了へた其日の一回分宛の原稿を貰つて來てくれた。若い女學生は

それと其日の新聞とを引き合はせて、無上の幸福を味はつてゐた。かうして原稿は積り積つてつひに最後の頁に迄至つた。女學生が有頂天になつて喜んだのは無理もない。しかし遺憾なことには、最初の手遲れのために、どうしても第一回分だけが缺けてゐる。堆く積み重ねられたこよなきこの珍寶を喜ぶにつけ、書き出しの缺けてゐることは、又一層物足りない感を起こさせた。

女學生の熱心は又伯父を動かした。伯父は漱石先生に請うて、最初の其の第一回を書き足して貰ふやうにするか、或は缺けてゐるわけを書いて貰つて、此の思ひ出の多い原稿の序にかへて貰ふかして、其上製本したら、題字に不折畫伯を煩はさうといふことを承諾した。しかしこの約束は中々果されなかつた。女學生は完全にされるその日の欣びを思ふと、胸の躍るうちに長い月日を待ち暮らした。

幾年かたつた。女學生は袴と踵の高い靴とをぬいだ。しかし『門』は依然として、女學生の愛惜の情を抱いたまゝ、昔どほりの不完全な姿で、紫の袱紗の中に眠つてゐた。或る日のことである。伯父の知人で、矢張り新聞社に勤めてゐるといふ人が、是非其原稿が見たいものである。其儘にしておくうちに、何かのはづみにいつか散逸しないものでもないから、ともかく借

りて禮心に製本をさせて、漱石先生なり、又は不折畫伯なりの題字を貰つておかへしをしよう
と言ひ置いて、原稿を借りて行つた。
半年經つた。原稿の音沙汰はない。一年經つた。待つ人は依然として待つてゐる。併し原稿
は美裝した姿を見せない。さうしてゐるうちに漱石先生が亡くなられた。生前あれ程自筆の題
字なり序なりをと望み乍ら、たうとう手に入れることが出來なかつた。返す〴〵も殘念である
が、今は是非もない。彼女は慈父に別れるやうな心で、先生の死を弔つた。さうして今は唯一
の遺品となつた『門』の原稿を手元において、せめて崇拜してゐた先生を追慕したいと思つた。
伯父に其事を告げると、あの男はすでに地方の新聞社に聘せられて、東北に去つたといふこと
であつた。驚いて伯父の手紙に添へて、自分の衷情を訴へて送る。返事がない。彼女は原稿の
行方を案じ乍ら、他家へ嫁いで行つた。しかしうら若いこの花嫁は、まだ人の心を疑ふことを
知らなかつた。
新しい生活が始まつた。樂しい世界が開展して行く。けれども祕藏の原稿を想ふ情は愈〻切
になつて來る。夫人は思ひが昂じると共に、しば〳〵原稿督促の手紙を書いて、僅かに其の切
情をやつた。そこへ賴みの伯父が死んだ。夫人は愈〻不安になつて來た。さうしてゐる間にも

歳月は淀みなく流れ去つた。

或る日、何心なく名もない一夕刊新聞を手にしてゐると、不思議に強く彼女の眼を捉へたものがある。言ふ迄もなくその知人の名であつた。知人は地方から東京へ舞ひ戻つて、其夕刊新聞に入社したのである。夫人は直様訪れて、原稿を返してくれることを懇願した。けれども知人の返答は、思ひがけなくも、すぐ移轉後間もないことだから、行李をあらためてから返事をしようといふ、其場限りの極めて曖昧なものであつた。日ならずして知人のもとから手紙が届いた。それによると、あの原稿は、地方を轉々してゐる間に、普通の古原稿と思ひ過つて、家人が屑屋へ渡したものか、それともある町で、事に坐して、自分の財産があらひざらひ競賣に附されたことがある。其時一緒に二束三文で賣り拂はれたものかも知れぬ。兎も角自分の行李のどこをさがしても、そんなものの姿は見當らないといふ、頗るにべもない無責任な挨拶である。夫人は取りつく島を失つて、落膽やら無念やらで、全く呆然として悲涙に暮れた。永年の間あれ程慕つてゐた寶が、己れの不注意から事もなげに失はれて了つた。自分一個の無念のみでなく、先生を追慕崇拜する社會一般の世人に對して申譯がない。若し偶然の機會で其原稿が誰かの手に保存されてゐるものならば、さうしてそれが自分が捧げた以上の敬意を拂はれてゐ

るものならば、所有の間に自他の別が出來ただけのことで、社會は何等失つたところがないのだから、寧ろ諦めもつけば、又原稿自身のために喜ばねばならないかも知れない。であるのにそれが、全く失はれたとしたら……夫人はさう思つては身も世もない思ひで、幾度か味氣ない涙を流し續けてゐた。

新聞の記事を見た時の飛び立つ思ひの夫人の樣は想像するに難くない。夫人は失はれた愛兒を見るやうな、或は永く別れてゐた悲母に會ふやうな胸を抱いて、直樣自分のもとへ訪ねて來られたのである。しかし結果は全く豫期に反して、餘りにも悲慘であり又滑稽であつた。夫人が安堵をしてさうして失望した原因は、先づざつとかうであつた。

涙を流して語る夫人の眞摯な樣はいたく自分を動かした。自分は夫人の純情に泣かされた。さうして無責任な田舍廻りの新聞記者に對して憤りを感じた。自分は言葉なく頸垂れてゐる夫人のほつれ毛が、自分の洩らした溜息のために小さく搖らぐのを眺めるのだつた。

其時、自分の頭に電光のやうに囁くものがあつた。自分は思はずしめたつと叫び出しさうになつた。が、危く我を抑へた。自分は急に元氣がついて來た。さうして心の中で「まるで探偵

小說だ。愈〻これは面白くなつて來たぞつ」と繰りかへした。

其神來のやうな落想といふのは外でもない。

夏『思ひ出すことなど』及び其他二三の原稿を纏めて買つた古本屋が、一ト月ばかり前に電話をかけて、ひよつとすると多分『門』の原稿が手に入るかも分らんから、入つたら見てくれるかといつて來たことを思ひ出したのである。其時は何氣なく手に入つたら是非見たい旨を答へたのであつたが、其後何等の音沙汰がない。展覽會はいゝ機會ではあるし、殊にかういふ事情があるとすれば、猶のこと飽く迄捜し出して見てやらう。其古本屋といふのはどういふ傳手をもつてゐるのか、嚮には『三四郎』の原稿を賣り、次ぎには『それから』の原稿を賣り、又自分が手に入れた『思ひ出すことなど』の原稿も其男の手にかゝつたのだから、そこ迄匂はすからには、必ず目あての穴があるに違ひない。これは面白くなつて來た。よし、きつと捜し出してやらう。自分の關心は、夫人に對する同情以上、遙かに多分に好奇心に傾いてゐた。自分は夫人を慰め乍ら、やゝ自信のある態度で、かういふ展覽會などのある時だから、思ひ出したやうに何かのはづみでうまくひよいと現れて來ないものでもない。さう悲觀したものでもあるまい。いづれ展覽會に出ない迄も、恐らく原稿の在所位は分るだらうと思ふから、さうしたら

すぐ樣お知らせしよう。ともかく展觀には是非おいでなさいと言つて、招待狀を贈つた。夫人は來た時とは見違へる程氣輕に、それでもどことなく淋しさうに辭して行つた。

玄關に夫人を送り出した自分は、すぐと電話室に驅け込んで、古本屋の主人を呼び出した。さうしてこの展觀を機會に、書畫や原稿の戸籍を作つて殘しておきたいから、賣る賣らない、出陳するしないは別問題として、ともかくいつか話のあつた『門』の原稿の在所をきかしてはくれないか、又場合によつては讓つて頂いてもいゝからと懇々と賴み込んだ。主人は非常に乘り氣になつて、すぐ樣心當りを探すから、明日迄待つてくれろ、十中八九迄は大丈夫だらうと引きうけて、電話を切つた。もう大丈夫だ。これで面白い探偵劇はいよ〳〵仕組み上げられた。あとはたゞ意外な結果を待てばいゝ。自分はその中で主要な一役を演じて、人をあつと言はせるのだ。自分はありもしない空想を一人で作り上げて、其日一日何とも知れぬ樂しい冀待の中に、いそ〳〵と仕事をして暮らした。

翌朝、自分は先方の返事を待ち切れずに古本屋の主人を電話口に呼び出した。しかし主人の返事は自分の勇んだ心に最初の躓きを與へた。主人のいふところによると、かつて一度先方から話しのあつた當の人を尋ねて其話をすると、原稿を所有してゐるのは自分ではない、自分の

友人か若しくはもう一つその知人かが持つてゐるのである、話の序に賣つてもいゝといふことではあつたが、今果してその氣で居るか、それとも或はすでに他人の手へ渡したやも知れない、不取敢問ひ合はせて見ようといふので、主人の待つてる間にすぐと手紙を持たせてやつたといふのである。こゝ迄聞いた自分は、之は愈々お誂へ向きに面白くなつて來たとうなづく間もなく、主人は更に話をついで、ところが先方の返事によると、さういふ原稿は手元にない、何かの誤解ではないかと言ふのださうである。自分は全く失望して了つた。が、更に電話器にしがみついて最後の突撃を試みた。それにしても火のない處に煙は立たない。君がたしかに『門』の原稿があると聞いたのは、勿論そこにあつたものに違ひない。恐らく何かの都合で言葉を濁して居るのであらうが、前々からいふとほり、それを手に入れる入れないは第二の問題として、戸籍調査の都合上是非在所を突きとめたい、其役を引きうけてはくれまいか、さう突貫すると、古本屋の主人は、それは昨夜の様子であれ以上進めないのは分り切つてゐるから御免を蒙りたいといふ。では君が尋ねて行つたその家を敎へてくれろ、自分自ら訪ねて情を打ち明けて懇願するからと追究すると、主人はそれは眞平御免だ、商賣取引の徳義上絕對に先方の名前を敎へ申すわけに參らぬと突放す。とりつく島もない。自分は全く絕望の裡に電話を切つた。口惜紛

れに空想を逞しくすると、主人が先生の原稿を容易に手に入れることから推して、先方の得意先といふのは恐らく新聞關係の人であつて、其人が更に問ひ合はせたといふ人は、或は洋畫家夫人の知人その人ではあるまいか。さうして神經過敏に警戒するところを見ると、古本屋の主人もこの事件に幾分絲を引いてゐるのではあるまいか。自分はみす〳〵手頃な探偵劇をみん事中途でやり損つて了つたわけだ。自分は期待が大きかつた丈に失望も亦それに相應して大きかつた。さうして無精に腹が立つた。其時の自分にとつては、『門』の行方は單なる他人の問題、卽ち洋畫家夫人の問題ではなかつた。全く自分自身のぬきさしのならない問題であつたのである。しかし開會に迫られてゐるので、後から後から湧いて來る用事に追ひまくられて、幸ひなことに自分はこれ一つに許りこだはつてゐることが許されなかつた。さうして開會の當日には全く古本屋や夫人のことを忘れて了つてゐた。

開會二日目のことである。知人や先輩の誰彼を案內して、目の廻る程忙しがつてゐると、とある薄暗い廊下の曲り角を急ぎ足に行き過ぎようとする途端、自分に挨拶をした婦人がある。自分は步みを止めて挨拶をかへした。五歲位の女の兒の手を引いてゐる婦人は、何か言ひた氣に自分に對したまゝ動かうともしない。よく〳〵見れば曩日の夫人であつた。今日は服裝も變

り、其上髮を丸髷に結つてゐるので、一寸見が分らなかつたのである。夫人は氣遣はし氣に、

「如何でございましたでせう。何か手掛りがございましたかしら。」

と尋ねる。自分は先度來訪をうけた折の、思はせ振りな思ひ上つた自分の様子を考へて見て、全く內心忸怩たるものがあつた。さうして夫人の純情を眼の當り見るにつけ、單なる好奇心のために其場限りの興奮をして、二三日後の今日あたりは、全く今の今迄夫人の存在をすら忘れてゐる淺墓な自分が限りなく憎らしかつた。その間夫人はどんなに、恐らくは救世主のやうに、自分の手腕を信頼して居たのであらうに……自分は間の惡い思ひで、簡單に原稿の手掛りのない旨を告げて別れた。

曲り角のところで自分を待つてる先輩の一人に追ひついた時、どうしたのかと問ふから、原稿のことをかいつまんで話すと、何でも『門』の原稿は東北のどこかにあるといふ話を聞いたことがある。或はその夕刊新聞の男から出たのかも知れない。けれども勿論詳しいことは聞いてゐなかつたといふ。自分は又光明を得たやうな氣がした。さうして罪亡ぼしに是非在所が知りたいから、貴方に話した人から突きとめてくれないかと頼んだ。先輩も亦しきりとこの事件を興がつてゐた。

やがて程過ぎてから、自分は又人を案内して原稿の陳列してある部屋へ行つた。すると呆然指を銜へて庭の方を眺めてゐる子供の手を無心に握つて、これ亦呆然と陳列函の中の原稿に見惚れてゐる夫人を認めた時に、自分の眼の中には覺えず熱いものがひよいと浮んだ。

展覽會は東京が終つてから、京都・大阪の有志に迎へられて、都合三都で開かれた。さうして豫期以上の成績をあげた。目録の中に新に加へられたものも四五にして止まらなかつた。しかし『門』の行方は遂に知ることが出來なかつた。其後件の先輩の一人に會つた時、君あれは何でも東北から、常陸とか下野とかの素封家のもとへ流れ込んで來て、今ではそこで門外不出の寶として取扱はれてゐるといふ噂であるが、それ以外のことは一切分らないといふ話であつた。又しても噂にだまされた。けれども自分はもう腹をたてなかつた。さうしてはがきを洋畫家夫人にあてて、あの原稿の噂が流布してゐるところから推すと、原稿はまだ死なずに、何人かの保管のもとに鄭重な取扱ひをうけてゐることと思ふ。私も貴女も今はそれだけで滿足しませう。さうしてそれ以上のことは到底知り得ないことに違ひない。私たちはたゞ飽く迄もその存在を信じて、さうしてそれが最もよき人の手に保護されることを祈りませうと書いて送つた。

十年たつた。

中

其間、例の大震災には漱石の遺墨などもいくつか燒けた。丁度遺墨集をある書店から刊行して居る最中なので、祕藏の軸物を借り出して、日本橋の版木屋にやつておいたところを、その儘煙にしてしまつたやうな、謂はば私の責任にかゝるやうなのもあれば、前述の展觀の時いゝ鹽梅に寫眞をとらせておいたので、燒けは燒けたものの、有難い事にとにかく俤は偲べるといつて、その寫眞を引きのばしていとほしがつてるといつたやうなのもあつた。展觀の時の一番大きな收藏家だつた瀧田樗蔭君が亡くなつて、その藏品が美術倶樂部で賣立てになり、漱石ものが初めて市場にのぼつたなどの事も、震災後間もない事であつた。

私は震災の翌年京都に移つて、足掛四年京洛の天地自然に親しんだ。丁度其頃先生歿後の滿十年に際會したので、津田青楓・和辻哲郎・池崎忠孝なんぞの諸君と發起して、西川一草亭さんのお花の道場「去風洞」で、さゝやかながら京阪地方にある先生の遺墨を集めた展觀をしたことがあつた。多分それに觸發されたものであらう、私はある關西の新聞に隨筆を求められる

まゝに、さきのやうな一文を寄せたのである。書きながらも恐らくこれを見せたら、例の洋畫家夫人は喜んでくれるであらうとは思つたのであるが、遺憾ながら其時には私は夫人の名刺を見失つてしまつて居た。

知人も少い關西の事ではあり、こんな閑文なんか讀んでくれる人があるかどうかと思つて居たのに、時々初めて紹介された人なんぞに會ふと、中々面白い探偵小説みたいな事があるんですからねなどと、二人も三人もこれを話題にするので、私だけではなく、外の人にもこんな事がやはり面白いのかなと思つたりもした。しかし當の失はれた原稿は、依然としてアリバイをきめ込んで、果してこの世にあるものやらないものやら、それさへ全然手掛りがなかつた。

年號が昭和に變つてから、私は又東京へ戻つて住むやうになつた。さうして十三回忌の記念にもと、未亡人を促しその口授をうけて『漱石の思ひ出』を書いて居た。書いたものは月々『改造』に發表されて、一年ばかりも續いた。

丁度其頃、私は高橋夫人の來訪をうけた。太平洋畫會の高橋虎之助氏夫人、つまり私が洋畫家夫人といつて居た當の夫人なのである。私がこの四年前の知己を歡び迎へたのは言ふ迄もない。私は訪問の小形(こがた)の名刺を受取つた時に、事の意外を喜ぶと共に、いきなりあの時の裾模様

の訪問着をさへ思ひ浮べて居たのである。

ところが書齋に現はれたのは、黑い羽織のものなれた中年夫人、そのうしろにはもう一人背のすらつとしたジアンパー服のうら若い女學生。

「娘が一緒にお伺ひしたいといふものでございますから………」

夫人が顧みて紹介する女學生を迎へながら、私はかつて見た夫人が、今眼の前にある母と子との丁度間頃の年恰好の夫人でなかつたかと思つた。それにしてもあの美術倶樂部の展觀で會つた、勿論顏かたちなど覺えても居ないあどけない小令孃が、この眼の前の女學生なのであらうか。私は面輪の夫人に彷彿とした伏目勝ちな少女を懷しげに見るのであつた。

「大きくなりまして、丈はもう私を追ひ越しさうでございますの。あの時分はまだ學校へも行つて居なかつたのでございますのに。お宅樣でも私がお伺ひした時に、可愛い御孃樣が應接間で女中さんとお遊びになつて居らつしやいましたが、もう隨分おみ大きくおなりになつて…………」

「えゝ、もう來年女學校へ入るんだとかいつて、こそ〱準備をやつて居ますよ。」

私は娘をよんだ。細君も續いて一座に加はつた。令孃が「お茶の水」と聞いて、これから女

學校へ娘を送らうといふ細君は、しきりにうらやましがつて居た。家の娘の一座の會話の半分もわからないらしい様子に引きかへ、彼女の上に時々伏せた目をあげては怜悧さうな微笑を投げかける令嬢には、女學生らしい樂しさが見られるのであつた。それかあらぬか、十年前にはやゝ世帶やつれを見せて居た夫人が、今日はかへつて晴やかで、夫畫伯の暢氣な寫生旅行の話などに打ち興じて居られるなど、十年の歳月がこの一家に幸した事をどことなく物語つてるやうでもあつて、深くは識らぬ間柄ながら、誠に快い再會であつた。

この日はかうした謂はば家庭的な話題で始終して、失はれた原稿についてはあんまり語りあはなかつた。といふより、夫人には語るべき新材料はなかつたし、私にしても一篇の隨筆をものしたものの、アドレスを忘れてお屆け出來なかつた事位しか報告するものの持ち合せがなかつたのである。

私は夫人の訪問をうけて、『門』の行方について又新な關心を持ち始めた。

夫人の來訪をうけて半月もたつやたゝないに、『門』の原稿を、しかも最近に見たといふ人の話を聞いた。その人といふのは當時「松竹キネマ」の文藝部に居た畑耕一君。折ふし城戸四郎

君と三人で會食して居るときに、何かの話の序に、たま〳〵畑君が先生の他の原稿はあんまり見た事もないが、つい一兩年前、あるところで、『門』の原稿を手にとつて見た事があるがと、かう言ひ出したものである。私は思はず、

「畑君、そりや本當かい。」

と、まるで意味をなさない問を周章ててやつてしまつた。それを又畑君は御丁寧にも、私が眞物かどうかを尋ねたと取つたと見えて、

「本物ですよ。例の漱石山房の原稿紙にちやんと書いてあつて、全部揃つて居るんです。」

と、躍氣になつて辯じ立てた。

畑君のいふところによると、一二年前、『大衆文學全集』の講演會の用件で、他の二三子と東北のある溫泉場に行つたところが、よく地方にはある奴で、土地の名士が招待してくれた。其折の御馳走に、これもよくある奴で自慢に所藏の書畫を次々に出して觀せるのだが、どれもこれも碌なのがない。初めはいゝ加減の挨拶ですませて居たのだが、あんまりしつこく、こん度はこん度はと持ち込んで來るので、少々お神酒も手傳つて、たうとう地金を出して、そりや眞赤な贋物だ、此奴は駄作だと、此方も敗けずに齒に衣着せず槍玉にあげ始めたので、主人の方

でもたうとう兜をぬいで、最後にこれは門外不出の珍品で、誰にも見せない事にしてあるのだがと物體つけて、持ち出して來たのが、外ならぬ『門』の原稿。口の悪い客人もこれには一言もなく、これはと言つた切り、しばし言葉もなく原稿を眺め、異口同音に、流石にいゝものをお持ちだ、他の數百幅の書畫よりも、この一品が貴い、折角御大事になさいといつて、漸く氣持をなほして、其日の接待を謝したとかういふのである。畑君のいふところによると、原稿紙の右頭に、亂暴な新聞社の組み指定の朱筆迄そのまゝ殘つて居るといふのだ。勿論私や、特に高橋夫人の、永年こがれて居た當の『門』に違ひない。

「ところで畑君、その原稿なら、開卷第一章が缺けてる筈なんだが、君は氣がつかなかつたかね。」

「さあ、一番しまひの、あの『もう又ぢきに冬になるよ』といふところはたしかに讀んだから、終りの方はずつと揃つてると思つたが、一番始めのところは氣がつきませんでしたね。ともかくタイトルに『門』とあつて、下に『漱石』とあり、それに活字の指定のあつた事迄は氣がついたが…………。第一章が缺けてるといふのには、何か仔細があるんですか。」

「妙な曰くがあるんだが、それは後で話さう。それでその所藏家の名は？」

畑君は私の手帖にアドレスと名前とを書いて、同席した他の客の名前迄あげてくれた。私は簡單に『門』の行方の物語を話した。正に原稿の見出された地方は、夫人がそれを預けた新聞人の轉任先に近く、又ある名望家が珍藏して居るといふ噂も、これで見ると正しく事實だつたのだ。畑君達もこの不思議に可憐な物語に熱心に耳を傾けた。私は此夜又しても怪しい興奮を感じた。しかし十年の歲月は、流石にかつての展觀の折に抱いたやうな探偵的な興味を感じさせなかつた。たゞ何よりも在所がわかつて先づほつとした感じと、そのほつとした感じを如何にして畫伯夫人に傳へようかといふ事と、この二つしか考へなかつた。

其夜、私は家にかへつてからすぐ樣夫人に宛てて、今日の顚末を書いて送つた。夫人からは追つつけ速達で返事が來た。それによると、自分の誠が天に通じたのか、自分の手ぬかりから失はれた原稿の在所がわかつたのは、啻うれしい喜ばしいといふばかりでなく、謂はば社會財をこの世から失つて居なかつたといふ事で、社會に對して申譯がたつた氣がする。これで自分も救はれた感じですが、しかしどこそこにあつたとなると、やはり自分も凡夫である、今となつてはそれを自分のものにかへしたいなどと迄は欲張らないが、せめてその永年こがれて居た時夢寐にも忘れる事のなかつた原稿に、たつた一目なりとも會はせて頂きたい。失はれて居た時

には、たゞどつかにありさへすればいゝと思ひ、在所がわかつて見れば、こんど度は是非この目で見たいと思ひ、見たら或は欲しくなつて自分のものだと主張したくならないものでもなく、さうなつたら切りもありませんが、でもやつぱりたつた一目でいゝから會はせて頂きたいものだといふのが、僞らない只今のお願ひですと書いてあつた。

私はこの切々たる文面をよみながら、人事とは思へず、純情な悲戀の文を讀む思ひで心を打たれた。いづれ大びらに會へる時が必ず來るでせう。今では恐らく所有主も大びらに所藏してるとは申しますまい。今迄おとなしく待つたのですから、お互その時迄待つとしませうではありませんか。私はそれに答へてから書き送つた。

その機が惠まれた時、本文の下が當然生まれるのである。

修善寺の詩碑

仲六君が綱をひくけれども、白い幕は碑のどこかの角に引つかゝつて居るものと見えて、心元ない綱の方が斷ち切れさうになるので、私が幕の下端を反對側に引つぱつて、やつとの事除幕を終つた。仰ぎ見れば牛の背を丸めたやうな臺石の上に、一丈二尺の碑が屹立して居る。青みがかつた黒い地膚のうちに、二行の碑文がくつきりと白く懸つて居る。木ならば木の香がぷんと匂ひさうな氣配だ。みんな思はず碑の前に進み出て、口々に立派に出來たと感歎する。字はもと〳〵碑の爲に書かれたものでも何でもない半折の二行物を、わざ〳〵この碑に入れる爲に四倍に擴大したのだから、かすれや筆の勢ひなんぞ、田舍の石工の手で果してこなせるかどうか案じて居たのだつたが、思ひの外なる堂々たる出來ばえを目のあたり仰ぎみて、私は嬉しいよりも、まづ肩の荷が下りたといふ感じが第一にした。

遺族の代表で私が謝辭をのべた後で、「九日會」の代表で森田さんが挨拶をする。語る人も聽

く人も誠に感慨深げであつたが、とりわけ傍の三重吉さんがしきりに目を拭く。さうして草平さんが挨拶をすませて元の席に歸つて來ると、其肩を撫でるやうにして、森田はうまいといつて、なほ涙を拭ふのであつた。去年の十二月九日の十七回忌の夜、年回が果てて、この二人に小宮さんを加へた三人があるところで落ち合つた時に、誰いふとなく、僕達は幸福だつたね、夏目漱石と同じ時代に生まれたのさへ幸福だのに、しかも親しく教をうけたのみか、お互散々ぱら我儘をいつたり叱られたり甘えたり厄介をかけたりしたのは、考へて見ると僕達だけではないか、それを思ふにつけ僕達は何といふ果報者だらうと感慨をもらすと、本當にその通りだと、他の二人も和して、しみ〴〵涙を流しあつて一夜を語らつたといふ。この話を思ひ出したせゐか、私は傍に居た青楓さんが、センチメンタルだなといつて三重吉さんを笑つたのが、かへつて涙よりも遥かに氣になつた。

正月に「九日會」の同勢九人ばかりで此地を檢分した時には、冬とは言ひながら小春日和で、富士から箱根の山、それから反對側には天城がくつきりと眺められて、富士山好きの岩波茂雄さんなんぞはもうそゝられて堪らなくなり、もつとよく富士を大觀出來るといふ山へ、ひとり

一行からわかれて行つたりしたものであるが、今日は四月の花盛りをねらつての除幕式であるのに、成程花はあつても寒さは季節外づれで、花に圍まれた丘の麓の茶屋などを見下すと、洗ひざらしの四條派の繪でも見るやう。伊豆の山々にかゝつてる密雲は雪雲かと見ゆるばかり。なまじいにスプリング・コオトなんぞ着て來たのが恨めしく、しきりにモーニングの洋袴をさすつて暖をとるといふ、四月の十日にしては珍しくもバカ〳〵しい寒さだ。富士も見えなければ天城も隱れて居る。いゝ鹽梅にやつと除幕式の間だけ雨があがつたといふ程度で、實は昨日の九日に式を擧げる筈のが雨に祟られて工事が進まず、一日のびたのが勿怪の幸だつたのだ。

溫泉から二十町もあるであらうか。富士を背景にした、テラスのやうな小山のてつぺんに碑は建つて居る。一寸古代の大きな陵墓を思はせるやうな小山で、俗氣のないすぐれた場所であるが、普通ならば地方人には招魂碑かなんかを建てたいところであらう。手輕に行けて、しかも中々雄大な氣のするところだ。最初正月に敷地檢分に來た時には、溫泉から少し遠過ぎるといふ理由でどうかと思つたのであるが、かうやつて碑が建つたのを見ると、いかにもあるべきところにあるといふ感じがしつくり來るのである。私達は登りながら歩を休めては仰ぎ、又下りながら幾度か振りかへつては眺めた。さうしてこゝに熊笹を茂らせ、こゝに芝を植ゑなどと、

あたりの風致に氣を配るのであつた。

「仰臥シテ人如レ啞ノ。默然トシテ看ニ大空ヲ一。大空ヘ雲不動。終日杳トシテ相同ジ。」

詩碑除幕式（左から著者 漱石未亡人 夏目伸六氏）

碑文のこの五言絶句は、修善寺大患の時の詩であつて、『思ひ出す事など』の第二十章の終りにのつてゐるものである。この詩を書いたものは相當數多いのであるが、これは亡くなられ

る年に書かれたものであつて、小宮さんの藏幅の引きのばしだ。晩年の字はみんないゝのであるが、やゝ細みなので、かうしたいかついかつい石にはどうであらうかと實はひそかに案じて居たのであつた。大きな自然に自分を委せ切つた當時の澄んだ心境がしみ〴〵石の上に滲んでるかのやうだ。

碑陰の文章と書とは、又この碑をいよ〳〵立派なものにして居る。今こゝに全文をのせて見る。句讀や假名の濁點は私が勝手につけたので碑にはないのである。

巍々タリ此石、標スルニ杳々超脫ノ詞ヲ以テス。嗚呼、是レ亡友漱石ヲ追懷セシムルモノニアラズヤ。漱石明治四十三年此地菊屋ニ於テ舊痾ヲ養フ。一時危篤ニ瀕スルヤ、疾ヲ問フ者踵ヲ接ス。其狀權貴モ如カザルモノアリ。漱石ノ名聲四方ニ喧傳セルハ實ニ此時ニアリトス。蓋シ偶然ノ運行ニ因ルト雖モ忘ルベカラザルコトナリ。夫レ病ハ身ヲ化シ、身ハ心ヲ制ス。漱石生死ノ間ニ彷徨シテ性命ノ機微ヲ捕捉シ、知察雋敏省悟透徹スルトコロアリ。漱石ノ思想ノ轉向躍進ヲ見タルハ、亦實ニ此時ニアリトス。固ヨリ必然ノ結果ニ屬スト雖モ忘ルベカラザルコトナリ。漱石ノ修善寺ニ於ケル洵ニ名ト實ト共ニ忘ルベカラザルモノヲ得タリ。漱石逝キテヨリ茲ニ十七年、此地ノ有志相謀リ、其忘ルベカラザルモノヲ明カニシ、併テ仰慕

ノ至情ヲ表セント欲ス。乃チ碑ヲ公園ニ建テ、漱石當時排悶ノ一詩ヲ勒ス。字ハ之ヲ擴大セルモノ、由テ以テ片鱗ヲ存シ記念ト爲スニ足ル。顧フニ漱石深沈ニシテ苟合セズ、靜觀シテ自適ス、往々流俗ト容レザルモノアリ。彼若シ知ルコトアラバ又此碑ヲ以テ贅疣ト爲サンノ

碑陰の拓本

ミ。然リト雖モ贅疣尚ホ能ク衆目ヲ牽ク。天地ノ裕寛ナル其用ヲ認ムルニ吝ナラザルナリ。況ヤ此碑ニ於テヲヤ。敢テ需ニ應ジテ碑陰ニ記スト云フ。

昭和八年四月

狩野亨吉識

菅虎雄書

狩野先生の高邁な文品(ぶんぴん)を備へた含みのある文章は、簡潔のうちに餘すところなくこの記念碑の由來を說明して居るのであるが、それを書く菅(すが)先生の筆蹟が、又いかにも金石法帖を自家藥籠中のものとして、謹嚴のうちにも悠容迫らざる底光りのする氣品を見せて居る。全く六朝と現代とがものの見事に渾融(こんゆう)して些(さ)のたるみを見せないのである。先生の永年の金石古法帖に於ける蘊蓄造詣が、こゝに端なくも亡友追慕の緣に觸發されて、かゝる傑作を生ましめたのではあるまいか。私は三人の老友のトリオになるこの記念碑こそ、現代は愚か、昔からの日本が持つたところの金石中の優なるものの一つではあるまいかとさへ考へてるのである。

修善寺大患は人間漱石作家漱石をすつかり內面的にしてしまつた。漱石の作品を通讀した人は、この大患を境として、作風に一大變化を來たして居ることを見逃(みのが)すわけには行くまい。ただ作中に名前が出て居るとか、そこに一泊したとか休んだとか、そんないはば平面的な作者その人とは大したつながりもない因緣によつてさへ、隨分多くの名所が作られ、又多くの記念碑

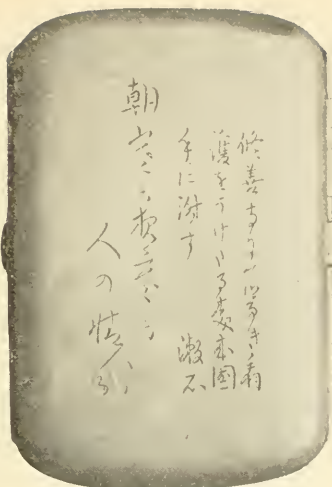
が建てられても居るのであるが、修善寺の漱石に於ける關係は、決してそんな生やさしいものではないのだ。或はこんな記念碑のやうなものは、もつと早く建てられても然るべきであつたかも知れない。

尤も漱石は惡くすればこの地へ死にに來たやうな事にならないものでもなかつたのだ。療養に來たのはいゝがそのまゝねついてしまつて、やがて大吐血をしてすんでの事で永久に眠つて了ふところであつた。いや、三十分ばかりは全く意識がなく、又脈も一時は上がつてしまつて居たのを、辛うじて注射又注射で、危く死から一命を鬪ひ取つたのだ。當時の主治醫森成さんの手記を見ると、大吐血の後の危機をかう書いて居られる――。

「私は咄嗟の間に漱石さんに寄り添つて無意識に手を取つた。豫て用意の注射を準備しつゝ御氣分は如何ですかと問うて見た。目を閉ぢた儘、ハア、樂になりましたと微かに返答があつたので、稍安心し乍ら注射した。

「杉本さんも手傳つて、兎も角漱石さんを蒲團の上へ安靜に寢かし、樣子如何と看守つて約十分間位經つたと思ふ頃、再びゲーツと響く乾嘔と共に反側して假死の狀態に陷り、脈搏がバツタリ止つてしまつた。

「サア大變！　萬事休矣！」

「私は胸中掻き捗らるゝ如き苦悶と尻が落ち付かない様な不安とに襲はれ、全身名狀すべからざる一種の壓迫を感じた。此現象は畢竟自分が大狼狽して居る結果で、此危急の際僕迄が狼狽しては駄目だと悟つた瞬間、反撥的に度胸がクソ落ち付きに落ち付き拂つた。目前に横たはる蠟細工の病體を冷靜に物質視すると共に、ドツカと胡坐をかいて、猛然ズブリ〳〵と注射の針を打つた。『コレデモカツ？　コレデモカツ！』と力をこめて根限り注射を續けた。

森成氏へ贈れる銀のシガレツト・ケース

「病人の腕を握つて檢脈して居られた杉本さんは、突然『脈が出て來た！』と狂喜して叫ばれた。成程小さい脈が底の方に幽かに波打つて居るではないか。此時の喜び！　此時の氣持！　只々兩眼から涙がホロリホロリと溢れ出るのみである。」

かうして漱石は生きかへつた。さうしてかつてなかつた心のゆとりをもつて、しみ〴〵と人と自然とをなつかしく眺めなほした。彼は仰向けに臥つたまゝ毎日室をながめた。さうして病間のつれ〴〵を慰めるべく摘んで來てくれる野の草花の移り變りを心靜かに眺めやり乍ら、コスモスの花を干菓子のやうだと思つたりするのである。「人よりも空、語よりも默」といふ前置きの「肩に來て人なつかしや赤蜻蛉」の一句は當時の心を最もよく現はして居るかと思はれる。かうして漱石は二箇月間の同地滯在を全く牀の中で暮らして、伊東へ出る方角も三島へぬける方角も知らずに、吊り臺の上に寢せられたまゝ修善寺をたつのである。勿論今度碑の建てられた山の上の公園なんぞ知らう筈はなかつた。しかし一度死の門を叩いてかへつて來た人として、その人と藝術とに澄んだ東洋的なあの高さと深さとを加へしめた地として、修善寺の名は漱石の讀者にとつて永く牢記されていゝのである。

私は二三日前に又『思ひ出す事など』を讀みかへして見た。大患が四十四歳で、これの書かれたのは翌年の四十五歳の時だ。いづれにしても現在の私の年から一つ二つしか離れて居ないのであるが、殆んど六十の人の言ひさうな事書きさうな事に充ち滿ちて居て、どうしても四十五歳の壯年の人の筆とは考へられない。かつてある禪家の老師に會つた時に漱石の歿年を問は

れ、五十歳で亡くなつた旨を答へると、たつた五十であんな事を書いたとは、隨分あの人もませて居ましたなといふ事だつたので、いかにも禪家らしいとぼけた言葉だと思つて笑つたのであるが、今にしてこの『思ひ出す事など』を繙いて見ると、常人よりはたしかに十年はふけてるやうだ。私の先生を識つたのは亡くなられる迄の丁度滿一箇年であつたが、その頃の漱石は五十歳でありながら、その時もさうだつたし、今考へて見てもさうであるが、どう見ても六十歳、或はそれ以上の老人としか思へないのである。これは私一人の考へかと思つて居たら、もう先生の定命を過ぎた「九日會」の先輩連中迄が、みんな異口同音にさういふのである。

除幕式のあつた一週間ばかり後、修善寺の原町長から其時の記念撮影の寫眞が屆けられた。參列の私達を始めとして、町の有力者達總勢五六十人が碑の前にならんで居る寫眞であるが、私は何もかもよく知つて居た癖に、ふと何氣なくその寫眞の中に或る一人の男の顏をさがして居た。すぐにその男が其日參列して居なかつた事を思ひ出して苦笑したのであつたが、何故かその男の顏も、こゝに記念に加はつて居て欲しかつたといふ氣がしないでもなかつた。

その男といふのは或るブローカー（？）の事で、甚だ擽い存在なのであるが、しかしうそ

から出たまことゝでも言はうか、この碑がかうしてこゝに出來上がる迄には、とにかく喜劇的ながら一役持つて居た、少々皮肉ではあるがともかく一恩人なのである。私は寫眞を見ながら、計らずもその男の顏を思ひ出したのである。

其男に私が始めて會つたのは、一二年前の漱石山房で月々の「九日會」のあつた時、又訪ねて來たから、貴方一度會つて見て話を聞いてやつて下さい、何でも湯ヶ原へ漱石の記念碑を建てるとかいつて、此間から再々來るのですが、一寸會つて見たけれども、何だか少し變なんですよといふ未亡人の話に、早速その男の名刺を片手に應接間へ出て行くと、縞ズボンに黑の上着をきた壯年の男が、窓際の長椅子によつて莨をふかして居るのだつた。最初の印象はやゝ品のいゝ院外團といつた感じ。ハア、貴方が奧さんのおつしやる松岡さんですかといつて、むしろ先方から私の商賣柄をさぐるかのやうに、上から下まで眺めるのだ。どつちが客でどつちが主人なのか、妙チクリンな感じだ。私はこれは氣がゆるせない代物だぞと思つた。

ところが話をして居るうちに、隨時に馬脚といつてはどうか知らないが、とにかく常識的な無智をさらけ出す。漱石の記念碑をこさへようと目論む程の男が、漱石の事をまるで知らないので、最初の私の警戒はゆるんで、段々をかしさに變つて來た。しかも無智をさらけ出して此

方が訂正しても、案外シャア〳〵として居る鈍感といふか厚顔といふかには、此方がむしろ顔敗けする位だつた。

例へば漱石が關係のあつた新聞は朝日新聞である位の事は周知な事實なのに、此男は、日日新聞の社員だつたんだから、德富蘇峰さんに碑文を書いて貰はうなんて見當違ひの事をぬけぬけといふ。小說にしても漱石が『不如歸』を書いたてな事を言ひ兼ねまじい語調なので、むしろ私がハラ〳〵する位なのだが、彼は私の歡心でも買ふつもりか、自分の文學敎養を見せびらかすつもりなのか、誠にとんちんかんの文學談を遠慮會釋なく御披露に及ぶ。二三十分話してるうちに私の方から我慢が出來なくなつて、貴方はお見受けするところ漱石の事はまるで御存じない癖に、どうして又記念碑を建てるなどといふ謂はば大それた計畫をと、初對面の人には到底言ふべき事でない言葉を洩らしても、彼は別に惡びれもせず、いや、これから大いに勉强するつもりで居ますから、何分一つ御指導を、つい他の方面で活動して居るものですから、文學の事は至つて不得手でして……。しかしこれを御緣に、かうした有意義の企てに手傳はせて頂いてるうちには、又門前の小僧でてな事をあつさりと言ふのである。結局湯ヶ原溫泉の有志の誰彼に賴まれたとか相談してとかと、あとでは眞鍋嘉一郎國手の名などもあげて、是非湯

ヶ原へ漱石の記念碑なり銅像なりを建てたいとかうなのである。

一體湯ヶ原溫泉に記念碑を建てたらといふ話は、早く先生歿後の翌年の第一回の「九日會」の席上でも出て、主治醫だつた眞鍋敎授が、湯ヶ原の人達からそんな相談でもかけられたのか、ドイツの文豪記念碑などを引例して、さうした入湯記念碑とか曾遊記念碑とかいつたものがあつてもいゝぢやないかといつた話の出た事はあつたのである。だから今眞鍋さんの話が出て、しかも記念碑といふ事であれば、私にして見れば十五六年前のそれが、時を得て再燃したのであらうと考へるのは當然の事であつた。それにしてもこのお粗末な男と話をするのは恐れ入らざるを得ない。そこで當らず障らずに、貴方がおやりになるといふならそれもいゝでせうが、下手なものをこさへて物笑ひにならないやうに、さうして又この不況時代の事だから、いらない事だがあんまりお金をおかけにならないやうに。ともかく湯ヶ原溫泉全體の意志でそれがきまつたんなら、夏目家としても別に文句はないが、その點をしつかり聞かせてほしいと私は言つた。男は幾分慌て氣味に、溫泉組合の方から私に伺つて賴んで來てくれとまかされたんですが、今度來る時には組合長・副會長の二人を同行します。ナーニ、今夜にでも電報をうてば、近いんですから、明日でも何でも來ます。では又近いうちにといつて、案外見切りよくかへつ

て行つた。私は未亡人に報告した上で、今後の一切の交渉をまかせてもらふ事にした。

二度目にこの男は私の自宅へやつて來た。相も變らぬ縞ズボンで、少し氣味の惡い位なれなれしくなつてる。私は元氣よく入つて來る男の背後に、連れて來る筈の組合長等が現はれるだらうと思つてのぞいたが、誰も居なかつた。

椅子につくと、彼はいきなり三千圓ばかりで銅像を造らうといふ話をおつ始めた。大家なら高いが、新進のこれからといふ彫刻家を値切れば安くやつてくれる。私の識つた奴が一人居るから、あれに掛け合へば、奴今相當困つてるから、安くやつてくれるだらう、その方は私が引きうけるとして、どうでせう、その三千圓のうち、半額を東京で寄附を集め、半額を地元負擔とする。地元の方は土地繁榮策として大體承知したから、東京の方を一つ心配してくれますまいか。外のものと違つて、兎に角天下の文豪夏目漱石の銅像を建てるといふのだから、夏目さんでも相當出して下さるだらうし、岩波さんだつて大分全集で儲かつたといふし、其外みんな先生のお蔭でえらくなつた門下の方なんだから、否應はなからうし、又世間に對しても、顏の手前かうした場合には喜んで然るべく寄附されるでせう。とにかくかういふものには筆始めが

大事だから、結局實際の金はどうでもいゝのだから、最初に夏目さんのお宅から五百圓ばかり筆始めに書いて頂くわけには參らんでせうか。かういつた事を滔々と述べ立てるのだ。

　私はさては奥の手を出して來たな、それにしては淺はかなからくりだと思ひながら、そんな相談を私にかけられては甚だ迷惑だ。湯ヶ原でおこしらへにならうといふのなら、みつともないものでなくばそれもよからうといつただけで、湯ヶ原の記念碑の爲に、東京で寄附募集をするなどといふ事は全く筋違ひだ。これが漱石終焉の跡を保存するとか何とかいふ事で、天下の有志から、寄附を募るなら又別問題で筋もとほらうが、一湯ヶ原の事でそんな事をするのは、私としては眞平御免を蒙る。それに誰の手でこさへるのか知らないが、今聞けば銅像をどうするとかいふ話だが、一體何のためにどこへそんなものを建てようといふのです。あんまり下手な、無い方がいゝなどと後で物笑ひになるやうなものは、おやりにならない方がいゝと思ふ。第一門下生から寄附をなんぞとあてにしてられるやうだが、なる程名前は相當知られて居ようが、金なんぞ持つてるものはありませんよと、私も大體先方の見とほしがついたので、樂な氣持でつけ〳〵と言つたものだ。

　ところがそんな事でへこむ先樣ではなかつた。丁度其時テーブルの上に、私が漱石の遺蹟を

巡禮した紀行を書いた雜誌がのつて居た。その四國の松山の條に、子規の髮塔の寫眞のあるのを見つけて、これはいゝ、銅像がいけなけりや、こんなのにしようぢやありませんか。これなら文句はないでせう、この素描を描くのに、誰が適任ですか、尤もこゝにレリーフかなんかを入れるのも面白いですな、では早速湯ヶ原へ行つて打ち合はせませう、この方なら銅像と違つていゝうんと安く上りますよ、根生川石かなんかでやつつければ、いはば御手のものですからな、これはいゝものがあつた、早く敎へて下されば、銅像なんて金のかゝる大袈裟なものは計畫しなかつたのに、先生も人が惡い、だまつて居て人をぢらすなんて、一寸この雜誌を拜借させて頂きます、今度上る時には立派に圖を引いて、これで動かないといふ計畫を立てて、豫算もキチンと立てて來ますからといつて、私が酸つぱい顏をして返事もしないうちに、黑い折鞄の中に雜誌を入れてしまつた。さうして立ちかけていふ事が振つて居る。子規居士つて聞いた事がありますな、どつかの坊さんでしたかな、湯ヶ原へ行く汽車の中でこの拜借した雜誌をよめばわかりますな。……

私は狐につままれた感じで、この珍客を送り出した。

珍客は電光石火の早さで翌日の午後やつて來た。あれからあの足ですぐと湯ヶ原へ行きましてな、みんなを集めて、石屋をよんで、徹夜で圖を引かせましたが、中々夏目漱石もいろんな心配をかけますわい。これが圖ですが、石屋は石屋で、どうして田舍ながら本場は違つたもので、相當うまく引きますよ。それといつて、大きな圖面を、これが正面、これが側面といつて二つ三つひろげて見せ、側には詳細の計算書をひろげたものだ。

「かういふ風にキチンとやつて來ましたから、もう文句はないでせう。それに計算もかうなつて出たからには、誰が御覽になつても疑問の餘地はありますまい。尤もこれはこゝだけの話ですが、このうち一割や一割五分は私がまけさせますがね。とにかく善は急げだから、早速取つかゝらうぢやありませんか。あの公園の山の上にこれが出來たら壯觀ですぞ。私もかういふ後々迄のこる立派な仕事の手傳をさせてもらつたといふ事で、これが出來上りさへすれば、もう報酬も何も、そんな事はどうだつていゝわけで、大いに滿足ですよ。男一疋、一つの仕事をこさへ上げるのは、欲得離れて實際愉快なもんで、謂はば男子の本懷ですからな。」

大きな圖面を前にしてそりみになつて得意然と笑ふ男を、少し大袈裟に形容すると、計略圖に當つた參謀長とでもいつたらいゝかも知れない。大方、昨夜の振舞ひ酒であらう、私は彼の

酒臭い息に眉をひそめた。
試に圖を見ると、成程、石屋は石屋と折紙付きだけあつて層々累々と石を疊み上げた上に、子規居士の記念碑そつくりの石がのつかつて居り、周圍には鐵柵がいかめしくめぐらされて居る。臺石が高くなくちや威嚴がありませんからねと彼がいふとほり、どうみても戰爭の記念碑を少しばかり軟化させた感じ。いかにもこの男の指圖で生まれさうな代物だと思つたら、思はず吹き出しさうになるのを堪へて、大層堂々たるものが出來ましたねといへば、これで何もかにもで千圓そこ〳〵、銅像の三分の一で上がるわけだから安いでせうと來る。さうしてかうなつた以上是が否でも一時も早くやらうとせがむのである。
私のところへ來てこの調子であるから、湯ヶ原へ行つては又何を言つてるか知れたものでない。このでこ〳〵の記念碑は願ひ下げにしても、記念碑そのものを地元の人達の發起で建てるのは悪い事ではないのだが、それにしてもかういふ千三つ屋が中に介在して、恐らく地元の連中をまくし立てて勝手な熱を吹き散らしてるのみでなく、必ず私の言つた事などを自分の利益になるやうに曲げて傳へて居るに違ひない、それでは出來るものも出來ず、出來上つてもきつと面白くないのはわかり切つた事で、必ず因縁をつけてぶら下るに違ひない。とにかく私の方

の眞意を、全然識らないわけではなし、とにもかくにも一應直接地元の當事者達へ告げて、先方の眞意も確かめる必要がある。でない事には、ともすれば地元の人達がこのいかものに喰はれないものでもない、そんな事でもあつては、事は先生の碑の事に發して、多少でも私が口をきいた以上、それだけの親切はあるべきだと思つたので、とにかく湯ヶ原の當事者に私が直接お會ひした上で、それから最後を決定しようといつて、其日はかへつて貰つた。私は天野屋の主人にあてて手紙を書いた。

案の條、私に言はれる迄もなく、先方の地元でも、最初は記念碑があつた方がいゝ位の話だつたのを、どう聞きかじつたものか、この男が一人で背負つて立つてしまつて困つて居たところらしく、私の考へて居た筋書きどほりに、其後間もなく男は締め出しを喰つたものらしかつた。自然の結果として、有難い事に私もこの無遠慮な桁外れの男の、押賣りがましい訪問をうける義務から解放される事になつた。

折から冬の初め頃で、十一月の末か十二月の始めであつた。丁度ある學校で漱石追慕の講演會の催があつて、私もその席で講演をする事になつて居た。其日は朝から來客で忙しく、夕方會場へかけつける時に、郵便が來て居るといつて一束家人から渡されたのをそのまゝ外套のポ

ケットへねぢこみ、さて自動車を拾つて漸く一わたり目をとほすと、中にお粗末なハトロン封筒が入つて居た。差出人は珍らしくもこのいつもの招かれざる客。湯ヶ原の事は一段落ついた筈だのに、又一仕事おつ始めたのかな、變な因縁をつけられちややり切れないぞと眉唾物で開いて見ると、誠に謄寫版刷りのきたならしいビラ一枚。ところ〴〵に赤インキで圏點が物々しく打つてある。まるで左翼のアヂビラ見たいだ。車の動搖と仄暗いライトのせゐで、しかとはよめないが、拾ひよみに判讀すると、この天下の志士が、彼の所謂我利我利亡者の湯ヶ原溫泉組合、別しては天野屋主人に天誅を加へて、黑白を天下に向つて問ふといふ、いはば斬奸詰問狀なのだ。私は思はずふき出して了つた。成程、彼の立場で見れば、かうも言へない事はないであらう。又世間に行はれる常套手段でもあるのである。私は妙に愉快になつて、場所柄も忘れてなほも聲を立てて笑つたので、運轉手から、旦那、よつぽど嬉しい手紙だと見えますねとひやかされてしまつた。さうして其日、歸つてからゆつくりこの愉快な怪文書を讀みかへさうと思つてるうち、講演を果たすと、前約のあつた宴會に行つたりして、たうとうそれ切り失つてしまつた。しかし來るところ迄來てしまつて相手方が啖呵を切れば、まあ〳〵大した仕事にもならなかつたであらう事が想像されもするので、私はこれしきの事で大怪我がなくてすんだ

事を心から喜んだ。さうしてこの事件も不思議な登場人物も、それで一段落と、いつ忘れるともなくあら方忘れかけてしまつた。

私が修善寺溫泉の土屋といふ仁の突然の來訪をうけたのは、それからやゝ一箇月近くたつた、いよ〱歳末の氣分濃厚の頃であつた。私はうけとつた未知の人の名刺で溫泉といふ字をよみ、取次の女中が記念碑といつたので、おや〱、例のが復活して、今度は愈〻本式に地元の人が來たのかなと早呑込みしてしまつた。さうしてそれつ切り名刺をよく見なかつたので、土屋氏から修善寺の話を切り出された時に、私は湯ヶ原と修善寺と妙にごつちやになつた一種の錯覺の下に、初めのうちはやゝ上の空で話を聞いて居た。其うちに變に辻褄が合はないなと感付いて、よく〱名刺を注視したら、全く私の粗忽とわかつた。それでやつと話が本道にかへつた。

さて土屋氏の話を伺つて見ると、やつぱり湯ヶ原の例の男が登場して來て居る。私にはそれが何を措いても愉快でなかつた。ところが私が不安に思つてる事が、同時に修善寺溫泉側をも不安がらせて居るのであるといふ事が直にわかつた。といふのは、土屋氏がその男の名をあげるから、あゝ、あの男が貴方の方へも行つたんですねと私が尋ねると、土屋氏の方から反對に、

實はその方なんですが、此方様とどういふ御關係なんでございますか、御差支なければ折入つて伺はせて頂きたいのですがと改まつて切り出したものだ。そこで私は率直に、どういふ話をあの男が貴方にも說いたか知らないが、どのみちあの男と提携してやるなら、この話は恐らく望みがないでせうと前置きして、前の事件の荒筋を掻いつまんで話した。それを聞いて土屋氏が喜んでいふには、實は此間突然あの男が修善寺溫泉へやつて來て、此方でこれ／＼の事をやらないか、湯ヶ原の奴輩は話が分らな過ぎるから、折角の自分の盡力も最後のどたん場へ來て無駄になつた。若し贊成ならば、間へ立つて自分が、私との橋渡し一切の交渉をやるからといつて來たのが、どうも第一印象がブローカーの賣り込みそつくりの感じだつたもので、初對面で失禮とは思つたが、言下に、それは貴方のためにおやりになるのですか、それとも修善寺のためを思つてのお話ですかと開きなほると、まさか自分のためとも言へないので、いや、社會のため、修善寺のため、引いては漱石先生のためと思つてやるのだとの申し開き。その御趣旨なら、一應直接町から誠意をもつて御願ひして見て、それでおゆるしが出れば、東京と此方とでは離れて居ますから、御足勞をしば／＼煩はしては御氣の毒だし、萬一御願ひして見て、それではいけないといふ事ででもあれば、どうか貴方から然るべくおとりなしを乞ふ、とにかく

記念碑がたつといふ事は、町として大變結構な事ですから、最初町として御願ひに出るのが本筋だとかういふ風に、最初に先手を打つておいて、さうして今日は町長の內意をうけて、私の意志をきゝに來たのだといふのである。

それで何もかもわかつた。といふのは、湯ヶ原の失敗を修善寺で取りかへし、さうして湯ヶ原に態見ろと讐をとつてやりたさに、湯ヶ原での計畫をそのまゝ賣り込みに行つたのに違ひない。但しかうした漱石因緣の地などといふ事にはまるで無智な彼としては大變な智慧なので、私が彼と數回會つてるうち、ふと湯ヶ原との關係より、修善寺の方がより深い關係を先生に持つてる事を語つたのを覺えて居て、そこで乘り込んで行つたのだと考へる外ないのであるが、底が知れて見れば、土屋氏もさうでしたかと、啞然としながらも、してやつたりとばかりに快心の笑を洩らしもするのだつた。

やがて次回には、町から正式に町長さんやら溫泉組合の會長さんやらが見えた。話はとんとん拍子に、邪魔な介在者なしに運んだ。愈〻除幕式をやらうといふ段取りになつた時、この男を招待したものだらうかどうだらうかと尋ねられたから、それは假令うそから出たまことにしろ、とにもかくにも今日結果としては修善寺詩碑の恩人なのだから、招待狀はお出しになるが

いゝし、又多少の色はつけて上げたがいゝでせうと、私は答へておいた。

除幕式の日は私は忙しがつて居て、すつかりこの珍客の事を忘れて居た。といふのもつまりは彼氏が其日姿を見せなかつたといふだけの事だつたのであらうが、それが當日の記念撮影の照相を見て居るうち、ふとこの喜劇の一齣を思ひ出して、かうした事にもいろ〳〵な役者が登場するものかなとしみ〴〵感じたのであつた。

其後數日たつてから、土屋氏から例の男がやつて來たので、あとくさりのないやうに記念碑を見せて、一晩御馳走し、さうしてなにがしかを包んでやつたら、文句を言はずに喜んでかへつたといふ報告をうけた。このお化、しをらしくも感心に出る時と所とを心得たものだ。

離縁の證書

『道草』は先生のたつた一つの所謂自敍傳小說であつて、數多い作品のうち特殊な持味をもつた名作であるのであるが、それ以外多くの先生自身の自傳が物語られてる點に於て、誰にも見逃せない甚だ重大な意義のある記錄でもあるのである。今養家先から離籍する當時の模様を、現に漱石山房に藏されてゐる當時の文書によつて偲んで見よう。

先づ最初に「手續書」といふ美濃紙二枚の屆書の草稿らしいものがあつて、ところどころ朱字が入つて居る。末尾は未完らしく尻切れ蜻蛉になつてゐて、年號も屆人の名前も入つて居ない。しかし養家先の事情がわかつて興味があるから、第一にのせることにする。

手續書

牛込區牛込喜久井町一番地
東京府平民夏目直克四男

鹽原金之助
慶應三卯年一月五日生

下谷區下谷西町四番地
養父　鹽原昌之助
四十五六歲

明治二十年月日不知分藉ノ上
神田明神下同朋町十六番地
藤田金太郎方ヘ同居移藉ス

右養父昌之助義ハ、内藤新宿北町之住居ノ砌、同人幼少ニ而勤伺難相成、夏目直克方ヘ引取、四五ケ年養育及、同丁舊名主役被相勤候緣合ヲ以、明治二年十一月中右金之助三歲ノ砌養子ニ差出置候處、同七年四月中、昌之助義淺草區戶長勤役中、日根里かつト申後家ヘ通合候ヨリ事起リ妻やすト不和ヲ生シ、直克媒人之廉ニ而引取、其際金之助ハ八歲ニ而養母ノ手ヲ離レ不申引取置申候、右ハ金之助ヲ四ケ年五ケ月昌之助方ニ於テ養育致候迄ニ有之、其後十四ケ年間直克方ニ而養育致□□古事等仕込申候　然ル處今般長男次男共病死致候ニ付而ハ、長男ノ遺言モ有之候ニ付取戾シ家督相續被致心體ニ有之候

一　戶籍面ハ金之助長男取拵戶主致置、同人印形等ハ昌之助手元差置、右金之助名義ヲ以多

分之借財ヲ懷シ□本所荒井町森田周助ヨリ金之助所持家屋ヲ抵當ニ差入金百圓借受、期月過候而モ返濟不致裁判ニ相成、右ハ外ヨリ借替返金及候趣、右ハ同樣之始末多ク有之趣相聞申候、就中長男ノ名義ヲ以右樣借財相嵩候ヲ爾後金之助ニ濟方被致候心體ニ相聞、末々難儀及候義必定ニ有之候間、今般離緣致シ實家へ引取申度願（以下缺）

まだ後がありさうでこゝ迄しか書いてない。察するところ文意からすると、先生の嚴父が、この離籍問題のいざこざが始まつた時に、ある憤をもつて書かれた草稿のやうにも思はれるし、筆蹟も他の書類と同筆のやうに見受けられるから、一層さう推定して差支ないやうであるが、それにしてもいかに一片の手續書とは言ひながら、この惡文は文豪の父の筆にしては、少し對照の妙が有り過ぎるやうだ。

この文書は明治二十一年の一月早々のものであらうが、初めにあるとほり、其頃養父は自分丈の籍を神田へ移して直接の責任をのがれ、養子金之助（先生）の名義で借財をし、養子所有の家屋を抵當流れにして、しかもその家に居据つて家賃も拂はないところから、裁判沙汰に迄なつてる文書が外に殘つてゐる始末で、隨分一時とは違つて微祿して居たもののやうだ。そこ

でかういふものにかゝづらつて居ては、此先どんな迷惑が降りかゝらぬものでもないといふのが一つ、それから長男次男が相ついで亡くなり、三男が病弱であつたところへ、長男大助（前名大一）さんが殊の外四男の金之助（先生）を愛し、自分の準養子にしようといふ意志のあつたところから、いよ〳〵先生の籍を實家へ取り戻さうといふことになつたものらしい。揚句の果が五箇年ばかり養育した其金を拂ふといふことになつて、そこで漸く籍を取り戻したのが、明治二十一年一月の事であつた。一月二十八日に實家復籍の事が牛込區長へ屆出になつて居る。それ迄はどうあつても養父の方で籍を渡さず、年頃になつたら官廳の給仕にでも出さうか、それとも何かそんな風なものにして、生活に役立てようといふ魂膽であつたらしい。

この文書の中で長男（長男次男の箇所以外）とあるは、昌之助長男の意味であるが、明治二十一年一月の屆出に、「戸籍正誤願」といふのが下谷區長に差出され、實際は夏目直克四男のところを、明治五年戸籍改正の折、養父が誤つて、昌之助長男として屆出たものだから訂正して欲しいといふ實父、養父、親類總代連名のがある。

さていよ〳〵離籍といふことに話が纏つて、そこで雙方から互に一札が入る。これは前の手續書から見ると大分文句が穩便になつてゐる。中に人が立つて取りなしたものであらう。

印紙割印

爲取替一札之事

一　先般長男大一殿病死被致候ニ付兼テ養子ニ貰ヒ置候金之助義離別致呉候樣御□合之趣承知致候　右ハ手前方ニテ養育致候廉モ有之ニ付右料トシテ金貳百四拾圓ニテ御示談仕候　然ル上ハ金之助離緣本籍ト引替ニ當金百七拾圓御渡被下、殘金七拾圓相當金七拾圓ハ當金御渡ニ相成候翌月ヨリ、金三圓ツヽ毎月三十日限リ無利足月賦ニ御差入ノ積リ御對談仕候義承知致段、聊相違無之候　尤一ケ月ニテモ相滯候ハヽ、一時請求相成候共申分更ニ無之候　依テ爲念取替一札如件

但シ戸主金之助名前ヲ以借財有之候共私方ニ於テ委皆仕拂ニ及同人に一切苦勞相掛ケ申間舖候事 ㊞

明治二十一年第一月

鹽原昌之助 ㊞

夫昌之助承諾之上旅行致候ニ付實印受取置候間取扱人田中重兵衞ヨリ代筆相願候也

妻　かつ ㊞

親類取扱人

田中重兵衞 ㊞

これで見ると、雙方同じ證書を取りかはしたものらしく、債權者と債務者とがごつちやになつてるところが妙だ。
かうして內金百七拾圓は卽金で一月二十七日に仕拂はれ、それから引續いて約定どほり每月三圓の月賦で、明治二十三年二月二十六日皆濟に至る迄仕拂はれてゐた。其記錄が殘つてゐるが、文豪一箇月の養育代が三圓の割で(筆墨紙贖)、外が衣類や病氣の物入りなどに當ることになつてるらしい。
かうして事件の決着がついたので、先生の方からも養父へ一札を入れることになつたのであらう、多分自分自筆だと思はれる證書がある。

今般私義貴家御離緣に相成因て養育料として金貳百四拾圓實父ゟ御受取之上私本姓に復し申候　就ては互に不實不人情に相成らざる様致度存候也
明治廿一年一月

金之助 （夏目認印）

鹽原昌之助殿

漱石筆「不人情に相成らざる」證書

次にかういふ手帋の寫しがある。多分嚴父が先生から入れたこの一札を見て、災を後に殘すものだとして斷然たる處置に出ようとせられたものらしい。

以手紙申入候然ハ先般示談ノ上、金之助養育金貳百四十圓定、内金百七拾圓差出シ、殘金七拾圓月賦ニ差出シ可申一札爲取替離縁

ニ相成、本人實家復籍致候　然ル上ハ拙者ト無沙汰ニ致シ金之助不服ナル扱人ヲ以テ、本人ヨリ別段一札ヲ被差出候趣承リ、右ハ意外之取斗存意不相叶候間、爾後交際出入等一切御斷及候　右之趣和三郎金之助ヘモ申聞置、且亦親戚一同ニモ其旨通知致候條此段申入候也

四月三十日　　　　　　　　　　　　　　　夏　目　直　克

鹽　原　昌　之　助　殿

同　　お　か　つ　殿

和三郎といふのは、先生のすぐの令兄で、其後名を直矩と改め、夏目家をついで、永く牛込矢來町に住んで居られ、通常矢來のをぢさんと呼ばれて居た。

かうして見ると先生は殆んど二十年間、養家先の鹽原姓をやむなく名乘つて居られたのである。

これで養家先との縁も全く切れて、元の夏目金之助にかへり、二十年間何のこともなかつたのであるが、洋行からかへられて間もなく『道草』の事件がおこるのである。これは作中に委曲が盡くされて居るから說く迄もないが、結局前に立派に切れた筈の惡縁も事實上切れないで

居て、又もや金と證書の交換に終つて了ふ。其頃元の養父は非常に零落して居たさうであるが、何にしても不實不人情はしないといふ證書が物を言つたものか、それとも手切れが手切れでなかつたものか、少々居なほりゆすりの形である。迷惑千萬のことであつたであらう。これを反對に先生が亡くなられて間もない頃、ある雜誌に、何をどう取り違へたものか、この事件を故意に曲解して、漱石は不人情だとか何とかしきりに書き散らして居たものがあつた。今私にその詳しい正確な記憶は無いのであるが、何でも鹽原側の横着な考へ方を、そのまゝ文字の上で横車を押したものであつたかとおぼえてゐる。どうでもいゝことではあるが、想ひ出したから一寸書き加へておく。其時元の養父側が入れた證書は、

證

一金壹百圓也

印紙

右金額贈與相成正ニ受領致候處確實也然ル上ハ後日ニ至リ金錢上ノ依賴ハ勿論其他一切之關係ヲ斷絶シ終世迄御依賴等ヲ申出間敷候爲後日誓約書如件

明治四十二年拾壹月貳拾八日

鹽　原　昌　之　助　㊞

下谷區西町拾七番地
田澤厚平㊞

夏目金之助殿

幼年時代の漱石と養父

さきにあげた先生自筆の證書といふのを、此時つまり事實の上ではこの百圓で買ひ取つた鹽梅式になつたものであらう。

これは餘談だが、つい此間鹽原の養母おやすさん（先妻）の遺族の方へ、先生の幼時の寫眞が保存されて居たら拜借したいと言つてお願ひしたら、貸して下すつたのが養父鹽原と二人で寫した筈の五歳位の寫眞。しかも養父の方半分が切り取られて無い。恐らく養母が鹽原の奴めといつた無念さ口惜しさから切

つて捨て、養ひ子の方だけを大事にして置かれたものだらうといふ遺族の方の説明であつた。
いかにもさもありなんといふ氣がする。自分で困ると誰でも人に迷惑をかけるものではあるが、とにかく鹽原といふ人も初め順境にあつたうちはよかつたのであらうが、往生際は甚だ芳しくなかつたらしい。

『明暗』の頃

先生が『朝日新聞』に『明暗』を大分書き進まれた頃の事である。武者小路氏がある雜誌に、漱石のものは初めは何だかだら／＼してるやうに思ひ乍らも、手法の巧さにつり込まれて讀んで行くうちに、後の方へ來ると、きまつてどつかでどかつと讀者の胸を打つものがあつて、それで全篇がたまらなくよく生きて來る。『それから』然り、『行人』然り、『心』然りだが、この『明暗』はいつものその漱石に似ず、妙に思はせ振りにだら／＼して居て、今か今かと待つてるが、一向それらしい處も出て來ない、先へ行つて例のとほりどかつと來るのかも知れないが、今のところ甚だ面白くないといふ意味の感想を書いて居た。それがある木曜會（木曜日が面會日になつて居て、其夜門下が山房に集まつたものである）の席上で、誰が言ひ出したのか問題になつた。すると先生もその批評はすでに讀んで居られて言はれるには、武者小路君あたりはロシアの作家などの影響で、小說の形式を發端から結末に近づくに隨つて、事件が段々發

展して行く、いはば三角形の頂點から底邊の方に向つて末廣がりに發展して行く形式ばかりを考へてるのかも知れないが、其の逆の形式、卽ち底邊の方から頂點の方へとすぼまつて行く形式もあり得る。自分のこの小說（明暗）はその形式を行くもので、隨所に埋めてある芋を、段段に掘り出し乍ら行く（此時先生は口のあたりに獨得の微笑を見せて、芋を掘り出す手付をされた）ことになつてるのだから、その作者の意圖を考へもせずに批評するのでは困る。一體あの人達といはず今の文壇全體が一種の恐露病に罹つて居て、さうした囚はれた尺度でもつて一律に作品をはかりたがるが、それ以外にも作品の形式なり傾向なりは十分ある筈だ。こんな意味の事を言つてられた事がある。其時の芋を掘るといはれた時の手付が、今でも時々目に浮ぶ。

この芋の話で思ひ出すのは團子の話である。文部省で文藝委員會といつたフランスのアカデミーまがひのものを組織して、その事業の一つとして、各委員分擔で、各國の名作を日本語に移すなどといふ事があり、その委員にといふ交涉を受けられて先生が斷られた時に、先生はこんな事をいつて居られた。文部省といふ串が、かう、委員といふ團子をさしならべるのさ。（此時も先生は串で團子をさす手付をされた）誰かその一粒の團子に甘んぜんやだねと言つて笑つ

て居られた事がある。まち〳〵の團子が串に貫かれて結局何を仕出來したかは、鷗外博士の『フアウスト』一篇を除いたら、少々蟲眼鏡物だ。

此の近年はあんまり本も讀みたくないから新刊も買はないよなどと言つてられたが、さうして又文壇の恐露病をしきりといましめて居られたが、寄贈される新刊や雜誌にはよく目を通して居られ、外國物でも昔學校で講義をして居た頃には、人に聞かれて知らないといふのがつらかつたが、近頃ではそれも平氣になつてねなどと言つて居られ乍ら、始終何かしら讀んで居られた樣子であつた。トルストイの『アンナ・カレニナ』をよまれたのも此頃らしく、私自身直接きいたのではないが、これ程偉大な小說は未だかつてよんだ事はないといつてられたさうだ。外國の雜誌は英語では『アセーニアム』、今の『リテラリー・ダイジエスト』の前身たる『カレント・リテラチユア』、それから美術雜誌の『スタヂオ』、佛蘭西では『メルキユール・ド・フランス』、獨逸では『ノイエ・ルンドシヤウ』などで、殊に『メルキユール』などにはアンダーラインが引いてあつたり、書込みがしてあつたりして居るのがある。

日本の雜誌もよくよんで居られた。殊に若い人達のものには非常な好意をもつてられた。私

達が揃つて小説を書き出したりしたのも、恐らく先生に見て貰へて其上批評が聞けるといふのが大きな原因だつただらうと思ふ。私達の同人雜誌（新思潮）が出た次の木曜日には、打ち揃つて先生の批評を聞きに上がつたものだつた。さうして先生は實に親切に讀んでて下すつて、批評されたり鼓舞して下すつたりしたものだつた。それから日本の雜誌はつまらないといつて人の作品に餘り目を通さないといふ私達の先輩に當る人達を評して、日本のものが下らないといつて、さう〳〵日本に居て外國のものが易々と數限りなく讀めるものではない。さういふ風に日本のものに見切りをつける者は、きつと遠からず日本の讀者から見捨てられるだらうなどと言つて居られた。

或る日書齋に上ると、紫檀の机にギューヨーの『社會學上より見たる美學』の原本が讀みかけて伏せてあつた。丁度其頃日本に其譯が出て、私達もよんだばかりでいろ〳〵感銘をうけた時なので、座につくと早速其話が出た。すると先生の言はれるには、今自分はギューヨーの本から直接學ばうといふより、よんで居ると、絶えずそれから直接間接の暗示をうけて、いろいろな問題を考へ出して來る。さうなると本はそつちのけで自分の考に耽る。それが大變な利益

なのだ。其代り頁は進まないが、人の意見を知るといふより、自分の考を纏めるといふやうな事になつて大變いゝといふお話だつた。これは亡くなられる三箇月程前の事だつた。

この美學で思ひ出すのは、或は此時の話だつたかも知れないが、其後も再び先生自身の口から、前に大學で講義をした『文學論』は甚だ不滿足なものであるから、今度はそれの恥をそゝぐといふではないけれども、近來しきりにもう一度講壇に立つて、新に自分の本當の文學論を講じて見たい氣がすると言つて居られたことがある。さういふ先生の語氣には自分から大學の講師でも志願して、改めて講筵を開きたいといふ位の意氣込みがあつたものだつた。言ふ迄もなく新に悟達された「則天去私」の文學觀をのべようといふのであつた。「則

則天去私　漱石

歿年秋の筆蹟

天去私」のお話は二度ばかりあつた。別に先生があのやうに急に逝かれようとも思はず、いづれ新しい大々的な組織理論の文學觀が、何かの機會で纏めて聞ける事とばかり思つて居たので、私達は詳しく先生からそれを聞かずに了つた。が、一度誰やらがさういふ作品の例はとお尋ねした時に、『ヴイカー・オヴ・ウエークフイールド』とか『プライド・アンド・プレジユデイース』などをあげられた事を覺えて居る。さうして其の意味は、「自然隨順」とか、「自然法爾」とかいふ意味に似て居つたと思ふが、この短い當時の印象を心覺え風に書きとめる文章に、先生が一生をもつて達しられた人生觀上藝術觀上の極點を、いゝ頃加減に揣摩臆測する不謹愼はよさう。

何でも最後の木曜會——十一月の初めであつたと思ふが、——には、私達が歸つた後でかなり詳しい說明があつたさうであるが、折ふし原稿の締切間近くだつたので、芥川、久米、赤木、私の四人は先へ歸つたのだつた。今から思へばもう一時間や二時間山房にあつたところで、原稿締切の間に合はないわけでもなかつたのを、何だか一種の見得から他の來會者を殘して立つたのに、つまらない誇を感じて居たのだつたから、これは正しく一生のあやまりだつた。

其日は蟲が知らせたとでもいふのか、其すぐ前の木曜日は私達三四人の極めて淋しい夜だつ

たに反し、此夜は又賓に後から後からと立て込んで、名前だけ聞いて居て其時迄つひぞ顔を見た事のない先輩達なども集まり、たうとう疊の上に座席がない位ぎゆう／＼で、私達が山房に出入して滿一箇年の間で最も賑かな夜であつた。其次の面會日には既に死の牀につかれたのだから、其日に限つてあゝも門下が集まつた事を思ふと、今でも實際不思議な氣がしてならない。

『明暗』が『朝日新聞』に載り始めたのが五月の終り頃、最後の回が出たのが亡くなられて葬式のすんだ二三日後で、二十回分位書きためてあつたわけだ。其頃のお話に、每日新聞にのる一回分の原稿が其日の日課で、以前は筆にまかせて何回分でも書いたものだが、やつぱり一回分の仕事に其日の力を傾けた方が、むらがなくていゝやうだといつて居られた。では一日分の原稿をどれ位でお書きですかと尋ねると、大概朝八時から九時迄の間に机に向つて、多くは正午迄の間に片付く。が時とすると三時四時頃迄、書いては消し書いては消しして、書きなやむ事もある。それを一回分書いて了ふと、頭を轉回させる爲に漢詩を作る。小說を書いてると、頭がとかく俗つぽくなつて困るからといふお話だつた。其時は妙な事を言はれる先生だと思つて居たが、成程先生が『明暗』執筆中に作られた詩は、數からいつても、八月の半頃から十一

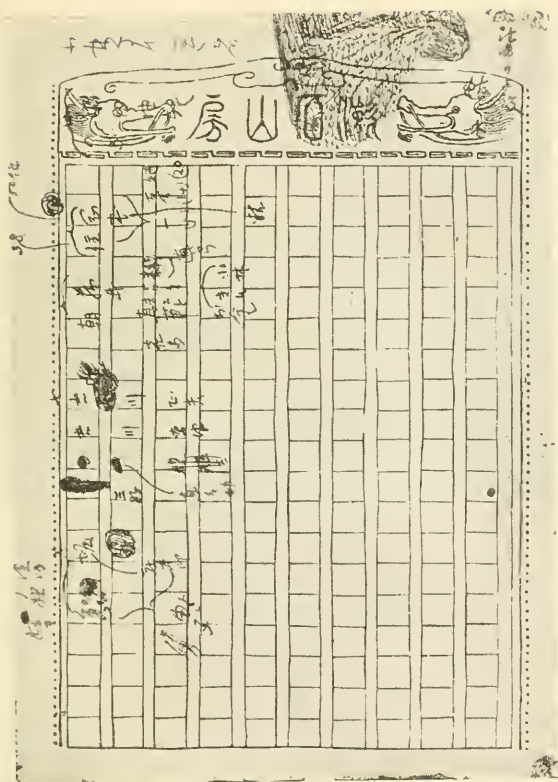
十一月二十日夜

真蹤寂寞杳難尋
欲抱虚懐歩古今
碧水碧山何有我
蓋天蓋地是無心
依稀暮色月離草
錯落秋声風在林
眼耳双忘身亦失
空中独唱白雲吟

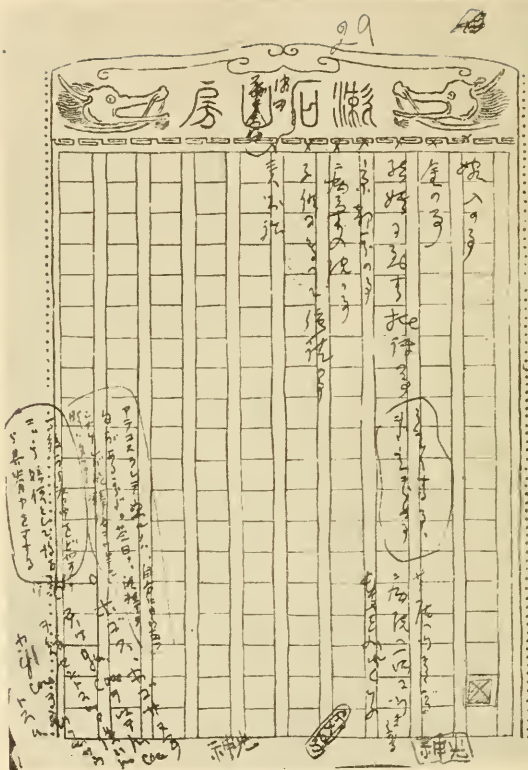
最後の詩稿（大正五年十一月二十日）

月二十日迄の間、平均一日一詩位づつのわりで作られて居るし、詩そのものも實にすばらしい。當時の先生の心境が何よりもよく出て居るのは、これらの數多い七言律詩ではないだらうか。

　其頃先生はよく書を書かれた。それには瀧田樗蔭氏見たいな書かせ上手が居たからでもあらうが、「歸去來辭」のやうな三四間にも餘る長巻を、續け樣に二本も書かれたりしたのを見た事がある。この長巻は、先生中々お得意のやうで、吾々がお伺ひすると、さつき瀧田が來て墨をすつたもんだから、こんなものを書いた。

一本書いたら、字が一二箇所ぬけて居る。折角頂くんなら脱字のない方がといふので、又一本書かせられた。今度は間違はれては大變だといふので、瀧田が一字一字指で指圖をする。さうして出來たら持つて行つたが、字の出來はかへつてこの方が力があつていゝやうだと、わざわざひろげて見せられた。まだ晝のうちは殘暑の相當きびしい頃で、誰やらがこれだけ書くにど

『明暗』の心覺え（一）

れ程時間がかゝりますかと尋ねたら、これは二時間半位かな、後ののは瀧田が干渉するんで三

『明暗』の心覺え（二）

時間近くもかゝつたかしらといふ話に、みんなは顔を見あはせ、合せて六時間近くも病身の先生に字を書かせるなんて、全く無茶な勞働ぢやないかと公憤をもらすと、先生は微笑しながら、

人間好きな事をやつてるとあんまり疲れもしないが、しかし終り頃には少し腕がだるくなつた

ねと、案外滿ち足りたといつたのんびりした顏をして、それから吾々若いものの相手になられた。

ところがその熱心な先生が、不思議と『明暗』執筆當時の謂はば新詩を書かれたのを殆んど見ない。恐らく『明暗』を書き上げたらゆつくりお書きになる積りだつたのだらう。

この漢詩で思ひ出すのは、『明暗』の書きをさめの日がわかつて居るのだから、それが一日一回づつと日課になつて居るところから推して、漢詩の出來た日が書きつけてあるので、第何回目の小說の部分を書かれた日、どの詩が出來たといふことが推定出來るわけだ。そこでこれは考へるだけでまだ手をつけないのであるが、作者のあたまは一つなのだから、性質の違つたものだといつても、そこに相關關係がありさうに見える。勿論小說と詩とではまるで反對の心境を描く事もあらうし、又似たりよつたりの心を描く事もあらう。これらの事を實際上の先生の所謂「仕事と道樂」との二つの遺されたた面(めん)についてさぐつて見たら、案外面白い創作過程の生きた心理學がつかめるのぢやないかと、こんな風に考へて居る。たゞ惜しい事にこの當時には日記がない。しかし手紙と『明暗』の原稿と詩を書き込まれた手帳とが殘つて居るのだから、

この研究はやつて見たら意外に面白い結果が得られるのではなからうかといふ氣がする。文學の研究法として、かういふ研究もたしかにあつていゝ筈である。

『明暗』は百八十八回で、永久未解決のまゝ悲しい遺稿となつた。先生の机上の原稿紙の肩には(189)なる翌日に書くべき回數の心覺えが遺つてるばかりだ。生前お延はあれからどうなるのです、津田はどうするのですなどと、皆してしきりに尋ねたものだつたが、先生は小説は生きものだからね、この先きどう流れて行くか、作者にだつてはつきりはわからないよ、まあ新聞で見て貰はうと微笑されて居たものだつた。ノオトに人物の名前などが書いてあるばかりで、筋などは全然書いてなかつた。人一倍責任感の強い、さうしてこの小説には非常な抱負をもつてられたらしい先生にも思ひ殘りだつたであらうが、私達にも大事なところでふつつり切れて居る『明暗』は、どう考へて見てもうらめしい小説である。

『明暗』の原稿は赤木桁平の池崎忠孝君が貰つた。それも賴んだ當人が忘れた頃になつて、君、あすこに來てるよと、書齋の廊下を先生は事もなげに顎でしやくられた。原稿が凡そ百回

分も束のまゝ雑な新聞包みになつて、新聞社から届いて居るのだつた。池崎が喜んだのは勿論である。其後亡くなられてから後の分をも手に入れ、今では百八十八回分一紙も缺けず珍藏して居る。（189）の心覺えの數字の肩にある原稿紙は、悲しい遺品となつて漱石山房に遺つて居る。

漱石詩集を讀む

漱石先生の漢詩について漠然と筆をとつて見る。
漢詩は先生の文學的所產のうちで、俳句よりも先に、恐らく一番早く鑛脈を現はしたもので、同時に又俳句よりも後に、死牀につく前夜迄も續いて現はれた鑛脈であつた。たゞその鑛脈は時時斷層に逢つて、幾年か中斷されて行方の見失はれてゐることがあつたが、詩人の胸奥深くに鶴嘴が入ると、いつもこの鑛脈が掘り出されるのであつた。俳句は初め非常に大きな鑛脈であつたが、五六年の採掘の後には段々細つて行つた。その代り金質が純になつて行つたやうだつた。俳句の鑛脈が細り漢詩の脈が斷層に遭つた時、忽然として露はれたのが小說の大鑛脈だつた。そのうちで漢詩のそれはいふ迄もなく、一番細いものであるが、又一番本質的な、恐らくは詩人が最後に理想としてゐた境地に近い醇質なものではなかつたであらうか。
私は先生其人を知る一つの鍵は、たしかに漢詩にあると思つて居る。

吾心若有苦求之遂難求。俯仰天與地。或作嗆々聲。春花幾開落。世事幾變更。鶂才非國器。豈功名。昨夜生月暈。颯風朝滿城。此時恪坐砥劍匣底鳴。慨振衣起登樓望前程。前程漠々愁雲橫。

大政

長歎深喟悅乎言之足使懦夫
興起矣高誦三復不覺斂襟

戊戌春分後一夕　弟甲拜識

明治三十二年の詩稿（朱は長尾甲山氏）

先生は初め大學豫備門に入る前に、三島中洲先生の二松學舍で漢文を學んだ。この頃しきりに友人と詩の贈酬をしたことが傳へられて居るが、どんな詩が出來たものか私は知らない。それも二十歳前のことであつて、其後數年を出でずして、明治二十二年、先生年二十三歳からの詩が殘つてるから、文學的なものとしてはこれで遺憾がない。

先生の詩はこれを大體四期に分つことが出來るであらう。

第一期は明治二十二年秋、房總に遊んだ漢文紀行の木屑錄中の詩に始まつて、明治三十三年渡歐の途につく時の詩と思はれるものに至る迄

約五十首。詩形は五律七律五絕七絕樣々である。總じて先生は律詩に長じて居られたかと思ふが、其特色はこの時代からすでに現はれて居るやうだ。

此の時代の詩には子規居士に贈られたものが多い。といふのは一體子規居士は先生の文學的話し相手の殆んど唯一のものであつて、そこへ向つてのみ引つ込み思案の先生は作品を示してゐたやうであるが、熊本時代の諸作は、一方子規居士に示すと同時に、一方長尾甲山氏あたりが選者たる新聞の漢詩欄へ投書したものなどがあるらしい。現に殘つてる其時代の詩稿には、甲山氏の朱點のついてるものが多い。

もとよりこの時代と言つても、初めと終りとでは十年も間がある。然もそれが二十代の初期と三十代の初めとであるから、詩境にも非常の違ひのあるのは否めない。例へば二十三年九月箱根へ行つた時の咏に、

客中逢レ客暗愁微。秋入二函山一露滿レ衣。爲レ我願言相識士。狂生出レ國不レ知レ歸。
得レ閑廿日去二塵寰一。囊裡無レ錢自識レ還。自稱仙人多二俗累一。黃金用盡出二靑山一。

などといふ七絕があり、二十八年五月の咏には、

才子群中只守レ拙。小人園裏獨持レ頑。

などといふ句が見える。これは松山赴任早々のことであるから、何となく「坊ちやん」の氣概を見る心持がする。いづれの詩句にも癇癪玉を破裂させて、世事の汚僞を罵つてる圖が見える。それが三十二年の詩になると、(尤もこれは三十一年以後の詩は皆さうであるが)眼界が廣く高遠にひらかれて居る。

眼識東西字。心抱古今憂。廿年愧昏濁。而立纔回頭。靜坐觀復剝。虚懷役剛柔。鳥入雲無迹。魚行水自流。人間固無事。白雲自悠々。

全く此詩に見るやうに、三十にして心機一轉した面目が見えるのであるが、吾々がうける感銘に於て、まだ何處となく浮足な物足らぬものが仄見えてぴつたりしない。それは第二期の作と比較するとよくわかる。

第二期は明治四十三年、修善寺溫泉療養中生死の境に立ち、漸くにして一命を取り止めた前の心境を吟じた詩約二十首。主として隨筆『思ひ出す事など』の中にをさめられた詩であつて、この大患によつて先生はより內面的になつて深さを增したと言はれてゐるので、この轉機の第一の道標がこれらの詩であるわけである。これと時を同じうして作られた俳句も同じ役目を果

たすものであらう。

この時代の詩の中では私の愛唱するものが二三あるが、先生も亦それらの詩を深く好まれたものと見えて、晩年に至る迄、人の書を望むものがあれば、それらの詩を書して與へられたものが澤山ある。

風流人未レ死。病裡領二清閑一。日日山中事。朝朝見二碧山一。
仰臥人如レ啞。默然見二大空一。大空雲不動。終日杳相同。
日似二三春永一。心隨二野水一空。牀頭花一片。閑落小眠中。

第一詩の朝々碧山を見るもすばらしいが、殊にこの第二詩を私は甚だ好む。默然として大空を見る、大空は雲不動、終日杳として相同じと口誦んで行くと、自分も悠々として天地の大に同化した感じがする。

この時代には得意の律詩の數が少い。恐らくまだ大患の後で體が衰弱してゐた爲に、大作をなすだけの氣力がなかつたのではあるまいか。しかし一旦死の扉のところ迄行きついて引きかへして來た詩人には、そこに回生の歡びと新らしい意氣込みとが泉のやうに湧くのを禁じ得なかつたであらう。さればこそ

萬事休時一息回。餘生豈忍比殘灰。

と咏じて囘生を感謝し、更に同じ詩に於て、

詎知門外一天開。

と、新生を得た這乎の消息を歡び傳へてゐるではないか。さうして又別の詩に於て、

殘存吾骨貴。愼勿妄磨礲。

と、こゝに運命にまかせ切つたものの强さをもつて、新たに下された自分の生命使命の貴重さを、恰も金の如くに惜しみかつ貴んで居る。私は更生の人の意氣に打たれる。深く自ら到るべきところに至つた人の力强さに打たれる。死の扉を叩いてかへつて來た人の面目に打たれる。大患は疑もなく詩人の皮を一皮剝いだ。もう吾々はこゝに第一期の詩に屢ゝ見るやうな大言壯語に近い乙にすましたある空疎さを微塵も感じない。詩句の一々がよそからもつて來て積み重ねられたものではなく、全く彼の內奧から自づとにじみ出て詩をなした、どことなく高僧の偈か語錄を見る感じさへあるではないか。

第三期は明治四十五年から大正五年春に至る五絕七絕約四十首であつて、主として自畫に題

した畫贊である。其の性質上自然五絶七絶をなしたものであらうが、不思議なことに得意の律詩は殆んど見られない。畫贊でないものも多くは繪畫的（南畫的）印象をもつたものが主で、詩として大概前後の詩に見る如き緊張味もなく、又『明暗』執筆當時の詩のやうな幽玄自在な面白さはないけれども、先生の南畫趣味との深い因緣を見る上に於て大切なものであることはいふ迄もない。一體先生は殆んど先天的に南畫趣味及び其精神とは切つても切れないつながりのある人で、後には自分で繪筆をとつてしきりに南畫を描かれたことは人の知る通りである。さうして常に自分の畫には自分の詩を題するのが一番いゝとあつて、繪が出來ると詩が出來た。

山上有レ山路不レ通。柳陰多柳水西東。扁舟盡日孤村岸。幾度鷺群訪二釣翁一。

この詩などは、全く稚拙な繪の辯解か說明みたいなものでしかないのであるが、しかしこれが一幅の紙面の中に納つて見ると、兩々相俟つてあるほゝゑましいものを見せてるのは面白い。恐らくこの試みに成功したので、これから續々として詩のために畫を描き、畫のために詩を題されたものではないかと思ふ。とにかくこの時代の詩は畫と離るべからざるもののやうで、詩をみると直ちに畫が思ひ出される。それだけに詩としては純粹でないかも知れない。

第四期は大正五年八月の半から、十一月二十一日死牀につく前日迄の間で、百日足らずのうちに無慮七十五詩を得て居る。當時朝日新聞に『明暗』執筆中であつて、朝机に向つて新聞一回分の原稿を書くのを其日の日課として、それがすむとこれ又日課の如く詩を作つたもので、時に詩情の湧かない時もあつたであらうが、興が乘れば日に二詩を得た時もあつて、その旺盛な創作力は感歎の外はない。時に先生齡正に五十。

小說を書いてると頭が俗になつていけないから、毎日その俗になりかけたねぢを後へ戻すために詩を作るのだとは、當時の先生の言であつたが、あく迄も詩作を樂しみ、其中に悠々己の心境を咏ひつゞけた樣を見れば、中々そんな生やさしい片手間の閑文字とも見えず、一切の讀者を豫想せずしてこれだけの業蹟を殘したのから見て、先生の文學的表現中、最も純粹な、最も高い、又最も深い地位を要求して然るべきものではないかといふ氣がする。たゞ形式が今の世の流行とは凡そ遠い漢詩であり、それには傳習の窮屈な約束などがあつて、一般に親しみ難いために、世人から認められない憾があるのである。

當時先生は「則天去私」といふことを藝術上の信念として得、その見地に立つて創作に新生面をひらかんとする意氣物凄く、もう一度大學の講壇に立つて、新らしい文學論を講じたいと

さへ洩らされたものであるが、私たちはこれを見て、齡五十に達してなほ此の壯んなる意氣のあるのに驚きかつ感奮したものであつた。當時の詩に、「明暗雙々三萬字。撫摩石印自由成。」とある如く、天空のやうな大道が、心行く迄のび〳〵と自分の前にひらけて來た心地がしたのであらう。さうして私の見るところでは、この「則天去私」の提唱を最もよく傳へたものは、この時代の漢詩ではなからうかといふ氣がするのであるが、恐らく先生はすべての自己の藝術をこの高さにまで高めようとして居た其の中道に於て斃れたものではないのだらうか。悟達の文字がこゝでのみ完成されてる氣がしてならない。

この時代の詩は八九の絕句をのぞいて、すべて七律である。實に自在で、實に高朗で、實に豐富だ。けれども、生粹の漢詩人の目から見たら、或はすべて異端であるかも知れない。が恐らくこのやうな一粒選りの詩を多く殘した詩人は、外に類例が少からう。しかもこれらの詩が、單なる漢詩人の詩でない一種獨得な點に於て、他の追隨を許さないものがあると思ふ。

先生は早くから王維を好んだ。有名な鹿柴館の詩の如きはその著作の中に現はれるばかりでなく、陶淸節と共にしば〳〵書に書かれた。杜詩も亦先生の愛されたものの一つであるやうである。高靑邱は非常に愛好されたものらしく、座右にその詩集が置かれてあつた。先生の詩に

は何となく高青邱を思はせるものがあるではないか。其外しば〳〵寒山詩を思はせるものがあるが、これも亦前記の詩人と共に大きな影響を與へて居るものに違ひない。けれどもその外三四の袖珍本の唐宋名家の詩集や清詩別載がある位のことで、これ程の詩人で座右にこれぞといふ詩集の無いのも不思議といふべきである。實際先生は有りふれた韻字の字引などを引き引き詩作するのであつて、全く天成の詩人であつたといふ氣がする。殊に律詩中の對句の妙に至つては、全く恍惚とさせられるものが多いのである。

この『明暗』執筆當時の詩はみんないゝ。一々あげて居たら際限がないから、たゞ一例として二三を示すに過ぎないけれども、いつか後日を期して、私はこれらの詩についての研究を書いて見たいと思つて居る。が今はたゞ殆んど顧みられることのない詩について、漱石愛讀者の注意を促せば足るのである。私はこれらの詩を近代日本が生んだ最も高い意味の文字ではないかとさへ思ふものである。

無題　九月三十日

閑窓睡覺メテ影參差。机上猶ホ餘ス筆一枝。多病賣文秋入リレ骨ニ。細心構想寒砭クレ肌ヲ。
紅塵堆裏聖賢ノ道。碧落空中清淨ノ詩。描キ到ツテ西風辭不レ足ラ。看雲採ツテレ菊ヲ在リ二東籬ニ一。

無題　十月九日

詩人面目不嫌工。誰道眼前好惡同。岸樹倒枝皆入水。野花傾萼盡迎風。霜燃爛葉寒暉外。客送殘鴉夕照中。古寺尋來無古佛。倚筇獨立斷橋東。

無題　十一月十九日

大愚難到志難成。五十春秋瞬息程。觀道無言只入靜。拈詩有句獨求清。迢々天外去雲影。籟々風中落葉聲。忽見閑窓虚白上。東山月出半江明。

無題　十一月二十日夜

眞蹤寂寞杳難尋。欲抱虚懷歩古今。碧山碧水何有我。蓋天蓋地是無心。依稀暮色月離草。錯落秋聲風在林。眼耳雙忘身亦失。空中獨唱白雲吟。

この最後の詩は先生の最終作であつて、翌日先生は死牀に就いた。私はこの詩が特に好きであるが、恐らく漱石詩集中壓卷の作ではあるまいか。この天上的な響き！　そこには人界を離れた不思議に透明な恍惚の世界がひらけて居るではないか。

贋漱石

一

名士の僞物が地方などに現はれて、講演の眞似事をやつたり、振舞酒の御馳走になつたりなどといふ笑ひ話はよくある奴だが、こゝにいふ贋漱石は、人間漱石のにせものがどんな喜劇をやつたといつたやうな話ではない。實は先生があんまり高名であつたせゐか、さういふ愛嬌のある話は、かへつてつひぞ聞いた事がないのである。こゝにいふのは、先生の筆をにせた書畫の贋物の話である。

自慢にもならない自慢を敢てすると、今日天下で私程贋漱石をどつさり見たものは、外には又とあるまい。大小合はせて恐らく數百といふ數にならう。とかう書き出すと、消息をよく知らないものは、數百とは吹きも吹いたり、法螺も休み〳〵吹くがいゝといふかも知れない。し

かし專門の贋作師が一人しか居ないとして、口を糊するためにしきりに書いたとすれば、その製造能力は相當のものだらうから、私が數百といふのに不思議はなく、若しあれが全部眞物だとしたら、漱石生前書畫の製作に忙しく、本業の小說なんか書いてる暇は恐らくなかつたであらう。ところが私のにらんだところでは、贋作師は一人ではなささうなんだから、その數たるや蓋し大變なものとならうではないか。

いつの頃からそんな妙な習慣になつたものか、東京の書畫屋連が漱石物を取扱ふ時には、大概一度私のところへ持つて來て見せて意見をたゝくのが多いのである。つまりおこがましいが、私の鑑定がないと商品としてパスしないのださうだ。いつ誰がそんな事にしてしまつたものか、此方の氣も知らず、だからみんな私のもとへ、宛然贋物拜觀の義務でもあるかのやうに持ち込んで來るのである。

かう書くと一寸偉さうに聞えるが、實は迷惑千萬の話なのだ。といふのは、來る奴も來る奴も、似ても似つかぬ贋物を持ち込んで來るので、しかも商賣上儲かりさへすればいゝので、漱石であらうと何石であらうと、そんな事はどうだつていゝので、敬意も何もあつたものではないのである。かういふ連中を相手に、朝といはず、夜といはず、彼等の持ち込むインチキ商品

此頃では見ないうちから、ハハアン、又來よつたなと豫感すると、ひらいて見て大概豫感が適中して居るといつた工合で、いかにも味氣ないものなんで、此方もそれを商賣のつもりで、欲の皮をつつぱらせて上前でもはねてやれば又どうか知らんが、そんな氣にもなれず、直接持ち込んで來るのは多くは商賣人だが、結局の所は所謂漱石崇拜家の手に落ちつくにきまつてるのだから、氣の毒な目に會ふのはさういふ氣のいゝ人達、さういふ人達の不幸を少しでも少くするために見て居るわけなのだ。そんなわけで、いゝものをどし〳〵持ち込んで來るんなら有難いが、名は立派らしく鑑定だが、底を割つて見れば絶えず贋物拜見なのだ。しかも眞赤な贋物を持つて來て、箱書きをしろ、極めを書いてくれ、といふのが大部分なのだから、全くもつて恐れ入らざるを得ない。でも私は心掛けよくも、乞はれれば神妙に見ては居るが、中にはいくらでもお禮はするから一寸箱書きをなどと、黄白をもつて釣らうとする不屆者があれば、これはいけないねといふと、いきなりつんとして、入つて來た時は膝迄手を下げて居たのが、急に目をむいて私をにらめつけ、物をもいはず玄關の戸をピシャリとしめてむかつ腹を立てて行くのもある。かと思ふと入札の札を見せて、二百五十兩で落して來たんだから、何とかなりませんかと

泣きつくのもある。千差萬別だが、商人の方は不作法でもまだ御し易い。素人の方の持ち込まれるのには、これが眞底からの愛着があるだけに、失望の大きいのが見えてるので、全くもつて扱ひにくい。

何にしても惡い習慣が出來てしまつたものだ。お人好しによし〳〵と相談にのつて見て居た自業自得の祟りだが、折角持つて來るのを今更見ないよとも言へず、今となつては依然益〻人を好くする外ないらしいが、此先き幾百千の贋物をこんな工合にして見なければならないのかと思ふと、情なくもあれば馬鹿々々しくもある。せめてこんな隨筆でも書いて、時に鬱憤でも洩らすとしよう。尤も中にはこれを讀んで贋物御要愼をされる漱石黨があれば幸だが、反對に贋物師が參考にして惡智慧を逞くしないものでもない。がそこ迄の責任は願ひ下げにしたい。

二

一概に贋物といつても、その中にも自ら種類がある。本來からいふと、藝術として人眞似をしたり、心にもないものを書くとかいふやうな無氣力無精神不純なものは、或る意味で贋物僞物だといつてもいゝかも知れないが、こゝではそんなむづかしい形而上の潔癖は出さぬとして、

所謂贋物だけを問題にする。ところで贋物といつても、初めから贋物を作るつもりでこしらへたものと、原作者の意志に反して、他の人の手でいつの間にやら贋物にしてしまはれたものと、たしかに二種類あるのである。

第一類には本業の贋作師が昔も今もうよ〳〵居て、多量製産をして居るらしい。普通贋物といへば大抵この類のものを指すのであるが、第二類となると、これは頗る多種多様だ。例へば無名の人の落款印章をぬいて、有名の人ののを入れるのを初めとして、落款のないのに金になりさうなのを入れて見たり、あつて邪魔になるのは、反對に切り取つてしまつたり、それを又箱書きや折紙で胡魔化すのは常套手段。それから人工的の所謂時代をつけるのも、亦その一つ。そのために京都あたりの古社寺の古煤が、高い金で賣れるといふ事だ。その方法たるや枚擧に遑のない程あるであらうが、そんなこんなの例が多過ぎるため、普通書畫屋といふと、何だかインチキ商賣といつたけしからぬ感じを人に與へるのは、表向き大變風流じみた綺麗事であるだけに、それだけ一層皮肉だが、しかし絶對に眞物ばかり扱ふとなると、多くの書畫屋はやつて行けないといふやうな妙な皮肉のまはり合せにならないものでもない。だが私はこゝで書畫一般の眞贋についてではなく、たゞ漱石ものについてだけ物語ればいゝのである。

私の見た贋漱石についても、これと同じ二つの種類がある。つまり意識的の贋物と、無意識的の贋物とがあるのである。

まづ第一類から物語らう。

何といつても一番數の多いのは、短冊色紙であらう。これは買ふ方でも手輕だし、書く方でも眞似易いし、又資本もかゝらない。どつちにしても世話なしで、其上先生の俳句の色紙短冊なら羽根が生えて飛ぶものらしく、隨分いかゞはしい問題にならないやうなものにさへ、お目にかゝる事しばしばだ。色紙短冊を合はせて、私の見た贋漱石は百にも近からうか。

これは私自身の話ではないが、私共の先輩にあたる一知人のもとへ、震災の前の事だが、短冊三四葉を見せに來たものがあつた。見るとどれもこれも似ても似つかぬ代物なので、不思議に思つて、こんなのがまだあるんですかと尋ねると、下谷のどこそこに行くと、五十枚でも百枚でも容易に手に入ると答へたものだ。そこで値段はときくと一圓五十錢とかいふ事に、そいつは安過ぎるぢやないかといへば、實は自分もさう思つたので、漱石先生のものがそんな事で手に入れば有難いと思つて、鑑定して貰ひに來たと答へたさうだ。それを聞いた他の一人が、そいつは參考に見て置かうと例のところへ行つて見ると、果して十枚でも二十枚でも、御注文

通りいくらでもある。値も一圓そこ〳〵の安値。そこで値も安い代りには、ものもひどいぢやないかと半疊を入れると、いかもの屋の親父の曰くが振つて居る。どうせ漱石さんのものを一兩や二兩で買はうて奴は、物の分かる奴ぢやない。そんな奴にや眞物だつて、贋物だつて變りはない、値が安くて、名前さへ書いてあればいゝんだ。しかし少し物のわかる貴方見たいの人なら、いくら安くたつて、これを見りや買ひつこないでせうと來たものださうだ。から徹底してしまはれたのでは、買ふ方がぴんからきり迄馬鹿の骨頂で、商賣やる方でも樂なものだ。

大震災でそんなものは一切合財燒けてしまつて、大いにせい〳〵したかと思つたのは此方の短慮。其後の様子を見ると、この種のものが到るところに散在して、さうして惡い事には眞物に近い値をつけて居るのだ。それで驚いたのはもう四五年前にもならうか。ある丸ノ内の會社に居るといふ、勤續二三十年程度の、片手間に書畫でもいぢくらうといふ人の好ささうな老人がやつて來て、色紙を見てくれといふ。實はその數日前、麹町のある俳人のものなど扱ふ識つた書畫屋が、色紙、短冊、横幅の畫贊ものなどかゝへ込んで來たのを見ると、絹の短冊で、書畫屋の方で、これは怪しいのでと一番しまひにつん出したのが反つていゝだけで、あと自信のある口はみんなひどい贋物なのだ。そこで私も笑つて、君ともあらうものがとか何とかいふと、

實はこの惡い方の口はみんないゝといふ觸れ込みで買つた口で、これが惡いとなると大變だと、私には不可解ながら、そんな事を獨り言のやうに周章てつぶやいたのだ。老會社員が私のところへ來たのは、つまり件の書畫屋からの注意でやつて來たものと知れた。

これも亦大量に色紙が十枚の餘もあるのである。まだ裏打ちもして居ないペラ〳〵な淡色のついた奴で、なる程前日見た色紙と同じ筆蹟らしいが、いかにもお粗末な、何こそ先生の何だが、どこを押せば漱石だなどといへた義理のある代物ではないのである。氣の毒だとは思つたが、一刀兩斷に全部いけないときつぱり言つた。

すると更に驚くべき事には、その老會社員が落膽してしかも不安さうにいふ事には、若しこれがいけないとなると、この手の口で丸ノ内のある財閥系の會社へ賣り込んだものは、全部いけない事になる。自分の知つたのだけで優に數千圓からあると思ふが、全部洗つたら大變の額にならうと、かうおづ〳〵といふのである。勿論色紙短册の外にも、半折が相當納まつて居るといふ。試みに貴方はどこから手に入れられたのかと尋ねると、田端の何とかいふ男で、その男は目黑あたりの何とかいふ男からだと言つて居たとかいふ。少々聞きやうによつては怪しい話なので、此上こんな老人をいぢめるのもと思つて同情して居ると、どうも飛んだ事になりま

した、これで何年間の貯金をふいにしてしまひましたと打ち明け話を始める。つまり内職に山を張つたものらしいのだ。初めは一つ二つ安く買つて來ておくと、それが何倍かに高く賣れる。味をしめて大量にやり出したら、どえらいお灸を据ゑられてしまつたものらしかつた。

こんなのは半商賣だから、氣の毒のうちにも身から出た銹と言つてもすまされようが、出入りの足袋屋の內儀が、御恩になつた大先生のお書きになつたものをやつと手に入れましたからと、つゝましやかに包みきれない喜びを見せながら、袱紗に一枚の短册を包んで持つて來て見せた時には、その心根が純眞で眞心があふれて居るだけに、私は此時程贋物師を憎んだ事はない。句は「廻廊の柱の影や海の月」だが、この句の贋物は色紙でも短册でも橫物でも隨分ある。

三

色紙短册について多いのは、何といつても半折だ。これも立派な幅になつたもの、中には物體ない程美しい金のかゝつた表裝のものもあれば、二重箱になつた貴重品扱ひのいかものもある。捲りも相當多く、絹や絖もちらほらある。多くは先生自作の詩を書くか、或は五言對句七言對句の、先生のよく書かれた文言を書いて居る。たまには全紙のものもあるし、漢字ばかり

でなく、俳句を書いたものもある。この數も幾十に上つて居よう。需要があるものと見える。時々入札會なんぞに行つて見ると、新書畫の場合、漱石ものの一つや二つ出て居ないといふ事は滅多にないので、數寄屋橋附近の安物の入札を月に三度づつ定期的にやるところなど、毎月漱石ものが姿を見せ、しかもその都度それが違つてるのから察すると、相當よく賣れるものらしい。恐れ入るの外はない。だから持ち込まれるものと、かういふものとを合はせたら、これも多分私の見たものは百を越えて居るに違ひない。

この詩や對句を二行に書いたうちには、近頃も引き續いてやつてるのがあると見えて、最初の頃から見ると大變上手になつた。もう一息といふのが中にはあつて、見なれない人の目をくらますのも遠くはあるまい。しかしよく見ると最初の一行の四五字迄が物になつて居て、二行目はもう字くばりが惡く、筆も亂れてぼろを出して居る。さうして當然の事ながら字に潤ひもなければ品もない。それに先生の字には始終一貫してその人獨得のものがあるにはあるが、しばしば半折など書かれるやうになつてからは、時代によつて字の書き癖に變化があるのである。さういふものを一向考慮して居ないのは、氣品が寫せないのは是非がないとしても、研究不足で藝のないものだ。尤もあんまり上手に生寫しといつた風にやられちや、見る方がたまらない

から、この程度が頃合なのかも知れない。

とにかく日本人がおしなべて床の間のついた家に住んでる以上、贋物、特に半折の贋物は、決してなくなるものではあるまい。

半折の書についで多くもあれば、又人の引つかゝり易いのは畫贊ものだ。これには半折のもの、横物などいろ〳〵あり、時には聯落ちなどの洒落れたものも見受ける。見て居て一番愛嬌のあるのはこの部だといつていゝ。雜誌や遺墨集の寫眞を見て描いたものらしいのもあるが、時には私達が見た事も考へた事もないやうなのが飛び出して來る事がある。猫の繪なんぞがこれだ。

つい最近の事、化け猫のつもりか、猫が茣蓙みたいなものを引きかづいて、二本足で立つてこらさと踊つてる圖に、俳句の贊をしたのを持つて來て、美術倶樂部で落札したのだから、箱書きをしてくれといふ。馬鹿々々しいつまらない繪で、字もなつて居ないのだが、注文主の方では漱石の猫だといふんで買つたものらしい。小波山人の箱書きがあつたが、私はむしろ小波さんの俳畫によく似て居ると見た。私がいかものだといふと、商人落札した時の二百五十圓かの札を出して見せて、困つた〳〵を繰りかへして居たが、つまらないものを買ふものがあれば、

又つまらないものを書くものがあるものだ。先生自筆の猫では、「あかざと黒猫」と先生自身箱書きされた薄墨の猫が一幅あるのみなのだ。

未亡人の話では、其の後數日たつて、同じく踊り猫の繪を見てくれと持ち込んで來たものがあつたさうだ。私のところへ持ち込んだのと話の模樣では圖柄が似て居るやうだが、これには

あかざと黒猫

四百五十圓とかいふ札がついて居たさうだ。かうなつて來ると何が何やらわからなくなるが、とにかく近來猫の繪をかくものが現はれたと見てよからう。

「棕梠竹や月に背いて影二本」とか、「竹一本葉二三葉に冬近し」などといふ句を題した、各々棕梠竹と竹とを描いたものを時々見受ける。棕梠竹は三年程前の暮近い頃、三日四日のう

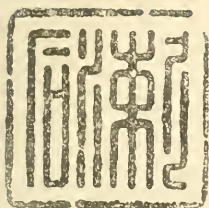
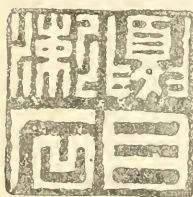
ちに、手元へ持ち込まれたのが二幅（各々表裝が違つて居た）、外出して見たのが一幅、都合三幅立て續けに見たには驚いてしまつた。

この原物はもと瀧田樗蔭君の藏幅だつたもので、其後どこへ行つたものか知らないが、贋物だけは中々豐富にふらついて居る。一體瀧田氏のものは、大體先生自身の箱書きつきで、その上表具のきれ地も別誂で注文して織らせたといふ御自慢のものなのだ。其上私は氏の生前全部ゆつくり拜見して、多くのものを寫眞にとつた事があるのだ。だから一見すれば、すぐ瀧田舊藏如何はわかるのであるが、それを又片言まじりにきゝかじつた半可通が、飛んでもないものを、これは瀧田さんとやらの舊藏でなんかと、尤もらしい顏をして持ち込んで來る物識りがあるのである。知つてるものから見れば、可笑しい位のものだが、知らない人はこんな事にも引つかゝつて了ふのだから、御要鎭あつて然るべしだ。

其外、蓮の繪やら鳥居の繪やら、鳥が飛んでるのやら、落葉を描いたのやら、菊を描いたもの、秋田蕗の押繪を模様に見立てて句を題したもの（これは瀧田氏舊藏に同じ趣向があるのである）、梅の粗畫や酒壺らしいもの、それから案山子などの、比較的簡單なものが、みんな、句を題して、尤らしい顏で横行して居るのである。一寸思ひ出しただけでこれだから、まだ外に

も圖柄がたしかにあるのであらう。多く貧弱でいふに足りない出來だが、漱石はずぶの素人だからこんなものだらうなどと、買ふ方から遠慮し謙遜して、少し値が安いと引つかゝる。何しろお客なんぞといふものは甘いもので、この少し安いが物を言ひ、誰にも掘出しの己惚れ根性があるものだから、つい尻の毛をぬかれるのである。が私なんぞがいくら大きな聲を立てゝ危い火遊びはおやめなさいと警告したつて、少し圖柄をかへれば、まだ〳〵贋作師の領分は無限大だといつていゝかも知れない。

四

さてこれらをおしなべて滑稽なのが印影だ。多く使はれてるのがこゝに上げた六群で、中で一番滑稽なのは、最後の五と六との二つだ。これは大正四年の春京都で病氣をされた時、徒然に書畫をものされ、津田青楓さんが有り合はせの蠟石の兩面に刻んだもの。これが印譜の中で一つところに上下にならべて捺してあるところから、所謂下駄印と早呑み込みしたものだらう。これを二つならべて捺して居る贋物を見た事がある。誰が陰刻ばかり二つ重ねて捺す奴があるものか。

それから又贋の方は、印程似せ易いものは無ささうなものだのに、まるで原物の手法を心得ず、鐵筆に對して全然無神經なのに驚く。これなんかもう少し敏感にやつたらよかりさうなものだのに、どの印もみんな死ん

でるからすぐわかる。さうして又肉色が悪い。印刷局の素晴らしい朱肉を贈られて使つて居られた先生の印影は、割に無頓着に捺して居られるものの、みんな色が鮮かなのだ。

大體先生のものは縁故縁故で頼んで書いて頂いたもの、數とてさう無暗にある筈はなく、又ざらに坊間にころがつてる程あるのでもないので、大部分の作品はその戸籍がわかつて居るのである。

ところが戸籍も知れ、作品を見ても筋のいゝものであるのに、世間といふ奴は又氣紛れで、眞物を認めてくれないといふやうな事もなきにしもあらずなのだ。殊にそれが所謂前書きのものに多い。

廣島の井原さんといふ方は、昔房州の保田で一緒に海水浴をし、其後音信不通で居たところ『猫』で一躍文名のあがつたのがかつての遊び友達だと知り、其後短冊を書いてもらつた事があつた。ところがそれが古い筆蹟なので人が信用せず、いくら先生から直接贈つて頂いたのだと説明しても無駄だから、私に證明してくれろといつて持つて來られた事がある。紛ふ方なき眞物であつた事はいふ迄もない。

薄色で芒を書き、それに句を題された幅を持ち込んだ畫商がある。珍らしいものなので、未

亡人に示すと、たしか中村是公さんの御存じの柳橋あたりの藝妓に描いてやつたものだといふ話。私も初見で感心してかへすと、それが轉賣される度に立て續けに四度も私の門を潛つたには、あいた口が塞がらなかつた事がある。

しかし、どつさり見せられて居るうちに、始めの頃はとかく遠慮があつて、どうもものを贔屓目に見たがつて困つたが、其頃いろ〳〵持ち込まれて、どれもこれも碌なものはなく、これもいけない、あれもだめと言つて居るうち、一つ最後に出來のいゝのを見せられた。すると前ののがみんなひどくいけないので、これ一つが素敵もなくよく見えて、これはいゝやうだと文句なしに認めてしまつた。あとで考へて見るとどうも錯覺で、それもいけないやうな氣がして困つたものだつた。しかしもう後の祭りでどうにもならず、今でも時々それを思ひ出すと氣になつて仕方がない事がある。其時には、竹田が贋を眞なりといふのは罪は輕いが、眞を贋なりといふのは許し難いといふやうな事を言つてるのを思ひ出して、ひそかに慰めるのであるが、どうも誤を犯したやうで氣持が惡い。

世間によくある奴で、箱書きをぬいて、眞物は眞物でどつかへ向け、箱に贋物を入れて賣る手があると聞いたが、いつだつたか入札に出た漱石物に、この手をやられ、たしかに箱書きは

私の筆蹟であるのに、中味は眞赤な贋漱石。これは自分の責任でなくとも、やつぱりぎやふんとせざるを得なかつた。

箱書きで罪なのは、中村不折畫伯の箱だ。これも中味をすりかへられたのかも知れないが、元々畫伯としては決して悪意があつて書かれたものではあるまじく、確かなものだからと識つた書畫屋から持ち込まれ、人の好い老畫伯はよしとばかりに筆を揮はれたものであらう。私は三四點見たがみんな悪いもので、當時大いに公憤を感じた。併しこれは後で其筋の注意があつて、贋物師が上げられたやうだから、畫伯にとつては大變迷惑な御災難だつたであらう。其他相當の俳人なんぞで箱書きを書いてるのを二三見受けたが、いづれも怪しいものばかりだつた。

詩をやる知人が漱石の横額を貰つたから見てくれといふ。行つて見ると全然いけないのみか、その粉本迄どれとわかる代物。すると一週間程で見ず知らずの書畫屋の小僧が、遙々長い額を座頭が三味線をかけるやうに肩にかけてやつて來た。ハハア……、詩人君やつたなと思つて居ると、果して件の額だ。これなんぞ愛嬌のある部だが、上來書いて來たところをもつて見ると、「葷酒不許入山門」にならつて、贋物入るべからずとでも玄關先に禁札が出したい位だ。ところがまだ此外にも第二類の贋物がやつて來るのだ。

五

數年前の『ホトトギス』誌上に、『四人の漱石』と題する考證をしたものがのつて居た。俳號を同じくする同名異人をあげたものだが、これによると寛政文化頃の諸國の俳人の中に、伊勢にも漱石があり、和泉にも漱石があり、出雲にも漱石があり、その外口篇の嗽ではあるが、京にも嗽石があつたさうだ。又同じ頃漱石子と稱する傳記未詳の畫家もあつたと書畫の辭引に名だけは見えて居る。すでに四人の俳人と一人の畫家とを見出した以上、詮索次第でまだ〳〵見付かるのは必然だ。私の見たもののうちでも、淸代の畫家の筆と思はれるものに嗽石軒と號したものに出會つて居るし、書畫を弄ぶ素人玄人で、漱石或は嗽石、時には漱石を號とするものは、和漢を通じて其の數は少くないことと思はれる。ところが門跡は本願寺に、太閤は秀吉にとられてしまつたやうに、漱石はすべて夏目金之助の漱石にとられてしまつた形だ。又さうやらないと書畫屋も商賣にはならないのだらう。

序だから書きそへておくと、先生がこの雅號を用ゐ始めたのは、明治二十二年、つまり二十三歳の時で、漢文や漢詩を書く時の雅號に使つたもののやうだ。後に俳句をしきりに作るやう

になつてからは、最初は「愚陀佛」と號し、後にこの號を用ゐた。

晩年に直接聞いた話であるが、それは支那の黄興が「文章千古事」といふ杜詩の一行物を爲め書きで贈つた幅をかけて置かれたのを見ると、漱石先生正と書いてある。つくりが文となつたり欠になつたり、どつちがいゝのだらうと尋ねると、先生自身、自分ももとは文を書いて居たが、本當は欠がいゝのださうで、この近年は欠に改めたと言つて居られた。なる程遺作を數見るやうになつてから氣がついて見ると、大正の初め頃迄のものは多く漱になつて居る。

さて此種のもので私が最初に打突つたものは、横濱の親戚が珍らしいものを手に入れたからといつて御自慢に持ち込んだ一行物。六朝風の肉太な力のある書風で、中々しつかりした堂々たるものであつた。文句は忘れたが、多分禪林句集の六言か八言かの句であつて、旁に干支が入つて嗽石書と書いてあつた。印影も嗽石で、恐らくある禪家の書と思はれるが、誰が書いたものか夏目漱石といふ箱書付きで天下を横行して居るのである。これは前記の外の一例であらう。十餘年前の事である。

出入りの表具屋が運座の句らしいものを五十葉も綴り合はせたものを持ち込んで來て、どえらいものを掘り出したから見ろといふ。何でも集めた男といふのが老俳人だとある。きたない

手稿だとめくつて行くと、最後の軸とあるところへ、烏が柿をつつつくとか何とかいふ、至極月並の句が一際大きく亂暴に書いてあつて、漱石と署名して居る。つまり點者が漱石なる宗匠のわけだが、可哀さうにこんな川柳紛ひの綿入り發句をなすりつけられては、夏目漱石甚だもつて浮ばれない次第だ。

大正九年の秋、遺墨展觀を東京、京都と催して、最後に『大阪朝日』の樓上で開いた。其時松山出身のYといふ紳士が、先年松山で知人の所藏を無理にねだつて來たものだといつて、竹石に詩らしいものを題した小點を持ち込まれた。匠氣滿幅の下素なもので、どこを押したら漱石などといふ音が出るのかと見て居ると、松山の元の所藏家は、先生がロンドンで書いた短冊などといふ珍品ももつてるので、筋は確かだと頻りに自信を强張する。甚だ鼻張りが强い。一緒に見て居た私も新聞社の連中も少からず僻易して、どうもとかそれとなく敬遠するのだが、上氣せかへつてる御當人、いつかな聞きわけがない。そんなに思ひつめてるなら、人の意見なんかきかなけりやいゝのだが、自分一人でなく、それを確かだといふものに鑑定家も居る、だのに貴方方はいけないといふと、終ひには喧嘩腰で突かゝつて來る。其男のたよりにして居るのは、讀畫樓主人と書いた下に捺してある小さい下駄印の一つに、かすかに漱石とよめるのが

わづかに足だまりなのだ。仕方がないので實物教育をやつてやらうと、展觀の會場に入つて一一手法の違つてる所以を說明に及んだが、ある畫贊物に大正四年云々と書いた中の「四」の字の筆使ひが、竹石の僞物の「四」といふ字そつくりだといつて狂氣のやうに喜ぶ始末だ。たうとう手におへなくなつて、ともかく預かつて外の連中にも見せて上げよう、何も私が權威といふわけぢやないのだからと、氣休めに持ちかへつた。勿論誰が見たつて相手になる代物ではないので、日を經てほとぼりのさめた頃を見計らつて返送してやつたが、受取つたとも、御手數有難うともいつて來ないのは、人情と言はば言へ、恐ろしく得手勝手な人間が居るものだ。

其頃、蟹を描いて千里横行と題した漱石ものがあるといふ話に、見ないけれどいけないだらうと言つておくと、今度は秋田の方から堂々たる南畫山水の寫眞を送つて來た。寫眞で見てもいけないのだが、程經て今度はその寫眞とは少し圖柄の違つた本物を、親類のものに託して見せに來たのがある。中々手のかゝつた山水だが、勿論これも似ても似つかぬ代物だつた。恐らく贋物を造るつもりで描いたものではなからうが、誰かにいたづらされて贋物に仕立てられたものであらう。田舍へ行くとえらい化物がのさばつて居ると見える。

森槐南の題詩が上にあつて、漱石が、牡丹の咲いてる岩石の下で、猫が孔雀の羽根と戯れて

る中々凝つた、眞物の漱石には描けさうもないし又描きさうもない圖柄が、四五年前の話だが、一月もたゝないうちに三度私のところへ訪ねて來た事がある。漱石の猫だといふのでみんな飛びつくものと見える。何でも大變高い事をいつて居たが、鼻高々と一つ見せてやらう位の氣位で持ち込むのだが、いけないといはれるとぺしやんこになつて、すぐにトランプの婆々ぬき見たいに他へまはす。それが又意氣揚々と長い風呂包みをかゝへて乘り込んで來るのだ。人は變れど主は變らずで、二度目には、此方から寸法でそれと察し、何だ又猫か、そんならかうかういふ猫の圖だらうと說明して笑つた事があるが、目ぼしいものになると、大概二度位づつ拙宅の敷居をまたぐから厄介だ。

これらのものは大方みんな原作者に罪はないので、門下の人のうちには、先生の筆蹟に似た人があるから、うかうかして居るとそんなのは知らぬ間に自分の名をぬかれて先生の名を入れ、そのまゝ通用して了ふやうな事がないともいへない。油斷も隙もあつたものでない。

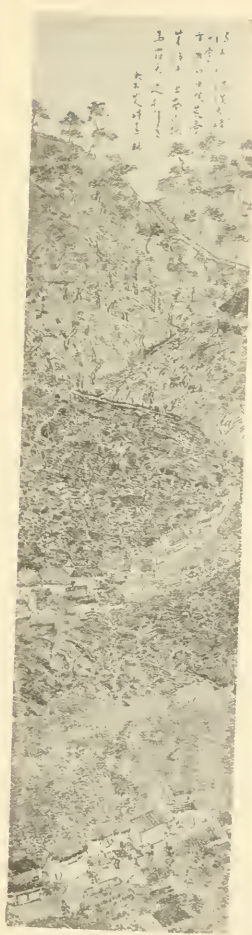
六

上來長々と贋漱石の事を書いたが、あげた例は私の見た多くのうちのほんの目ぼしいものだ

け。今後もいろ〳〵思ひもかけない珍品、氣のきかない粗製亂造品などを見せられる事であらうが、眞物のいゝものは年と共に少くなり、かうした贋物のみひとり市場に横行する傾きが、近來殊に著しくなつて來て居る。早い話が私自身故郷に殘しておいた掛軸を、火に會つて燒いた事があり、又あの大震災では、私の知つた物のうちでもかなり失はれたものがある。例へば

（萩の粥月待つ庵となりにけり　漱石）

岩波茂雄さんなんか、所藏品の大部分を殆んど火に見舞はれたのであらうが、殊に愛藏の「萩の粥」と題する畫賛ものは痛惜に堪へざるものの如く、幸ひ私の手許に寫眞が殘つて居たのを引きのばして、今は纔かに愛惜の情をやつて居られる。かうした失はれたもののうち私の責任にかゝる一幅は「南山松竹圖」と題する細密な着彩南畫だ。これは野上豐一郎さんのものを借

り出して、遺墨集の最後にをさめるべく、日本橋の刷師のもとに、くれ〴〵も大切にするやうにといつて預けて置いたのだ。それが大體出來上つた時に、例の大震災でやられてしまつた。不可抗力とはいつても、あの邊に居た道具屋で、先生の額をもつて居た男なんか、あとは野となれ山となれ、これ一つさへあればとその額を背負つて遙々東海道を國府津あたりまで逃げのびたのさへあり、殊に出版所の春陽堂では、さういふ大事なものはみんな持ち運んでしまつたといふのに、一番大事なこの幅を取り出さなかつた。結局熱がなかつた事に歸着するわけなので、後で出版所を詰つたところ、自分とこのものでゆるしてくれといつて居たが、それも無責任にそれなりにしてしまつた。しかし野上さんには散々怒られ、とにもかくにも代りの南畫を、

南山松竹図

山房所藏のものから割いてお贈りはしたものの、どのみち當の「南山松竹圖」は永久にかへつて來ないのだ。かうした着彩の南畫は全部で十點もあるかなしで、しかも先生自身表裝をさせ、箱書きをして、人にもやらず手元に保存されて居たのだから、特に贈られた野上さんの心中もさることだし、又全體的に見ても惜まれてならないのである。

先生は特にどんな法帖を學ばれたといふ事も聞かない。法帖拓本の類も相當座右にあるのであるが、どつちかといへば見て樂しむといふ方で、そのうちのどれを學んだといふあとはない。一時明月上人の字に私淑されたあとがあるやうだが、其頃は眞似るとか習ふとかいふより、やはり自分流に樂しんで書かれたもののやうだ。其後良寛張りの字を書かれた事があるが、これはわづか一年ばかりの間ながら、相當影響があつたと思ふ。遺作を見ると、その影響がくつきりとわかる。しかし其後、間もなく又自分の流義にかへり、晩年の筆蹟は、手紙の字の一層洗煉されたものになつて居る。だから手紙の字をよくのみ込んで居りさへすれば、贋物にひつかかるやうなへまはやりつこないわけだ。この點全集の書簡集を編まれた小宮さんなんか、そこへ行くと强いものだ。とにかく先生は一體に自分自分の素質にある天眞の流露したものを好かれたらしく、今出來の六朝風の字なんぞには好感を持たれて居ず、自然自分でもあゝいふわざ

とらしい眞似はされなかつたやうだ。
繪の發足は初め我流の水彩畫。その後油繪をやられたが、これは色が濁つてものにならず終ひだつた。水彩の大部分もやゝ朦朧體だが、しかしやつぱり一種獨得のカラリストで、先生好みの上品な色彩が、始終一貫してついてまはつて居るのが面白い。これは南畫を描かれるやうになつてからでも貫いて居るもので、晩年には南畫が餘程面白かつたものらしく、三幅對の大作をやつて見るなどと、その構想を樂しんで語つて居られた事がある位だ。大きな南畫を描かれる前に、藏澤の墨竹に感服し、しきりにそれを學ばれ、全く藏澤振りの竹をいくつか殘して居られるが、これも後では段々元氣のいゝ太い竹でなしに、高品な細みのものに變つた。かうなると書畫一體で、先生には妙に氣張つた肉太のものは、何に限らずお齒に合はなかつたものであらう。
贋物師も頭を働かして、もう少し漱石を研究するといゝのだが、うはべばかりいくら眞似ようとしたつて、漱石の書畫の面白味はそこにないのだから、結局眞物に親しみのあるものの眼を瞞着するわけには行かない。尤もそれが學べるやうだつたら、其日から贋物かきを廢業する事になるかも知れない。

はつきりした記憶はないが、たしか先生が逝かれて二三年後の事であつた。一日當時小倉に居られた佐藤といふ仁が訪ねて來られて、先生の古い短册を五枚示された。佐藤といふ仁には、前々賀狀や何かでいくらか馴染はあつたものの、それがどういふ緣故の方であるかは、其の時迄知らずに居た。聞けば明治二十九年の春、松山から熊本に移られた當時、獨身の先生を、何くれとなく世話をした松島とく女といふ老媼の、たしか緣に當る方であるとかいふ事であつた。その松島といふ媼は、もう數年前に亡くなられたさうであるが、先生の結婚生活が始まつてからも、亦長女筆子が生れてからも、其の頃樂隱居の身であつた老婦人は、よく土地慣れない新世帶のものの面倒を見て吳れたものだといふ。殊に筆子の如きは始終おもりをして遊ばせて貰つてゐたといふから、自分達にとつても、此老婦人は懷しい恩人であるに違ひない。

此老婦人が先生から短册を書いて貰つてゐた。贈つた人も贈られた人も今は亡い。隨つて何

とらしい眞似はされなかつたやうだ。

繪の發足は初め我流の水彩畫。その後油繪をやられたが、これは色が濁つてものにならず終ひだつた。水彩の大部分もやゝ朦朧體だが、しかしやつぱり一種獨得のカラリストで、先生好みの上品な色彩が、始終一貫してついてまはつて居るのが面白い。これは南畫を描かれるやうになつてからでも貫いて居るもので、晩年には南畫が餘程面白かつたものらしく、三幅對の大作をやつて見るなどと、その構想を樂しんで語つて居られた事がある位だ。大きな南畫を描かれる前に、藏澤の墨竹に感服し、しきりにそれを學ばれ、全く藏澤振りの竹をいくつか殘して居られるが、これも後では段々元氣のいゝ太い竹でなしに、高品な細みのものに變つた。かうなると書畫一體で、先生には妙に氣張つた肉太のものは、何に限らずお齒に合はなかつたものであらう。

贋物師も頭を働かして、もう少し漱石を研究するといゝのだが、うはべばかりいくら眞似ようとしたつて、漱石の書畫の面白味はそこにないのだから、結局眞物に親しみのあるものの眼を瞞着するわけには行かない。尤もそれが學べるやうだつたら、其日から贋物かきを廢業する事になるかも知れない。

古短册

はつきりした記憶はないが、たしか先生が逝かれて二三年後の事であつた。一日當時小倉に居られた佐藤といふ仁（ひと）が訪ねて來られて、先生の古い短册を五枚示された。佐藤といふ仁（ひと）には、前々賀狀や何かでいくらか馴染（なじみ）はあつたものの、それがどういふ緣故の方であるかは、其の時迄知らずに居た。聞けば明治二十九年の春、松山から熊本に移られた當時、獨身の先生を、何くれとなく世話をした松島とく女といふ老媼の、たしか緣に當る方であるとかいふ事であつた。その松島といふ媼は、もう數年前に亡くなられたさうであるが、先生の結婚生活が始まつてからも、亦長女筆子が生まれてからも、其の頃樂隱居の身であつた老婦人は、よく土地慣れない新世帶のものの面倒を見て吳れたものだといふ。殊に筆子の如きは始終おもりをして遊ばせて貰つてゐたといふから、自分達にとつても、此老婦人は懷しい恩人であるに違ひない。

此老婦人が先生から短册を書いて貰つてゐた。贈つた人も贈られた人も今は亡（な）い。隨つて何

時書かれて、どうして贈られたものかは固より分らない。が想像するところによると、恐らく明治二十九年の秋に、五枚共同時に書かれたものであつて、それが二十餘年の間、熊本のある田舍家の襖なり、衝立なりに貼られたまゝ、半ば忘れられてゐたものに違ひない。それが先生の逝去によつて、改めて見出され又は想ひ出されて、世に出るに至つたものと思ふ。佐藤氏が所藏してゐられたのは、さうした傳來によつたものであらう。

古い短册は各〻五つの句をのせてゐる。

わが脊戸の蜜柑も今や神無月　漱石

香椎宮

秋立つや千早ふる代の杉ありて　漱石

鷄頭や代官殿に御意得たし　漱石

酒なくて詩なくて月の靜かさよ　愚陀佛

ひかで鳴る夜の鳴子のさびしさよ　漱石

最初の蜜柑の句は二十八年の句であるが、以下の四句は皆それ〴〵二十九年の秋、正岡子規に送つた俳稿の中に見出す事が出來る。自分が此間の短册は二十九年秋の揮毫になつたものだ

といふ想像は、現に殘つてるその俳稿などから考へて見て、大凡大過のないものと思ふ。
明治二十八年から三十二年迄が、先生の作句の一番油の乘つた時であつたらしい。句が出來ると、それを半紙なり卷紙なりに書いて、子規居士の許へ送られた。子規居士はそれに點をつけ、朱を入れて送り返した。先生の俳稿はいつも居士宛で、最後に「乞斧正」又は「乞叱正」と書いてあると、居士の朱筆で末尾に「子規妄評」とか何とか書いてあるのが、おきまりのやうであつた。それらの俳稿は、當時の詩稿と共に漱石山房に藏してあるが、俳句の面白さ以外に、子規漱石兩文豪の性格が紙面に躍如としてゐて甚だ

酒なくて詩なくて月の靜かさよ　明治二十九年

禿筆の大師流なり梅の花　明治三十二年

露けさの里にて靜なる病　明治四十三年

興味が深い。

先生の短册の、世の崇拜者好事家の所藏してゐる數は、幾百といふ夥しい數に上るであらうが、多くは明治の末期から大正五年病歿迄のものであつて、明治三十年前後のものは多くあるまい。自分が從來見て來た數多いものの中では、此の五枚あるのみである。(最近又一枚見た。)此意味に於て此等の古い短册は、全く貴重な珍品であると言つて差支がない。

そして當時の所有者佐藤氏に乞うて「月」の句と、「鳴子」の句との二枚の短册を貰ひうけて、その代りとして夏目家所藏の二枚の新しい短册を贈つた。それが

冷やかに抱いて琵琶の古き哉　　漱石

ばつさりと高架の上の一葉哉　　漱石

の二句である。前の句は明治四十三年の句であるが、後者の作句年代を明かにしない。けれども平明枯淡の持味から推すと、恐らく晩年の句に違ひない。筆蹟からいへば琵琶の短册がやや早く、一葉の方は歿年近くのものと思はれる。

この二枚の新しい短册と、煤けた三枚の古短册とを比較して見ると、筆蹟の上に非常な隔りがある。餘りにその逕庭が甚しいので、後年の高品にして蟠(わだかま)りのない、美しい、自己の領域を

達成された墨蹟を見て居る目には、これが同じ人の手によつて書かれたものかと怪ぶまれもしよう。けれども時代に二十年の隔りのある事を計算に入れて考へて見る必要がある。實際其當時の俳稿や尺牘には、此等短冊に現はれた俤は十分に見出す事が出來るのである。さう言へば心なしか、新舊兩種の短冊の間にも、何等か一脈の相通ずるものがあるやうである。自分の想像では、先生が短冊を書かれた最初の作品が、此等の煤けた短冊として殘つてゐるものではあるまいか。

今此等新舊五枚の短冊が、此道の數寄者であり、又平常先生に傾倒してゐる是山詞兄の懇望によつて、嚮の所藏家の手から氏の手に移つた事は、氏の欣びが想ひやられると共に、短冊自身自らその處を得たと言ふべきであらう。自分も氏と喜びを頒つと同時に、短冊が落ちつく所に落ちついた事を心から祝ふものである。

（昭和三・四）

宗教的問答

この十二月九日の祥月命日に漱石先生の十七回忌を營んだ。さうしてその記念として『木屑錄』の原本を複寫して頒つた。『木屑錄』といふのは、漱石二十三歳の筆になる漢文の房總紀行であつて、珍らしい事に子規居士が朱で到るところに評を書いたり、點を加へたりして、最後に跋を書いてるもので、勿論世に問ふ爲にものされたものではないが、恐らく文豪の筆として一番最初に纏まつた文章であらうと思はれる。毛筆で書かれたのび〱とした毒氣のない文字といひ、漢文ではあるが着眼や描寫といひ、いろ〱の暗示をふくんで居て、漱石研究家にとつては活字本の漢字を卒讀するのと違つて、又なき味のあるものだ。殊に子規漱石と二文人の筆蹟を比較して見てるだけでも、非常な興味があるのであるが、しかし私は今こゝで二人の比較論をしようといふのでもなければ、又『木屑錄』や漱石の初期の文章の研究をしようといふのでもない。

漱石二十三歳は明治二十二年だ。九月九日脱稿とあるその九日さへ、今となつては命日が九日であつて、その九日には、毎月今でも生前そのまゝの遺室漱石山房に門下が集まつて、九日會と名づける會をつゞけて、今に二百幾十回を重ね來つた位だから、何となくある感じをさへ持つのであるが、さてその二十二年は私が生まれる二三年前のことだ。私は先生の生前丁度滿一年の間、その門を叩いて親しく教をうけた一人であるが、元々年は親子程違つて居ても、其爲か何となく同時代の人といふ感じがし、又多くの小說の類は極めて自分に親しみのあるものと思つて居たのに、その人の同じ年が、すでに私が生まれる二三年前に、かうした『木屑錄』のやうな文章を書きのこしておかれたのかと思ふと、何だか今迄知らなかつた先生といふものが別に存在して居るといつたやうな、妙に遙かな心地がして來るのである。しかし考へて見ると、私などには至極親しい漱石の作品の大部分も、今の若い讀者や一般の人々にとつては、丁度私が『木屑錄』を手にしたその感じに似たものがあるわけだ。

此間漱石追悼のある講演會に出たところが、數多い講演者の中で、直接先生を親しく識つてゐるのは私一人といつてもいゝ位で、あとはみんな漱石を純粹に歷史的存在として價値づけをし批判を新にしようとして居る人達ばかりだつた。十六年も經つてなほも私達は故人の息吹を

感じて居て、とてもさうした離れた氣持でこの人を見る事が出來ず、又それを自分の幸福とさへも感じて居るものではあるが、實際頓馬な話だが、其日まで自分はそれに氣がつかず、人もみんな自分のやうな感じを一樣にもつてるもの位に漠然と考へてゐて、自分が數の少い例外の位置に立つてる事をはつきりと知らなかつたのだ。この偶然の小發見から、自分には極めて何でもないありふれた事ながら、こゝに朧氣な記憶を辿つて、十七年前の一夜を物語つて見る氣になつた。勿論記憶違ひもあらう、聞き洩らしもあらうし、又第一忘れてしまつた箇所も少くないであらう。しかし從來殆んど傳へられて居ない漱石のこの一面を、いさゝかでも傳へる事が出來れば私は滿足だ。

冷い雨がしと／＼と降つた。その雨のせゐか、いつになく木曜日の夜の漱石山房はものしづかだつた。客も珍らしく少かつた。芥川と久米と大學生が一人と、さうして私との四人だつた。木曜日は山房主人の面會日だ。十一月初めのことであつた。

殆んど無言の大學生を除いては、全くの水入らずといつてもいゝ位なので、主人と若い弟子たちとの問答にはいつもの雜音が入らず、過去一年間の木曜日で一番しんみりとした夜であつ

た。其日も初めのうちは、いつもの調子の文學談やら超然たる世間話であつたのであるが、やがてふとしたことから宗教的な話題に入つて來た。はつきり覺えて居ないが、たしかアナトール・フランスの事か何かからそんな話になつたかと思ふ。初めは芥川が何かと問を發して居たが、やがて私にお鉢がまはつて來た。豫々私は宗教的な問題に關して、一度何かと尋ねて見ようと思つて居た矢先きだつたし、又文學に志し始めた當時の自分に、根本的に横たはつて居た自分の問題でもあつたので、それをこの大先輩がどう解して自らを處して居るか、それが知りたかつたので、私はこの機を外づしてはとかなり不遠慮に尋ねたのであるが、しかし前々から質問をきちんと用意して居たわけでないので、問ふ事がどつさりある筈であり乍ら、思ひどほりに出て來ないのがもどかしくて仕方がなかつた。問ふ若者は求道者の熱にをのゝいて居るが、答ふる主人はそれにつれて瞑想的な獨白を續けるのであつた。

——西洋の近代の大作家のものを見ると、大體がぎり〳〵のところへ行くと、一種うける感じが宗教的で、それが大變作品を深めて居るやうですが、そこへ行くと日本の作家のものは、一體に何だか其點薄つぺらに感じられて仕方がありませんが、如何でせう。

「みんながみんなといふわけでもあるまいが、さういふ點がないでもないね。尤も君がさう

いふ種類の作家なり作品なりを特に好んで讀むといふところもあるだらう。が一面國柄にもよるだらうね。しかし近代文學の所謂大きな作品といふのは、結局人間の思ひつめた生活を描くにあるといつていゝだらうから、さういふ點になると、自然、宗教的な救ひといふやうな事が問題になつても來るし、又さういふ大切な時の用意に、昔から宗教といふものは役立つて來たのだから。勿論近代になつては、昔のその救濟が用をなさなくなつたといふ事を主題にしたものも隨分あるやうだが、とにかく人間のぎり〳〵の思ひつめた生活を描くとすれば、勢ひ宗教的な色彩なり要素なりが多分に現はれて來るだらうね。又彼方の習俗といふのが、今もいふとほりさういふ點では甚だ宗教的なんだから。」

――これは私だけの偏見かも知れませんが、彼方のフリー・シンカーやモダーニズムを唱へる人達でさへ、まだ日本のさういつた新らしがりや連より遙かに宗教的だと思ひますが……

「それは面白い見方だ。しかし宗教的といふ秤一つで文學の輕重をはかるのは考へものだね。だがさういふ宗教的色彩の濃厚な國々の間で、歐洲大戰が現にしきりに行はれて居るのも妙ぢやないか。」

一しきり戰爭の話が出る。大正五年の秋の事だから、歐洲大戰の眞盛りなのだ。トライチュ

早稲田南町の書齋に於ける漱石先生

ケやニーチエの話から、自然話は哲學の方に流れ移つて、其頃喧傳されて居た獨逸西南學派の事などに及んだ。さうして大塚博士のリツケルトの講義の話などが出た。主人はその講演の筆記を哲學雜誌で讀んだといひ、それから『丁酉倫理』かに三回に亙つて、連載された紹介が、大變要を得て居てよくのみ込めたといつた。亡くなられた後でその三冊が書齋の廊下に丁寧に保存してあつた。

――藝術家のフイロソフイーを見ても、その哲學は初めはロマンチツクで、中頃は倫理的になり、それから最後には宗教的になるといふ風に感じられますが、何だか先生なんぞの行き方もそんな風ぢやないんでせうか。

「それは文學者だけに限つては居まい。大體に於て人間はさういふ徑路を辿るものなんだらうね。しかし自分のやうな多少ともに文學の道に携はつたものは、救ひといふやうな事でも、宗教家が夢想するやうに、一律一體に全人類が一時に救はれるなどとは考へない。救ひといふ事と悟りといふ事とが、大體同義語に思はれるんだね。」

――すると絶對者の中にうけとられるといふ淨土教的な他力主義でなく、自ら悟りをひらいてそれで救はれようといふ禪的な、謂はば自力主義なんですか。

「自力とか他力とか、さういふ抹香くさい用語は、非常にはつきりして居るやうで、其實誤解が生じ易いが、始めから絶對者を豫定しなくたつて、境地としてはさういふところ迄行かなければ、救ひにはならないのぢやないかな。だから理性的な僕等は超越的な神なんぞを考へる事が出來ない。さうして內在的に見て行けば又必要もないわけだ。但し自覺の絶對値といふか、見性成佛といつた悟りの極致を神とか佛とかいふのなら、そりやいつてもいゝだらう。」

――するとテルツリアヌスの言つたといふあの有名な「不合理なるが故にそれ信ず」といふ言葉を、先生はどうお思ひになりますか。

主人は一度その言葉を聞きかへして、小さく自分の口で繰り返したが、

「面白い言葉だが、何もさうなつたら、不合理なるが故になんぞと殊更ひねらなくともいゝぢやないか。もつとすなほに言つてのけたい氣がするね。柳は緑に花は紅でそれでいゝぢやないか。あるものをあるがまゝに見る。それが信といふものではあるまいか。例へば今こゝで、そこの唐紙をひらいて、お父様おやすみなさいといつて娘が顏を出すとする。ひよいと顏を見ると、どうしたのか朝見た時と違つて、娘が無殘やめつかちになつて居たとする。年頃の娘が親の知らぬ間にめつかちになつた。これは世間のどんな親にとつても大事件だ。普通なら泣き喚いたり腰をぬかしたりして大騷動をするだらう。しかし今の僕なら、多分、あゝ、さうかといつて、それを平靜に眺める事が出來るだらうと思ふ。」

私達はこれを聞いてびつくりした。異口同音に、

「そりや、先生、殘酷ぢやありませんか。」

と言つた。すると主人はなほも靜かに、

「凡そ眞理といふものはみんな殘酷なものだよ。」

と穩かに答へて續けるのだつた。

「一體人間といふものは、相當修行をつめば、精神的にその邊迄到達する事はどうやら出來

るが、しかし肉體の法則が中々精神的の悟りの全部を容易に實現してくれない。頭の中では死を克服出來たと信じて居ても、やつぱり其場になつたら死ぬのはいやだらうよ。それは人間の本能の力なんだね。」

——すると悟りといふのは、その本能の力を打ち敗かすことですか。と誰かが尋ねた。

「さうではあるまい。それに順(したが)つて、それを自在にコントロールする事だらうな。そこにつまり修行がいるんだね。さういふ事といふものは一見逃避的に見えるものだが、其實人生に於ける一番高い態度だらうと思ふ。」

——さうして先生はその態度を自分で體得されましたか。

「漸く自分も此頃一つのさういつた境地に出た。『則天去私』と自分ではよんで居るのだが、他の人がもつと外の言葉で言ひ現はしても居るだらう。つまり普通自分自分といふ所謂小我の私を去つて、もつと大きな謂はば普遍的な大我の命ずるまゝに自分をまかせるといつたやうな事なんだが、さう言葉で言つてしまつたんでは盡くせない氣がする。その前に出ると、普通えらさうに見える一つの主張とか理想とか主義とかいふものも結局ちつぽけなもので、さうかと

いつて普通つまらないと見られてるものでも、それはそれとしての存在が與へられる。つまり觀る方からいへば、すべてが一視同仁だ。差別無差別といふやうな事になるんだらうね。今度の『明暗』なんぞはさういふ態度で書いてゐるのだが、自分は近いうちにかういふ態度でもつて、新らしい本當の文學論を大學あたりで講じて見たい。といつて昔講じた文學論が元々意にみたないから、その不名譽の償ひを今しようといふのではない。それはそれで、すでにかいてしまつた恥であつて、今更どうにも仕樣がないが、かうした人生觀文學觀を確立して、それを人に傳へないのは甚だ相すまない次第だ。が、それが義務だとか責任だとかいふのではなく、言つて見れば天が私にそれを命じてるやうな氣がしてならない。是非纏めて君達始め天下の有識者諸君から聽いて貰ひたいと思つてゐる。」

いつになく主人の言葉は積極的であつた。しかも若い者の氣焰と違つて、底から盛り上がつて來る信念に充ち溢れて、おぼえず敬虔の念さへ湧くのだつた。あれほど嫌つた大學の敎壇にもう一度立ちたいと言ひ、從來大體に於て消極的な、どつちかといへば東洋的の隱逸主義の人が、卒然として、かうした烈々たる胸懷をぶちまけたのだから、私達がそれに感激したのは無理もなかつた。私達はその日の一日も早く來らんことを、どんなにか夢をもつて語り合つたで

あらう。さうして日頃尊敬しておかなかつた人の中に、思ひもかけない巨きなものが目覺めて、いかに若々しくこの人を動かしてるかを、今更のやうに仰ぎ瞻るのだつた。

——先生は死んだらどうなるとお思ひですか。

「死後の生活といふやうな事は深く考へて居ない。しかし肉體はこのまゝ肉體の法則に從つて亡びるだらうが、しかし精神がそのまゝ一緒になくなるとは、どうも感情上からも考へたくないね。といつて何も心靈學者のやうに、靈がこの空中にふらついてうよ〳〵居ると考へるのもどうかと思ふが、とにかく死んだら、その瞬間から一切の自分が何もかも無くなると考へられようかね——」

此夜私達は異常な感奮をもつて山房の門を出た。私と芥川とはエツケルマンの『ゲエテとの對話』の中に、これに類似の場面のある事を語りあつた。今迄先生に接してまだ聽くを得なかつた事を遂に聽いたといふ喜びと、人生に對する絶え間なき修行に對する決心とを得て、私は殊の外嬉しかつた。雨に濡れて下宿へかへつたが、私は容易に眠れなかつた。まだ聞き足りない點がどつさりある。今日の感激の消えないうちに、それらも序に尋ねて置かう。さう思ひ乍

ら筆をとり上げたが、改まつて書くとまるで書けなかつた。それから手紙を上げれば必ず返事を几帳面に下さる先生の事を思ふと、つまらぬ手紙を讀んで頂くだけで一苦勞だのに、それにまた返事を書かせては全く申譯ないし、第一手紙が貰ひたいやうでさもしくもある。いづれ次の木曜日には又お目にかゝれるのに、何も急ぐ事はないと思ひ返して、自分をおさへてしまつた。しかし次の木曜日にはどういふものか、蟲が知らせたとでもいふのか、この夜の靜かさに引きかへ、座敷へ入り切れない位人が集まつた。「則天去私」の文學觀なんぞも出たが、この夜程しんみりしたものではなかつた。さうしてその次の木曜日には、すでに死の牀につかれてしまつて、それからお目にかゝつたのはたうとう十二月九日の夜、もう先生の口が永久に物を言はなくなつてしまつた時であつた。

私はあの時何故不躾でも手紙を上げて、さうして返事を頂いて置かなかつただらうと泣きたい程悔んだ。手紙を上げれば、其時先生はうるさいと思つても、恐らくは青年の純情と熱意にほだされて質義に答へてくれられたであらう。さうすれば假令斷翰零墨と雖もこの種のものの全く遺されてない今日、又なき典據となつたであらう。今はたゞ簡單に席上語られた事を、同席したものが敷演して居るに過ぎないのだから、誤りなきを保し難いのみならず、又何等そこ

に論議の發展がないのである。私は今になつて見て、何故あの時下手にはにかんだり尻込みしたりしないで、本當の勇氣を出さなかつたであらうかを思ふ。さうして私自身が手紙を貰ふとか貰はないといふ、いともちつぽけな事でなしに、かの「自然法爾」とか、「自然隨順」とかいふ言葉と同樣に、この人が五十年の一生をもつて登りつめたその「則天去私」なる境地を、彼自身の筆によつて宣表し鮮明せしめなかつたといふ事に、ある罪をさへ感じて居るのだ。私が先生に接して、今日何よりも惜しいと思ふのは、この一事に外ならない。主人自身この境地にありながら、思ふまゝ筆を揮ふ暇のなかつた事は返す〳〵も無念であつたであらうし、又日本としても、近代に於ける最も大きな損失の一つであつたであらう。（十七回忌に際しての追憶――忽卒の間になつたので、先生の口調をそのまゝ寫したのではなく、その思想の意味を主として誤なく傳へようとしたまでだ。一々の言葉がそのまゝ全部先生の言葉でないのはいふ迄もない。當時漱石先生は五十歲であり、私は二十六歲であつた。さうして多分亡くなられる一月前頃の事である。）

其後の山房

お骨上げ——十二月十三日

連日の通夜の疲れで寢過す。約束の九時半までに遲れはしまいかと氣遣ひ乍ら、久米と連れ立つて早稻田のお宅に伺ふ。今日は先生のお骨上げに行くのである。

玄關を上つて應接間へ通る。隣りの先生の書齋には、白屛風を立て廻した靈壇の上に、「文獻院古道漱石居士」と書いた白木の位牌が置かれてある。今日になつてしみ〴〵それだけでは物足りない氣がする。せめて昨日までのやうに先生が棺の中に横たはつてゐられたなら等と、及びもつかないことを考へる。岡田君たちと、昨晩はよく眠つたといふやうな何でもないことを話し合ふ。そこへ赤木君が急いでやつて來る。

十時頃二臺の自動車に分乘して落合の火葬場に向ふ。先きの車には、先生の奥樣、先生の御

令兄、奥様の御兄弟、それから森田さん。後の車には、岡田君、赤木君、それに久米と私といふあんばいに乘る。

前の自動車が喇叭を鳴らし續けに、狹い通りを行く。私達の車はそれに從ふ。黑塗の前の車臺の背に、街路の礫や轍が、縞を作つて、次々に映り去る。人通りの多い市街を外れて田舍道に來かゝる。道の南側に立木が並んで、疎な日光が落ちてゐる。人通りが無いので、自動車が速力を出して駛る。自然、車と車との間隔が生じる。誰やらが、「惡漢追跡の光景だね」といふ。皆が何でも無いことを興あり氣に打ち笑ふ。こんな風に、車が走るにつれて刻々に變つて眼前に展開される景色が話題に上る。常ならば、誰も取り上げさうにもない些事や、平凡極まつたことが、今日に限つて、會話の材料になるのである。路傍のさゝやかな蜜柑などをならべてあつた駄菓子屋の前で立木を切り倒さうとしてゐた時も、路より一段高い日當りのいゝところに建てられた瀟洒たる別莊風の建物を見た時も、皆の口から殆んど一樣に平凡極まる無邪氣な可笑しくもない冗談が述べられた。併し誰も常ならば言ふに堪へず、聞くに堪へないやうなその退屈な會話に、何の不審もなく應答してゐた。さうして多くは屈託のないらしい笑に身を任せた。けれ共その一ト皮下には、誰の胸にも、或る觸れてはならない共通な題目が祕められてゐ

たのではなからうか。少くとも私自身はさうであつた。第一に、私は先生の話をすることによつて、私自身の胸を苦しめたくはなかつた。それと共に、胸に抱いてゐる先生の姿を他の人々の話によつて、少しでも掻き擾したくはなかつたのである。けれども又同時に、先生のことが誰の口からも話されぬといふことは、私にとつて淋しい物足りないことであつた。私は心ひそかに誰かしら先生のことに關する話題を提供して呉れることを希つてゐた。――私の心をもつて直ちに他の心理を忖度するの非は知らぬではないが、或は皆がこんな矛盾した心を抱いてゐたのではあるまいか。

せゝこましい景色から、急に眼界が開ける。と、自動車は一層狹い畑の中の小路に折れ曲る。火葬場の煙突がすぐ目の前にあらはれる。冬枯の野には、これといつて目を牽くやうな色もない。只廣いだけである。そして廣い野の盡くるところと覺しいところに、雪を頂いた連山が曲線を描いてゐるが、眼界はそこに盡きたとも見えぬ。緩い起伏を限りなく續けてゐる霜にいたんだ大地と、無窮に連なる霜に褪せた大空とに圍まれた空間は、穩かな光をもつて充されてゐた。遠近の杜の間から、南に向つて屋根を傾け乍ら、この穩かな光を穩かに照り反してゐる家が、幾軒も見える。小春日和とでも言ひたげな日である。久しく郊外の風色に接しなかつた私

は、何となく自由の園に放たれて、自由に呼吸することが特に許されたやうな氣がした。地の匂ひ、枯竹の香り、新鮮な空氣、すべてが一時に私の感覺を蘇へらせたやうに見える。

火葬場の待合には、中村是公さん、犬塚保治さん、それから坊さんが、もう私達の到着を待つて居られた。私達も日當りのいゝ待合所に入つて待つ間もなく、小宮さんが愛息の手を引いて來られた。これで今日のお骨上げの人員は揃つたのである。

そこへ制服制帽の隱坊が、用意の出來上つた旨を知らせに來た。「博」といふ字の入つた、丸い眞鍮の帽章が、此間から葬儀萬端の世話をしてゐた、葬儀屋博善社の不愉快な手代のことを想ひ起させた。私はこの頃葬儀屋の連中を見ると不快になつた。そして坊主の顏を見ると可笑しくなるのが常であつた。一同は火葬場に入つた。

この附近は高等學校時代にはよく散歩に來たことがあるから、勿論この火葬場には見覺えがある。但し中に入るのは今日が初めてなのである。火葬場は、坂の中段に陽を抱いて建てられてゐるので、一面にぽか〳〵と暖い日を浴びて外部は決して陰氣臭くはないが、流石に竈場は冷え〳〵とした。幾つも並んだ鐵の扉の中で、一段高く、そして大きく作られた鐵扉が二つある。それが特等の竈である。向つて左の竈に、紫の縵幕が張つてあつて、風なきにその交露が

微かに揺いでゐる。これが先生の肉體を燒いた竈である。赤茶けた扉が、まだ昨日の熱を宿してやしまいかを思はせる。一同が知らず識らずの間に、竈に向つて並列した。

「不思議だわね。慥かこの竈は雛子の竈と同じだわ。」

奥様がつく〴〵竈を見乍ら仰有つた。雛子さんといふのは先生の愛孃である。『彼岸過迄』の一章、「雨の降る日」の中に書かれた宵子は、雛子さんのことだといふことは前から聞いてゐた。私は來る途々、あの末節の骨上げの條を記憶の中に蘇へらせてゐたが、今かうやつて竈の前に立つて、奥様のこの言葉を聞くと、一倍あの骨上げのところが判然と目に浮んで來る。私はあれと、現在の私達とを頭の中に並べておいて、知らず識らずの間に比較してゐた。さうして、隱坊が、「お封印を」といふところや、がちやりと音をさせて錠をぬくところや、それからレールを敷いて、鉤を竈の中の金床に引つかけ乍ら、がら〳〵とそれを引き出すところや等が、すべて同じなのをとくと確かめた。私には『彼岸過迄』といふ公式に據つて、隱坊が全くその通りに働くやうにしか思はれなかつた。

私達の前に引き出された鐵の箱の中には、白骨が、黒褐色の灰に雜つて散らばつてゐる。私は幾度もかういふ火葬場の經驗を有つてゐるから、かねてこの有樣を明確に想像の中に描いて

ゐた。が、今現に白骨に向ふ段になると、矢張り一瞬の間顏をそむけずには居られない。私は一旦外した視線を再び戻した。さうしてそれから各人の顏を窺つた。誰も泣いては居らない。だがしかし何かのきつかけさへあれば、今にも涙のこぼれさうな顏は幾つもある。

「さあ、拾ひませう。」

奥樣の聲がする。皆で箸を一本一本取り上げる。二人で骨を挾んで拾ふものだと誰やらがいふ。皆がその樣に、二人で一つづつの骨を挾んでは、傍の白い甕の中へ入れる。大きな骨が先づ拾はれて了ふ。後には一々二人で挾んでゐては面倒なやうな小さい骨ばかりが殘る。と、こん度は箸を捨てて、直下に手で拾ひ始める。最初に手で骨を拾ひ上げた時、私は温かい先生の生前の手と握手したやうな氣がした。それから段々拾つては甕の中に入れ、拾つては甕の中に入れしてゐる内に、細かい骨も殘り少なになつて了つた。私はもつとあつて呉れたらと思つた。さうして同時に、この小さい骨の一片をこつそり持ち歸つて、自分の肌身離さず持つてゐたいとも思つた。小さい骨が欲しくて欲しくて堪らないのであつた。

別の容器に入れる筈の齒と喉佛とが中々見當らない。と、隱坊がちよい〳〵と箸で灰を掻き分けては、小器用に捜し出す。皆が流石は商賣柄だと感心する。併しどうしても喉佛が見えな

い。

「只今篩ひまして持つて參ります。」

隱坊はかう言ひ乍ら、燒場の片隅に、拾ひ殘りの灰をもつて行つた。暫くすると隱坊が、

「喉佛樣がおいでになりました。」といふ。さうして白いかたまりを、一同に見せびらかすやうに、一二度小さく弄んで壺の中に入れた。私は喉佛樣と「樣」をつけたのがひどく可笑しかつた。隱坊はそれと同時に篩つたところを、又皆の前に持ち出した。持つて來たのを見ると、中に圓い眞黑な最中のあんこのやうなものがある。誰やらが拾ひ出したのを見ると、それは時計であつた。表の硝子は鎔けて、蠟のやうに流れかけたまゝで、灰色に固まつてゐた。

「あゝ、時計がありましたね。さつきから見えないので、すつかり鎔けて了つたとばかり思つてゐたの。えゝ、あのいつも使つてゐたニツケル側の安時計よ。冥途に行つて藥をのむのに時計がなかつたらさぞ困るだらうと思つてさ。それと一緒に眼鏡も入れたのだが、どうしたでせう。お爺さんで近頃は目が遠くなつたから、本を讀む時の用心に入れてやつたんです。」

奥樣が微かな笑の影を口元に浮ばせ乍ら言ふ。と、赤木君かと思ふが、

「あの眼鏡もですか。」

と、惜しさうに問ふ。眼鏡は玉だけが、大きなビー玉のやうになつて殘つてゐた。

「可笑しいわね、金緣が鎔けるでせうか。」

「可笑しいですね、金が鎔けて燃え盡したのか、姿を消すとは可怪しいですね。金齒だつて黑くなつて殘つてゐるのに。」

こんな會話を傍らで默々として聞いてゐた隱坊が口を切つた。

「何しろ火力が強うございますからね。」

私は場合が場合だから人を疑ぐるのは惡いとは知り乍らも、面白くない方に自分の考を進めざるを得なかつた。

つまみ上げられるだけのお骨を拾ひ上げ、篩つた灰雜りの骨をすつかり壺の中に入れる。嵩ばつて蓋がし切れない。すると隱坊が、茶鋪の番頭が袋に茶を入れる時のやうに、容赦なく壺を搖つたり、叩いたり、下の臺に打突けたりする。私はその態度がひどく癪に障つた。それからその壺を白木の箱に納めて、更に白布でつゝむ。それを臺の上に飾つて、前に蠟燭をともす。坊さんがお經を讀む。

讀經が了ると早速歸途につく。前の自動車にお骨をのせる。さうして來た時と同じ樣に、そ

遺骨靈前

の後から私達の自動車が續く。
　お宅へ着くと、令孃令息達が壺のところへ寄つて來て、中が見たいと言ふ。そんなものは見るものではありませんと、誰やらが諭ふるやうに拒んでゐた。壺は直ちに壇上の位牌の背後に置かれる。家族始め、來合はせた者一同が香を焚く。
　葬儀事務はこんな風にして一日一日と捗取つて行く。併し私の感情はそれと隨伴して變つて行かない。健康體の先生が病牀の人となり、病牀の先生が骸となり、骸が棺の中に納められて山房を出て、今日は又白骨となつて山房に歸つて來る。けれ共惘然としてゐる私の心は、その時

時に一時的の刺戟の爲に、一時的に悲しんだり泣いたりもしたにはした。併し一體に、悲しみの程度も、頂點を究めずに薄らぎかゝるのである。私には何よりそれが物足りない。これは一部分、或は私が感情の誇張はいふまでもなく、ある時にはその自然の發露をさへ極端に抑へつける性質にもよるのであらう。が、私は涙をさへ思ふ存分揮ふことのなかつたことを、先生に對して申譯のないことのやうにさへ思ふ。私の心は、ひどく悲しまない代りには、嬉しがりもしない。いつかは飛び切つてひしと胸にせまる悲しみに打つかるであらうといふ豫期の下に、始終平靜――陰鬱な平靜の狀態を續けてゐる。私は涕泣する人を幸福な人だと羨んで見る。

人は餘りの悲しみに逢會した時、涙以上の涙のない悲痛の狀態にあることがある。が、私の心の狀態をそれに比するのは今の場合當らないといつていゝ。かと言つて、今度のことが、私の生涯に於ける事件中の單なる小事件であるとは考へられない。又、最早どんなことにも自分の感情が動かなくなつたとは思ひ得ないし思ひたくもない。結局、私には自分の心の狀態の說明がつかない。

此間中から毎日嘱されてゐた『明暗』の原稿も、たうとう最後まで行きついた。愈々今日は最終の百八十八回が『朝日新聞』に出てゐる。山房に集まる人々の顔には失望があつた。本當に先生と永別したのだなといふ意識が今更に深まる。

「あゝあゝ、たうとう終つちまつたね。」

「明日から新聞を見る張合がない。」

こんな嘆聲を雜へた會話が、人々の間に取り交はされる。岡田君が、この最後の回を切り取つて、切拔帖に貼りつける。見ると前の方には、きちんと誤植がなほしてある。聞けば、ずつと前のこと、或る時、奥様が氣を利かして、その日の分を貼られたことがある。ところが何か餘外事を考へてゐられたものと見えて、貼り上つた後を見ると、裏返しにべたりと貼つてあつた。それ以來病臥前まで、多くは先生自身毎朝貼られたものださうである。

十一月二十二日、病の牀に就かれてからも、義理堅い、そして作に油の乘つてゐた先生は、時々『明暗』のことを氣にして口に出されたさうである。二十八日の第一回の內出血のある前などには、元氣な口吻で、奥様にこんなことを言はれた。

「早く癒つて書き續けたいものだ。醫者は動くなといふが、ナーニ、書かうと思へば今でも

書けるよ。」

「でも、もう暫く靜かにしてゐて下さい。二十回も書きためてあるんですから、急がなくともいゝぢやありませんか。」

「それもさうだが、二十回分が切れるまでに癒るかしら。」

奥様は言葉を濁して、先生を慰めてゐた。百八十八回で永久に中絶されて了つた『明暗』は、何時まで續く筈であつたのか、誰にも分らない。先生が亡くなられた最初の通夜の時、先生の手帖の類を繙へして見たことがあるが、無論作のプロットなどは少しも書いてない。たゞ何處かに、出て來る人物の血族關係などが書きとめてあるばかりであつたやうに微かに記憶してゐる。生前、「お延は先生あれからどうなるんです」などといふ質問の出る度に、「どうなるんだか、まあ、新聞に出てから見て貰はう」と微笑を湛へて答へられるのが常であつた。そして又、「明暗は何時まで續きますか」といふ問に對しては、「來年の正月までは續くよ」との答であつた。そんなところから推すと、もう四五十回で、『明暗』の本當の幕が閉ぢたであらうと察せられる。

二十七日の夕刻に山房の門を潜る。愈〻明日の午後一時を期して、先生の遺骨は、雜司ヶ谷の墓地に埋葬されるのである。今夜は御骨へお別れのための通夜をする。靈前に線香や蠟燭を更に上げながら、奥様や先生の御令兒を圍んで、追憶に耽る。集まつた人々は、小宮さん、東さん、岡田君、赤木君、松浦君、久米及び僕などで、人數は割合に少い。宵の中に內田君の夫人、山田さんの奥樣などの姿も見受けたが、御二人とも通夜の人ではなかつた。

俳句の運座の始まつたのは、何時頃であつたか。眞夜中といふよりは寧ろ朝に近かつたやうに記憶してゐる。尤も僕は非常に睡かつたので、側の行火にあたり乍ら、うつら〳〵と半睡の狀態を續けてゐた。季題は何でも「師走」と、その外もう一二題あつたらしい。他の人々はしきりに沈吟してゐる中に、いつも元氣な赤木君や、久米が、盛に駄句る模樣である。久米などは昔取つた杵柄だと言はんばかりの、凄まじい景氣らしい。僕は眠いのでどんな名句があつたのか、まるで覺えてゐない。が、只二句だけを思ひ出すことが出來る。寢耳にも不思議な位强くもをかしくも響いたらしかつた。二つとも赤木君ののださうで、一は「隨處皆混沌として師

走かな」といふので、他は「鬼面してなほ虎威をかる師走かな」といふのである。僕は半ば夢の中で、この痛吟（こんな成句があるかどうかは知らない）を聞いた。そして可笑くなつてたうとう目がさめて了つた。

明け方近くなつてから、それまで賑かであつた一座が、一人寢二人寢して大分靜かになつた。そしてあべこべに僕は起き上つた。もう天明までには間がなかつた。

正六時に葬儀屋の人足が、墓標を取りに來るといふのを思ひ出して、僕は新聞を取りに行つた序に、玄關や門を開けた。露を含んだ灰色の朝が冷たさうに白んで來た。

早曉から風が出た。七時頃に漸く人足が二人して、墓標を取りに來た。九寸角、二間丈の墓標が、よぼ〳〵の葬儀屋の人足の肩によつて運ばれるわけはない。僕はどうして運んで行くだらうと、好奇心をもち乍ら、二人の行動を眺めてゐた。そこへ出入りの植木屋が出て來て、僕にも手をかして呉れといふ。僕も仕方なしに彼等の仲間に加はつた。僕は白布を卷いたこの大黑柱樣の四角の墓標を動かし乍ら、どう思つて見ても、この墓標と先生とを結び付けることが出來なかつた。

九時十時頃から人數が增えて來る。十一時頃坊さんが來て、靈前で讀經をした。それが終る

と集まつてゐたもの一同が、御骨に向つて最後の燒香をする。

小宮さんが、奥のピヤノの前で、森田さんの奥樣に手傳はれて、フロツクを着てゐる。瘦せてゐるので、肩の邊りに眞綿を入れて、恰好をつけてゐる。先生のお下りださうだ。とかうする中に墓地で受付をする役割が決(きま)つて、その人達が先發する。芥川や僕は、大勢の人の中で美しい着物さへ着れば、いつも陽氣になるお子供さん達の仲間に入つて、輕口を言つてゐた。

皆が自動車の待つてゐる大通りまで出たのは、零時半頃であつた。風がひどくなつて夥しく砂塵を上げる。空は曇つて、いやに寒い。四臺來る筈の自動車が二臺しか待つてゐない。二臺は後からすぐ來るといふので、まづお骨を送る。さうして先の自動車に乘つてゐるお子供さん達に「失敬!」などをして、風の中に佇んでゐた。

暫く待つたが自動車は來る樣子もない。自動車屋へ自働電話をかけても要領を得ない。背さん、鈴木さん、野上さん等十人許り、小半時間風と砂との中で待ちぼけを食つた。所定の時間はせまつて來る。しかも自動車の來るらしい氣勢もない。で、一同はぶつ〳〵言ひ乍ら、徒歩で墓地に向ふことにした。この風の中にガタ〳〵車でもあてがはれては危險(あぶない)といふのである。

僕達は捷徑(ちかみち)を辿り乍ら、雜司ヶ谷に向つた。

葬儀以來初めて會つたので、芥川と途々色々な話をした。主に先生に關することであつたのは言ふまでもない。その中に、二三日前に聞いた、こんな無邪氣な話も雜つてゐた。——

『貴郎、わたし高野山に行きたいと思ふが、一緒に行つてくれない。』

問ふのは奥樣である。それに答へるのは無論先生である。

『さう。…………併しそれは駄目だらうよ。』

『何故？』

『何故つて、昔からこうやの明後日といふからさ。』——

「にや〳〵笑つたその時の先生の顔が目に見えるやうだね。」

二人は生前の先生の姿を思ひ浮べ乍ら、墓地へ急いだ。

僕達が着くのを合圖に、すぐと式が始まつた。

廣からぬ墓地を生垣の外から四十人許りの人數が取り圍んだ。中には新しく八九尺程の穴が掘られてゐた。さうして穴の中を覗き込むと、底には花崗石で組み上げられた石廓があつた。その中へ白い陶製の骨壺を容れた。それに添へて、葬式の時の先生の友人及び門下生の弔辭も入れられた。石の蓋をする。それが終ると、純一君と奥樣とが、第一の土を投げ入れる。皆が續

いて掘り返された土くれを取つて投げ込む。皆が丁寧に土を入れるのに雑（まじ）つて、純一君だけが、獨（ひと）りボールを放るやうな熱心なスタイルで敢然と投げ入れる。

一通りその事がすむと、人夫が土を落す。さうして物の三四尺も土をかけたと思ふ頃、改めて墓標を穴の中に立てて、更に土で穴を埋める。すつかり埋めた後で、

當墓地（墓標は菅虎雄氏の筆になる）

墓標の白布を脱（と）る。菅さんの書かれた「夏目金之助墓」といふ文字が黒々と現はれる。樒（しきみ）を立てて白木の机を置く。香爐とお水とを備へる。女の様な姿態（しな）をする坊さんが供養する。

墓前に進まれた時、僕もその無邪氣さに引き入れられて、微笑を禁じ得なかつた。と同時に、その無邪氣が、却つて氣の毒にも思はれた。

式が終つて歸途につく。雪空が暗く頭上にかゝつて、今にも降り出しさうな空模樣であつた。途上今晩も俳句の運座をやらうといふ提議が出て、贊成者の數も多い。

歸つて見ると、應接間の方に、先生の位牌が飾つてある。さうして書齋との間に、戸が立て切つてある。その戸を細目に開けて見ると、午前まであつた壇は取り崩されて、すつかり掃除がしてある。書棚を隱してゐた白屛風も取りのぞかれて、夥しい洋書が、思ひ思ひに金文字の背を見せてゐる。僕には久し振りで、先生の書齋を見るのが嬉しかつた。

夕食後運座が始まる。松根さん、鈴木さん、小宮さん、內田君、岡田君、松浦君、久米、芥川、なんぞといふ顏觸である。赤木君が居ないのは淋しい。同君は、『時事新報』の初刷から、新年の創作について、同君の所謂「巨彈を投ずる」爲の準備に、一足先に歸つたのである。

「今日の運座は、松根（東洋城氏）といふ宗匠が居るんだから、本式だね。」

かういふのは鈴木三重吉さんである。題は「火鉢」外二題である。題が出るといきなり、鈴

木さんが、「ひげ過ぎの睾丸あぶる火鉢哉」といふのはどうたなどと、一座を笑はせる。が暫くすると、電話がかゝつて來て、二三句を入れたまゝ中座される。

東洋城さんがぴんとした髭をひねり乍ら、宗匠然と筆を走らせる。願はくば紋付の上に、いつも戸外で着てゐられる十德を着られたら、更にこの句會の席上うつりがよかつたらうに等と、いつもの傍觀者の想像を恣にする。

此夜の選句の中で、どれといつて覺えてゐるのもない。が、たゞ「先生に叱られし夜の火鉢哉」といふのが、あの場合何となくいゝ氣持をさせた。慥か鈴木さんの句であつたと思ふ。

九時頃にお暇をする。

死面成る――十二月三十日

書齋は全く先生御存生の時と同じやうに整へられた。紫檀の机の上には、今度の御發病の前日まで用ゐられた、189といふ『明暗』の回數の心覺えのついた原稿紙と、萬年筆と、鳳鈕兕鈕の二の銅印と、玉の文鎭と、眼鏡入れと、象牙のペン・ナイフなどが、生前の儘に置かれた。そしてその前には、毛皮の上に座蒲團まで敷かれた。それからもと通り額が掲げられた。應接

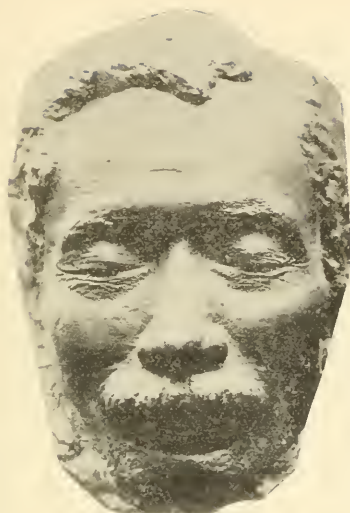
間には、先生自筆の書幅が二つかけられた。何もかも以前のまゝだ。變つたのは主人の居ないことばかり。

この晩芥川と僕とは、書齋の瓦斯ストオヴにあたり乍ら、奥樣と色々な話をしてゐた。と、

デス・マスク
（新海竹太郎氏作）

かれこれ十二時近くでもあつたであらうか。不意に玄關の戸を叩くものがある。誰かと思つて戸を開けて見ると、小宮さんであつた。

小宮さんは、先生の死面(デス・マスク)を持つて來られた。先生が亡(な)くなられた夜新海さんが型を取られた面(マスク)が出來上つたのである。死面は神々しいばかり靜穩な先生の死の面影をその儘に傳へてゐるが、髭と頭髮とに稍不服があつた。併もそれも決して大した瑕(きず)といふのではなく、實際人々の想像以上の出來映であつた。

彼等がしげ〳〵と死面を視て、色々と感想を述べてゐる間、奥樣は成るべく眼を避けてゐら

れた。奥様には、まだ生々しいあの死の光景が、餘りに生々しく回想されて、恐らく堪へ難いのであらう。

「何だか、先生が、頤を前に突き出し、そして眸を狹めて『これがおれの面か』と、上から覗き込んで、耳語いてゐられるやうな氣がするね。」

こんな言葉と共に、死面は位牌の傍らに、黑布で蔽うて置かれた。

小宮さんが歸られてから、朝三四時頃まで、奥様から先生のお話を聞く。近頃の僕にとつては、こゝで先生に關したお話を承るのが何より樂しみたのである。

大正六年一月元旦

午後三時頃山房に行く。野上さん、赤木、久米などの面々がゐて、座には屠蘇が出てゐる。野上さんが岩野泡鳴氏と清子氏との間に起つた事件を語つてゐられる。(附記。今月の『黑潮』に出てゐる、泡鳴氏の『離婚まで』の事實談)色々と談話に花が咲く。

暫くしてから、日の暮れるまで令孃令息達の相手をして、ボールを投げたり、羽根をついたりする。いくらか正月らしい氣持に近づく。そのうちに追々人が集つて來る。森田さんが、お

弟子と一緒に來る。岡田君が來る。內田君が來る。松浦君が來る、…………段々賑かになる。あひ鴨をつゝき乍ら、色々な話が出る。中にも昨夜出た『新小說』臨時號の『文豪夏目漱石』の噂が立つ。

僕は此朝あれを大方讀んで、和辻さんの『夏目先生の「人」及び「藝術」』に最も感心した。が、反對に、諸家の『感想及び印象』と云ふ條を見て、ひどくこれらの大部分の人のいふことに喫驚して終つた。その喫驚したところを一々擧げてゐては堪らないから、一つ二つの例を見よう。——

內田魯庵氏が「…………もう一つ付け加へれば、夏目さんは、殆んどと云つても好い位、西洋の新しい作を讀んでゐないと思ふ。…………」魯庵氏自身さう思つてゐるのは隨意だが、これ位間違つたことを麗々しくもう一つ付け加へなくともよささうなものである。こんなことを强ひて思ひたい人間は、一度先生の書齋に入つて見るがいゝ。近頃の多くの人と先生の違ふところは、近代文學以外にクラシックも讀んでゐられたことだ。

島村抱月氏は、先生を指して、創作に於ても餘り變化をしない作者だ、といふやうな自由な想像を廻らしてゐる。併し抱月氏は、先生の最近の作は讀まないのださうだから論外である。

僕から見ると、たつた十年そこ〳〵の活動期間ではあつたが、創作の上で先生程絶えず變つて行かれた人も尠いのではないかと思ふ。

その外白鳥氏や星湖氏の中にも妙な箇所があつた。が、總じて（二三の例外はあるが）これらの諸家が、先生の最初名の出た時分の前期の作ばかり讀んでゐて、近頃のものを申し合せたやうに讀んでゐないことは、僕をひどく不思議がらせた。これは前期の先生を認めて、それから格段の進歩をされた後期の先生を無視してゐることだ。日比周到(ひごろ)の用意のもとで、大抵の創作には、その作が有名であらうと無からうと、目を通してゐられた先生に較べて、何といふ差異であらう。

（附記。漱石先生及び其門下に關した批評は、其後方々の新聞雜誌に澤山出た。が、其中で、ひどく僕を不快がらせた暴言が二三ある。第一が『日本及日本人』に出た河東碧梧桐氏の『漱石及び其門下』。第二が『新日本』に出た關莊一郎氏の『道草のモデル』。第三が『大學評論』に出た石田三治君の『夏目先生の文學及び文學論』などである。石田君のは、往々僕を失笑させた。――大正六年一月）

顔・寫眞・畫像

ある木曜の面會日の夜の事、どういふきつかけからか話が人の顔の事に及んで來た。若いものの、それも多く文學でもやらうといふ連中が、遠慮のない先生の周圍に集まつて、言ひたい放題の事を無軌道に言ふのだから、自然女の話なんぞ出る機會も多く、先生も一緒になつて、時には隨分あけすけな口をきかれて、相當きはどい場合もあるのであるが、それが一向わざとらしくもなければ、特別改まつたこだはりもなく、何つて居て大變面白くつてしかも上品なものだつた。女の話があんな風に出來るやうになればなどと、芥川なんかと後で無暗と感心する事もしばしばだつたが、此日はどういふわけだつたか、女の顔の話でなく、男の顔の事でしきりに花が咲いた。

すると先生が突然僕達の方へ顎を一寸しやくつて、君達は文科の先生の中で誰が一番いゝ顔をして居ると思ふかと、かういふ難題をかけられたものだ。問はれて見てみんな返事につまつ

た。といふのは講義を聽いて居る一時間なり二時間なりの間、それも長い教授になれば三年間も、毎週一度二度は見て居る顏だ。しかしあゝ立派な顏だなと、講義が面白いとか爲になるとかと身をいれて聽いた教授はあつても、顏をほれ〴〵と見るといつた教授はつひぞないからだつた。

勿論、大學へ入りたての新米の頃には、毎時間入れ代り立ち代り音に聞こえた何々博士某々教授に初見參に及び、親しく謦咳に接して名講義を拜聽する光榮を喜んで、ノオトに教授の咳拂ひ迄書き取るなんぞといふへまな愼重振りをやらないものでもないのであるが、少し慣れてくると、教授博士もみんな人間だ。かへつてあらばかりが目立つて、ある哲學の教授は老鋪の番頭さんらしく前垂れをかけるがよろしく、ある美學の教授は質屋の主人が似合ふらしく、ある社會學の教授は糶賣りをやらせたら賣上げが上るだらうし、ある老博士は赤いチヤン〳〵を着せて孫の洟をかませておきたいし、其他等々といつたていたらく。開きなほつてさてどの顏が好きかと言はれて見ると、役者なら左團次の男性的の奴とか、羽左の江戸前がとか即座に答へられるのだが、みんなハタと行きつまつてしまつた。

するると大學の話になつたので、先生、昔の先生時代の癖を無意識のうちに出されたものか、

坐つて居る順で、芥川君、君はと順々に名ざしで來た。芥川が苦しまぎれに上げたのは、美學の大塚博士、久米も大塚博士、私も別に候補者がないのだから、大勢に順應して附和雷同してしまつた。大塚說が多數と見て、先生は一寸怪訝な顏をされ、さうかな、あんなのが君達にはいゝのかなと獨り言のやうに言はれた。昔大學院學生の時代、大塚さんと先生と二人で興津海岸を散歩された時に、閨秀作家の麗人大塚楠緒子さんが博士を見初められた、それが緣で結婚されたといふローマンスがあるのださうだが、どうもあの時見初めたのは、大塚でなくておれのやうだつたとは、先生の時々洩らされた諧謔であつたとか。今膝下に集まる若い連中が、口を揃へて大塚博士を男の中の代表のやうな口吻をもらす。君達にはあんな婆さんみたいな感じの男がいゝのかいと、口にこそ出しては言はれなかつたが、たしかに先生は一寸不服のやうであつた。

森田の顏はどこからどこ迄ぶく／＼で、輪郭甚だ不鮮明だ。あんな顏は好かん。あれでひげでもなかつたら見ちや居られない。先生は何かの拍子で突然まともから吐き出すやうに言つてのけられた。小宮さんとか森田さんとか鈴木さんとかいふ人達に對する時の先生はいつもこれで、氣に入らないとなると、あゝ迄言はなくてもとはたでハラ／＼する位遠慮會釋なくぐさつ

とやつて來る。最初の程かういふ場面に出會すと、私達はむしろどぎまぎした。しかし後ではかういふ特別親しい態度が、私達にもして頂きたい位に思ふのだつたが、言葉つきにもものごしにも、まだ〳〵その足元にもよりつけない程よそ〳〵しいものだつた。私達はそれを心ひそかに淋しがつたものだ。

しかしかう眞向からやられても、森田さんの方でも惡びれもしない。其頃たて始めたらしいあごのチョビ髯を一寸撫でて、さういふ先生だつて、『猫』の頃の先生は神經が顏の全面に行き渡つて居て、いかにもえらさうで一癖ありげだつたが、あの修善寺の病氣がなほつてからといふもの、どつか會社の重役みたいにいやにでぶ〳〵に無神經に太つてしまつて、髭なんかも短く刈り込んで、どこにも夏目漱石らしいところがない、いやに充ち足りたといつた平凡人に墮してしまつてと喰つてかゝる。私達には目の前の先生の風格しかないのであるが、森田さん達には以前の先生が懷しいのであらう。さういへば松浦一さんなんかも、後の刈り込んだ髭を惡趣味だといひ、『猫』時代の先生の顏を素敵にほめて居られた事がある。

話はどうやら水掛論になりさうになつた時に、先生が急に此間人相をみて貰つてねと、自分の顏の話をボツ〳〵始められるので、私達の興味は全く一新されてしまつた。それによると、

目は三白眼でどうとかやらで、鼻は筋がとほつてどうしたとやら、額は廣くて秀でて居るとか、耳は何とかだとか、結局先生自身もうろ覺えで、しかも半分位忘れて居られるのだが、いゝ事づくめなので、誰やらがいゝ事ばかりぢやありませんかといふと、いや、ところが惡い事が一つあるんだといふお話。つまり顏の上の方は大變いゝ相なのださうだが、鼻から下、つまり顎の部分が短か過ぎて調和がとれて居ない。これは短命か、でなければ末がよくない相なんださうだ。と診斷を下されても、下部の短いのは生まれつきだから如何とも仕難いわけで、何とかならんものかと尋ねたら、人相見なんかといふものは、うまい逃げ道を知つてるものだ。つまり天神髯をあごに生やせとかういふんだ。森田の乾分になるんだねと笑つて言はれたので、さつきの水掛け論は見事解消してしまつた。それからロンドンに居られた時、ひよいと見ると黄色い顏したチンチクリンの日本人が歩いて居るので國辱だと思つたら、往來の鏡にうつつた自分だつたといふゴシツプは、ありや本當なんですかときくのがあれば、松山中學ぢや先生の渾名はなかつたんですかなどといふ、他愛のない質問を發するものがあつたりした。しかし先生は當時の自分の渾名が「鬼瓦」といふのであつた事は、もう忘れて居られたやうだ。鼻のあたまに痘痕があつたからなのだ。

私が初め先生の寫眞を見たのは『中學世界』だつたか『文章世界』だつたかに現はれた、口髭のぴんとした、机の前に坐つて居られる寫眞だつた。萬卷の洋書を背にして、机上には文房具や、水仙の花の生けてある花瓶がある。近づき難い鋭い人といふ感じで、後年久米なんかに門を叩くべくしきりと誘はれても、その寫眞の第一印象が十年後にも目先きにちらついて居て、行つて見たいには見たいが、さりとて畏怖といつた一種の感じがぬけ切らず、長い事迷つたものだつた。ところが一度お目にかゝつて見ると、まるで寫眞で見た感じとは別人で、誠にいゝ自分達の老先生といつた感じをうけた。私達は多分人間的に圓熟されたその頂點でお目にかゝつて敎をうけたのではなからうか。だから森田さんなどと違つて、少くとも私には、あの四十歲頃の鋭い姿よりも、五十歲の圓熟されたあの先生が、一番ぴつたり先生らしく思はれてならない。

そんな事から私は思ひ立つて、先生の幼少から晩年迄の、ありとあらゆる寫眞を全部集めて、謂はゞ寫眞で先生の一代記を見得るやうにやつて見ようと決心した。折もよし丁度十三回忌。記念に印行して頒つつもりでやつたところが、割合に集まつた。やりかけて見ると段々欲が出

て、幼少の思ひもかけないのが手に入つたりするので元氣づき、父祖の畫像やら、居宅や墓や遺族などまで一冊のうちに配列して、大體寫眞による一代記を編む事が出來た。寺田寅彦さんが大變喜んでくれられ、啻に先生といふ特別の人の一生の種々相がわかるのみでなく、何となく誰でも持つてるすべての人々に共通した「人の一生」といふものが、誠に豐かに僞りなく盛られて居て、ほゝゑましくもあれば淚ぐましくもある程懷しい氣がすると言つて居られた。

これを編みながら、寫眞から歸納して、二十歲以前はさておいて、大體先生には五つの大きな時期があると解していゝやうに思つた。尤も人が寫眞に納まるのは、シャッターの開いて閉ぢる全くの瞬間なのであつて、その瞬間、愉快の時もあれば不愉快な時もあり、心の動靜も一定してないのだから、いつも其時代の代表的な顏をして居るとは限らない。しかし一年に一度、二年に一度位、たまさかにしかとらない照相をずつとならべて見て行くと、やつぱりそこには爭へない時代々々の變化が見出されるのである。

まづ豫備門時代から大學卒業前迄が一つの時代をなして居て、集まつた寫眞は六枚ある。年代からいへば明治十九年から二十五年、制服の關係もあらうが、まづ〳〵大同小異だ。とはいふものの最初の弊衣にドタ沓を穿つた豪傑流の寫眞と、最後のキチンと大學の制服をきて髮を

わけて居る寫眞との間に、自ら發展のあるのは勿論である。この頃は大學生間に寫眞の交換が流行したものらしく、卒業前後の學友の寫眞が、現に多く漱石山房に藏されて居る。藤代禎輔、松本文三郎、松本亦太郎、正岡子規など十枚に餘らう。

次の二十六年の卒業後の寫眞には立派な口髭が立てられて居るのを見る。『猫』の作者だからといつて、髭の有無で人品の鑑別をするわけではないが、誰しも大學を出て實社會に踏み出すと、氣構へが違つて來る。先生にさういふ事があつたかなかつたかは私にはわからないが、見た目はこの髭のため顏が違つて來て居る。先生はこの髭をつけたまゝ、大學院に籍をおいて高師に敎鞭をとり、松山中學の敎員室に入り、熊本五高の敎壇に上つた。髭をひねりつゝ英語を講じられたかどうかは私の知らないところであるが、見合ひの寫眞にも、新家庭の寫眞にも、卒業生の記念寫眞にも、洋行のため上京するに際して撮影された寫眞にも、皆同じやうな髭が目立つ。この時代の寫眞は數が多い。どれにも先づ敦厚な君子人の俤が見える。

明治三十三年九月の外國留學から、三十六年正月歸朝迄には一枚の寫眞もなく、其年も次の年もつひに姿を現はさずに、漸く三十八年になつて寫眞があり、自畫像がある。洋行中一枚の寫眞もないのは實に惜しいのであるが、しかし考へ樣によつては、この寫眞のないといふ事が、

かへつて當時の先生の心境自身の寫眞の役をして居るのかも知れない。とまれしばらくめで見た寫眞は、すつかり以前の熊本時代と面變りがして居る。問題にして居た髭はピンと先が上がり、眼ざしは突きさすやうに鋭くて、然も皮肉な調子を帯び、どこかに絶えず癇癪の破裂してゐるのが感じられる。氣力も旺で、どこからどこ迄神經がぴり〳〵震へて居さうだ。精神上に大きな變化があつたものに違ひない。三十八年から四十一年迄の六七枚の寫眞がこれを證明して居る。かうした緊張した顏の持主が、何を仕出來したか。外からも内からも動かすものがあつて、恐らくは最も不幸にして最も幸福な時を送つたに違ひない。先生の寫眞はかういふ事を物語るが、當時の先生の家庭と教職と業蹟とをあげて見れば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

明治四十三年は修善寺大患の年である。この年の病前に三枚の寫眞がある。どれも皆前期にくらべれば長者の風格が見えるのに、いかにも疲れたといふ感じがあり〳〵と見える。これはすぐ次に來る大患といふものを頭において見るからかも知れないが、この心身共に疲れたといふ感じは、顏が鋭く深いだけにそれだけいた〳〵しい鬼氣を感じさせる。たつた三枚の寫眞乍ら、私はこれを一つの時代と見たいのである。

大患によつて先生は一度死の門迄辿りついて、又戻つて來られた。再生の人の心が深まり改

まるのは當然であらうが、それにつれて顏が變つて來るのも亦當然であらう。寫眞は雄辯にそれを物語つて居る。髭は短く刈り込まれて、以前の病的な銳い衰への暗い影は消えた。其代りそこには恐らく血色のいゝであらうと思はれる肉體のいゝ健かな老を見る事が出來る。先生の顏はこのまゝ次第に老けて完成されて行つたのだと見れば見られようかと思ふ。

私はかつて先生の漢詩を大體に分けて、これを四つの時期にして見た事がある。今寫眞の分け方とくらべて見ると、大體に於て彼我照應するものがあるのは愉快だ。しかもこれは單に漢詩のみに限らず、先生の本領とされた小說其他の作品にもこの變化と時期とを見てとる事が出來さうだ。人の生活なり思想なりと顏とは、何と密接な相關關係を保つてる事か。私はこれを編みながら、本の中にたつた一枚位寫眞を入れたのでは、本當に物足りないものだと思つた。

顏や寫眞の事を書いた序に、畫像を一瞥して置かう。

先生の顏をしばしば描いたのは、私の識つてる範圍では津田青楓さんと岡本一平さんだ。前者は線描、後者は言はずと知れた漫畫風。一平さんは數年前の春陽會の展覽會だつたかに、漱石先生五題とかいつた漫畫風の油繪を描いて出して居られた事がある。中々特徵をつかまへ、

手まはりのものなどで相當繪の效果を出さうとして居て面白いのであるが、しかし私には晩年先生が國技館で角力を見て居られた時の漫畫風のスケッチが、どういふものか大變なつかしいのである。

當時の朝日新聞に出た二枚つゞきで、十德みたいなものを羽織つて、たしか烏打ちをかぶつて居られた。角力が取組む迄は眞顔で居るが、勝敗がすむと口髭だけをにやつと動かすとかい

漱石先生像（津田靑楓氏筆）

ふ漫文付きだつた。

津田さんの線描による先生の坐像は、近來中々手に入つたやうで、自然圖柄もきまつて來て、

漱石先生之像（岡本一平氏筆）

描いたものも多いであらう。大概きまつて「閑窓睡覺影參差」といふ晩年の七律を賛して居る。一平さんのが樂天的でしかもどつかやにつこいのに比し、これは又いやに文人式に納まつて居る。畫家の素質の現はれであると同時に、又一つには和洋の材料の然らしめるところでもあらうか。

津田さんので惜しいと思はれるのは、先生の亡くなられた直後、棺をひらいてその死顔を涙ながらに鉛筆で寫生したデッ

サンだ。あれは全集の插繪になつたので知つてる人も多からうが、松根東洋城さんの珍藏するところであつたのを、過ぐる大震災で燒けてしまつた。

此外にも津田さんは前からよく先生の顏を描いた。「漱石と十大弟子」とか何とかいふ白描の屏風を描いた事があつたが、あの時代の一聯のものは、今どこに行つてるであらうか。多分先生が亡くなられてからいくばくもない頃出來た作品だつた。

漱石先生胸像（中谷翫古氏作）

この二人の畫家は、生前特別先生には恩顧にあづかつた人達で親しみがあるのであるが、胸像を造つてある展覽に出品してあつたのを未亡人が買ひ取られ、今現に山房にある中谷翫古氏のものなど、これは寫眞を見て造られたものらしく、大分ちぐはぐで甘い出來だ。これから見ると、比較するのも異なものだが、あの死面(デスマスク)なんぞは、死相の不氣味(ぶきみ)さは蔽ひ隱せないが、しかし嚴肅な壯重味と現實感とがよく現はれて居ると思ふ。

寫眞や繪の外に、先生の聲の寫眞ともいふべき蓄音機の吹き込みだあつたさうだ。是非複製

して保存したいものと思つて問ひ合せたら、初期の頃の蠟管に入れたもので、其後ボロ／＼になつて全くどうにもやりやうがないといふ事だつた。みんなが集まつた時、あの座談上手の先生の聲を圓盤からきくなんぞといふ事は、私達ばかりの歡びではなかつたであらうに、これは惜しみてもなほ餘りある事であつた。

原稿の戸籍

『門』の行方は淡い探偵小說式結末を豫想させるが、あれを讀んだ讀者は、自然他の原稿はどうなつて居るであらうかと考へられるであらう。尤も千萬な疑問だ。私はこゝに自分の知つてる限りを書きつらねて、讀者の疑問に答へる事としよう。

斷つて置きたいのは、私がかうして原稿の戸籍をしらべたのは、全集編纂で小宮さん達が大體在所をさがして出して居られたのを、更に大正九年に「漱石遺墨展覽會」を催した爲に、その時調査したからによるのであつて、それから例の大震災のやうなものがあり、幾多財界などの變動があつた事だから、其後所有主がどう變り、又そのうちのどれかがこの世から失はれてしまつたといつた事は、もう私の知らない事に屬して居る。

大體原稿といふものは、作者が書いて新聞社なり雜誌社なりへ手渡して了ふものであるから、性質上作者のもとには殘らないのが原則だ。ところが世間なんぞは暢氣なもので、原稿は一切

夏目の家に殘つてでも居るものかと考へるのがあれば、『坊ちやん』座談會に於ける猿之助君みたいに、たつた一枚でいゝから『坊ちやん』の原稿が手に入れたいなんかと、至極氣のいゝ事を言つてるのもあり、又私なら大概なものはお菓子屋の見本みたいに、一二枚づつ取り揃へて居るかも知れないなんぞと、甚だ漫然と人の氣も知らないで太平樂をならべて居る御仁もある。現在ですでにこれなんだから、こんな漫文でも、將來多少物を言はないものでもない。知つた人にはつまらないが、しかし知らない人にはいくらか興味があらう。

草稿で一番古いのは、その昔小學生の頃同級生だつたといふ島崎柳塢畫伯が『正成論』といふ作文の草稿を所持して居られ、それには鹽原と署名がしてあつて、甲といふ採點までついて居るが、字は當人の筆かどうか少々怪しいものだ。但しこんなのや高等學校時代の作文なんかは、まづこゝでいふ原稿のうちには入らないと見て、文學的作品の部に屬するもので一等古いのは、漢文で書かれた『木屑錄』だ。これは十七回忌の時の記念にそのまゝ玻璃版にうつして出版したが、子規居士が朱で評を入れたり、點を打つたり、後には跋を書いて居て、中々の珍品だ。明治二十二年の作で、房總半島紀行だ。これは小宮豊隆さんが未亡人から贈られたので、

もと粗末にこよりで綴ぢてあつたのを、小宮さんが帖仕立にされた時、氣のきかない經師屋が端をたち切つてしまつて、書き込みの子規居士の文字も大分切り落してしまつたのは惜しいことだ。

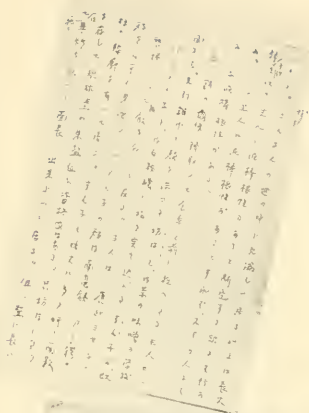
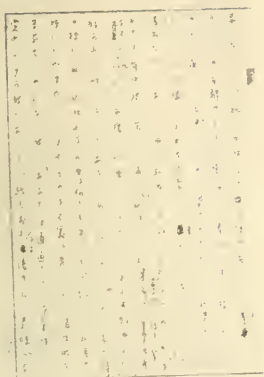
子規居士の書き込みのあるのに、同じく俳句の草稿がある。この俳稿は明治二十八年から同じく三十二年迄、半紙や卷紙に書いたものが幾十枚となくあるので、各紙に子規居士が點をつけたり、批評を書いたりして居る。うち三四葉が散らばつてるだけで、他は悉く漱石山房に殘つて居る。數寄者には垂涎物と思ふ。

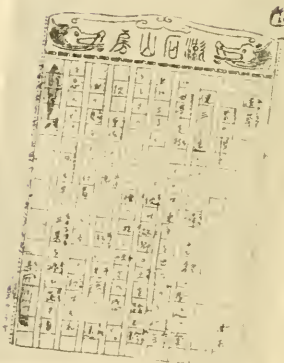
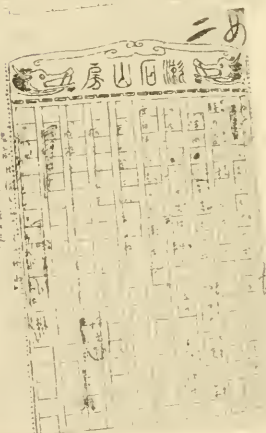
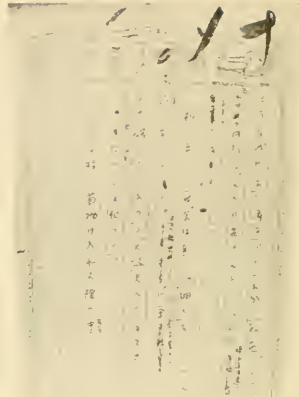
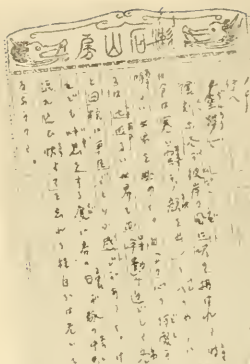
俳稿と同じやうに朱の入つて居るものに、詩稿がかなり殘つて居る。これは主として熊本時代の詩稿で、長尾甲山氏の朱が入つて居る。これも山房にすべて殘つて居る。

堅いものでは『文學論』の講義の草稿が、これも山房に殘つて居る。『道草』にいふ所謂蠅頭の文字で、始めの書き出しは大きな字だが、終りの方へ出ると本當に六號活字をきつちりとつめ込んだやうだ。さうして單行本にするのに中川芳太郎さんあたりがノオトを淨書したのに、先生自身が書き込みをされた原稿も山房にあるのである。

これに引きかへ、『文學評論』の講義草稿も書き入れ原稿もないので、これはどこにあるかと展觀の時隨分方々さがした。ところがどうしても見當らずあきらめて居ると、ひよつこり野村傳四さんのところから、他の藏幅やら袱紗やらと一緒に屆けられて來た時には、諦めて居ただけに全く雀躍したものだ。尤もそれはほんの一部分で、全部赤インキで、多分瀧田樗蔭さん等が講義筆記を淨書したのに、先生自身が筆を加へられた、その加筆の部分の、しかもその一部であるらしい。しかし一部分でもこれは草稿さへ無くなつてるので、甚だ貴重なものだといつていゝわけだ。

『猫』は雜誌『ホトトギス』にのつたもの。その中程の第何囘目分が、分の薄い册子に綴ぢられて、大阪の素封家水落庄兵衞氏のもとにある。先代の庄兵衞氏が人も知る露石といふホトトギス派の俳人だつたので、高濱虛子さんあたりに懇望して、手に入れられたものであらう。たゞ『猫』全篇からいふと、極めて一部分であるのが憾みで、もつとどつかに無いものかと、半ば諦らめ半はそれとなくさがして居ると、一昨年だつたかある結婚式の席上、たま／＼虛子さんの令息と隣席に坐り、いろ／＼話をして居るうち、高濱さんのところへ『猫』の原稿の他

原稿　右上『吾輩は猫である』同左『坊つちやん』下右『虞美人草』同左『それから』

の一部分が保存されてるといふ事を伺つた。いつでも見せるといふお話だつたが、まだ拝見に出て居ない。これは今迄私達の間では知られて居ない原稿で、

原稿　右上『思ひ出す事など』左同『行人』右下『道草』左同『明暗』

謂はば新發見の部に屬する。近日拜見する時を樂しみにして居る。

水落さんには、其外にもう一つ『坊ちやん』全篇の原稿が祕藏されて居る。これは一紙も

缺けず頗る見事なもので、猿之助君ぢやないが、たつた一枚でもいゝなどと失敬しようものなら、それこそ折角のものがとんだ掘物になるのだ。よくもこの二つが、かゝる心ある人の手によつて珍藏されて居たものだとうれしくなるのである。

思ひもかけない珍品はもう一つある。それは『草枕』の原稿だ。これも遺墨展觀の折、無いものと諦らめて居た、といふのは、前に全集を校合する時の必要から、大體原稿の所在はわかつて居て、出來るだけ借り出して來て校合したのであるが、この『草枕』は『門』などと同じく、行方不明の一つだつたのだ。ところがどういふまはり合せか、展觀の數日前に姿を現はした。鎌倉の松木喜八郎氏の所藏だ。この原稿の風變りな事は、當時『新小説』にのつたので、當時の編輯者らしい人の手の指定の朱字が入り、其上同月所載のものか遲塚麗水氏(?)か誰かの文章も一緒に綴り込んである事だ。こんなのは明治文學史上珍品の一つに違ひあるまい。

それ以前のものでは、亡くなられた小山内薫氏のところに、短篇『琴のそら音』の原稿があつた。これはあんまり優遇もされて居なかつたやうで、多分同氏等が大學生時代、『七人』とかいふ同人雜誌をやつた時ねだつて貰つたものと思ふが、震災はある、同氏は亡くなられる、どうなつてしまつたか、私には消息がわからない。

『虞美人草』の原稿は全部鈴木三重吉さんの手にある。これは中一二枚缺けてるとかいふ話であるが、今では見事に裏打ちされて立派な箱に入つて、いかにも貴重品らしい重厚さを見せて居る。かつてある富豪が是非にと大金をもつて所望した事があると傳へられて居る。この頃迄の原稿紙は、例の美しい文字で、四百字詰の本郷松屋の原稿紙に書かれて居る。本郷の大學に居たものは、初めは大概あすこの原稿紙を使ふので、私達にはそれだけでも懐しいのである。

『三四郎』は麻布の鈴木周太郎氏といふ方が持つて居られて、そこへ車を走らせておかりしに行つた事がある。これも完本だ。確か和綴で箱に入つて居たと思ふ。しかし三浦直介氏藏の『それから』は、どういふわけだつたか、たうとうお借り出來ず、自然私はまだ一度も拜見して居ない。

『彼岸過まで』はお粗末な草色のクロースの表紙で、二冊本に綴ぢられて居る。これはもと薄井秀一氏の所藏だつたが、氏が洋行される時に、夏目の母に買つて欲しいといふ事で、山房にかへる事になつたものだ。惜しい事にこれも天地がかなりに切り落されて居る。しかし完本であるのがせめてもの慰めだ。

『行人』は加藤四郎氏、『心』は山本松之助氏、『道草』は美土路昌一さん。加藤氏は朝日新聞の校正長をされて居た方だし、美土路さんは現に朝日新聞の幹部の一人だが、私が展觀の頃お借りに行つた時には、たしか外國へ派遣されて居たお留守だつたと思ふ。三四年前帝劇で左團次が「シラノ・ド・ベルジュラック」をやつた時お目にかつて、やつとそのお禮を言つた事を思ひ出す。

最後の大物『明暗』全篇は、大阪の池崎忠孝君が祕藏して居る。これは永らく私が預つて居て、私にまかせるから裝幀してくれないかといふ事に、一枚一枚和紙で裏打ちさせて、それを六冊本かに綴ぢ、立派な桐箱を造つて屆けた。彼と私と合議の上で、各冊の題簽を門下に頼もうといふ事で、第一卷を未亡人、以下それ〴〵書いて貰ひ、なほそれでも足りないで、今度は見返しにもろ〳〵の門下の署名をして貰ひ、最後にこれは京都の去風洞で十年記念の小展觀を催した時、箱の表を津田青楓さんの題字、裏に西川一草亭さんに山茶花かなんかの繪を描いてもらつた。すこぶる凝つた面白い趣向のものとなつて居る。

大物は大體そんなものだが、小さいものはちよい〳〵外に散らばつて居る。例へば『朝日文

藝』時代の小さい隨筆や論文など。

『文展と藝術』といふ文展批評は岩波茂雄さんの所藏だつたが、これは岩波書店の大金庫が大震災にやられた時、同氏所藏の書畫諸共、あの劫火にやられたのではあるまいか。『硝子戸の中』の原稿が數年前ある古本屋へ出、何でも三千圓とかいふ言ひ値に、誰も私達の識つた連中の中では手が出せなかつたが、あれは今保坂潤治氏の所有に歸してゐる。

『硝子戸の中』に似た先生の身邊隨筆、わけてもあの修善寺の事を書かれた『思ひ出すことなど』はいろ〳〵の意味でなつかしいものだが、大正九年の夏前かと思ふが、本鄉の正門近い古本屋に原稿が賣りに出て居るといふ話を小耳にはさんだので、樣子見旁〻あはよくばと買ひに出かけた。この店はどういふ緣故かよく先生の原稿が賣りに出るところで、『三四郎』も『それから』もそこから出たものだと聞いた。

行つて見るとたしかにある。あるにはあるが惜しい事に全部が全部揃つてるのではなく、新聞の一回分づつ賣る方が手頃なものだから、幾人にもいゝところを乞はれるまゝに分賣してしまつて居た。何とかしてみんな買ひ戾して手に入れる方法もがなといつて見たが、店賣りしたのだから誰が買つて行つたかわからず、中には九州くんだり迄行つたものがあるなどといふ。

仕方がない、一回分いくらかときくと、とことんのところ十圓なら賣る氣らしいので、殘つてるのをこみで買ふ約束をし、序に『點頭錄』の二三回分、『朝日文藝』の一二回分迄、殘らず一纏めで値をきめてしまつた。さうして明日家へ金を取りに來るやうにいつて、アドレスと名前とを書くと、今迄私を知らなかつた本屋の欲張り親父の口惜しがる事。貴方と知つたら三倍程に吹つかけるのにといふのだから、此方もうまくしてやつたりと悦に入つて、今度は出たら外へ話す前に何でも持つて來給へ、高く買つてやるからと大きくそりかへつたものだ。それがつまり『門』の原稿の事件をこんがらかしたあの電話となつて現はれたのだ。

かうして原稿を一瞥して見ると、當代の文人でこれ程原稿の保存されてる人はまづあるまい。それといふのも、一つは先生が四十近くなつて卒然と文名をなし、わづか十年そこ／＼で盛名のうちに亡くなられたといふのが、その大きな理由なのであらうが、いつ何時どういふ間違がないものでもないので、私はぼつ／＼これらの原稿を借り出して、そのまゝ複寫して、原作そのまゝの香りを同好の方々にわかちたいものだと思ひ立つたのは隨分早い事だが、實現したのは比較的簡單な『木屑錄』たつた一つ。これだけでもかなり喜んで貰つたので、必ずや『坊ち

やん』だ『草枕』だといふものを始め、もろ〱の名作を、あの美しい先生の創作當時のペン字で讀む事が出來たら、どんなに深い愛着と熱情とを讀者に與へるだらう。私はその事を考へて自分ではぞく〱するのであるが、さていつの日その夢想が實現する事やら。しかし私の生きてるうち、是非とも舌をなめずり〱やつて見たい贅澤な仕事の一つだ。

全集の裝幀

漱石全集の表紙の模様が、一見文字のやうでもあるが、といつてまともに讀めさうな文字もまづ見當らず、さりとて單なる模様としてはこれ又如何にも奇怪なので、そこには何かしらいはくがあるだらうとは、多くの讀者の疑問であるらしい。私とても專門でないから詳しい說明は出來ないが、此際概略の說明をするのも無駄ではないだらう。それにはまづ先生の著書の裝幀の大略を見てするのがいゝと思ふ。

一體先生は裝幀に好みのあつた方で、『吾輩は猫である』にしろ、『漾虛集』にしろ、『鶉籠』にしろ、初版は菊判の頗る美本で、先生の文章が一世を驚かしたと同樣、裝幀も亦人々の度膽をぬいたものであつたであらう。明治三十九年四十年といふ頃に、こんな美本が現はれたのだが、これらは今見ても立派な、むしろ贅澤版とでもいひたい部類に屬して居る。殊に『猫』が三冊續きであり乍ら、同じ風な體裁を備へて、同時に少しづつ文様が變つて居るなどは面白い

意匠だ。私自身の舊い經驗をいふならば、先生の『虞美人草』が市に現はれた時には、まだ田舍の中學生であつたが、あの帙入りの華麗な書を店頭に見た時、買ひたいには買ひたいが、さりとて餘りに綺麗で物體なく、たうとうおぞけをふるつて買はずにしまつた事を覺えて居るが、意氣地のない田舍中學生をおどかした先生の裝幀も罪な事だ。其頃の裝幀は橋口五葉氏だつた。先生は身邊にいゝ裝幀家をもつて居られた。さきには故橋口五葉氏、後には津田青楓氏で、丁度五葉氏の圖案が行きつまつたかに見えた時、津田氏が現はれて腕を揮つた形であるが、先生の生前津田氏は『道草』と若干の縮刷本を手がけたのみだつたのは、何にしても物足りない感がないでもない。

とにかく先生の著書は『文學論』『文學評論』のやうな堅いものに至る迄、裝幀に意を拂はれて居た。たゞ一つの例外は『社會と自分』一冊きりであらう。

五葉、青楓兩氏の裝幀の外に、繪心のある先生は、自分で裝幀がして見たかつたのであらう、『心』と『硝子戸の中』の二冊を著者の自裝で出版された。これは岩波書店から最初自費出版の形式で出されたものださうだから、自然さういふ謂はば一種の道樂氣も出たのであらうが、この全集の裝幀は實にこの『心』の裝幀によつたものである。『硝子戸の中』の意匠は更紗模

様集『花ふくさ』の中から取られて居る。

最初先生が亡くなられて全集を出版するといふ時に、裝幀を誰にたのむかで、甲論乙駁で大した名案もなく、いつそそれよりか先生自身の裝幀があるのだから、それに則つたらといふ事になり、一決したのが、大體今日の裝幀であるのである。

大體と言つたのは『心』の裝幀と違つてるところがあるからである。『心』の表紙のひらには、二重枠の中に、「心［荀子解蔽篇］心者形之君也……」云々と、康熙辭典の心の條が八行ばかりにぬき書きがしてあつたが、全集には無論それがなく、その代り題字題簽が先生の畏友狩野亨吉博士の手になつてる事である。

さて愈〻本題に入るが、この表紙の文字模様は、通常「石鼓文」といはれて居る、周の岐陽の石鼓の拓本から取られたものである。『金石索』によると、獵の事が刻まれて居るのであるが、永く埋もれて居て、唐の初めに世に現はれたとある。高さ一尺五寸乃至二尺そこ／＼、周り六七尺といふ臼型の石が都合十あるので、文字はその胴にあるのである。文字の消えたものが少くない。拓本で普通行はれて居るのは、三百八十六字本と、北宋舊拓の四百六十二字本とあつて、後者が善本だと見えて居るが、先生所藏の拓本も、複刻ものには違ひないが、字數の

上からいつて恐らくこの後者に據(よ)つたものであらう。橋口五葉氏の令兄貢氏が、支那の領事をして居られた頃に贈られたものかと思ふ。この奇古な神秘的な文字が先生を喜ばしたものに違ひない。

惜しい事に先生手澤の拓本には貼り違ひがあつて、「金石索」に載するところの本文と違ふところがまゝあるのであるが、今は拓本の研究を目的とするのではなし、叉先生自身これらの文字の面白さに、圖案の意匠としてとられたものに過ぎないのだから、その事は今の場合どうでもいゝことだ。

そこで參考迄に表紙と本文との對比をしておく事にしよう。先づ裏表紙の右の上から始まるのであるが、上下と角々とは文字が半分以上ないから、それと推定する外ない。第一石の三行目から始まつて居る。

避馬既駘君子員〻
邋〻員斿麀鹿速〻君
求觪〻弓卤〻茲以
寺避毆其時其

來趩〻㝵〻熯卽遨
卽□時麀鹿趚〻
其來大垐避毆其
來遺〻射其豧蜀（以上第一石）汧
殹沔丞〻彼淖（以上第二石）騝〻
避以隮于止陸宮
車其寫秀弓寺（以上第三石）

むづかしい字があつて、普通の漢學の知識では一寸讀めさうにない。新に鑄造しなければ、第一今の活字にない字さへあるだらう。表紙では隨分刀の頽（くづ）れて居るところがあつて、最後の二字なんぞは全く得體（えたい）がわからないが、本文から推して字を當てておいたのである。

『心』の表紙の刀と刷とは伊上凡骨氏の手になつて甚だ高雅溫潤、色合も頗る趣があつたが、それが菊判の全集となり、今また普及版となるに及んで、最初の和紙が布に變つて第一に趣を失ひ、今度は大量製產で手刷（てずり）が出來ないので、先生當初の意匠だつたデリケートな色合はかなり害（そこな）はれて、謂はは幾分俗惡になつた。が何はともあれ本全集は先生自身の裝幀を生かして傳

へたといふ意味で、意義の深いものがあるのである。が全集が普及されたので、この装幀を見るといきなり人は漱石全集を思ふのであるが、何ぞはからん本家本元は『心』にあるのである。さうして面白い事には、二三年前に支那で飜譯出版された『草枕』には、甚だ雜ではあるが、ちやんとこの全集の装幀をとつて居る。かうなつて來ると何が何やらわからなくなるわけだ。

一叢の芒動いて立つ秋か

序だからこゝで書き加へておくが、改造社版の未亡人述小生編錄の『漱石の思ひ出』の装幀も、一見全集に似て居て、其實よく見ると全く違つて居るのである。そこに苦心といへば一種の苦心があるので、表紙は同じ石鼓文の違つたところから文字を拾ひ、見返しも先生の趣味にならつて、前記『花ふくさ』の一部を借りて創案を立て、扉に橋口五葉氏案の先生の原稿紙の外枠を拜借したりなどして、

先生の趣味を取り入れるにつとめたのである。まゝ全集と『思ひ出』とが同裝幀だなどと早合點する人があるやうだから、こゝに書き加へておく次第である。

先生が『心』の裝幀の見返しにもと描かれた芒の圖案がある。其後句を題して鈴木三重吉氏に與へられ、既に同氏の珍藏するところであるが、昨年『漱石寫眞帖』に拜借してそのまゝ見返しに使つたことがある。何しろ自分で繪を描かれた位だから、書畫の表裝にしても、書物の裝幀にしても、相當好みがあつたらしい。が、一旦人にまかせた以上、實にその人を信じてまかせ切りだつたらしく、この點又先生といふ人をよく現はして居ると思ふ。神田に栗原といふ表具屋があつて御用を承つて居たものだが、今どうして居るか消息を知らない。こゝの主人に尋ねて見たら、表具の方の趣味なぞもわかる事が多からうと思ふ。

お墓の話

今では東郷元帥の遺骸を迎へた多摩墓地のやうな廣大なのが出來たが、これ迄の東京の大きな墓地といへば、まづ谷中、青山、雜司ヶ谷の三箇所だつた。その三箇所がそれ〴〵特徴があつて、谷中は所柄だけに舊幕の香がし、青山は明治年間の武將紳商顯官の休憩所の感があり、雜司ヶ谷には明治から大正へかけてのインテリ向きの精神文化を代表したもろ〳〵のリーダーの墓がある。各〻特徴がくつきりとして、こんな文化史的な見地に立脚して、三つの墓地を比較對照して見たら、案外面白いものが得られるであらう。各墓地に眠る代表的人物の名をあげただけで、思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

此外東京には音羽の護國寺の墓地みたいに、元勳を特徴にしたものもあり、又染井墓地のやうなものもあるにはあるが、前記の三つのやうに、時代的にそれ〴〵つながりを持つて居て、しかもその時代々々の特徴を鮮かに備へて居るものは他にあるまい。

こんな事を見て行つて、それにつれて様式の變化などをくらべて行くのも、一種の文化史として興味のない事ではないが、しかしこゝでは墓地一般を考察しようといふのが主題でないから、たゞ各墓地に各々特徴がある事をのべ、さうしてわが漱石先生の墓は雜司ヶ谷にあつて、この墓地の極めて特質的な一代表をなしてる事をいへば足るのである。

一體夏目家の先祖代々のお墓は、小石川小日向臺町の本法寺といふ眞宗寺の墓地にある。名主の家の墓といふものはこんなものなのであらうか、格式のやかましい舊幕時代にあつては、あたりの墓とくらべて、まづ可もなし不可といふうちにも、やゝ可の部に屬するであらうか。寺は東本願寺末の阪東四ヶ寺の一つ、小日向御坊といつた有名な格式のある寺。しかし先生は禪が好きで、しかも分家して了はれて自由な所へ、一番季の娘の雛子さんが亡くなつた時の手次寺の本法寺のやり口が氣に入らないといつて居られたとかで、參禪の緣故もあつて、葬式の導師は鎌倉圓覺寺の宗演禪師、菩提所は小石川茗荷谷の、白隱禪師にゆかりのある至道庵といふ事になり、墓地は季女の眠る雜司ヶ谷になつたのである。雜司ヶ谷墓地は、『心』をよんだ先生の讀者には、殊の外懷しい、恐らくは先生を葬るにふさはしいと感じられる處なのである。

葬式の折の老師の香語が、書齋の白いものづくめの靈壇にのせてあつたのが、いつの間にや

ら見えなくなつた。納骨だ、あとかたづけだといつてるどさくさ騷ぎに、大方どこかへ仕舞ひ忘れたのだらう、いづれ一片付きしたら、どつか本の間からでも出て來るだらうと、さして氣にもとめないで居るうち、數年たつてから、たしか津田青楓さんだつたと思ふが、近畿の繪行脚をして居るうち、丹波の山の中でこの宗演老師自身の香語を見せられ、其時は面白いものがこんな山の中にあるものだな位で、別に氣にもとめず、所藏家の名も聞かず、又どこからどうして手に入つたのかもきかずにしまつたが、何でも旅の雲水から安く買つたとかいつて居たとかういふのである。そこではたと思ひ當つたのが、あの乞食坊主、あいつの仕業に違ひない、して見ると山房に無いのも道理、いつの間にやらうま〳〵と盜み出されて居たわけなのだ。

その乞食坊主といふのは、先生が亡くなられて十日ばかりたつた頃、突然玄關先きに現はれて、先生崇拜の雲水だが、是非供養に靈前でお經を上げさせて頂きたいといつて來たものなのだ。風體も普通の雲水型、後で考へれば××僧堂なる頭陀袋も雲水笠ももつて居ないのだから、疑へば疑へるのだが、時が時で、弔問の手紙を見ても哀悼の文章を見ても一々感激して、家中のものが謂はば奇特病に罹つて居たのだから、かういふ特志の青年雲水を見ては、益〻先生の徳の大きかつた事を思ふ位のもの。言ふなりに靈前へ導いて、經を上げて貰ひ、いつぱし吾黨

の士のつもりで、お茶などのみながら話しあつて居ると、愈〻此方の氣に入つた事をいふ。さうして歸り際にお布施(ふせ)を出すと、こればかりはといつて固辭するのだつた。

かうして七日目毎に必ずやつて來た。後では出された御布施は押し頂いて持つてかへるやうにはなつたが、もう誰もこの氣さくな雲水を氣にしないのみか、七日目毎に、今日も亦あの雲水が來るぞなどと、それとなく待つやうになつて居た。雲水は靈前にといつてお香を持つて來る事もあれば、禪宗の薄つぺらなお經を持つて來る事もあつた。彼は大森禪戒と名乘つて居た。只私にいさゝか不思議だつたのは、臨濟宗の話をすれば、私は總持寺の僧堂に居たものですからと答へ、曹洞宗の事を語れば、禪は實行ですからとか何とかいつて、何も修行だなどといつて人に語る程のものはありませんとそらすのが常だつた。今は駒澤大學の學長をして居られる位の人物だから、其の當時にあつても私にはこの大森禪戒といふ名が聞き覺えのある名で仕方がないので、それをいふと、坊主の名なんかみんな同じやうなもので、昔から同名異人が、どつさりありますよと笑つて答へるのだつた。

ところが森田さんが、先生の德をたゝへる意味で、かういふ例もある、あゝいふ例もあるといつて、いろ〳〵例をあげた中に、この雲水の事を書いたか話したかしたものだ。するとその

記事を讀んだ有島生馬さんから、どうも近頃家に來る雲水のやり口なり風體なりがそつくりだが、若し同一人だとすると、ちと怪しいから警戒したがよからうといふ注意が來た。有島さんのところでも、丁度其頃嚴父が亡くなられた後だつたのだ。探つて見ると正に同一人。そこで久米が一役かつて、何くはぬ顏して來た雲水を雜司ヶ谷の墓地迄誘き出し、そこでやんはり正體を暴いて事なきを得た顚末は、久米自身が當時小說の一齣に書いて居た。結局大して金にしたわけでもなし、もつと懇意になつてから一仕事しようとたくらんで居たものか、その邊の消息はわからないが、後で何か失くなつたものはないかなどと大騷動をしてさがして見たけれど、別にめぼしいものに異狀はなかつたのだ。それが數年たつてから證據の品を注進されて、初めてやつぱりあれをやられたのかと氣がつくなんて、いかにも迂濶千萬な人のいゝ話だ。

今の墓のあるところは、雜司ヶ谷墓地としては新開地なので、もとは市の街路樹の種苗地になつて居た。丁度三回忌の時墓を建てようといつてる時、取り拂ひになつて墓地擴張になつたので、舊墓地のじめ〳〵したところから、こゝへ改葬する事にした。かなり廣い地面の一角で、一體こんな廣い空地が、いつになつたら墓で埋まるのかと思つて居たら、あの大正八九年の猛

現墓地

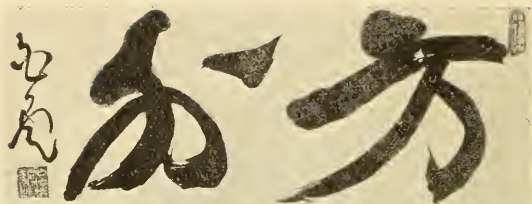
烈な流行感冒で、見る〳〵ふさがつてしまつたには、人もよく死ぬものだと驚かされてしまつた。

あの墓は未亡人の妹壻に當られる建築家の鈴木禎次さんの設計だ。何でも先生の學識のやうに、和洋のいゝところをとつて新様式を出さうといふ意氣でやられたものと聞くが、墓石は西洋風の寢棺型をわざと安樂椅子式にとり、それに五輪をあしらつたりして日本の味を出さうとしたのださうであるが、正直なところどうもぴつたり來ないやうだ。

ところで、この墓をやる時に飛んだ苦心談があるのだ。といふのは石の正面に「文獻院古道漱石居士」といふ先生の戒名と、「圓明院

清操淨鏡大姉」といふ未亡人の生前戒名とを、二行に書いて彫りつけようといふ未亡人の望みなので、字を鎌倉の菅白雲先生に御願ひしてあつたのだ。菅さんは故人の親しいお友達であつた。私達は一高で獨逸語を教はつたのであるが、あいつの獨逸語は怪しいが、字は相當なもんだと私達にまで推稱されて居たもので、芥川なんかは自分の處女出版『羅生門』などには、題簽初め扉なんかまで、白雲先生の手を煩はし、額なんぞも書いて貰つて、部屋にかけておいた筈だ。たしか文句は「方外」の二字だつたと思ふ。

菅虎雄氏筆

さてお願ひはしてあるが、この二列縱隊の戒名が中々出來ない。ぎり〳〵のところ、今晩中に出來て石屋の手に渡らなければ、到底三回忌當日迄には完成しないといふ日になつてしまつた。私は前日鎌倉へ電報を打つて、明日頂きに伺ふ旨を言つておいた。多分出來てるのを貰つて來て、其日のうちに石屋の手に渡せばいゝのだから、折よく十一月半ばの日曜日を幸ひ、久々で當時横須賀に居た芥川を訪ねて、半日駄辯つて來よ

うと、その方へまで手まはしよくハガキを飛ばして、早く行けば遊ぶ時間も多い事と胸算用して、起きぬけに出かけたのだ。

所が鎌倉へついて、俥を由井ヶ濱の先生のお宅の前へ待たせて伺ふと、俥はかへしてまあ上れといふお話。飛脚のつもりが、先生の御座敷へミイラにされてしまつた。これだけ書いては見たのだが、どうも字くばりがうまく行かず、何枚書いてもだめなのだ。これから書くから、君も見て居て批評しろといふ白雲先生の御託宣。書きよどしが半打もあるのだ。

やがて毛氈を敷いて、墨をする。したゝか唐墨をおろして、石の寸法通りの紙をひろげる。先生が眞劍勝負のやうな氣合で、懸腕直筆で六朝風の字を、紙も貫けとばかりに書かれる。何枚書いても、先生の氣に入らない。おひるになつた。一休みをして、先生所藏の法帖など見せて頂いて、又してもかゝる。私は紙の頭をおさへながら、先生と同じく全身に力をこめる、今度こそはと思つてると、又してもいけない。かうして又夕食になつてしまつた。

夕食をすませて散歩がてら來られたのであらう、上品な洋服の老婦人がやつて來られた。顯理さんの未亡人だと紹介される。愛猫の碑を頼みに來られたのだ。先生は丁度墨がすつてあるからと氣輕に書かれると、すぐに一枚で出來上つた。かういふ風にうまく出來ればいゝにと、

先生ががつかりして筆を投じて了ひたい位に疲れて居られると、石屋から催促の電報が來る。又しても勇氣を揮つて紙に向はれる。いた〳〵しいが仕方がない。たうとうしまひ頃には、先生も何が何やらわからなくなり、私も目移りがする上に疲れ果ててしまつて、どれがいゝやら悪いやら皆目見當がつかなくなつた。しかし一度石に刻まれれば永久に殘るのだからといつて、先生にはどれもこれも滿足出來ないのだ。やがて九時も過ぎた頃、もう先生にはこれ以上書く氣力も盡き果て、私ももうこれ以上いくら書いて頂いても無駄だと思ひ出した。そこで二十枚ばかり書かれたうち、一番先生の氣に入つたのを頂いて行きますといふと、おれにもわからない、娘がよく見るですといつて、漸くあきらめられた様子で、令孃に助け舟を出された。令孃は一渡り見て、これが一等上出來よと、一枚をぬき出してくれた。もう先生にも異存はなかつた。さうかい、大丈夫かいと好々爺振りを示して、巻いて渡された時には、私は何といふ事なしに涙が出さうだつた。

八丁堀の中野といふ石屋へ持つ行つた時には、夜も十二時近く、煌々たる電燈を墓石の上に吊つて、手筈はよしと職人達は篝火をたいて、私の來るのを今や遲しと待つてるのだつた。私は凍てつきさうな夜の空氣を刻む石鑿の音を背後に聞いて、やれ〳〵責任を果たしたなとほつ

とした。

翌日から字を書くと、菅さんの字の癖が出るやうになつてしまつた。勿論下手上手は問題でないが、たつた一日ではあるが、一心に氣合を入れると、その影響は恐ろしいものだと思つた。さうしてそれからしばらくの間といふもの、墨を磨るのが面白くなつて、よく法帖をひろげた。

三回忌の當日見事に出來上つた墓を見て、菅さんの字がいゝといふ聲がしきりに聞かれた。先生はいろ〳〵の面からためつすがめつ心配さうに眺めて居られるから、大變評判がいゝですよと傳へると、先生も滿足らしく、此間はひどい目に會はせてしまつたなと、莞爾として目尻に一束の皺をよせられた。私は石屋に拓を叩かせて、先生のもとへ贈つた。

宗演禪師の筆になる位牌は、茗荷谷の至道庵德雲寺にある。今では德雲寺の本堂が再建されたが、老師の提唱があつた頃には、至道庵といふ說教所ばかり。命日の十二月九日には、こゝの薄つぺらな茣蓙の上に坐らせられて、勤行に列して居ると、本當に全身が凍える思ひがしたのだつた。

七回忌の頃であつたであらうか。當時そこの住持だつた坊さんが突然訪ねて來た。曾つて見

ると、祠堂金制度を確立したいが賛成してくれろといつた要件で、寺の方から賦課式に言つて來るのも異なものだが、ともかく菩提寺とあつて見れば、何がしかの事はするのが當然と思ひ承知をしたところが、今度は月賦ならいくら、年賦ならどう、それが一時拂ひならいくら〳〵の割引きになるてな、妙に商賣じみた事をいふのである。さうあけすけと言はれて見れば、話はわかつてゐゝやうなものの、淨財とか布施とかいふ一種神聖な氣持がなくなり、まあ相談して置かうといふ事で歸つて貰つた。するとその翌日電話があつて、どうも大變な事になりました。實は至道庵といふのはあれは說教所で、說教所に位牌を祀る事は法規が許さない、今迄は其筋で大目に見て居たが、今度嚴重に取締る事になり、不日先生の位牌もあすこには置けない事になります。つまり近々追ひ立てを喰ふわけで、そんな事にでもなつては先生の御位牌として不面目此上なしだから、今のうちに、何もあすこでなければいけない理窟もないのですから、よそのいゝ寺へお移しになつては如何ですか。確かな筋から情報を得たので內密に御相談します、とかういふのである。

明治政府以來、佛教政策には相當苦心して、新らしい寺名義といふものは許可しない方針なので、說教所は許可するが、それはどこまでも說教所の取扱ひ、寺になりたいものは、廢寺の

名義を買ふのだといふ事を聞いて居たので、私は又徳雲寺といふ寺名義を至道庵が持つてるのだらうと、最初から獨り合點をして居たのだ。だから住持の話は、急た取締りといふのは少々聞こえないが、場合によつては無い事ではないと感じたので、そこで試みに他の適當の寺はときいて見ると、白山の某寺を推薦するのだつた。考へませうといつて、私は禮を言つて電話を切つた。

翌日になると又電話が來た。祠堂金を今のうちに纏めてお納めになつては如何、幾割引きなどといふ事でなしに、半分でも三分の一でもいゝから今納めて頂ければ、位牌を別の寺へ移しても權利を引きつぎ、責任を持つて立派にお爲になるやう取計らひますからとかういふのである。此間からの話と思ひならべて見ると、話は三段で、たしかに仕組まれて居る樣子。ははあ、奴さんやつてるなと、其時私は受話器を耳にあてながら北叟笑んだ。

そこで私は意地惡く、そんな面倒な菩提寺はいらないから、位牌は山房に引き上げるが、一體貴方はどうされるのかと尋ねたら、自分は白山の寺へ入るので、今現にどこそこの庵寺に居る。だから祠堂金はどうか此方へお持ち下さるなり、また私が頂きに行つてもいゝが、とにかくもとの寺には惡い奴が居ますからと、まだ四の五の言つてるのだ。私は筋は全部讀めたと思

つた。試みに念のため至道庵に電話して見ると、もとの住持は少しわけがあつて、つい此間左遷されたのだと、新らしい住持が出て來ていふ。つまり祠堂金と位牌とが持つて行きたさの拙い芝居だつたのだ。

翌日私は欲張りの憐れむべき老僧の爲に、小さい菓子折を下げて、彼が謫居の庵室を訪れ、今度はいろ〳〵御心配有難うございましたといつて置いて來た。

漱石山房の繪端書

先生のところへ來た重だつた手紙が保存されて居たら、相當面白いものがあつたに違ひないのであるが、子規の手紙一束と、例の博士號辭退問題の折の福原文部次官の手紙と、それから極く極く晩年に山房を訪れた禪宗の雲水の手紙數通とが、文庫の中にわづかに遺されて居たばかりで、惜しい事に殆んど外には何も殘つて居ない。漱石全集には書簡集が二冊になつて、約千通の手紙が集められてるのであるが、それが多くは來た手紙の返事として書かれたものか、又は反對に返事が來たと豫想すべき性質のものだから、先生自身が受取られた手紙の數といふものは夥しいものであつたであらう。先生の友人のうちでも狩野亨吉博士の如きは、よそから來た手紙といふ手紙は、數十年來一切捨てる事なしに保存しておかれるといふ丹念さで、全集編纂の時なんかも漱石からの手紙がある筈だとお借りしに行くと、あるにはあるんだが、さがし出すのが大變だといふお話。これも極端な例かも知れないが、破棄するにはさぞ惜しい手紙

もあつたであらうに、それが一つも殘つて居ないといふのも、亦對照的な極端振りといつてよからう。

ところがそれに反して面白い事には、山房には數百枚の繪端書が保存されて居る。中には隨分粗雜ないけぞんざいな代物もあり、時には唯一寸した圖案なり模樣なりのあるもので、廣告としか受け取れない年賀狀などでさへ、どつか見所があるのか紛れ込んでるのであつて、丹念に繪端書と名のつくものはみんな保存されたらしくもあれば、又氣紛れに保存する時はし、しない時にはそのまゝ忘れられ捨てられたらしい事も考へられるのである。とにかく先生の子供らしい一面が繪端書だけをのこさせたものだと想像して、さして見當外れではなささうに思はれる。

これは私の想像であるが、明治三十八年十月に『吾輩は猫である』の上卷が出版されて、所謂洛陽の紙價を高からしめた爲に、翌る三十九年の年賀狀には、各種各樣の猫の繪端書が方々からしきりに舞ひ込んだ。そこで、捨てるに忍びず保存し始めたのが、意識的に繪端書を保存し始めた動機といつては大袈裟だが、まづ大體そんな氣持が動いたものだつたであらう。それが證據には『猫』以前のものは先づないといつていゝ位だ。しかも先生自身その前から水彩畫

をかき、交換的に自筆の水彩畫繪端書を人に出したりして居られるのだから、その應答に先方からも繪端書が來て居なければならない筈であるのに、さういつたものは皆目見當らないといつていゝのである。

繪端書の種類は自筆のもの、木版刷りのもの、石版、コロタイプ、さして珍らしいといふ程のものはないやうであるが、しかしいろ〳〵時代の推移がわかつて面白い。大體に於て日本の印刷術が拙いので、外國物が際立つていゝ。今ならば目をむく程の代物でもないのであるが、「此ハガキは今日獨逸から屆いたから、何か君の材料になれかしと望んで早速送る。成らなくとも成る樣にするのがえらいのだ。僕はちと大膽だが、パラダイス・ロストの韻文(八七調)譯をはじめた。正月以來の『太陽』へ陸續出す都合だ。」といつた土井晩翠さんからの繪端書がよくこれを證明して居る。地紋を木理のやうに薄色にすつた中に朦朧たる西洋美人の顏がある。初めの頃の明治三十八九年といへば、丁度日露戰爭の後の事で、軍事郵便やら凱旋記念繪端書やらで、多分日本のこの種郵政文化の上でも一新期限を劃した頃と思はれる。自然さうした影響がこの不用意のコレクションにも現はれてるやうに見られる。一體繪端書といふものが誠に手取り早い謂はば「街の藝術」なのだから、其時々の流行好尙をよくうつし出す。現在で

はこの傾向はもつと激しくなつて、街頭の繪端書屋をのぞくと、或る意味の流行とか人氣とかいふものが一目でわかる氣がする事があるが、私の朧氣な記憶によると、日露戰爭といふものは、この傾向の先驅的意味をもつてるやうに思ふ。だから繪端書に現はれた新粧は、必ず當時の文化に新らしいものの現はれた證據になりさうだ。

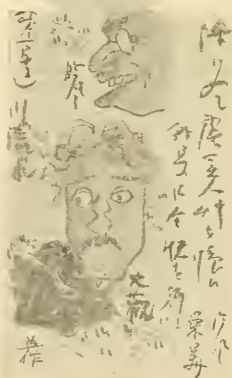
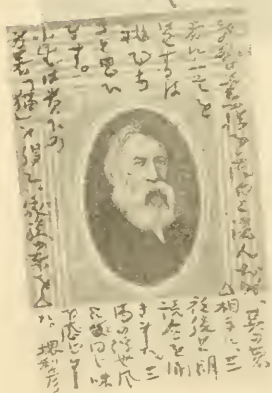
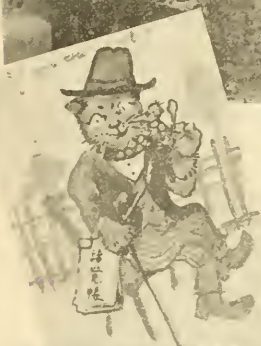
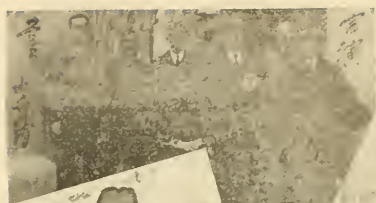
しかし私はこゝで日本の繪端書文化を論じようといふのではないから、以下この氣儘なコレクションの中から目にとまつた繪端書を暢氣に取り上げて、讀者諸君に讀んで聞かせて上げようと思ふ。但し其間時々私の自分勝手な想像やら解說なりの入るのは、大目に見て頂きたい。

「新刊の書籍を面白く讀んだ時、其の著者に一言を呈するは禮であると思ひます。小生は貴下の新著「猫」を得て、家族の者を相手に、三夜續けて朗讀會を開きました。三馬の浮世風呂と同じ味を感じました。」

この差出人は堺利彥さんで、お粗末な平民社繪端書と刷り込んであるフリードリツヒ・エンゲルスの肖像入りの繪端書であるのが面白い。堺さんはいふ迄もなく日本の社會主義者として無產運動の父とよばれた人、貝塚澁六と名乘つて一方では皮肉やユーモアの筆をとつた人だか

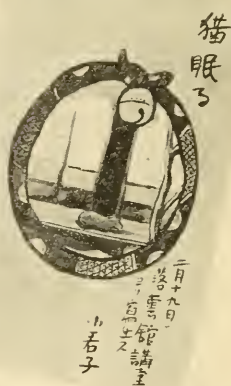
ら、『猫』を讀んで快哉を叫んだのであらうが、後の無産文學を云々するものが、徒らに狹い城寨に立て籠つて、狂犬の如く何でもかんでもブルジョア文學の一本槍でやつつけた揚句の果が、自繩自縛で窒息したのとくらべると、面白いものを面白いといふ、誠にこだはりがなくていゝ氣持だ。しかも、それがマルクスの兄弟分エンゲルスの繪端書に書いてあるところに、言ひ知れぬ滋味があるといふものだ。三十八年十月末のスタンプが捺してある。『猫』の第一回が雜誌『ホトトギス』に出たのが、三十八年の正月號、それを前から知つて居た文章會の連中の中には、氣早にも三十八年元旦の賀狀に自筆の猫の繪端書をよせてるものさへあるが、一册の本になつて『猫』の上卷として市に出たのが十月。堺さんは出るとすぐその評判の本を買つて讀んだものと見える。

一體この『猫』は最初文章會で朗讀された時には、まだ標題がきまつて居ず、作者は『猫傳』としようかといふのを、編輯者の高濱虛子さんが、書き出しの一句をとつた方がいゝといふ意見を出されたので、作者自身もそこは謂はば他力本願で異議のなかつたものと傳へられて居るが、こゝにその頃の空氣を知るに恰當な一葉がある。差出人は野間眞綱さん。三十八年二月の消印がある。——

先生に寄せた繪端書（一）

「先晩××邸へ參り候處、ホトトギスが雜誌屋より來て居た。直ぐ十一時迄讀み候。面白いの何のつて、近來リードルと文法ばかりに眼をさらせる小生には天來の妙味に候。本日學校より歸りて亦讀み候。興味一層に候。小生が奉呈したハガキの事が書いてあるが、此猫傳が幾百年の後に其時代の學者の註脚がつく時に、此端ガキを送つたものは抑々誰であるかについて、國文學者歷史家の議論沸騰したら面白いがなと思ひ候。（中略）皆川君は愈先生は大家となりさうだと申居候。小生は一寸思附候。此猫がへあがりて猫又と云ふものになつて太田池に棲み、夜な夜な出て人を食ひ、赤兒はうまいとか婆さんは皮ばかりで味がないとか云ふのを御書きになつたら面白いだろーと思ふで候。（後略）」

これで見ると『猫傳』といふ幼名が殘つて居るところも、亦先生が大家になりさうだと門下のうちで噂しあつてるのも面白い。まだ本鄕千駄木の所謂猫の家に住んでられた頃なので、あの根津權現から程遠からぬ太田池なんぞが怪談味を帶びて現はれるのも、時代色があつて面白いではないか。

所謂猫の家は齋藤阿具博士のお宅、裏には『猫』に出て來る落雲館事郁文館中學がある。中學の事が相當やつつけられて居るので、中學校側としては穩（おだやか）でなかつたであらう。野間さんの

先生に寄せた繪端書（二）

ハガキに出て來る皆川正禧さんが、『猫』をほめたハガキをよこした中に、「此間郁文館の一教師に逢ひましたが、先生の事を郁文館では惡く言つてる樣でした云々」と注進して居る。すると繪心のある生徒が描いたものか教師が描いたものか、「落雲館講堂ヨリ寫生ス　小君子」といふ匿名で、「猫眠る」と題して、蝸牛然たる猫が障子の下の緣側で午睡をして居るスケッチ繪端書、繪は上手でないが、赤い首輪に鈴をつるしたのを繪の額緣にした一寸思ひつきのもの。宛名の夏目金之助漱石先生は丁寧なのか、馬鹿にして居るのかわからない。ともかく『猫』が評判になつてからは、郁文館からこの猫の家は絕えず注視の的になつたことであらう。

其頃は「吾輩は××である」といふのが流行語になつたものらしく、到るところでそれが亂用され、それは現在でもまだ續いて、時々思ひもかけない「吾輩は××である」が現はれる事がある。野間さんのハガキを又拜借すると、戶張竹風さんが帝大の演說會で一席辯じられ、その演題が「吾輩は日本人なり」といふのだつたさうだから、三十年後の今日にもぴつたり來さうなお誂向きの元氣な代物だが、開口一番「吾輩は猫ではない、吾輩は日本人である」とやつたら、滿堂大笑哄笑したとある。つまりあてこみが當つたわけだが、いかに當時『猫』の人氣があつたかが讀める。

この類では、少し後の四十一年四月のハガキだが、高濱虛子さんが京都祇園の「一力」から寄せ書きをよこして居る。「万亭」といふ角印が眞中に捺してあつて、下の隅つこに藝妓らしい下手糞の署名が四つ御行儀よくならんで居る。すると右肩に誰やらわからないが、「吾輩は饅頭屋である」といふ一句があると、お隣には「吾輩は豆腐屋の息子である」と書いてある。すると「都にも金之助あり鬼ごつこ」と書いた人があり、後をうけて虛子さんが「春の媼を來吉といふ」とつけて居る。酔餘の座興であらうから、何の事か門外漢にはわからないが、多分飲む程に語る程に、いつとはなしに一座の話は『猫』の上に落ち、そこで、では一筆漱石宛に寄せ書きといふことになり、金之助はんなら祇園にも居やはりまつせと老妓が御披露に及んだのだらう。その金之助さんは大の漱石黨で、後年先生が京都で病んだ時などは、面白可笑しい話で病間を慰めたものだといふ。

『猫』の噂や面白さは日本にばかり限られたものではないらしく、これは繪端書ではないが、ニューヨークから三十八年十一月三日の天長節の祝宴のメニューの裏に、こんな一文が書かれて來て居る。差出人は渡邊傳右衛門さん。

「孔雀の舌は遠きむかしの夢なり、トチメンボーは和製の西洋料理臭し、此は去し日當地シ

エリーに催されし天長節祝賀會の獻立なり、正月早々餅を失敬してお三に牛耳把られし『I am a Cat』君の無念を遂に思ふて、玆に同君の鼻の下に捧ぐ。」

猫も遙々アメリカからフランス語で書いた立派な獻立を送つて貰ふ程有名になつたので、方方から短冊を書いてくれの、字を書いてくれのといふ注文がどつさり來た事であらう。中に一つ催促らしい秀逸は、筆筒に羽根と筆を一本だけ描いて「猫の承諾はいかゞで御座いますか」と書いてある。中々要領がいゝ。この人果してお望みの獲物を得たかどうか。

岩の上に短い袴に久留米絣、素足に藁草履、太い棍棒まがひのステッキの百日鬘よろしくの蠻カラ男が、片手に鼠みたいな小動物をのつけて睨んでるお手製の繪端書がある。註に曰く「此は法學士の人が猫の第一章を讀んでかいたのです、猫子だからズツとして居るのだそうだ」と書いてある。ズツとして居るはどこの方言やら知らないが、法學士この猫を煮て喰ふつもりか、頗るつきの蠻骨だ。すると法學士多々良三平君のモデルだといはれて居る俣野義郎さんの、九州は三池炭坑の勤め先へ、

「多々良さん、猫を上りたくはありませんか。實業家はさだめし面白くていらつしやいませう、教師や新聞記者はほんとにつまりませんネ。三平様　（水島寒月つて實名誰の事なのです

か)」

と、誰でも小説をよむとモデルさがしをするのは一般の人情、それをかうむき〳〵と犯人は君だぞといはぬばかりに、本人のところへ出されたのではやり切れない。いくら先生でもそりやひどいといふので、俣野さんが漱石先生のところへねぢ込んで來たといふ話は聞いた。なる程このハガキを同封して、證據をつきつけての强談判であつたのだらう、ハガキの眞中にチヤンと二つ折りにした折目がついて居るなんかは、當時の光景目に見えるやうだ。

さてモデル序に、このハガキで問題になつてる水島寒月のモデルだといはれてる寺田寅彦さん――こゝで寺田さんに禮を盡くしてお斷りして置きますが、いつぞや寺田さんは、僕は先生にも奥さんにも怨まれるやうな事は微塵もして居ないつもりだのに、『猫』では僕がモデルに使はれてるといふし、又奥さん迄『思ひ出』の中でその裏書きをされて居る、甚だ引き合はないと言つて居られたが、私はこゝでお人よしにもたゞ噂を噂として傳へるだけに止まつて、勿論何等惡意なんぞあらう筈がないのだから、どうぞ惡しからず――その寺田さんは、Dynamical investigation of Sentimental interia 面白く拜見なんぞと、別に抗議も申込んで居られず、のんびり新婚のお祝を貰つた御禮なんぞをのべて居られる。その寺田さんの年頭の繪端書。

「新年御目出度う存じます。昨日は前を通つたしるしに名刺を入れておきました。定めて評判が惡かつた事と思ひます。(中略)昨日國旗を取り込むのを忘れて盜まれました。盜む奴も奴だが、取られる奴はよつぽどお目出度い。それで今年の正月は一層お目出度い正月でした。」

これで見ると、その頃から元日にはみんな先生のところへ集まつたものらしく、書いてはなくともそこのグループの空氣が何となく感じられる氣がするのが懷しい。元日に國旗を盜まれたところも亦御愛嬌だ。

明治三十九年は午年だつたと見えて、この寺田さんの繪端書は珍らしく牧場の初日の出かなんかをかたどつた馬の繪端書なのであるが、先生はこれを貰つて初めて、今年は猫の年ではなくて馬の年だつたのかなと思つたであらうと想像される位、猫の繪端書が多いのである。來る繪端書も來る繪端書もみんな猫の繪。私の記憶によれば、これはもう少し數が多かつたのであるが、亡くなられた直後、やんちや盛りの男の子供達が、自分達の遊びにつかつてなくしてしまつたのが少しあつた。惜しい事をしたものだ。西洋ものの日本出來のもの中々賑かだが、中には『猫』の插繪にしてもいゝやうなこつた自筆のものなどがある。文句は賀狀だから、さして紹介する程珍なものは見當らない。

猫の繪端書は三十八九年に限つたわけではなく、その後もぼつ〳〵來て居る。猫といへば漱石、漱石といへば猫を聯想するといつた工合で、亡くなつてからでもつながつてるのだから、生きて居られたうちには始終緣があつたものであらう。亡くなられる年になつても、書かせ上手の瀧田樗蔭さんなんぞ、「吾輩は猫である」と書いて下さいなんかといつて、短冊をつきつけて先生に書かして居たものだ。澁川玄耳さんが、ロンドンはハイド・パークの犬墓地の繪端書に、「アンタの家の猫の墓は此處にお移しなつたら如何と思ひます。」などと、遙々異鄕にあつて、漱石を想ふにつけて猫を引きあひに出すといつた工合だ。それにしてもこの有名な墓の主なる初代の猫の先生自身の手になるスケツチが、どつさり先生の水彩畫の繪端書をもつて居られた橋口貢さんのブツクの中にあつたやらなかつたやら、私は全部を一度拜見したのだが、今ではすつかり忘れてしまつて居る。

『猫』同樣人氣者の『坊ちやん』の繪端書なんぞ、もつとあつてもよささうに見えるが、これはかきやうがないのか、たつた一枚しかない。それにはマドンナを中心にして、「山あらし」「赤シヤツ」「野太」「たぬき」「ウラナリ君」を始めとして、「坊ちやん」は言はずもがな、「いか銀」から「お淸」迄かなり要領よくかいてある。

しかし『草枕』になるともう手がつかないと見えて、その作品を主題にしたらしいものは見當らず、たつた一枚、布哇から來たので漱石自筆の五律と淸方の繪とを組み合せた繪端書に、(それには『草まくら講義記念』と刷り込んである)「淺學自ら揣らず高著『草枕』一學年間に於て講義候事多罪　再拜」と書いたのがある。出版されてわづか二三年、すでに明治年間にホノルルの中學で『草枕』が講義されたといふのも面白い事實だ。

『幻影の盾』が出れば、極彩色の『夜鴉の城』の繪端書が舞ひ込み、『薤露行』が出れば、又歎美の端書が訪れて來る。『倫敦塔』なんぞも、これが爲に塔そのものが日本人に特別親しみが出來、例へば日本の海洋文學の先驅をなしたと見るべき太刀雄事後の海員組合の米窪滿亮さんが、倫敦塔の繪端書に、「エドワード五世とデューク・オブ・ヨークの兄弟が首斬られしブロツクの邊りにたゝずみて、はるかに先生の御健康と『倫敦塔』の多祥とを祈り申し候」などといふのが來るやら、又「ロンドン塔に來て、ほんの一寸見ましたが、あなたのロンドン塔に何を書いてあつたかを思ひ出して見ようとあせつても、乍殘念忘れて居ります。かへつたらすぐくりかへして見ねばなりません」などといふ端書も舞ひ込む。これは前にもあげた澁川玄耳さんのロンドンからのたよりの一つだ。

『虞美人草』は『猫』『坊ちやん』『草枕』などとならんで、先生の作品のうちでは一番多く讀まれてるものの一つであるが、それ迄の作品がディレッタントとして書かれて居るのに反し、これは朝日新聞入社第一回の作品で、いはば作者として新聞の讀者を十分頭の中に入れて書いた最初のものなのである。だから名文と哲學と情熱とで遙かに所謂通俗小說以上高められては居るが、人物の型と筋の構成とはわりに單純だといつていゝ。ところが此間新派の連中がこれを芝居にやつたのを見ると、うぶな脚色家だつたと見え、一所懸命その人物の型と荒筋とを掘りおこしてならべ立てて見せて居た。これではこの作品の肉のうまいところを捨て、骨ばかりを拾つてお皿へつけたやうなもの、吾輩は犬であるといつた、芝居でさへあればといふいかもの喰ひでない以上、いかな『虞美人草』でも少々頂きかねた次第だ。

新聞にこの小說が出た時には、『虞美人草』の浴衣だとか指輪だとかいふのが發賣されたといふからには、中々人氣の立つたものであらう。

「昨日の晚と今日一日かゝつて東京朝日をさがして見たが見つかりません。何だか親の仇（かたき）が目にかゝらぬやうな氣が致します。早く汽車にのつて大きな停車場についたら、『美人』に會へるのにと思つてこがれて居ります。まだ一回しか讀みません。」

「虞美人草をたづねあぐんで、とう〳〵ミルクホールに這入つたら大阪朝日がありました。うれしかつた。繰返し巻返し、しやぶるやうに讀んだ。（下略）」

二つともに小宮豊隆さんからの繪端書。丁度夏休みで歸省する途中、京都で出したものらしい。當時始終先生の門に出入して居られたのだらうから、小宮さんだけは特別と言はばいへるかも知れないが、しかしなほよく當時の漱石がいかに待たれたかを現はして居ると思ふ。文中「美人」はもとより『虞美人草』にかけたは論のない所だが、しかしこの二葉とも祇園の舞妓の繪端書であるのが中々物をいつて居る。其後も小宮さんからの繪端書には所謂美人の繪端書が中々多く、中には「進呈」「乞御高評」などと書いたのさへあつて、現今ならば活動女優のブロマイドかなんかに當るのであらうが、當時の尖端を行く文學志望の新人の間に、やぼくさい自然主義型以外に、あるデカタン的な歎美主義の傾向が現はれて居たと見ていゝかと思ふ。『スバル』や『三田文學』の運動の氣運が甘いながら仄かに見えて居る。

美人序にその方へしばらく脱線すると、同じく京都の舞妓(まひこ)の繪端書に、京都からの鈴木三重吉さんのたより。

「京は蜆賣(しゞみうり)の女が赤い日傘をさしてゐます。昨夜は雨でした。獨りで深夜まで酒をのみまし

た。これから妻の候補者を見に行くんです、一人はお茶屋に奉公してゐ、一人は友禪の下繪をかいてゐます。」

文章から何からがいかにも三重吉式だ。永い間の堅苦しい教職から自由になつて、何となく廣々とした自由の世界に躍り出た氣分のして居られたであらう當時の先生には、かういふ周圍の若い人達のたわいもない眞似が、一方では馬鹿々々しくもうつり、一方では新鮮にも映じたであらう。

さて『虞美人草』にかへつて、當時ドイツ留學中の深田康算さんからのライプチッヒ大學の繪端書がある。惜しい事に深田博士は數年前に亡くなられたが、京都大學の美學の教授として盛名のあつた尊敬すべき學者であつた事は、遍く人の知るところだ。

「今月末伯林へ轉學する事にいたし候。講義は思つたよりツマラヌやうに思はれ候へども、美術史の方丈は先づ聞くつもりに候。『虞美人草』は實に面白く拜見、會話の息もつけぬ引きしまり方、女の活きてるの、底に横はる人生觀の深さ、只今まで拜見せしものの內最大傑作と存じ居候。若し小生の如きものも人間らしくなりうる事ありとせば、共緣となるものは確かに此書に在りと考へ候。批評とは閑人の爲しうる事業とすれば、小生には（少くとも只今は）共

メリカから『虞美人草』を飜譯したいから許してくれといつて來たが、何も骨折つてあんなものを飜譯するには當るまい、自分のものにももつと外の作品がある筈だといつて居られた事があるが、しかしかういふ手紙は何はともあれ作者を喜ばせたに違ひない。

晩年先生はあゝいふこしらへものの感じのこつてりした作品がいやであつたのであらう。ア

力なし、否又之を欲せざるに候。」

厨川白村さんが嵐山の繪端書に、「虞美人草中の嵐峽の敍景を想ひ出し此端書を差上申候」といふのを書いて居られると、これはもう大正に入つてからではあるが、横山大觀、和田英作、笹川臨風の三氏から出した、「洛に入りて虚美人草を憶ひ、我兄の全快を祈る」と書いた寄せ書きの端書が二枚、目を射る。第一號と書いた方は「川流れ」と題して、加茂川のつもりであらう、石ころだらけの川の上に、眞黑な臨風さん、目玉の太きい大觀さん、横廣の黄色な顏色の英作さんの、三つの似顏が非常にうまく描いてある。見たところ似顏漫畫は和田さんの筆らしい。第二號の方は「柳の下」と題して京都美人の平べつたい人のよさそうな顏が三つ四つならんで、一々署名のしてある事第一號に同じだ。この繪端書はコレクション中の珍で、畫家の自筆のものには外に齋藤與里さんや津田青楓さんのものがあるが、とにかくこの三人のカリカチ

ュアはずばぬけて面白い。そのうち大觀さんとは繪を贈られて全紙に自作の詩を書いて上げたりした事があるが、和田さんとはどういふおつきあひがあつたか、私はまるで知らない。

美術家の方々が飛び出したから序に書き添へておくが、彫塑家の新海竹太郎さんから、當時の「文展」出品作が出來るとは、今年はこんなのを出品しますからお目にかけますといつた、自作の繪端書がいくつも來て居る。先生がなくなられた夜、死面をとつて頂いたのは新海さんであつた。

以上先生の作品を主にして來たが、其後は名實ともに本當の大家になつてしまつたが爲に、傑作を書いて見せるのが當然といふことになつたせゐか、繪端書はあるにはあるが、これぞといふものも見當らない。尤も作品について何とか言及してる繪端書でも、全部が全部溢美の辭を捧げて居るものではない。中には「秋高うして宇治川の鮎肥えたり。喰はば旨いのみ。『三四郎』は凡也。漱石とは何れの石ぞや。」なんぞといふ匿名の野次もまじつては居るのである。こゝらで作品を離れて目ぼしい變り種をさがして見よう。年代不順。

「一處不住の雲水、ゆき〳〵て今は漸く此處まで參り申候。奉天より長春迄は中村君東道せ

られ居候。一行幸に頑健。御安心被下度候。終に老兄の清福を祈し」

差出人は釋宗演老師。撫順炭坑の繪端書だ。多分中村是公さんが滿鐵總裁をして居られた時で、前年には漱石先生を招じて、『滿韓ところどころ』を書かしめ、今又老師の一行を迎へて、沿線巡錫の東道をしたものであらう。上田恭輔さんとの寄せ書きがしば〳〵見える。圓覺寺の老師には一度參禪された緣があり、『門』の中にはその模樣が書いてあるといはれて居るが、その緣で亡くなられた時には老師が導師であつた。

序だから『門』についての杉村楚人冠さんの、高山植物かなんかをはりつけた繪端書を紹介する。

「『門』日々面白く拜見、昨今は圓覺寺の光景睹るが如きを覺え申候。中に塔中(タッチュウ)とあるのは塔頭(タッチュウ)然るべくと存じ候。又室內と申せども『室中』といふ言葉はきゝも及ばず、これは小生のおぼえちがひにもや候はんか。(下略)」

いかにもこれは杉村さんの方が二つともいゝので、案外先生はこんな事には暢氣(のんき)なもので、時には奇妙きてれつなあて字なんかを平氣でやつて居られたり、假名づかひなんかも隨分變つて居て、全集の初回をやる時なんぞ、校正の衡に當つた門下の人達の間で、どう統一するかな

どといふ事が問題になり、結局一種獨得な「漱石文法」といつたものをこしらへ上げてそれによつての一種の統一をはかるといふ事にしてしまつたものだ。

宗演老師の旅行は浦鹽へ出られる豫定であつたらしいのであるが、途中所勞のため引きかへされたといふハガキも見えて居る。越えて大正二年十月附で、中村さん上田さんの連中が支那旅行された端書が目に入る。

「昨日萬里長城を訪ね、今日揚子江上に遊ぶ。長江沿岸悉く史的の地、連想呼び起して興味津々。昨夜三更赤壁を過ぐ。弦月西天に幽かに、金波江上に漂ふ。」

「蕪湖沖にて」と上田さんがかう書いてる尻へ、中村さんが、「是公更に曰く、思ひ出す首丈出せば野菊哉」と俳句みたいなものを書いて居られるが、何の事やら、昔の事でも思ひ出されたのか、當人同志でなければ這乎の消息は知る由もない。そのすぐ後へ又別行で、「是公又曰く、揚子江を經て初て支那を知る」と書き、又別行に「是公再び曰く、支那を跋捗せざる者は中原を語るべからず」と題して居る。お盛な事だ。すると「支那へ來て行程二千三百里」と書いたのがあると、又「秋高し中原長江呑み盡す」とやつた人がある。船中で支那を論じ四百餘州何のそのと、意氣頗る軒昂であつたのであらう、夏目の隱居を一つ吹き飛ばしてやれといつた姿

氣であつたと見える。是公さんが、「うちを出て、飲むで寢てごみを着て、朝から晩までへをたれる」と最後に結んでるなんか、東洋豪傑の面目躍如たるものがあるではないか、

かうした線の太い豪傑流のものといゝ對照をなすものは、寺田寅彦さんの外國通信だ。數は十枚程だが、どれにも若さがあつて味がデリカで、詩情に溢れて居る。ゲーテハウスの繪端書一枚だけを失敬左に。

「昨夜ケルンから此處迄汽車でラインの岸を上りました。成程美しい景色でした。昔の城跡が到處に殘つて居ますが、どうしてこんな小な家に籠つて淋しい岩の上で大名だといばつて居た事だらうと不思議に思ひました。ロレライの絶壁は思つた程凄い處でもなく、下を外車の奇麗な河蒸汽が旗を立てゝ通つて居ました。(裏に)ウェルテルの原稿の插畫に大勢で青年の死骸を取卷て泣き悲しんで居るのがあります。どういふものか此畫が眼について忘れられません。粗末な彩色繪ですが。輕氣球の展覽會を見て、頭の中が十八世紀と廿世紀の五目ずしになりました。」

外に大河内正敏、小野義一、伊東榮三郎、寺田寅彦四氏のベルリンからの寄せ書きのものなども珍らしい一つであらう。なほ外國からのものには、ビョルンスンの肖像繪端書に、「今日測ら

ずも此地にて此人の葬式に逢ひ、よそながら弔意を表せり。擧國半旗をかゝげて弔ふ。クリスチヤニヤにて、田中清次郎」などといふのも、何やら物を思はせるものがあるではないか。日附は四十三年五月三日。それから大谷繞石さんのイギリスの田舍からの通信なんかも、英國に留學中、ロンドンにばかりくすぼつて居た先生には、珍らしいものには違ひなかつたであらう。

藤岡作太郎博士の「(前略)突然ながら畔柳君より承り候へば、セーンツベリーのよりも簡にして要を得たる批評の歴史御所藏の由、右書名及著者一寸敎示にあづかり度、右御願ひ迄」といふ大磯からの繪端書は、阿部次郎さんの、「一人で日光に來ました。紅葉は半ば散つて途が落葉に埋れて居ます。戰場ヶ原をすぎて高山の晩秋頗る蕭條、木にも山にも共輪郭にイレギュラリテイが加はつて一種の凄味を感じます。長々恩借のクローチエ、此木曜には間にあはないから、此次の木ヨーに持つてまゐり升」といふ日光湯本からの繪端書と好一對だ。學者といふものはどこへ行つても本の事が氣にかゝるものと見える。

「こゝからライオンの吼える聲がきこえます」は、野上豐一郎さんが京都は南禪寺の瓢亭の繪端書に、上田敏さんと連名で書いて居る一節。お隣りへ上田博士が簡單に「御無沙汰を謝し、

御健康を祈る」と通り一ぺんの挨拶が書いてあるのはやゝ物足りないが、又その取りすましたところに上田さんの面目があるともいへさうだ。野上さんののは外に數枚ある。お得意の御能のスケッチは、失禮ながらまだ其頃はあまり御上手とはいひかねるが、外の御同輩連中が美人端書で先生をいぢめつけて居た頃、お能のスケッチでお上品に納まつて居た對照も面白いが、文中時々小說が出來たさうだから見てやつて下さいなどといふ文言の見えるのは、言はずと知れた令閨彌生子女史の小說の件と知れる。かういふ賢夫人が側にあつては、美人ハガキに用はなかつたわけ、さてこそと讀める次第だ。それにしても近來野上さんといふと、森田草平さんを一方に聯想させるのはどうもよくない事だが、それはそれとして、見渡したところ森田さんの繪端書の一枚もないのは、繪端書なんぞのない方がかへつてこの人らしくて、氏の一面を物語つてるものかも知れない。

森田さんなんかと同時代の小山內薰さんの、これは又珍らしい繪端書がある。小山內さんの他のたよりはみんな芝居の繪端書だが、こればかりは尼さんがお祈りをして居る泰西名畫の寫眞からが、思ひなしか微笑ものだ。この頃の小山內さんは、內村鑑三先生の影響からはみ出して、芝居の方へ夢中になりかけた頃かも知れない。

「失禮ながら一書を呈し候。今日は年來御指導下され候甲斐もなく、飛んだ醜態をお目にかけ、何とも申譯無之候。誠に先生の御親切なる suggestions を悉く無に致し、場違ひの沈默を守り居候事、かへすがへす恐縮の至りに候。實は何が何やら分らずじまひにて歸り候次第、御憫笑被下度候。傳四は大分得意の様子に候。呵々」

明治三十九年六月十六日夜の日附だ。これは正しく才人小山内が大學卒業の時の口頭試驗で悲鳴をあげた場面で、先生から大いに助け舟を出して貰つたにも拘らず、外人教師にキユーキユーいぢめられて冷汗をかいた光景とわかる。其頃の卒業期は七月だつたから、丁度六月半は最後の口頭試驗の頃。多分上田敏さんも同席だつたであらう。誰でも經驗する事ながら、才人小山内といはれた人だけにをかしくもあれば氣の毒でもある。文面で見るとよくよく參つたものと見える。翌年の四月には大學をやめられたから、先生にとつても、これが最後の試驗であつたわけだ。

今は老大家の德田秋聲さんも、その頃は中堅どこのパリパリ。鄕里の方の山中溫泉の繪端書に、「『あらくれ』は迚もおよみになるやうな代物ぢやありませんが、おひまがございましたらごらん下さい。『朝日』の方が少し書きたまつたら、おわびかたがた一寸お伺ひしたいと思つ

て居ります。時節柄御自愛を祈ります。」と書いてある。謙遜な書り振りがいゝ氣持だ。

朝日新聞社のうちでも、鳥居素川さんからの繪端書は中々多い。ところが一枚變つたものに、「如是翁と樽井濱邊に清遊を試み遙表敬意候　素川。紀州路の東上行脚といふを試み、一日を素翁とともに暮らし申候　如是閑」といふのがある。今ならば翁も結構だが、まだ明治四十二年、お互ひ長谷川如是閑翁、鳥居素川翁といつてるのは、これは又どうしたわけであらう。それにしてもまだ五十にもならない先生をつかまへて、みんなが「翁」「翁」とよんで居たのを思ひ出す。其頃はそんな流行があつたのであらうか。かへつてそれから二十數年後の今日、長谷川さんなんぞあんまり翁だなんて顏付もして居られないやうだが。しかし五十歳の先生は、今考へてもたしかに「翁」といつてもいゝやうに年をとつて居られた氣がする。

俳句の端書なんぞもつとあつてもよささうなものが案外少い。松根東洋城さんの旅からのものがちよい〱とある位のもの。道後溫泉から、村上霽月さん、下村爲山さん、それに東洋城さんの三人で、あの火消壺然たる湯口の繪端書に、句の寄せ書きをしてるのなぞは、先づ珍らしい部だ。「新涼に底まで澄める朝湯かな　霽月。連れ立つや宿の浴衣を借着して　爲山。新涼に寢れば廣しや十五疊　東洋城。」この鮒屋には私も泊つた事があるが、そこから青葉のう

ちに見えた松山城も一部燒失したといふし、爲山さんの糸瓜の幅のぶらさがつて居た子規居士の記念室のある正宗寺も全燒したといふし、たつた五年程前に訪ねた私の知つてる松山にもそれだけの變化があるのである。『坊ちやん』時代の泳ぐべからずの道後しか知らない先生に、この爲山畫伯描くところの繪端書と、子規居士を通じての俳友霽月さんとは、どんな感慨を與へたことやら。

さて最後に、私は見なれた文字の一枚の端書に目をとめた。見なれたも道理、これは現在九州帝大の佛文の教授をして居る親友の成瀨正一が、ニューヨークから先生に宛てたキリストの繪端書だ。十一月十六日の御端書ありがたく拜見しましたに始まつて、サラ・ベルナールを觀た事などが書いてある。よく見るとこのハガキの日附が十二月十日になつて居る。先生は丁度その前日の十二月九日に永眠されたのだから、遠く異鄕にあつて知らない事とはいへ、知らず識らず蟲のしらせでもあつたか、キリストの繪なんかをお送りしたのかも知れない。それが又どういふわけで、先生自身の手によらずこのコレクションの中に紛れ込んで居たのか、家人の好意か偶然か、遺品を見て行くと、ついいろ／＼な事を考へさせられる。（九・七・一五）

追記　この小文をものにして一ト月程後に、私は中華の日本文學研究の權威周作人教授と深教授とを山房に案内した。さうしていろ〳〵な遺品やら書入れのある本などをお見せして說明して居るうち、たまたま何か珍らしいものがなと滅多にあけた事のない片隅の古ぼけた本箱の抽斗をぬいた。すると思ひがけなくもまだ目をとほして居なかつた繪端書を、二百枚ばかりも發見した。

　その繪端書を持ちかへつてしらべて見ると、やはり目につく發信人は大體前と同じやうなもので、たゞ松根東洋城、寺田寅彥、小宮豐隆などといふ方々のものの比較的多いのが目立つ位のもので、變り種子は、故鄕の溫泉からの齋藤茂吉さんや、武者小路實篤さんの「昨朝の『自然派とヒロイック』、今朝の『艇長の遺書と中佐の死』面白く嬉しく拜見いたしました。先生に差上げし手紙の亂雜なのが、昨日中なんだか氣にかゝりました。もつと落着いて書けばよかつたと思ひました。御見舞に上りたく思つておりますが、遠慮しやうとも思つて居ります。」などといふのが新顏だ。

　この武者小路氏のものは、明治四十三年七月二十日、胃腸病院あてに出されたものだが、つまり先生が修善寺であの大患をやられる少し前の事だ。繪端書を見て驚くのは、猫の繪端書の次に多いのは、實に修善寺と其後この胃腸病院に永い事入院されて居た時の御見舞の多い事だ。これはよく先生の生涯を外から說明して居ると思ふ。

　この見舞狀の中に草平さんの繪端書が一枚見付かつた。案の條、「用事なし、私が繪端書を送るのだから、珍らしいだけを取柄に」と書いてある。文展の美人畫繪端書だ。當人がかうやつて證明して居られるのだから、私はある微笑をもつて先見の明を誇つてもいゝやうだ。其他久保より江女史が、松山の二番町の家のやゝ變つた事を知らせた一葉や、齋藤阿具博士が所謂「猫の家」の模樣がへを報告して居られるのなど、それ〳〵先生のある種の生活資料を物語るものといつていゝであらう。

追憶記の事

『改造』に連載中の『漱石の思ひ出』も思ひの外に長くなつた。去年の夏日光中禪寺湖畔のホテルで話を聞いて書き始めたのだから、やがて滿一年にもならうとして居る。八月號の原稿を今渡したところだが、その中では大正元年二年のあたりを書いた。漱石先生の歿年は大正五年十二月だから、この後長くても二回位で終る事であらう。或は今年も同じ頃に、レーキサイドホテルで、最後の「思ひ出」話しを聞く事になるかも知れない。

漱石未亡人の思ひ出話は、最初斷片的に聞いた時から、此儘聞き放しにして了ふのは惜しい事だと思つたものであるが、それもすでに十二年も昔の、それからがすでに一つの思ひ出話になるのであるが、それから後も折にふれて聞くにつけ、何とか一つの纏つたものにしておきたいものだと思ふやうになつた。いつか其話をすると、未亡人もその主旨には贊成であつたが、いづれまだ餘り時が近くて記憶が生な（なま）ために、離れて眺めるところ迄行つて居なかつたので、

折を見てといふ事で、其時は具體的の話に迄至らなかつた。しかし顧れば今年はもう十三回忌だ。去年の春、私が三年間の京都滯在から東京へ引き上げて來てから、未亡人のうちに語らんとする意が動き、私も亦進んでこれを聞いて筆にすることを喜んだ。

一體かういふ仕事はは〻えない仕事で、己を空しうしなければ中々出來ない。一寸見は何でもないやうで、又最初私もさう思つて居たのであるが、其實さてやつて見るとそれ程樂な仕事ではない。まづ自分のスタイルが出たがる。だから最初のうちは未亡人の漱石の思ひ出ばなしでなくて、自分の創作中の人物が、よそ〳〵しい會話を取り交はしてるやうな氣がして仕方がなかつた。其癖書く方ではそんな事のないやうにと、出來るだけ警戒もし苦心もして居るのだが、つまり調子に乘れないのである。其うちに終になれて來て、近頃では未亡人が其時話し忘れた事で、前に話を聞いておぼえて居る事などを插入しても、別に自分を出す事もなく出來るやうになつたと思つて居る。だから下手に文章に念を入れたりして練つて居ると、かへつて變な出來ばえになつて了ふ。近頃では話を聞くと、それを四五日頭の中で整理しておいて、それから筆を執ると一氣に書いて行く事にして居る。チョビ〳〵丹念に書いてゐた時より、その方が結果がい〻やうに思ふ。

漱石先生夫妻の見合ひ寫眞

まづ話を聞く前に、――勿論漱石全集の一通りはかなりの程度で心得てる積りではあるが――なほよく全集の各部にあたつて準備し用意しておく。一番よく讀むのは書簡集で、これで其頃の事件と思はれるものの大體を心得ておいて、年月を確めておく。それから飛び飛びだから、あると限つたわけではないが、ともかく日記があれば無論それをよむ。それから小品・隨筆の入用な部分に目をとほす。俳句や漢詩が又非常に役立つ場合がある。これらのものに一通り目をとほして、大體の目録を作つて、それを傍において未亡人の話を聞くのである。話といつても古いところでは、三十年前の

新婚當時の事、或はもつと古い事になると、未亡人にはわからないか、それとも又聞きのうろ覺えの部分も出て來る。さうなると老齢の先生の令兄の許へかけつけて教をうける事などもある。それから自分の作つた目錄によつて、あの時はどうだつたかとかこの時はどうだつたとかと尋ねて、そこで古い事を思ひ出して貰つたり、まるで忘れてゐた事を突つき出したりする事もあるのである。又未亡人の話にも記憶の間違などがないものでもないので、日記や手紙から得た資料で訂正して行く事もある。

かうして出來上つた原稿を、未亡人から目をとほして貰つて、誤があれば指摘して貰つて正して行くのである。初期の頃の事に關しては、漱石全集以外、子規全集が大分たすけになつた。大體に於て未亡人の記憶は始めの方が素晴らしくいゝ。段々家庭の雜務が増えて煩はしくなるにつれて粗になり勝ちのやうであるが、又もつと記憶のありさうなと思はれるところが、案外なかつたりすることもあつて、やはり誰でもと同じやうに精粗の波を描いて居る。これはどうにもやむを得ない事であらう。それから特別の文學的教養のある人でないから、その方面の事に關しては、多く聞くところがない。それも亦一面やむを得ない事ではあるが、併し吾々の聞きたいところは、生半可な文學少女のなり上りのきいた風な文學議論や何かではなく、其方

面には自ら他に人もあり、又先生自身がすでに多くを物語つて居られるのだから、餘人は知らず、自分は餘り意に介しない。寧ろ吾々の眞に聞きたいところのものは、家庭に於ける漱石であり、妻の見たる人間漱石の赤裸々の姿であるのである。此點に於ては、讀者も意外とされるやうなものが物語られて居るかと思ふ。その眞實をあるがまゝに物語り、それを又其儘筆に移したといふ點に於て、所謂漱石崇拜家の顏をそむけさせ、自分の如きも、語る人も語る人ながら、書く奴も書く奴だ、少しは手加減して書くものだと言はぬばかりの非難をさへうけて居る。しかし自分も漱石先生を尊敬し愛讀してゐる點に於て、敢て人後に落ちない積りではあるが、眞實の筆を曲げて迄、漱石を神樣扱ひにしようとは思はない。誰にとつても事實はあく迄も事實なのである。

手加減をしないといへば、又どんなつまらなさうに見えるものでも、どんなくだらなさうに見えるものでも、出來るだけ生かして書き込むやうにした。私自身がくだらないと思つても、案外人の目にはくだらなくないのかも知れない。又今の同時代の人々が九十九人迄面白くないときめて顧みない事でも、或る一人でもが面白いといへば、それは正にそれだけの價値があるものだ。ましてやそれが百年の後にでもなれば、どうでんぐりかへるか知れたものではない。

だから自分はつとめてそれらを捨てずに生かさうとして來た。

一體先生の生涯には、大衆好みの波瀾重疊たるところもなく、又通俗向きの層々累々たる事件もない。しかし自分はこれを讀みながら、作物を讀んだだけでは物足りなかつた立體的な漱石を、かなりの程度に迄頭の中に浮き彫りにすることが出來たやうに思ふ。最初自分が目をつけてすゝめた事が、今その目的を果たしかけて居るのを見て、自分も下積になつての働き甲斐があつたやうに思ふのである。いつぞや森田草平氏等が諸家の漱石の思ひ出話を集めて居られたが、あれ等も完成したら、漱石愛讀者に新しい福音を齎すものに違ひない。しかしこの企てはどういふわけか中止になつたらしい。

妻の見た文豪といつたものの纏まつたものは、日本には殆んどない。私の知つてる範圍内では、小泉節子刀自のラフカデオ・ヘルン小泉八雲先生の思ひ出の記位なものであらう。これは聞くならく未亡人の思ひ出話を田部隆次氏が書かれたものださうで、前に出た田部氏の『小泉八雲』に入り、今度は小泉八雲全集の別冊に入つて居る。これは非常に面白いもので、これによつてつひに識る事の出來なかつた先生に、どれ程親しむ事が出來たか知れない。先年先生の遺族の方々にお目にかゝり、殊に次男の巖君と近づきになつたのも、畢竟するに直接間接この

菊判五十頁そこ〳〵の小文に負ふところが多いのである。これをのぞいては、『漱石の思ひ出』は殆んど唯一のものだとといつていゝであらうと思ふ。

漱石先生がどれ程の作家であるか。今でも時々こんなことが問題になるやうだが、それは自然時がきめてくれるだらう。今の私はそんな閑問題をかれこれ言つてる時をもたない。それよりも自分が尊敬してる人の家庭生活が、最も近くに居つた人の口から親しく始終を盡くして語られたことを忠實に書いて、これを自分と樂しみを同じくして居る人々に頒つ喜びと、さうして語る人の健在のうちに、ともかくこれ迄に聞き續け書き續けて來てよかつたといふ安堵と、この二つの情にほつとして居るところだ。いづれ完成の上、秋には本になるであらうが、漱石がくだらぬ作家だといふことになれば、この本も自然くだらない本と折紙がつけられようし、でなくて彼の作物が永久的なものである事になれば、この本も亦半永久的な何ものかを讀者に囁く事になるかも知れない。自分は今單行本の爲に、澤山の珍らしい漱石先生の寫眞を集めて居るところだ。

（昭和八・三・八）

門下交遊記

一　初對面

私を初めて漱石先生のところへ連れて行つたのは久米だつた。久米はその前に一二度、同じ英文科に居て始終夏目家に出入りして居たO君といふのに連れられて、芥川と一緒にお伺ひした事があり、誰が行つてもいゝんだから、君も連れて行つてやらう、いゝお爺さんだよてな事をいつて、いかにも先生とはもう心安さうな口振りですゝめるのだが、私は自分の性格として、尊敬して居れば居る程さう氣輕にお邪魔する氣になれず尻込みして居ると、久米は君は根は圖太い癖に、妙に引込み思案でいかんとか何とか言つてしきりに口說く(くど)ので、たうとうおつかなびつくり久米の後からくつついて、同じく一人の招かれざる客となる氣になつた。大正四年の秋の終りか冬の始め頃であつたと思ふ。木曜日の夜が先生の面會日なのだ。

ところがこの陽氣な案内人、牛込のどつかの停留場で電車を捨てたはいゝが、親しい筈の親方の家を忘れてしまつて、別な小路を曲つたと見えて、歩いても歩いても漱石山房の前に出ない。行きつ戻りつ、こんな筈はないんだとか何とか氣休めを言つてはさがすのだが、とんとわからない。あれ程意氣込んで、先輩然と新米の私を引き具して來てこれだとすると、山房の主人の方では、勿論この陽氣な案内人を忘れて居て、折角訪ねても門前拂ひを喰はされるんぢやないかと心細くなつたが、それでもものの小一時さがしまはつた揚句、やつとこさ蔦の生えからまつた玄關に立つと、取次の女中さんに、此間上りました久米です、友達を一人連れて來ましたと、臆面もなくしやあ〳〵と言ふのだつた。私は愈〻玄關拂ひかなとおづ〳〵して居ると、何卒此方へとあつて、有名な書齋と客間とのつながつた山房に通された。

先客は四五人あつた。久米が私を先生に紹介してくれた。私はこのえらい人の前でかたくなつてしやちこばつて居た。先生は簡單に文科ですかとか、お國はとか一二私に聲をかけてくれられた。私は恭々しく返事をした。聲が咽喉へ引つからまつて仕方がない。みんなざつくばらんに先生をつかまへて勝手な事を言つてるのが羨ましかつた。先生はそれから半ば義務かなんかのやうに、進んで調子を合はせる様子もなく、又たつて意を迎へるといふでもなく、どつか

早稲田南町邸の玄關

無愛想でぶつきら棒でありながら、其癖若い連中と應酬して居るのが満更いやでもなささうであつた。さうして不思議な事に、平凡なことでも先生の口から出ると、大變含蓄のある味の深いものに感じられるのだつた。

かうして私は山房の客となつたが、其時私が一番感じたのは、先生が思ひの外に年をとつて居られるといふ事だつた。其後度々、御邪魔するやうになつてからさうばかりも思はなくなつたのであるが、しかし今から考へて見ると、丁度それから一年後に亡くなられたのであるから、年はわづかに五十歳であつたのであるが、どことなく老人老人して居られたのも當然であつたのであらう。

二 『新思潮』の發刊

多分かうして先生にお會ひ出來て話が伺へるといつた事が、私達の文學熱を一層煽り立てたのであらう、いつの間にか雜誌をやらうといふ事になつた。勿論さういふ機運は前々からないではなく、すでにその一二年前には、豐島與志雄、山宮允なんぞといふ上級生と一緒になつて、山本有三だのアララギ派の歌人土屋文明だの、一時共產黨で羽振りのよかつた故佐野文夫だのといふ同級生達と都合十人で、『新思潮』といふ同人雜誌を半年程もやつた事があるにはあつたが、併し其時は何となく雜然として居てピツタリ行かなかつた。其時の何號目かには、今の貴族院議長の近衞さんがオスカー・ワイルドの社會主義の論文の飜譯をよせ、その爲かどうか忘れたが、其號が又運惡く發禁になつた事などがあつた。近衞さんとは一高時代によく軟式の野球をやつた。此間の京大事件でやめた森口君なんぞも、近衞さんのチームのメンバーだつた。

さて今度新しく新規まきなほしで同人雜誌をやるからには、前のやうな雜音の入らない結束の堅いものにしようといふので、同人も芥川、久米、菊池、成瀨、私といふ仲のいゝ五人だけでやる事にきめた。やるにしても金がない。そこで基金を造らうといふ事になり、當時『ジヤ

ン・クリストフ』に感激して、ロマンローランの所に手紙をやつたところ返事を貰ひ、更に一層ローラン崇拜になつて居た成瀨（現九州帝大佛文學教授）が、ローランの所からその『トルストイ傳』の飜譯權を得て居たのを幸ひ、みんなが分擔してその飜譯をうけもつ事になり、さうして新潮社から出版してもらつて、その印税を雜誌の基金につぎ込んだ。當時はトルストイ全盛の初期で、其後『トルストイ研究』なんぞといふ月刊雜誌が出たのも間もない事であつたであらう。とにかくかうして生まれたのが、其後有名になつた『新思潮』だ。

まだその頃はみんな大學生だつた。菊池は故あつて京都の大學に居たけれども、私をのぞいた四人はみんな英文科。私一人哲學科でしかも高等學校で一年休學したので、みんなより一年おくれて居た。其頃は卒業が七月で、卒業論文は四月いつぱいに出せばいゝ事になつて居た。雜誌をやり始めたら、その方が學校の事より面白くなり、みんな論文を書かなけりやならんならんと言ひながら、せつぱつまる迄雜誌の小說を書いて居た。そのため論文の方が段々短くなつて、例へば芥川なんか「人及び藝術家としてのウイリアム・モリス」とか何とか、初めは頗る大計畫らしかつたが、段々段々日がたつにつれて小さくなつて行つて、終ひには子供時代のモリスになるんぢやないかなどとみんなで笑つた程であつた。

秀才で勉强家で通つて居る芥川がすでにこれだから、久米なんかの周章て様はなく、覺束ない英語でしきりにハムレツトをやつて居た。近頃築地小劇場で『ハムレツト』劇を久米が演出して居るやうだが、久米のハムレツト學者（？）は多分この邊から來て居るのであらう。

さて雜誌が出て見ると頗る評判がいゝ。殊に初號に出た芥川の『鼻』といふ小說は、先生の激賞するところとなつて、芥川が文壇の寵兒となる素地が出來た。續いて久米の作品も評判がいゝし、私なんぞ迄いはば雜魚のとゝまじりといふ奴で、まぐれに時々ほめて貰つたりした。

雜誌が出來てからといふもの、芥川、久米、私の三人は、かなり頻繁に先生の所へ伺つた。ところが又先生の方でも實に親切なもので、貧弱な雜誌の隅から隅までよく讀んで居られて、實に丁寧に批評して下さるのだ。漱石全集を見ると、夏休みにみんな東京に居ない爲にその批評を伺ひに上らないと、手紙で批評をして下すつたのなどがあるが、今考へて見ると本當に物體ないほど有難いことだつたわけだ。だから雜誌が出ると、その次の木曜日には揃つて出掛けたものだ。たうとうおしまひには、讀者なんぞ一人もなくつたつていゝ、先生さへ讀んでくればなんぞと、大きな事を誰いふとなく言ひ出してしまつた。がそれは法螺でも何でもなく、當時は全くその氣持であつた。私達の間で先生といへば、外のどんな大先生の事でもなく、直

右より成瀬正一氏・芥川龍之介氏・著者・久米正雄氏

ちに漱石先生のことにきまつて居たものだ。

とにかく先生の知遇を得てその提撕をうけたといふ事は、私達にとつて大きな出來事だつた。久米はもと／＼作家志望で、早くから作家意識さへ持つて居たと思ふが、芥川なんかは多分先生といふものがなければ、作家にはならずに、どつかの大學教授に納まつて居たであらう。さうなれば菊池も小説家になつたかどうか疑はしく、私なんぞは確實に別の道を選んで居たであらうと思ふ。外の漱石門下といはれる先輩連中の間に伍して、私達迄同じやうに漱石門下と呼ばれるには、たつた一年の間で時間は比較にならない程短いが、しかし先生からうけた影響は、かう考へて來るとやつぱり私達の一生を左右す

る位大きなものであつたやうだ。

三　其頃の芥川・久米

其頃雜誌の發行所は、本郷菊坂の女子美術學校の下の方にあつた私の下宿で、誠にきたない古ぼけた素人下宿だつたが、婆さん一人で氣がおけないもんだから、まるでみんなのクラブ見たいになつて居た。芥川なんかも頻繁に來た。一高時代から同級生ではあつたが、彼は秀才、私はやんちや、彼は江戸つ子、私は田舍者、それに彼は純文學で、私は哲學といつたやうな工合で、それ迄あんまり親しくもなかつたのであるが、其の頃はすつかり親しくなつて、彼として容易に人に見せないあんまりお上品でない半面なんかも、別に隱さないやうになつて居た。病氣の治療費に窮して、マイエル・グレーフエの大きな美術史なんかを一緖に質に入れに行つた事などもあつた。しかし何といつても一番仲のよかつたのは久米だつた。

久米と私とどうしてあんなに長い間仲がよかつたのか、一寸可笑しい位だ。まるで性格も氣質も趣味も違つて居るのに、それを知りつゝやつぱり親しい交りを續けて居た。下宿の婆さんなんかまるで御夫婦のやうだなどと言つて居た位、近所に住んで居た關係もあつて、日に一二

回は必ず往き來をして居た。たまに久米が來ない事があると、婆さんがどうなすつたんでせうと心配するのだつた。一つ下宿にしばらく一緒に居た事もあるし、中條百合子女史の祖父が拓いたとかいふ福島縣の開成山に、母一人子一人の侘住居に彼を訪ねた事もある。其時、彼の老いた母堂が茄子を丸ごと燒いて下すつたのが非常に美味しくて、今でも茄子の季節になると時時思ひ出すことがあるのであるが、ともかく散歩するにも芝居を觀るにも、どう氣があつたものか、いつも一緒だつた。殊に淋しがり屋の久米の方からよくやつて來た。

久米が大學を出て、文學士だもの、背廣位なくちやといふんで、月賦でこさへた洋服の事を、口の惡い芥川が、狸の洋服といふ名をつけた。大方狸のやうな色合だつたんだらう。久米はこの一張羅を着て得々として居た。多分その得々のとばつちりであらうが、記念に一緒に寫眞をとらうといふ事になり、二人でならんで寫眞をとつた。私はまだ大學生の制服姿。その又制服といふのが、いつの間にやら洋服代は外のものに變つて居るので、久米が卒業したのを幸ひ、賣りつ飛ばさうといふのを、命乞ひして着用に及んだ代物。しかもその大時代物たるや、雜誌の金が足りなくなつたりすると、質に入つてなにがしかになるといふ、至つて調法な制服なのだ。その寫眞を見て、芥川がこりや花嫁花壻ぢやなくて、花壻花壻だねと言つたのをいまだに

覺えて居るが、とにかく二人はいゝ氣なものであつたんだらう。

四　水木銀之丞になつた話

話は前後するが、私が久米の身代りになつたバカ〳〵しい話がある。まだ高等學校の頃の事、みんな金のない連中なもんだから、讀賣新聞とか萬朝報とかいつた新聞の懸賞に應募して居た。此間の京大事件で大變評判のよかつた恒藤恭君なんかも私達の同級で、この人おとなしい癖に、小説も書けば繪もやるといふ何でもやの秀才で、其頃學生新聞と言はれて居た萬朝報の懸賞短篇小説を度々せしめて居たが、久米なんぞがやらない道理はないどころか、前年にはすでに萬朝報の學生徒歩旅行の選手などといふのをやつて、健筆を謳はれたこともある位。それで思ひ出すのは、丁度その旅行で入京の日、市川の橋の上へかゝつたら、風のある日で久米の帽子が濁流の中に吹き飛ばされた。澤山新聞社の人やら出迎への人やらが來て居たところへ、折角の晴れの入京に帽子がなくてはと、私がザンブとばかりに濁流の中に飛び込んで、帽子を拾ひ上げてやつたと云ふ冒險譚がある。丁度其頃日日新聞社で柳川春葉の『生さぬ仲』の劇評を募集したところが、見事三等に當選してしまつた。當選したのはいゝが、困つた事に水木銀之丞と

いふ變な名を使つたところが、いつ何日社へ金をとりに來てくれ、係のものが賞金を渡すからといふことになつてしまつた。その係りが桑野桃華氏に違ひないので、この人は俳句會で識つてるから甚だ困るといふのが、久米の云ひ分なのだ。久米は三汀といつて中學時代から俳句では相當鳴らして居て、其頃はかなり油が乘つて、方々の句會へ出張つて居たものらしかつた。そこで私にその水木になつて、金をもらつて來て、とかういふのである。

いくら何でも水木銀之丞といふ若衆みたいな名には私も困つた。かういふ若衆好みの妙チキリンの名は、元來菊池が悪いので、ワイルドの『ドリアングレーの繪姿』をはやらせたり、其他かういふ男色趣味を敎へたのは彼で、よせばいゝのに久米迄がかぶれて、こんな變名を使つてしまつたのだ。賞金は一等が二十圓、二等が十圓、三等が五圓。たつた五圓だけれど、當時の私達には棄權する事の出來ない大金だつたのだ。

序に變名が出たから一寸書き添へておくが、ずつと後になつて雜誌を出した頃に、どういふわけだつたのか、菊池が草田杜之介、芥川が柳川隆之介なんぞと名乘つて發表して居た事があつた。

どう考へても私が銀之丞でございと言つて、日日新聞社へのめ〳〵とどの面さげて行けるも

のかと頑張りもしたが、しかし久米があんまり頼むもんだから、そこは義俠心を出して、たうとう御丁寧にも前夜わざわざらくの日近い、觀たくもない『生さぬ仲』劇を新富座迄觀に行つて、示された刻限に例の弊衣破帽で新聞社へ乘り込んだ。餘りにきたならしい水木銀之丞君の姿ではある。ところが通された小さい應接間には、一等君二等君共すでに御先着で、もうなれなれしく話を交しながら、次に現はるべき三等君を、非常な好奇心で待つて居たものらしい。殊に名が名だから、すばらしい色白のしやれ者でも現はれるだらうと心待ちにして居た氣配。ところが現はれ出でたのが、凡そ銀之丞の名とは似ても似つかぬ昂然たる垢顏蓬頭の一書生だ。一人は背廣の會社員らしい小柄の男、一人はセルの袴に金ぶち眼鏡といふ其頃の典型的なにやけた三十近い男、これは後でわかつたのであるが、どつかの醫學生だつた。二人共にへエーといつた意外の面持をしたが、すぐに背廣君が愛想よく、水木君ですかと聲をかけた。私はこゝが度胸だと思つて、相手の顏をぐつと覗つめて頷いた。そこへ私が桑野ですといつて、酒ぶとりのした和服の社員が現はれて、三人に一枚づつ名刺をくれた。なる程久米のいつたとほり桃華氏だ。それから一人一人の名前をきいて、さうして水引のかゝつた賞金をくれた。大きな包紙にたつた五圓、しかもそれが人ののだと思ふと、嬉しくも何ともなかつた。

桑野氏は人をそらさない話術で、今日わざ〳〵おいでを願つたのは、わづかばかりの御禮をお渡しするだけなら小爲替でもよかつたのですが、實はこれ迄この種の懸賞募集をやつて來て、こん度のこの三篇程優秀なものが揃つて集まつた事がないので、全くどれを一等にしようかと迷つた位なんです。私一人の考ですと、皆さんに甲乙なしに揃つて一等になつて頂きたかつたのですが、社の規定が許さないのでやむを得ず等級をつけましたが、その代り皆さんの劇評はかう申しては失禮ですが、どこへ出しても恥かしくないので、今後も機會ある度にどうか私へ書き送つて頂きたい。新聞なり、雜誌なりに發表するやうに致しますから。こんな事を一くさりのべた後で、水木さんののは大變結構でした。一高にも芝居を觀る方が居られるんですねといふから、そんなに結構なら一等にしてくれりやいゝにと心の中では思つたが、一つからかつてやれといふ氣になつて、俳句をおやりださうですが、私の同級に久米三汀といふのが居ます。お若いのに中々才人で感心して居ますが、して見ると貴方方（あなたがた）のクラスには餘程文學好きの諸君がよつて居られると見えますねと來た。御存じでせうか、彼奴中々芝居が好きですといふと、久米君ですか、よく存じて居ます。するとと背廣君とセル君とが尻馬にのつて、又一しきり水木銀之丞をほめそやした。もう水木君はほめられるのは澤山だつた。早くかへつて、包紙を渡し

てほつとしたい一念だ。

ところが新聞社を出ると、一散にかへらうと思つてる私は、二人の間にはさまれて銀座の方へ拉し去られてしまつた。といふのは二人のいふところによると、これだけ三人の新進劇評家が集まるといふ事は滅多にある事でない、一つ顔つなぎにどつかで食事をしようといふのである。食事は困つた。五圓に手がついてはと思ふのであるが、水木銀之丞其の期に及んでまさか種明しをするわけにも行かず、仕方がないから喰つついて行くと、いつぱし文士氣取りの連中は「プランタン」へ入つた。其頃「プランタン」といふと有名な文士やなんかの行く一番尖端的のところとされてゐたカツフヱーだ。入つて見ると、壁といはず天井といはず所きらはず漫畫や落書や署名でいつぱいだ。俄文士はすつかりいゝ氣持になつて、當時はやつた五色の酒を先づ呑んだ。それから何やら洋食をくつたが、私には學校附近のトンカツの方がうまかつた。するうちに僕等も一筆記念を殘さうぢやないかと背廣君が立ち上がつて、壁にはもう空地がないので、テーブルの上に椅子をのつけて、そこへ上がつて筆を揮つた。私も墨痕淋漓と水木銀之丞の署名をのこした。

勘定を心配して居ると、誰やらが拂つてくれた。もうこれで放免だらうと思つて居ると、折

角の記念に新富座を觀ようといふ。行つて見ると昨日で終つて居る。それぢや松蔦の家を訪問しよう。劇評家が立女役(たてをやま)の一人位知らなくちや幅がきかない。第一三人が三人共今度の劇評では松蔦をほめそやしたんだから、松蔦たるもの恩を感じて大いに御馳走してくれるかも知れない。僕達のやうな贔屓(ひいき)を持つてれば、どんなに心強いか知れない、大いに名優に仕立てようぢやないかと、段々危くなつて來る。行つて見ると、松蔦丈は自由劇場の舞臺稽古に帝劇へ行つて留守との事。やれ／＼救はれたと思つたのは私一人、他の二人はまだ／＼足りないのか、明日行くから舞臺稽古を見せろ、劇評家たるものがと、番頭相手に威張り散らして居る――。當時の文學青年氣質の一斑を知る上での一つの材料にもと思つて、こんなバカバカしいエピソードを書いたのであるが、全くもつて私は水木銀之丞の一役を一日ふられたのでこり／＼した。あとで醉がさめたのであらう、わりかんをくれろといふハガキが寄宿舍へ舞ひ込んだが、其時にはすでに吾が愛する水木銀之丞君はどこにも居なかつたわけだ。

五　其頃の菊池

卒業して菊池が京都から出て來る。入れ代つて成瀬がアメリカへ立つて了ふ。その前に一度

雜誌の同人みんな揃つて、先生のところへ行かうといふ事になり、私は雜誌の本部たる私の下宿で待つてるのであるが、待てど暮らせど誰もやつて來ない。後で聞くと誰かの早合點で、私が一足先きに先生のところへ行つたものと思つて、大急ぎであとの四人でかけつけたのださうだ。翌日それを聞いて私は大いに氣を惡くしたが、あとのまつりだつた。多分成瀨も菊池も先生をお訪ねしたのは、後にも先にもそれ一回切りだつたらう。

其時の印象を菊池は先生の追悼號に書いてるのに、會つて二三日はいゝ氣持だつたとかあつさりやつてるので、何だか私達は不滿で問ひたゞすと、どんな人に會つたつて、そんなにいゝ氣持が後々まで續いて殘るものぢやない、二三日も續くのはとてもいゝ方ぢやないかといふ返事に、いかにも菊池らしい言ひ分だと思つた事があつた。菊池は私達殘りの者が、みんな漱石漱石と生神樣みたいに大騷ぎするのがあんまり愉快でなかつたらしく、其頃丁度朝日新聞に連載されて居た遺稿となつた『明暗』などについても、私達が感心する程感心もせず、夏目さんの技巧には感心するけれどもとか何とかいつて、中々許さなかつた。さうして私達があんまり感心してない口吻を洩らす上田敏先生などを、自分が教はつた關係もあつてであらう、かへつて持ち上げたりして居た。だからかういふ點になると、菊池は謂はば異分子であつた。

其頃の菊池は境遇のせゐもあつたであらうが、誠に謙虚でみんなに好かれて居た。後年『文藝春秋』をやつて、その一黨と反對派を持つやうになつてからの彼とは、殆んど全く別人の觀があつた。惡口屋でガミ〳〵誰にも噛みついた今の池崎忠孝君事當時の赤木桁平や、ブルドツグみたいな江口渙君なんぞも、口癖に菊池君はいゝ人だといつて居た位で、つまり私達仲間のいゝいゝほめられものだつたのだ。

これはもう少し後の事であつたと思ふが、横須賀の海軍の學校に奉職して居る芥川が、好きな文學の話も出來ず甚だ味氣ないから、一ト月に一度位づつみんなで集まつて駄辯を弄しようぢやないかといふので、それも面白からうと久米、私などが主になつて集めたのが、豐島與志雄、廣津和郎、谷崎精二、加能作次郎、田中純、佐藤春夫、柴田勝衞、江口渙、赤木桁平などの諸君に私達、何でも多い時には十五人位、當時の新進作家とか何とか言はれて居る連中が集まつて、上野の貸席あたりで安い飯を食つて、何といふ事もなしに雜談をしてわかれた。毎月第三の土曜日を會日ときめたので三土會とよんだのであるが、かういふ連中の間でも、菊池はおとなしい、人のいゝ人で通つて居た。

其頃の菊池は善良な社會部の一記者として、至極實直にまめ〳〵しく働いて居た。外の連中

が新進の呼び聲勇ましく活躍して居るのを、今に見て居ろといつた顏もせず、みんながえらくなつたら、そのお蔭で僕なんかも年に二三度雜誌社へ原稿を紹介してもらつて、少しばかりの臨時收入があればそれでいゝんだ、何しろ新聞社の月給ぢや洋服も買へないからなどと言つて居たが、それが一向厭味つたらしく響かないのみか、彼自身ちつとも目立たない雜誌に賴まれても、唯々として相當の原稿を書いて居た。さうして同人雜誌の方でも、月給を貰ひ出したから、他の同人なみに月割りを出さしてくれといつて、皺くちやになつた小爲替を出すのだつた。いつもいつも小爲替なんでどうしたのかと尋ねて見ると、現金をもつてるとすぐなくなつて了ふので、なるべく使はないやうに小爲替にしておくのだといふ。菊池一流の面白い考へ方だ。

菊池の記者時代に私が一番參つたのは、漱石先生の臨終の時だ。私は夏目家へかけつける前に菊池に電話をしたものだから、追つかけて社から菊池がやつて來た。しかしその時は危篤は危篤でどつさり親戚知己門下がつめかけては居るのだが、朝日新聞以外には知らせてなかつたのだから、此方も遠慮すれば、菊池も遠慮して居る。それではとにかくまだ息がある事と、主だつた見舞客を社に通じて指圖を待つ事にするから、友達甲斐に、四五丁離れたところの洋食屋で電話をかりてそこで待つてるから、もう少し詳しい樣子を知らせてくれろといふたつての

頼みなのだ。どうもスパイめいて居ていやなんだが、しかしそれ程いふのを斷るわけにも行かず、しばらく坐つて居て奥から傳はつて來る情報を言ひに行つてやり、それから大急ぎでかへつて來て見ると、其の留守の間の三十分位のうちに先生は亡くなられて、つひに臨終に會ふ事が出來なかつた。これは菊池を恨むのではないが、私の終生の恨事だ。

六　終刊漱石追慕號

先生が亡くなられると、雜誌をやるにも張合がなくなつてしまつた。それにもう一つは、みんな賣り出しの頃とて、自然外の大きな雜誌にたのまれる原稿に力を入れて了ふので、持ち出しの自分達の雜誌には身が入らなくなる道理で、有名になつて益〻賣れない雜誌をこさへるのもバカ〳〵しくなつて、たうとう『漱石先生追慕號』といふのを翌年の春寒の頃に出して、それきり打ちどめにしてしまつた。それには久米が『臨終記』を書き、芥川が『葬儀記』を書き、私が『その後の山房』といふのを書き、その外私達の友人諸君の追憶などをのせた。

其の當時は大雜誌の一つだつた『新小說』が『文豪夏目漱石』といふ臨時號を出し、東洋城さんの俳句雜誌『澁柿』が同じく追悼號を出し、私達の同人雜誌と、都合三つの追悼號が出た

だけで、その外一篇二篇の追憶弔文は、殆んどどの雜誌にも出た位であつたので、自然私達の算盤を離れてやつたこの終刊號迄非常に受けがよく、每號五百部刷つたのが大半殘本になる始末に、淸水の舞臺を飛び越えたつもりで千部刷つたところ、瞬く間に賣り切つて每日々々方々の本屋から、私の下宿へ五月蠅い程催促に來るのだつたが、紙型がないので再版も出來ず、それに終刊ときめたらげつそりして集金もせず、少しばかりの印刷屋の借金なんぞ、この金を集めたら立派に返せるのだつたらうに、甚だずぼらな結末を告げてしまつた。當時雜誌に一番力を入れて居たアメリカに居る成瀨に大分怒られたが、かう內部的にだらけて來ては、もう雜誌なんぞ續けられるものではない。

とにかく先生が亡くなられたといふ事は、私達には大きな出來事だつた。芥川や久米達にとつても勿論大きな打擊に違ひなかつたが、漸く秋になつて先生に親しめるやうになつて、愈々これからといふところだと思つて居た矢先きだから、私は殊の外參つた。といふと私が先生を自分のものにして居るやうに響くが、大體漱石先生といふ人は、みんなにそれぞれ自分の先生だといふ感じを抱かせる大きな人格の持主だつたのだ。私なんぞはそれ迄お伺ひしても、むしろ隅つこの方でくすんでる方なので、成瀨への手紙に私の事を越後の哲學者だなんて言つてたら

れる位なんだから、他は推して知るべしなのである。が、先生は門下の先輩連中と私達とでは言葉使ひが違つて居た。先輩連中にはズバリと無遠慮な調子で言はれるが、私達後輩に向つては丁寧だつた。それが私達には慊らず、もつとぞんざいに言つて貰ひたかつたが、たうとうそこ迄は行けなかつたわけだ。

七　當時の赤木、現在の池崎

近頃の池崎忠孝君は先年の『米國怖るゝに足らず』以來、すつかり天下國家を論ずる民間の軍事通になつて了ひ、殊に滿洲事變以來其の方面では無くてはならない論客の一人として、著述に講演に寧日なき有様であるが、其頃の彼は赤木桁平なるペンネームで、颯爽たる論陣を張つて『遊蕩文學撲滅論』なんかでしきりと大聲叱呼して居た若い評論家であつた。彼は實によくしやべつた。のべつ幕なしにしやべる上に、又その聲が甲高い(かんだか)と來て居るから、賑かな事此上なしだつた。それに直情徑行で向ふ意氣が强かつた。だから隨分敵もあつたやうであるが、私なんぞも初めはあんまりガア〳〵いふので喧しい男だ位で、どちらかといふと好意が持てなかつたが、段々彼を識るやうになつてからといふもの、すつかり彼が好きになつた。

『米國怖るゝに足らず』が出た當時、又しても彼の誇大妄想的な撲滅癖が出て來たぞと、漱石門下の九日會で嗤つて居た人があつた。しかしその頃彼は大阪から上京して來て居て、かう左翼の氾濫にも困りものだ、世界が右翼へ大轉換しかけて居るのが、日本のジャーナリズムには分らんのかなと痛嘆してゐた。ロンドン會議の後で、『六割海軍戰ひ得るか』といふ本を出した時に、この比率では萬一の時日本は危いのかねと私が尋ねたら、とにかく日本は絕對に敗けちやならんのだ、だから絕對にまけないんだと、彼は昂然として言ひ放つた。彼の愛國的熱情を見るべしだが、かうした時代に彼のやうな元氣な論客のあるのは甚だ痛快だ。とにかく大學の先生ばかり多い漱石門下に、かうした變り種のあるのは愉快ではないか。彼の造詣の深い戰史が早く世に現はれるのを、私はとうから待つてる一人だ。

漱石門下の交遊といつた與へられた題目でこれ迄述べたところは、むしろ新思潮中心の交遊といつた方がいゝのかも知れない。實際私は漱石山房で多くの人を識つたし、又現に御交際を願つてる方も澤山ある。しかし交遊と呼んでさんやくんぬきで話の出來る人はやつぱり數える程しかなく、しかもそれは多く同年輩の連中だ。ところで當然それ程親しかつた私と久米との

間に不幸な事件があつて、その爲に今ではむしろ舊友といつた關係になつてしまつたのであるが、其の當時の雜誌中心、しかもその雜誌はいつとはなしに漱石中心の形に於て作られたのを思へば、二つをごつちやにしてこんな風に往時を追憶して見るのも、亦何かのたしになるかも知れない。

久米と私との間の不幸な事件は、どういふものか妙に世間の話題になつてしまつたところへ、久米が短篇長篇いろ〳〵書くものだから、變に雙方共引つ込みがつかない形になつてしまひ、やがて菊池が『友と友との間』を書き、最後に、だまつて過ごして了はうと一時は決心した私までが『憂鬱な愛人』なんぞといふ長篇を書いてしまつた。それは最初私達の間の濃やかなる交友錄であつたのが、やがて悲しい絕交記に變る人生記錄だ。當時紛々たる世評のあつた時、芥川も池崎も、それ〳〵第三者の立場で書かうかなどと言つて居たものだつた。何だか先生のある小說を、私達は地で行つてしまつたやうな氣さへ當時はしたものだ。私は自分で思ふ存分書いてしまつたから、漸くこの氣持をぬける事が出來たが、それにしても最初それ程氣が進んでも居なかつた私を、無理に先生のところへ引つぱつて行つた久米は、私にとつて惡戲好きな運命の天使みたいな事をする男ではある。

（昭和八・十二）

子規の雛

私共は子規居士の短い手紙を一通祕藏して居る。外の人の手にあつたのでは、それ程特別な意味のある筈もなし、又有難味のあらう道理もない。しかし私共夫婦の手にあると、まるで値値が違つて來る。妻の母から貰ひうけて、かれこれ十年の餘にもなるであらうが、毎年雛の頃になるとは思ひ出して、掛物にしようか額に仕立てさせようか、今年も亦雛祭の間に合はなかつたなどと語り合ひながら、又しても匣底深く祕めるのが例になつて居る。

さうやつて數年來同じやうな事を同じやうな頃に繰りかへすうち、その事自身が謂はば我家のさゝやかな年中行事のやうになつてしまつて、今ではよそ行きの改まつた額や軸にしてしまふより、むしろこの原形のまゝ、毎年雛の灯のもとで破れかけた封筒から引きぬいて、生まれた頃の遙かな淸い心を味はふ方が自然だ、そんな風に思ふやうになつた。元旦に神代の事を偲ぶとすれば、雛の宵にこそ人は童心にかへつていゝ筈ではないか。

拜啓　小包にて小雛さし上候　熊本の雛祭陰暦に違ひないと家人のはからひ也　こんなもの陳腐なるやも存ぜず候へども……

相變らず忙しいので閉口致居候　餘り忙しいためぼんやりとして仕事手につかず此頃は何もせずに繪をかき居候　それが又非常に面白いのでいよ〳〵外の者がいやになり候　一枚見本さしあげんかとも存候へど大事の祕藏の畫を割愛して却て笑はれるのも引き合はずと其まゝ祕藏、ひとりながめて樂居候　呵々

君の謠は何流なりや　金春か寶生か觀世か

三月三日夜　常規

金之助様

差出人の常規が子規居士であり、宛名人の金之助が漱石であるのはいふ迄もない。明治三十三年三月三日と、妙に三の字ばかり重なつて居るのも面白い。其頃漱石は熊本の坪井町に住んで居た。

前年の五月末日に長女が生まれた。

安々と海鼠の如き子を生めり　漱石

といふ句は、其の出産の感想なのであらうが、多分居士にも通信された事と思ふ。それに應へる居士の句を見ないのは殘念だ。翌年の雛祭は初雛だ。病牀にあつて季節の句を案じて居た居士は、ふと友の長女の初雛に當る事を思ひ出して、雛人形を祝ふ氣になつたものであらう。雛の日に雛を送るのもといふのを、家人が九州の片田舍の事、多分舊暦か一ト月おくれに違ひないと慰めるので、さてこそと送つたのが、いづれかといへばみすぼらしいありふれた三人官女。この雛の小さくはえないのが、かへつて居士の生活が偲ばれて、又なくゆかしくも有難いのである。さうしてこの三人の官女が長い旅をして熊本についた時、それを迎へる雛壇は恐らくはなかつたであらうし、第一内裏雛からがあつた事やら無かつた事やら、それさへ心元ないものではなかつたであらうか。

一家の歴史は又雛壇の歴史でもある。千駄木の所謂「猫の家」に居る頃には、五つ六つの雛をしよんぼりと簞笥の上に飾つて居たのが、やがて一つ増え、二つ増えして、いつとはなしに賑かな雛壇になつた。父が珍らしくも雛人形を買つてやるといふので、勇み立つた子供達が、父をおいてけぼりにして先走つたので、心證を害しておちやんになつたエピソードなどが物語

られて居る。雛の宵に生まれたといふので、一番季の娘は雛子と名づけられた。しかしこの雛は短命ではかなくも急逝した事、『彼岸過まで』の一齣に見る如しだ。

　どこの家でも雛壇の上は、一見整然として居るやうで、其實よく見ると割合に雜然として居るものだ。この雜然として永年の一家の歴史をそれとなく物語るのが面白味があるのであつて、百貨店から只今屆けましたといつたやうな粒の揃つたセツトは、何がなしに趣がない。さうして居るうちに段々新陳代謝が行はれて、こゝの社會でも二十年三十年前のみすぼらしい老朽雛は、きらびやかな新粧ゆたかな金權雛に位置を讓らなければならなくなる。子規の雛も、からいふいかんとも仕難いこの世の中の鐵則の支配をうけて、いつの間にやら出入りの植木屋の雛段に左遷されて居たのであつた。私達がそれを知つて、代りの雛と取り代へて貰つたのは、官女謫居三年の後であつた。

　私達の長女が生まれた時、私の母が初雛を祝つてくれるといふ。其時ふと私の頭をかすめたのは、昔まだ物心のついたかつかない頃、立派な御所人形を玩具にして、その足をもぎ、鼻をかき、衣裝を裂いて、いくつかの人形を二タ目と見られない廢人にしてしまつた事を思ひ出し、多分それが雛人形の一族のいくつかでなかつたかと母に訊ねると、母は土藏から雨掛けの行李

二つに入つた雛人形一式を出して來てくれた。內雛樣と五人囃子とを辛うじて殘したまゝ、他は槪ね私の手にかゝつて殘殺されてしまつたものらしい。今更惜しんでは見たものの、こればかりは正しく自業自得。母のいふところによると、祖母が私を溺愛し、いゝも惡いもわからない頑是ない子に、物體ないと母がとめるのもきかず、かうやつて蟲に喰はせて了ふよりはと、私の玩具に與へて、壞すのを喜んで見て居たのだといふから、吾が事ながらまるでお話にも何にもならず、よくもこれだけ殘つたものだと甚だ消極的な感心をする一方では、實際しまつたことをしたものだと身慄ひが出る程だつた。曾祖母が嫁入りの時持つて來たものださうで、田舍にはまづ珍らしい出來なのである。

私は妻と相談して、新らしい今出來のものより、むしろこれを貰つて行かうといふ事にし、早速十軒店の病院に入れたのであつた。人形屋では今時珍らしい、大切になさいといつて褒めてくれた。

妻の母や祖母や其他から贈られた人形を加へて、我が家の雛壇はかうして出來た。各種各樣、新舊大小樣々の人形が、時たまわからず屋の小さい男の子が、僕ののもと言ひ張つて、緋毛氈の上に加藤清正なんぞをならべたりする事もあるが、とにかく雜然とではあるが、一通りのメ

ンバーは揃つた。そこで見渡すと、昔の雛はみんな面長で、近代に到る程寸がつまつて居る。雛なんぞ一向近代化する必要もなく、又近代的しては有難味の少なくなるもののやうに思はれてるものでさへ、間のびのした時代離れの顔では通用しないものと見える。現に長女などは永い事古い雛の悠長な顔をきらつて居たものだ。時代といふものは爭へないものらしい。

そこで內裏雛と五人囃子の中間にはさまつた三人官女のみすぼらしさは、いくら緋の袴をつけて乙にすまして居ても、どうしてもつりあひがとれない。第一大きさが三分の一もない上に、服裝が甚だ慘めだ。わけを知らない子供達は、來年は立派な三人官女を買つてくれとせがむ。親の心子知らずか、子の心親知らずか、私達夫妻は、俳句といへば「古池や」と「朝顏に」だと思つて居る子供に、この贈り主の話をしてもわからないにきまつて居るので、仕方なしにただ默つて微笑みながら、お互この手紙の事を思ひ浮べ、いつか讀んできかせる時の來るのを待つのである。

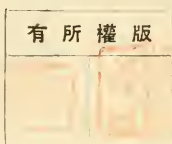
昭和九年十一月十五日印刷
昭和九年十一月二十日第一刷發行

漱石先生
定價壹圓五拾錢

版權所有

著者　松岡讓

發行者　東京市神田區一ツ橋通町三番地　岩波茂雄

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十七番地　白井赫太郎

精興社印刷

發行所　東京市神田區一ツ橋通町三番地　岩波書店

電話九段(33)　一八七番・一一八八番／一八九番・一一八〇番／一〇二二番（小賣部專用）
振替口座東京二六二四〇番

（大森製本）